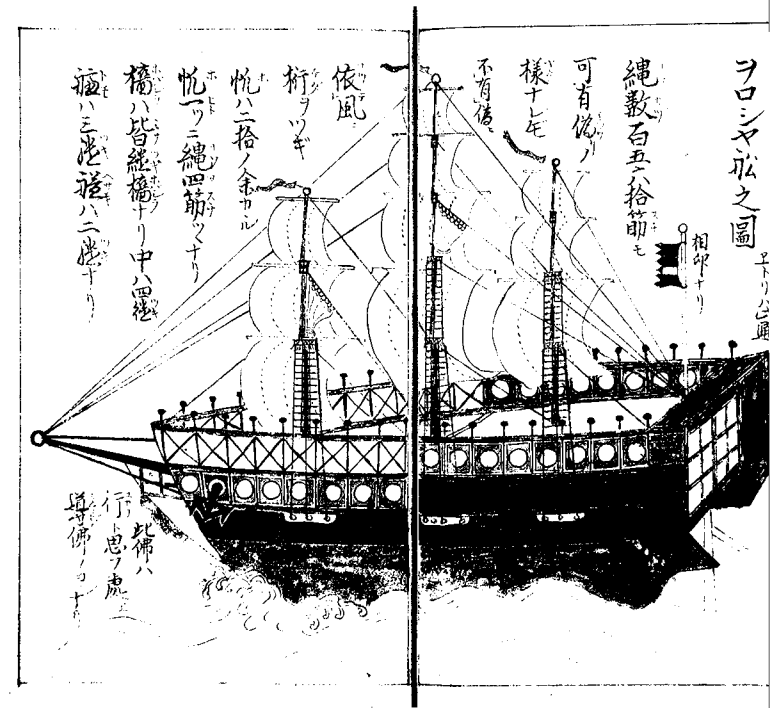


ロシア史料にみる 18~19世紀の日本

第5集

平川 新 監修

寺山恭輔・島山 禎・小野寺歌子 編



究センター叢書 第39号 平川 新 監修

ロシア史料にみる18~19世紀の日本関係 第5集

東北大学東北アジア



CNEAS

**ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係
第 5 集**

平川 新 監修

寺山恭輔・畠山 禎・小野寺歌子 編

東北アジア研究センター叢書 第 39 号

東北大学東北アジア研究センター

Japanese-Russian Relations in the 18th and 19th Centuries

A Documentary Record

Vol. 5.

(CNEAS Monograph Series No. 39)

Supervised by HIRAKAWA Arata

Edited and Translated by TERAYAMA Kyosuke,

HATAKEYAMA Tadashi, ONODERA Utako

Copyright ©2010 by Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University

Kawauchi 41, Aoba-ku, Sendai City, Japan 980-8576

All rights reserved

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

目次

日露関係史料集第5集の刊行にあたって 平川新	1
出典一覧	7
訳語表	8
用語解説	14
凡例	16
1. N.P.レザーノフから皇帝[アレクサンドルー世]への報告書。1805年7月18日。	19
2. N.P.レザーノフから露米会社総本部への報告より。アレウト列島への航海について。 1805年7月18日。(⑥No.75).....	22
3. 商務大臣・伯爵N.P.ルミャンツェフよりアレクサンドルー世宛の報告。イルクーツク国民 学校の日本語生徒について。1805年7月21日。	28
4. キャプタ税関長F.ゴルブツォフより商務大臣N.P.ルミャンツェフ宛の通知。イルクーツ ク国民学校日本語生徒への給付金増額分支出を指示したことについて。1805年8月16 日。	29
5. J.ド・ヴリフ[ウルフ]の回想録より。1805年8月25日～9月23日。(⑩No. 220)	29
6. N.P.レザーノフから海軍中尉 N.A.フヴォストフと海軍少尉 G. I.ダヴィドフへの指令。 近く予定されている遠征に向けた船の準備について。1805年8月29日。(⑥No.79)	31
7. 露米会社手代F.ヴィホトツェフから露米会社本部への報告。1805年9月5日。	33
8. シベリア総督より商務大臣N.P.ルミャンツェフ宛の感謝状。イルクーツク国民学校で日 本語を学ぶ生徒への給付金増額について。1805年9月11日。	34
9. N.P.レザーノフから露米会社取締役への書簡。1805年11月6日。	34
10. N.P.レザーノフから[露米会社取締役への]書簡。1806年2月15日。	58
11. N.P.レザーノフから露米会社取締役への第二の秘密書簡。1806年2月15日。	77
12. N.P.レザーノフからアレクサンドルー世への上申書。カディヤクでの滞在について。 1806年2月15日。(⑥No. 85)	86
13. フリゲート船ユノナ号航海日誌より(オホーツクからアニワ湾まで、およびカムチャツカ のピョートル=パーヴェル湾までの復路)。1806年9月27日～11月10日	89

14.	海軍中尉 N.A.フヴォストフからマツマイ県知事への書簡。1806年。	97
15.	海軍中尉 N.A.フヴォストフによるロシア帝国のサハリン島領有宣言。1806年10月12日。	98
16.	カムチャツカ地方統治者、陸軍少将 P. I. コシエレフから商務大臣 N.P.ルミャンツェフ伯爵への上申書。1806年12月2日。	98
17.	露米会社総本部からアレクサンドルー世への上申書。1806年12月15日。	99
18.	陸軍少将 P.I.コシエレフからアレクサンドルー世への上申書。海軍中尉 N.A.フヴォストフが指揮する秘密遠征隊のカムチャツカ到着について。1807年2月28日。	100
19.	陸軍少将 P.I.コシエレフから N.P.ルミャンツェフへの書簡。1807年2月28日。	100
20.	海軍中尉 N.A.フヴォストフから N.P.レザーノフ宛の報告。(日付不明)。	101
21.	海軍中尉 N.A.フヴォストフから海軍少尉 G.I.ダヴィドフへの指示。1807年4月28日。	105
22.	G.I.ダヴィドフから[海軍大臣]P.V.チチャゴフへの上申書。極秘遠征参加者としての航海について。1807年4月29日。(㊦No.102)	106
23.	海軍中尉 N.A.フヴォストフの N.P.レザーノフ宛報告。第二次遠征計画について。1807年4月30日。	108
24.	海軍少尉 G.I.ダヴィドフの航海日誌。1807年4月15日～。	111
25.	海軍参議会からスループ船ディアナ号指揮官、海軍中尉 V.M.ゴロヴニンへの指示より。クロンシタットからオホーツクへの航海について。1807年5月16日。(㊦No.103)	132
26.	N.P.ルミャンツェフから五等官 A.I.フヴォストフへの書簡。1807年7月24日。	135
27.	A.I.フヴォストフから N.P.ルミャンツェフへの書簡。1807年7月31日。	136
28.	海軍少尉 G. I.ダヴィドフから A.A.バラノフへの書簡。「すでに政治的監視下にある住居にて」。1807年8月7日。	136
29.	N.A.フヴォストフと G.I.ダヴィドフが 1807年に日本人から略奪した物品の一覧。	138
30.	海軍少尉 G.I.ダヴィドフから会社総本部への報告書からの抜粋。1807年10月18日。	144
31.	海軍中尉 N.A.フヴォストフからヤクーツク地方長官への報告書。1807年10月19日。	151
32.	海軍中尉 N.A.フヴォストフからヤクーツク地方長官への書簡。(日付不明)。	152

33.	イルクーツク県知事の質問と回答。海軍中尉 N.A.フヴォストフの航海と日本での活動、および日本にかんする知識について。(日付不明)。	154
34.	シベリア総督 I.B.ペステリからアレクサンドルー世への上申書。1807 年 10 月 26 日。	159
35.	露米会社総本部からアレクサンドルー世への上奏文(㊟No. 40)。1807 年 10 月 28 日。	160
36.	露米会社取締役 I.シェレホフ[シェリホフ]から商務兼外務大臣 N.P.ルミャンツェフへの報告。1807 年 11 月 20 日。	163
37.	I.B.ペステリから N.P.ルミャンツェフへの書簡。1807 年 11 月 30 日。	164
38.	露米会社から N.P.ルミャンツェフへの報告。1808 年 7 月 2 日。	165
39.	海軍大臣 P.V.チチャゴフから N.P.ルミャンツェフへの書簡。1808 年 7 月 13 日。	166
40.	N.P.ルミャンツェフからアレクサンドルー世への上申書。フヴォストフとダヴィドフの遠征について。1808 年 8 月 4 日。	167
41.	商務兼外務大臣 N.P.ルミャンツェフから露米会社総本部への通知。1808 年 8 月 10 日。(㊟No. 141)	170
42.	I.B.ペステリの報告。オホーツクに連行された日本人について。1809 年 5 月 20 日。	171
43.	[露]米会社代表取締役 M.M.ブルダコフから会社本部への報告。日本の武器見本をサンクトペテルブルグの兵器庫に引き渡すべしとのアレクサンドルー世の命令について。1809 年 12 月 26 日。	171
44.	露米会社取締役 M.M.ブルダコフから軍務大臣 A.A.アラクチェエフ伯爵への報告。N.A.フヴォストフと G.I.ダヴィドフの遠征隊による、日本の武器見本の入手について。1809 年 12 月 26 日。	172
45.	露米会社総本部取締役 M. M.ブルダコフから軍務大臣 A.A.アラクチェエフ伯爵への報告。1809 年 12 月 27 日。	172
46.	N.A.フヴォストフと G.I.ダヴィドフの遠征隊によって運び込まれた日本の武具類の目録。[1809 年 12 月]。	173
47.	シベリア総督 I.B.ペステリから N.P.ルミャンツェフへの書簡。1810 年 5 月。	173
48.	N.P.ルミャンツェフから I.B.ペステリへの書簡。1810 年 5 月 31 日。	174
49.	I.B.ペステリから N.P.ルミャンツェフへの書簡。1812 年 1 月 16 日。	174

Архивные документы по истории японско-российских отношений
(1805 – 1812)

3. Доклад министра коммерции графа Н.П. Румянцева императору Александру I об учениках Иркутского народного училища, обучавшихся японскому языку. —21 июля 1805 г. 177
4. Уведомление управляющего Кяхтинской таможни Ф. Голубцова министра коммерции Н.П. Румянцева о сделанном распоряжении выдавать прибавку к жалованью обучающимся японскому языку ученикам Иркутского народного училища. —16 августа 1805 г..... 178
7. Донесение приказчика РАК Ф. Выходцева в Главное Правление РАК. —5 сентября 1805 г..... 179
8. Отношение Сибирского генерал-губернатора министру коммерции графу Н.П. Румянцеву с благодарностью о прибавке к жалованью ученикам, обучающимся в Иркутском народном училище японскому языку. —11 сентября 1805 г. 180
13. Экстракт из судового журнала фрегата «Юнона» (из Охотска в губу Анива и обратно в Камчатку в гавань Петра и Павла). —С 27 сентября по 10 ноября 1806 г. 181
14. От флотского лейтенанта Н.А. Хвостова Матмайскому губернатору. —1806 г. 189
15. Объявление лейтенантом флота Н.А. Хвостовым острова Сахалина владением Российской империи.—12 октября 1806 г. 190
16. Рапорт правителя Камчатской области генерал-майора П.И. Кошелева Н.П. Румянцеву. —2 декабря 1806 г. 191
17. Донесение Главного правления Российско-Американской Компании Александру I.—15 декабря 1806 г. 191
18. Рапорт генерал-майора П.И. Кошелева Александру I о прибытии на Камчатку секретной экспедиции под командою лейтенанта Н.А. Хвостова. —28 февраля 1807 г. 192
19. Письмо генерал-майора П.И. Кошелева Н.П. Румянцеву. —28 февраля 1807 г.

.....	193
20. Донесение лейтенанта Н.А. Хвостова Н.П. Резанову. —[Дата отсутствует]	194
21. Инструкция лейтенанта Н.А. Хвостова мичману Г.И. Давыдову. —28 апреля 1807 г.	197
23. Донесение лейтенанта Н.А. Хвостова Н.П. Резанову о планах второй экспедиции. —30 апреля 1807 г.	198
24. Судовой журнал. Мичман Г.И. Давыдов. —Начат 15 апреля 1807 г.	200
26. Письмо Н.П. Румянцева Статскому советнику А.И. Хвостову. —24 июля 1807 г.	221
27. Письмо А.И. Хвостова Н.П. Румянцеву. —31 июля 1807 г.	222
29. Ведомость вещей, захваченных Н.А. Хвостовым и Г.И. Давыдовым у японцев в 1807 году.	222
31. Донесение лейтенанта Н.А. Хвостова Якутскому областному начальнику. —19 октября 1807 г.	228
32. Письмо лейтенанта Н.А. Хвостова Якутскому областному начальнику. —[Дата отсутствует]	229
33. Записка о вояже и действиях в Японии и познаниях в оной флота лейтенанта Н.А. Хвостова. Вопросы Иркутского губернатора и ответы. —[Дата отсутствует]	231
34. Рапорт Сибирского генерал-губернатора И.Б. Пестеля Александру I. —26 октября 1807 г.....	236
36. Донесение Директора Российско-Американской Компании И. Шелехова министру коммерции и министру иностранных дел Н.П. Румянцеву. —20 ноября 1807 г.	237
37. Письмо И.Б. Пестеля Н.П. Румянцеву. —30 ноября 1807 г.....	238
38. Донесение Российско-Американской Компании Н.П. Румянцеву. —2 июля 1808 г.	240
39. Письмо министра морских сил П.В. Чичагова Н.П. Румянцеву —13 июля 1808 г.	241
40. Доклад Н.П. Румянцева Александру I об экспедициях Хвостова и Давыдова.— [Дата отсутствует]	241

42.	Записка И.Б. Пестеля о японцах вывезенных в Охотск. —20 мая 1809 г.	245
43.	Записка в Правление Американской Компании ее первенствующего директора М.М. Булдакова о повелении Александра I передать образцы японского вооружения в Санкт-Петербургский Арсенал. —26 декабря 1809 г.	245
44.	Записка директора РАК М.М. Булдакова военному министру графу А.А. Аракчееву о приобретении экспедицией Н.А. Хвостова и Г.И. Давыдова образцов японского вооружения. — 26 декабря 1809 г.	246
45.	Записка директора главного правления РАК М.М. Булдакова военному министру графу А.А. Аракчееву. — 27 декабря 1809 г.	247
46.	Реестр японского вооружения привезенного экспедицией Н.А. Хвостова и Г.И. Давыдова. —[Декабрь 1809 г.].....	247
47.	Письмо Сибирского губернатора И.Б.Пестеля Н.П.Румянцеву.—Май 1810 г.	248
48.	Письмо Н.П. Румянцева И.Б. Пестелю. —31мая 1810 г.	248
49.	Письмо И.Б. Пестеля Н.П. Румянцеву. —16 января 1812 г.....	249

監修者、編訳者、訳者一覧

日露関係史料集第5集の刊行にあたって

平 川 新

本史料集には、1805年から1812年までのロシア語史料49点を翻訳して収録した。1800年から1815年までの史料を収録した第1集と時期は重なるが、第1集が第2回遣日使節レザーノフと日本人漂流民の送還を中心とした内容であったのに対し、この第5集はレザーノフが幕府から通商を拒否されてカムチャツカに帰還して以降の史料を中心にしている。

内容は大きく三つに分けることができる。第一はレザーノフによる北アメリカ開発構想、第二はフヴォストフとダヴィドフによる日本北方襲撃事件、第三はイルクーツクの日本語学校、である。

レザーノフによる北アメリカ開発構想については、1805年にレザーノフが皇帝にあてた報告書である史料1や12、彼が露米会社に宛てた報告である史料2、9～11などに詳細に記されている。

1804年に来日したものの、日本と通商を開くことに失敗したレザーノフは、ロシアが18世紀に進出したアラスカの毛皮業振興に活路を見出すことにした。史料1をみると、この地域はオットセイが豊富で、すでに100万頭以上を捕獲したと述べている。絶滅しないように狩猟を禁じたことレザーノフが述べているので、その乱獲ぶりはすさまじい。この地域にはボストンから毎年15隻前後のアメリカ船がやっていると記されているが、史料9にはイギリス船がカディヤク島に来航したとあるので、領土獲得や先住民との間の毛皮取引をめぐる、列強が角逐を繰り返していた様相を知ることができる。先住民との戦闘も激しかったが、ボストン商人が大量の大砲を先住民に提供しているといった記事もある。最終的にはアメリカ大陸の先住民たちは欧米列強の支配下に強行的に組み込まれてしまうが、その過程における列強と先住民との間の複雑な関係が垣間見えて興味深い。

史料1によるとレザーノフは、北アメリカの施設を増強し、船を新造したうえで再び日本に交易を迫ることを考えていたようだ。日本政府は拒否したが民は交易を望んでいるとして、松前(北海道)やカラフトの日本人集落を襲撃し日本政府に軍事的圧力をかけたいと述べている。皇帝の許可を得る前に実行するともあるので、日本との交渉失敗の不名誉を何とか自力で回復したかったのだろう。皇帝の許可を得ない襲撃が罪に問われるかもしれないとの自覚はもっていたから、正式に上申すれば許可がおりないと予測していたのかもしれない。その後、襲撃命令を撤回したと

いう解釈もなされているが、こうした経緯をみるとレザーノフは確信的に命令を出したといっ
てよい（レザーノフの襲撃命令については拙稿「レザーノフ来航史料にみる朝幕関係と長崎通詞」、
寺山恭輔編『開国以前の日露関係』東北アジア研究センター、2006年、を参照）。ところが襲撃
の責任を問われたのは、1807年に没したレザーノフではなく、その命令を忠実に実行したフヴォ
ストフとダヴィドフであった。

フヴォストフとダヴィドフによる日本人集落襲撃事件に関する史料の一部は、すでに第1集に
収録している。そのなかにレザーノフによる襲撃命令書も含まれているが、本書にはフヴォスト
フとダヴィドフそれぞれの航海日誌や、襲撃事件の処理に関するロシア政府筋の動きを示す史料
を収録した。史料13以下の大半がそれである。

レザーノフがフヴォストフ中尉に、サハリン(カラフト)島とクリル(千島)列島へ遠征し、日本船
や集落を攻撃して日本人を捕虜にし船を焼き払うことを命じたのは、ロシア暦1806年8月のこ
とである。これを受けてフヴォストフは同年10月、サハリンのアニワ湾にある日本人居留地を
襲撃して4人を捕虜にし、物資を掠奪して家屋を焼き払った。翌年5月には部下のダヴィドフと
共にエトロフ島とリシリー島で日本人居留地を襲撃して掠奪と放火を繰り返し、日本人を捕縛し
た。彼らは捕らえた10人のうち8人をリシリー島付近で釈放して、松前県知事（松前奉行）に
宛てた史料14の書簡を持たせている。日本政府が通商に応じなければ、さらに大きな攻撃をし
かける、という脅迫文であった。

この襲撃事件の詳細については第1集と本書所収史料、およびA.A.キリチュンコ氏の「海賊船
ユノナ号とアヴォシ号ーロシア側当事者の行動から見る樺太・エトロフ島襲撃事件」（『東北アジ
ア研究』6、2002年）によって、ロシア側からの事情をつかむことができる。また、この事件に対
する日本側の動向については、菊池勇夫氏の『エトロフ島』（吉川弘文館、1999年）や藤田覚氏の
『近世後期政治史と対外関係』（東京大学出版会、2005年）に詳しいが、フヴォストフらがエトロ
フ島を襲撃した際に捕虜になったのが、盛岡藩士大村治五平であった。一ヶ月後に釈放されるが、
捕虜になったことを理由に大村は藩から籠居の処罰を受けた。無念の思いで襲撃と拉致の様子を
書き綴ったのが「私残記」である。

同著はすでに、森荘巳池氏が『私残記ー大村治五平に拠るエトロフ島事件』（中公文庫、1977
年）として紹介し、近年には岩手県立博物館の図録『北の黒船』（2008年）でも全文が紹介されて
いる。ロシア船による襲撃の状況だけではなく、拉致された船内の構造や道具類なども絵入りで
説明されており、日本人側の記録として貴重である。そこで本史料集では巻末附録として、同著
から「ロシア船」と「ロシア兵」の図版を掲載した。掲載を許可して下さった大村次盛氏と、

仲介の労をとっていただいた岩手県立博物館の時田里志氏には、篤く御礼を申し上げたい。

なお「私残記」の記事から、興味深い事例をいくつか紹介しておきたい。一つは、白旗に関する記事である。大村たちが警固するエトロフ島のシャナにロシア船二隻があらわれた際、幕府役人の関谷茂八郎は、「長棒之先え白物」を付けて振り回せばロシア船が寄りつき、上陸時に「あの地の礼法」として鉄砲を三回打ち放すだろうと語ったという。だから攻撃だと勘違いするなという注意だったのだが、会所支配人の川口陽助が「棒之先へ白木綿を結付、振廻し候処、舟にて鉄砲三放四放打申候」とあるように、白木綿すなわち白旗を掲げて応接したにもかかわらずロシア側が発砲したため、日本側も一発打ったという。そのためロシア船はいったん岸を離れたが、また接岸しようとしたため再び陽助が応接に向くと、やはりロシア船から「鉄砲三放討」されたという。そのとき、関谷の配下として来島していた間宮林蔵が駆け寄って「是は大秦之礼法」だと注意したため、日本側は手出しをしなかった。「大秦」とはローマ帝国のことだが、ここでは西洋の意味である。ところが上陸したロシア兵は陽助に鉄砲を打ち放って傷を負わせ、大砲も陸揚げして、激しく攻撃してきたという。おそらく再接岸のときも陽助は白木綿を掲げていたと思われる。大村治五平は関谷茂八郎や間宮林蔵たちが「物知顔」に「礼法」だなどといったので攻撃をしかける機会を逸し、簡単に上陸を許してしまった、と批判している（「私残記」に白旗記事があることを紹介したのは、中村喜和「陽助の白旗—エトロフ島合戦余話」『異郷』31、来日ロシア人研究会会報、2009年）。

もし二人の「むだ言」がなければ防戦して上陸させなかったのにと大村が痛罵するように、幕府役人の関谷と間宮が、なまじ西洋の礼法に通じていたがためにロシア兵の上陸を許してしまったということになる。確かにその通りかもしれない。だがここで注意しておきたいのは、関谷と間宮が、白木綿／白旗と、礼砲の意味を知っていたという点である。

じつは白旗については、ここ数十年のほどのあいだに論争が起きていた。嘉永六年（一八五三）、軍艦4隻を率いて浦賀に来航したアメリカのペリーが日本側役人に通商か戦争かの選択を迫り、もし日本が和睦を乞うのであれば、この白旗をかかげよ、と書いた文書と白旗を手渡した、というのである。松本健一氏は『白旗伝説』（講談社学術文庫、1998年）において、それまで日本で白旗といえば源氏の旗印のイメージしかなく、白旗が降伏を意味するものであることをペリーによって初めて知らされたとし、この白旗一件こそ、アメリカの砲艦外交を典型的に示すものだと指摘している。これに対して宮地正人氏や岩下哲典氏は、白旗を掲げよと言ったと書いている記録は存在するが、それはペリーが渡したのではなく、幕府役人が作成した偽書であり、また幕府

役人はすでに白旗が交渉旗であることを知っていたと批判した（宮地「ペリーの白旗書簡は明白な偽文書である」『歴史評論』618、2001年。岩下「江戸時代における白旗認識とペリーの白旗」『青山史学』21、2003年、など）。

ペリーが白旗を渡したことは、論争の双方が認める歴史的な事実である。要はそのときに、降伏するなら白旗を掲げよと書いた文書をペリーが渡したのかどうか、大きなポイントであった。これまでの実証的検討からみれば、文書はなかったが、ペリー側は白旗の意味を日本側に説明した、と理解するのが妥当なようだ。口頭ではとうぜん白旗が交渉の使者の印でもあることが説明されただろうが、降伏する場合は白旗を掲げよという部分が過大に受けとめられた可能性があるというのが岩下氏の見解である。白旗文書の有無にかかわらず、宮地氏もアメリカによる開国の迫り方を砲艦外交だとする見方を否定してはいない。しかし砲艦外交をいうなら、もっと確実な史料を使えというのが宮地氏の批判であった（岸俊光『ペリーの白旗』毎日新聞社、2002年）。

その後、松本英治氏が、フヴォストフ襲撃事件が発生した1807年(文化4)に、長崎通詞がオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフから、今後ありうるロシア船との交渉に際しては舳先に白旗を掲げればロシア人は間違いなく会談する、と教えられていたことを明らかにした（松本「19世紀はじめの日露関係と長崎オランダ商館」『開国以前の日露関係』前掲）。ロシアとの紛争が長崎通詞をして、ヨーロッパの国際慣行に目を向けさせたのであった。

緊張を高めた日露間ではその後1811年(文化8)に、クナシリ島に上陸したロシア海軍士官ゴロヴニンが日本側が捕縛し、翌年、副官のリコルドがゴロヴニンとの人質交換をはかるためにクナシリ島沖で高田屋嘉兵衛を拉致するという事件が連続して発生した。しかし高田屋嘉兵衛の機転と仲介によって、1813年(文化10)に箱館で日露会談が実現し、ゴロヴニンが釈放されるにいたる。その交渉時、ロシア船には白旗が掲げられており、箱館奉行所とロシア船の間を往き来した高田屋嘉兵衛の小船にも、同様に白旗が翻っていた。白旗は交渉旗として機能したのであった（拙著『開国への道』小学館、2008年）。

ところが大村治五平「私残記」が記す「白木綿」の事実は、フヴォストフ事件よりも前に、白旗が国際交渉旗であることを幕府役人の関谷茂八郎や間宮林蔵らが認識していたことを示す重要な記事だということになる。さすがに異国と接触する可能性を想定した探検家たちであった。国際慣行を十分に吸収していたのである。だが、その国際慣行にもとづいて日本側が掲げた白旗を無視して、ロシア側は砲撃を加えた。「私残記」は、ロシア側が西洋の「礼法」に反して攻撃したことも明らかにしている。

「私残記」で興味深い二つ目の記事は、奥州下北郡牛滝村の船頭継右衛門ら6人が、カムチャ

ツカから脱出して千島列島伝いにエトロフ島までたどりついたという話である。継右衛門ら 13 人乗りの慶祥丸は享和 3 年(1803)10 月に箱館から江戸に出帆したが、房総半島九十九里沖で暴風雨にあって太平洋へ押し流され、翌年 7 月、ようやくにして北千島のホロムシリ島に漂着した。北千島アイヌとロシア人宣教師の乗った船が同島沖合を通りかかって助けられ、カムチャツカのペトロパヴロフスクに移った。そこで、すでにロシアに帰化して日本語通訳になっていた石巻の若宮丸漂流民善六に出会う。慶祥丸漂流民は善六から、通商交渉に出向いたレザーノフが長崎から戻れば、すぐにでも日本に送還されるだろう、と聞かされる。しかし交渉に失敗してペトロパヴロフスクに帰着したレザーノフは、慶祥丸漂流民をアラスカに入植させることを考えた。この史料については第 4 集史料 59「N.P.レザーノフによる露米会社本部宛の報告書」として収録したが、本書史料 7 に収録した露米会社カムチャツカ手代からの報告では、カムチャツカ警備司令官のコシェレフ陸軍少将が彼ら 6 人をヴェルフネカムチャツクに送って耕作に従事させることを決定したとある。カチャツカを預かる現地司令官と、アラスカにまで商圏を広げた露米会社の重役でもあるレザーノフとのあいだに、日本人漂流民の扱いをめぐる相違が発生していたことが知られる。慶祥丸の漂流記(「享和漂流記」『江戸漂流記総集』3、日本評論社、1992 年)には、帰国を懇願する漂流民に対してコシェレフおよびレザーノフとおぼしき人物が、帰国をあきらめて他の地域に移住することを勧めたという記事があるので、ロシア側記録とも一致する。

ところで本書史料 7 には、ロシア暦 1805 年 6 月 30 日の夜に、日本人 6 人が密かに逃亡したとある。おそらく漂流民たちは、入植労働力として移住させられることを恐れたのだろう。ただし慶祥丸漂流記には善六やロシア役人らの協力を得てカムチャツカから小舟で出発したとあり、ロシア側記事と大きく異なる。レザーノフと共に長崎に来航したナジェージダ号船長クルーゼンシュテルンも、日本人が逃亡したと書いている(『クルウゼンシュテルン日本紀行』駿南社、1931 年)。慶祥丸漂流民はシュムシュ島からはアイヌの介助を得て無事にエトロフ島まで到達したが、幕府による無用な詮索を避けるために、脱出ではなく、ロシア側の協力によって帰国したことにしたのかもしれない。

なおフヴォストフは、1807 年にエトロフ島のナイホを襲撃した際、番屋小頭の五郎治らを拉致した。大村治五平の「私残記」にも彼の名前が出てくるが、釈放されなかった五郎治と佐兵衛はオホーツクに連行された。史料 42、47～49 には、その兩人に対するオホーツクでの扱いや、彼らの脱走と佐兵衛の死亡に関する記事がある。生き残った五郎治は 1811 年にイルクーツクに送致されて善六の家に寄宿した。慶祥丸漂流民がカムチャツカから脱出したあと善六はイルクーツクに戻り、今度は五郎治と出会ったのであった。その五郎治は、ゴロヴニンがクナシリ島で日本側に捕縛されるとオホーツクに呼び戻され、副官リコルドの使いとしてクナシリ島に上陸した。

しかしロシア側に戻らなかったために、リコルドはクナシリ島沖で辰悦丸を拿捕し、乗船していた高田屋嘉兵衛をカムチャツカに連行するという事件が発生する。その後は前述のように、高田屋嘉兵衛の仲介によって1813年に初めての箱館で日露会談が開かれ、ゴロヴニンは釈放された。その日露会談にロシア側通訳として立ち会ったのが善六であった。

ロシア名ピョートル・ステファノヴィチ・キセリョフこと元若宮丸船員善六は、1806年時には十四等文官に任じられていたことが本史料集第4集史料53・3に収録した記事からわかる。善六はロシア正教の洗礼を受けてロシアに帰化した1796年からイルクーツク日本語学校の助手を務めていたが、本書史料3、4、8には1805年の日本語学校生徒6人の奨学金増額に関する史料を収めた。善六は1815年には同校の正教師に任命され、年俸240ルーブルと住宅費70ルーブルを給されたが、この時期の日本語学校の生徒は、わずか2人にすぎない。1816年には、ついに閉鎖された(播磨権吉「露国於ける日本語学校の沿革」『史学雑誌』33・10、1992年)。第4集所収の日本語学校関係記事によれば、テキストの不足などにより日本語教育の成果があがっていないことが知られる。だがロシア側が日本語教育に意欲を失ったのは、レザーノフによる通商交渉の失敗によって、対日交渉に悲観的になっていたこともあると思われる。

以上、本書所収史料の概要を簡単に紹介してきた。こうしてみると、漂流民、襲撃、捕縛・拉致、日ロ会談、日本語学校など、さまざまな連関のなかで日ロ関係が展開していたことを知ることができる。本書もまた、これまでの一連の史料集と同様に、日露関係史の研究に貢献するものと確信している。その編集の労をとってくださったのは、東北アジア研究センターの寺山恭輔准教授と、小野寺歌子さん(教育研究支援者)、畠山禎さん(元研究員)である。翻訳については、巻末にあげた6人の方々のご助力を頂いた。18～19世紀の難解なロシア語の翻訳と校訂・編集に取り組んでくださったこれらの方々に、深甚の謝意を表したい。

出典一覧

(番号は各文書末尾の出典に対応)

史料館*

- (1) (旧)ロシア外交史料館
АВПР (Архив внешней политики России)
(現)ロシア帝国外交史料館
АВПРИ (Архив внешней политики Российской империи)
- (2) (旧)国立中央海軍史料館
ЦГАВМФ (Центральный государственный архив военно-морского флота)
(現)ロシア国立海軍史料館
РГАВМФ (Российский государственный архив военно-морского флота)
- (3) (旧)ソ連国立中央歴史史料館
ЦГИА (Центральный государственный исторический архив СССР)
(現)ロシア国立歴史史料館
РГИА (Российский государственный исторический архив)

刊行された文献

- (4) N. M. デゥルジエン 『いにしへの日本におけるロシアの航海者』
Дружинин Н. М. Русские мореплаватели в старой Японии. Ленинград, 1924.
- (5) P. ティフメネフ編 『露米会社の形成と現在までの活動の史的概観』
Тихменев П. (Сост.) Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени. СПб., 1861-1863. Ч. 1-2.
- (:) J. ド・ウルフ 『半世紀以上前の北太平洋への航海とシベリア横断旅行』
D<Wolf, J., A Voyage to the North Pacific and a Journey through Siberia more than a Half Century Ago, Cambridge, Mass., 18: 1.

* ロシア語の「アルヒーフ」の訳。史料館以外に、資料館、文書館などの訳も可能。

訳語表

官庁など

Адмиралтейский департамент	海軍省
Адмиралтейская коллегия	海軍参議会
воеводская канцелярия	地方長官所
губернская канцелярия	県庁
земский суд	地方裁判所
кабинет е.и.в.	帝室官房
Охотская канцелярия	オホーツク政庁
Коллегия иностранных дел	外務参議会
Коммерц-коллегия	商業参議会
Правительствующий Сенат	元老院
приказная изба	役所
приказная палата	プリカース[官庁]所
провинциальная канцелярия	地区政庁
Сибирский приказ	シベリア庁

官位・役職など

адмирал	海軍大将
боцман	掌帆長
боцманмат	掌帆兵曹
бригадир	陸軍准将 (1722～1799 年)
вице-адмирал	海軍中將
воевод	地方長官
военный губернатор генерал	軍務知事
войсковой старшина	コサック軍中佐 (コサック軍のみ)
генерал адмирал	海軍元帥 (1708 年～)
генерал-губернатор	総督
генерал-интендант	主計長
генерал-лейтенант	陸軍中將 (18 世紀末～)

генерал-майор	陸軍少将
генерал от артиллерии	砲兵大将 (1796 年～)
генерал от инфантерии	歩兵大将 (1796 年～)
генерал от кавалерии	騎兵大将 (1796 年～)
генерал-поручик	陸軍中将 (1730 年代～18 世紀末)
генерал-прокурор	元老院総裁
генерал-фельдмаршал	陸軍元帥 (1699 年～)
главный командир	総司令官
главный правитель	総支配人
губернатор	県知事
есаул	コサック大尉 (～1884 年)
инженер-генерал	工兵大将 (1796 年～)
кабинет секретарь	帝室官房長官
капитан	歩兵大尉 (～1884 年)、海軍佐官、艦長、船長
капитан 1-го ранга	海軍大佐
капитан 2-го ранга	海軍中佐
капитан 3-го ранга	海軍少佐
капитан-командор	海軍准将 (1722～1799 年)
капитан-лейтенант	海軍大尉 (1698～1884 年)
капитан-поручик	歩兵中尉 (1705～1798 年)
квартирмейстер	補給兵曹
команда	乗組員、部隊、小隊など
командир	指揮官、司令官、艦長など
комендант	警備司令官
комиссар	監察官
контр-адмирал	海軍少将
корнет	(騎兵・国境警備) 少尉補 (～1884 年)
лейб-гвардия	親衛隊
лейтенант	海軍中尉 (～1885 年)
майор	陸軍少佐 (1698～1884 年)
мастер	親方など
матрос	水兵

министр иностранных дел	外務大臣
министр коммерции	商務大臣
министр морских сил	海軍大臣
мичман	海軍少尉（～1885年）
начальник порта	港長官
обер-офицер	尉官
передовщик	先導者
подполковник	陸軍中佐
подпоручик	陸軍第二少尉
подъесаул	コサック中尉（～1884年）
полковник	陸軍大佐
поручик	陸軍少尉（～1884年）
правитель	支配人、統治者
прапорщик	陸軍少尉補（～1884年）
президент Коммерц-коллегии	商業参議会議長
премьер-майор	陸軍中佐
приказный человек	官吏
прикащик; приказчик	プリカース員、手代など
промышленник	毛皮採集者
работные люди	役夫
ротмистер	騎兵大尉（～1884年）
служилые люди	下級勤務員
сотник	コサック少尉（～1884年）
ундер(унтер)-офицер	下士官
управитель	管理者
флагман	艦隊司令官
хорунжий	コサック軍少尉補（～1884年）
шкипер	掌帆長
штабс-капитан	歩兵中尉（1798～1884年）
штабс-ротмистр	騎兵中尉（～1884年）
штурман	航海士

文書など

атлас	地図帳
вахтенный журнал; журнал плавания;	
шканечный журнал	航海日誌、当直日誌
ведение	通達、報告
выписка	抜粋
докладная записка	報告書
доношение	報告
журнал заседаний	會議録
журнал путешествия; путевой журнал	旅行日誌
записка	文書、報告
известие	通知
извлечение	抜粋
инструкция	通達、指示
итоговая карта	総括地図
конвенция	条約、協定
(Морской) регламент	(海軍)規定
Морской устав	海軍操典
наказная память; ордер	命令書
наставление	指示
определение	決議
перевод	転写、翻訳
показание	証言、供述
предложение	提議
предписание	指令
представление	報告書、上申書、請願書
приложение	添付文書
проект	構想、草案
пропозиция	動議
реляция	戦況報告、功績調書、報告
рапорт	上申書、報告

распросные речи	談話記録
регест	要旨
рескрипт	詔書、勅書
сказка	陳述書
сообщение	手紙、報告
указ	勅令（皇帝の場合）、命令書
экстракт	要約、要約報告

船

бот	小船艇
бриг	ブリッグ型帆船
бригантина	二檣帆船
буер	輕帆船
буса	(東洋の)大型木造船
галера	ガレー船
галиот	平底帆船
дубель-шлюпка	ダブル・スループ船
коч	コーチ船
лодья(ладья)	ロジャー(ラジャー)船
пакетбот	パケットボート
тендер	単檣帆船
фрегат	フリゲート船
шитик	シチク船
шлюп	スループ船
шлюпка	搭載艇
шхербот	平底小船艇
ялбот	船載ボート

その他

иноземец	異郷人
----------	-----

инородец

異族人

острог

要塞

посольство

使節團

поход; экспедиция

遠征、航海

промысел

毛皮事業、毛皮採集

用語解説

度量衡

アルシン	約 71 センチメートル
アンカー	約 34.35 リットル
インチ	約 2.54 センチメートル
ヴェドロ	約 12.3 リットル
ヴェルシヨーク	約 4.45 センチメートル
オシミナ	約 105 リットル
クルシカ	約 1.23 リットル
サージェン	約 2.134 メートル
シトーフ	10 分の 1 ヴェドロ(約 1.23 リットル)
ゾロトニク	約 4.25 グラム
チャルカ	約 0.123 リットル
チェトヴェルチ	4 分の 1 アルシン(約 18 センチメートル)
ノット	船の速度単位。毎時 1.87 キロメートル
フィート	約 30.48 センチメートル
プード	約 16.38 キログラム
フント	約 409.5 グラム
露里(ヴェルスタ)	約 1.067 キロメートル

地名

アレウト列島	アリューシャン列島
ヴォストーチヌィ洋、ヴォストーチ	太平洋
ノエ海(それぞれ東洋、東海の意)	
カディヤク島	コディアック島
クリル列島	千島列島

その他

アルテリ	ある種の筋肉労働者などによって組織される、労働、消費、利益分配のための協同組合をさす。ただし、本史料
------	--

	集においては、毛皮採集者の作業班の意で用いられている。
下級勤務員	おもに兵士をさす。
掌院(アルヒマンドリート)	ギリシャ正教における黒僧(修道僧、禁妻帯)の階位の一つ。修道院長などの要職につくことが多い。
毛深いクリル人、毛深人	クリル列島民のうちカムチャツカ半島から遠方にある島々に居住する者。ロシア皇帝に臣従しておらず、したがってヤサク税(後述)を納めていない。
トヨン、クニヤゼツ、アタマン	順に、選出された族長、シベリア異族人の族長、首領、の意。
バイダーラ、バイダルカ	海獣の皮で作られた小舟。バイダルカはバイダーラよりも小型のものをさす。
役夫	労力を要する単純作業に従事する者や毛皮採集に従事する猟師などをさす。
ヤサク税	帝政期において、狩猟を営む非ロシア系民族に課せられていた現物税。クロテン、狐、ビーバーなどの毛皮類で納められた。

凡 例

1. 本史料集では、おもにロシア各地の史料館に所蔵されている未刊行史料、帝政時代の刊行物で紹介された史料の日本語訳を収録した。このうち前者については、ロシア語テキストも掲載した。
2. 本史料集シリーズ第1～3集の出典となったロシア語史料集①～⑩(書名等については、第1～3集の凡例を参照されたい)に加えて、以下の史料集からも関連史料を若干、追加した。
⑪N.N.バシユキナほか編『ロシアとアメリカ合衆国——関係の形成(1765～1815年)』
Башкина Н. Н. и др. (Сост.). Россия и США: становление отношений (1765–1815). М., 1980.
⑫A.L.ナロチニツキー責任編集『19世紀および20世紀初頭のロシア外交——ロシア外務省史料』
Нарочницкий А. Л. (Отв. Ред.). Внешняя политика России XIX и начала XX века: документы Российского министерства иностранных дел. Серия первая. Т. 4. М., 1965.
これらの史料集を出典とする場合、史料題名のあとに丸囲み数字で出典史料集を表記し、そのあとに各史料集における整理番号を付した。
3. 所収史料の出典に付された丸カッコの番号は、「出典一覧」に対応している。
4. 既刊史料集第1～3集およびそれらの出典となったロシア語史料集などを参考に、内容を損なわないよう配慮したうえで、日本語訳、ロシア語テキストの体裁を統一した。
5. 史料の一部が省略されている場合、省略部分は(略)と示されている。この部分はロシア語原文の...と対応している。なお、省略および史料の部分的引用は、基本的にロシア語史料筆写者により行われたものである。
6. 本書の監修者、編訳者、訳者の側で補足した部分は、脚注ではそれぞれ【監修者補注:】、【編訳者補注:】、【訳者補注:】として記し、文中では〔〕内に入れた。
7. 史料筆写者がロシア語テキストに付した注は、脚注ではそのまま記し、文中では〔〕内に入れた。
8. 語彙、文意が不明な箇所にかんしては、やむを得ずロシア語をラテンアルファベット表記したものを残し、下線を引いた。
9. 目上の者に宛てた文書は、必ず敬体(ですます調)で訳した。
10. 地名や人名について、原典の同一文書内でも表記のゆれが見られる。その表記が一般的な

表記と異なる場合、[]内に一般的な表記を補足した。

11. 本史料集では、とくに断りがないかぎり旧暦(ユリウス暦)が用いられている。新暦(グレゴリオ暦)に直すためには、18世紀においては11日、19世紀においては12日を加える必要がある。

1. N.P.レザーノフから皇帝[アレクサンドル一世]への報告書

1805年7月18日

ウナラシュカ[ウナラスカ]島

慈悲深き皇帝陛下

私は指示を与えたくてカムチャツカにナジェージダ号を残し、6月14日、カムチャツカを出発し、皇帝陛下の御意に沿うべく先に進みました。われわれは、まさにウナラシュカ島よりアメリカ地方の観察を開始したいと考えておりましたので、アレウト列島の北側に沿って航行しました。逆風のため湾に入れず、私はこの逆風を利用して聖パーヴェル島や聖ゲオルギー島の北にある島々へ向かいました。しかし、われわれはさらに北へ流され、そこから聖パーヴェル島へようやく辿り着きました。島は信じられないほどのオットセイであふれ、海岸はオットセイで埋め尽くされておりました。狩猟も容易です。われわれは新鮮な食料を持ちあわせておらず、自分たちの消費用に半時間ほどで約80頭を仕留めました。それにもかかわらず、オットセイは10頭ほどしか減っていないようでした。ボストン人[アメリカ合衆国民とくにボストン出身者]がロシア領アメリカ沿岸で毛皮を採集し、その毛皮を中国へ持ち込んでわれわれに打撃を与えさえしなければ、これらの島は無尽蔵の富の宝庫です。オットセイは100万頭以上捕獲されましたので、私はオットセイが絶滅しないように、猟の中止を命じました。私は人員をセイウチの牙の採集に振り向けました。聖パーヴェル島のそばに、セイウチが群がる島があったからです。聖ゲオルギー島に接近したにもかかわらず、逆風のためわれわれはそこに到達できず、ウナラシュカ島へ針路をとりました。暴風に耐え、われわれは7月16日、そこに辿り着きました。ウナラシュカ島で私は聖アレクサンドル[・ネフスキー]号に遭遇しました。この船は、バラノフ氏が越冬し、自分たちの施設を構えているノルフォーク・ズドノ[ノーフォーク・サウンド]、別名シトカ[ノヴォアルハンゲリスク]から到着したところでした。私は聖アレクサンドル号から以下の報告を受けました。昨年、コロシ人[トリングット Tlingit 族]とロシア人の激しい戦闘がありました。コロシ人は、ボストン人の協力によりすぐれた銃器で武装し、要塞を建設しました。この要塞から彼らを追い出したものの、味方が6人殺害され、重傷者が多数出ました。バラノフ氏も腕を負傷し、海軍中尉アルブーゾフは胸に重傷を負いました。ネヴァ号が救援にやってこなければ、被害は甚大であっただろう、とのことでした。

僭越ながら、忠実なる臣民として皇帝陛下に私見を申し上げます。ボストンから毎年15~20隻の船が到来する現在、当地方の支配を確実にする必要が大いにあることに議論の余地はありませんし、素手のままでは安心できません。第一に、[露米]会社は、小型であっても軍事用のブリッグ型帆船を建造し、砲を装備して当地へ送る必要があります。そうすれば、ボストン人は退却を

余儀なくされるでしょう。その一方で、中国人はもっぱらわが国から毛皮を入手するようになるでしょう。第二に、かくも広大な地域における会社の事業遂行自体が巨額の費用を要し、毛皮交易だけでは[ロシア領アメリカ]維持できません。また、アメリカにある会社の施設が主要な食糧、すなわち穀類をオホーツクから輸送しなければならないのであれば、本来の力を十分に発揮できません。オホーツクは、それ自体が援助を求めています。したがって、スペイン政府の許可を得たうえで、フィリピン諸島やチリで食料を購入する必要があります。とくに、かの地ではパンやラム酒、砂糖が安価ですので、ピアストル立て手形にて二束三文で調達できますし、カムチャツカ全域にも供給可能です。他方で、アメリカの施設を増強し、船舶を建造したうえで、日本人に交易の開始を迫ることができます。われわれのところでは、民が交易を強く望んでおります。ここに、私はフヴォストフ氏やダヴィドフ氏のようなすばらしい協力者を得ております¹。彼ら

¹ [編訳者補注：帝政期に刊行された『ロシア人名事典 *Русский биографический словарь*』は、フヴォストフとダヴィドフの生涯について、一部不正確な内容も見受けられるが、詳細な情報を提供している。以下、参考までに紹介しておきたい。

フヴォストフ、ニコライ・アレクサンドロヴィチ(1776～1809年)——海軍中尉。1786年、海軍幼年学校に入学。1792年、海軍少尉。1797年、海軍中尉に昇進。1801年までさまざまな船でフィンランド湾、大西洋、地中海を航海した。1802年、露米会社に入社。同社の航海士は航海の経験がきわめて不足しており、フヴォストフはその精力、進取の気性、海事にかんする知識で同社に大きく貢献した。1806年、フヴォストフはユノナ号を指揮してオホーツクからサハリン島に渡り、アニワ湾で「ロシア遣日使節団を拒絶した日本帝国に復讐するため」(レザーノフ)、日本人の穀物倉を焼き払った。翌年、同船を指揮し、海軍少尉ダヴィドフ指揮下の単樁帆船アヴォシ号を帯同してクリル列島への航海を行ない、シャナ島[正しくはエトロフ島のシャナ湾]で2つの日本人集落を倉庫もろとも焼き払った。そして、マトマイ島[北海道]の日本人から輸送船を略奪し、オホーツクへ帰った。しかし、オホーツクでフヴォストフはダヴィドフとともに逮捕され、ペテルブルグへ送還され、海軍省による取調べを受けた。海軍省は彼らを軍事裁判に付すことを決定した。一方、フヴォストフとダヴィドフは総司令官の命令でフィンランドへ派遣され、小型船を指揮し、スウェーデンに対する軍事行動に参加して見事な戦功をあげた。フヴォストフの功績に対して聖ゲオルギー四等勲章を、ダヴィドフにウラディーミール四等勲章を授与することを総司令官は提議したが、アレクサンドル一世は自筆でつぎのように記した。「日本人に対するこれらの将校たちの身勝手な行為への罰として、フィンランドでの功績には褒賞を授与しない」。1809年10月4日深夜、フヴォストフとダヴィドフは【船の航行のために】切り離されていたイサーク橋を、通行するハシケの助けを借りてヴァシリエフ島からネヴァ川の対岸へ渡ろうとしたが、川に落ち、溺死した。彼らの遺体は発見されなかった。

ダヴィドフ、ガヴリール・イヴァノヴィチ(1784～1809年)——旅行家。1795年、海軍幼年学校に入学。1796年、ダヴィドフはまず名簿[海軍幼年学校生徒名簿]にもとづき士官候補生となり、クロンシタットからイギリス沿岸までを航海した。1798年、海軍少尉に昇進し、ふたたびイギリス沿岸、そしてドイツ沿岸を航海した。1802年、海軍中尉フヴォストフからの誘いで、陸路オホーツクまで行き、そこから社有船でアメリカまで航海するという露米会社からの提案を受諾した。ダヴィドフはスクナー聖エリザヴェータ号で、オホーツクからカディヤク島の聖パーヴェル湾へ渡った。1804年、ダヴィドフはフヴォストフとともにオホーツクからペテルブルグに帰った。ペテルブルグで2人は露米会社にふたたび入社した。しかし、この年の航海では彼らはアメリカに到達できなかった。というのは、聖マリア号の漏水により、彼らはペトロバヴロフスク湾行きを余儀なくされ、ここで越冬したからである。1805年、ダヴィドフとフヴォストフは、遣日使節の任務に失敗した露米会社元代表取締役レザーノフと合流し、アメリカ沿岸を航行し、ノヴォアルハンゲリスクに到着した。レザーノフは使節団失敗に対する日本人への復讐を企て、サハリンのロシア領併合を計画した。レザーノフはその目的で単樁帆船[正確にはフリゲート船]ユノナ号を入手し、これをフヴォストフの指揮下に委ね、新たに建造した単樁帆船アヴォシ号の指揮者にダヴィドフを任命した。レザーノフが与えた指示によれば、ダヴィドフはサハリンとマトマイに向かい、サハリンのアニワ湾で、レザーノフをオホーツクへ送り届けたフヴォストフとその船の帰りを待たなければならなかった。そのうえで、ダヴィドフはフヴォストフと一緒にサハリン遠征を遂行しなければならなかった。しかし、レザーノフはオホーツクに上陸すると、この指示に対する補足をフヴォストフに送った。この補足は二重の意味にとれる、つまりサハリンへの

の助力を得て船を建造し、来年、日本沿岸へ向けて出発し、マトマイ[北海道]では日本人の村落を破壊し、サハリンから日本人たちを追い出し、沿岸一帯を恐怖に陥れ、漁獲物を強奪し、およそ20万人分の食糧を取り上げることを考えています。そうすることで、日本人に対してわれわれとの取引を一刻も早く開始するように強いたとしても、皇帝陛下がそれを私の罪とみなされるとは思っておりません。われわれとの取引から、彼らは恩恵を受けるでしょう。ところが、私は日本人が大胆不敵にもすでにウルップ島に商館を設けたとも聞きました。ご命令が下りるのを待たずに行動を起こした罪人として、私を罰してください。しかし、私が時間を無為に過ごし、御身の栄光のためにこの身を捧げないのであれば、私はむしろ良心に苛まれることでしょうか。ましてや、偉大なる陛下のご意向に沿うことができると分かっているときにはなおさらです。私の功績は、世界一周航海だけで終わりません。毎年、数えきれないほどの商船がそのような航海を行っております。私は会社に手紙を送り、スペイン領の港町での食糧購入その他もろもろについての、陛下への請願を会社に依頼しました。しかし、会社が恐れ多くも請願したのか存じておりませんので、私自身が陛下に直接お願い申し上げることにいたしました。

ところで、私は以下の遂行を自らの神聖なる責務と考えております。すなわち、アメリカ地方全域の統治について深く探求すること。平穏な皇帝陛下のご治世にふさわしい統治の精神を、この地において人びとに育ませる人材を提供すること。もしも野蛮な慣習が存在するならば、それらを一掃すること。博愛心によってのみ、皇帝陛下のご慈悲にあずかれるのだとひとりひとりに教え込むこと。当地ウナラシュカ島で、島民たちがすでに自分たちの慈悲深き皇帝の御名を讃えているという印象を私は受けました。彼らが支配人に満足しているのか、【ラリオノフから】抑圧

遠征中止とも遠征遂行の激励とも解釈可能なものだった。ダヴィドフとフヴォストフはこの新しい命令を後者の意味で解釈し、指示にしたがって行動した。実際には彼らはサハリンを占領しなかったが[正確には、レザーノフはサハリン占領を命令していない]、日本人への報復として2つの集落を略奪した。1807年、遠征終了後、ダヴィドフとフヴォストフはオホーツクへ帰還するが、そこで逮捕された。この逮捕では、彼らが規律違反(遠征は彼らの独断によるものと判断された)を犯したことよりも、オホーツク港長官が彼らに対して敵対的な態度をとったことが大きな影響を与えた。拘禁されたダヴィドフとフヴォストフは逃亡した。イルクーツクで当初、彼らの身柄は確保されたが、その後、解放された。ペテルブルグに到着後、彼らは上層部から嫌疑をかけられたが、いかなる裁判も受けなかった。その後、ダヴィドフはフィンランドへ派遣され、砲艦を指揮した。ダヴィドフとフヴォストフがフィンランドで類まれなる武勇を見せたにもかかわらず、総司令官ブクスゲウデン伯爵がダヴィドフへの聖ウラディーミル四等勲章の授与を提議すると、皇帝[アレクサンドル一世]は「日本人に対するこれらの将校(ダヴィドフとフヴォストフ)の身勝手な行為への罰として、フィンランドでの功績には褒賞を授与しない」ことを決定した。ダヴィドフはフィンランドからペテルブルグに帰還し、海軍大将シシュコフ邸に寄寓し、そこで自分の航海にかんする旅行記の執筆に取りかかった。1809年10月4日、ダヴィドフはフヴォストフとともにヴァシリエフ島から帰宅しようとしたが、すでに橋は[船の通行のために]切り離されていた。彼らは橋の一端から、その時間に通行するハシケに飛び乗り、そこから橋のもう一端に飛び移ろうとしたが、失敗し、川に転落して溺死した。遺体は発見されなかった。ペテルブルグでは長い間、彼らの死が話題となった。ダヴィドフは自分自身の最初のアメリカ航海にかんする旅行記だけをまとめることができた。この手記は1810年、『海軍将校ダヴィドフによって執筆された、彼と海軍将校フヴォストフの2度のアメリカ旅行』(1810年、第1部)と題してシシュコフによって出版された。1812年に出版された同第2部には、カディヤク島やその住民たちにかんする記述を含む論文が収録されている。ダヴィドフの旅行記には民族学的、語彙的資料が数多く収集されている。語彙にかんする資料の抜粋をクルゼンシテルンは作成し、著作の中で発表した]

されていないか探り出しました。彼らはみな、支配人のことを父親のように慕っていると答えました。私が遠方に住むトヨンたちを呼び集めたところ、この者たちもこれを裏づけました。最後に私は全員を集め、私が当地に滞在するのは、君主たる皇帝陛下が彼らに対してお心を配られている結果であるから、何か頼みごとがあるならば、まったく恐れずに私に申すようお願いさせました。彼らはひとつだけ頼みごとがあるが、それは私にではなく、支配者に対してだと答えました。彼らの要望はかなえられるだろうと納得させたうえで、それは何かと尋ねました。彼らは、自分たちはまったく平穏に暮らし、幸福であり、自分たちの労働の見返りとしてお互いの申し合わせにもとづき自分たちに帰しているものをすべて受け取っている、支配人はこれまで同様、自分たちに対して善良であってほしい、と答えました。私は陛下の御名において、支配人ラリオノフに金メダルを、通訳パンコフに銀メダルを与えました。トヨンたちが一致して、この者たちは善良であると答えたので、この者たちに褒賞が与えられるのだ、とトヨンたちに伝えました。まさしくこの時、私はアトハ島より連行された町人クリカノフを、アメリカ人[原住民]女性とその乳飲み子の男児への非人道的な暴行の科で、見せしめとして厳正に裁きましたトヨンやアメリカ人、ロシア人、水夫たちが集まる中でこの犯罪者に枷をはめ、法に則って彼を処罰すべくイルクーツクへと、その方面に向かう輸送船で送り出しました。そのうえで全島民に対して、皇帝陛下にとって臣民はみな平等であるということ、そして毛皮事業に従事するロシア帝国人に対しては、島民を殺害したならば同じくらい厳しく処罰されるということをお教え諭しました。

本日、全住民に対する皇帝陛下の君主たる庇護を記念し、カディヤク島へ急行いたします。そこで武装し、ただちにノルフォルク・ズンド島、別名シトカへ出発します。その地から、現地事情を含めた詳細な報告書を皇帝陛下にお送りいたします。

(5)Тихменев П. Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени, ч. II, прил., с. 192-195.

(小野寺歌子・畠山禎 訳)

2. N.P.レザーノフから露米会社総本部への報告より。アレウト列島への航海について(⑥No. 75)

1805年7月18日

ウナラシュカ島、ソグラシエ[和合]村

慈悲深き皆様

6月14日、ナジェージダ号を残してペトロパヴロフスク港を出航しました。何が待ちうけてい

るのかまったく分かりませんが、私はアレウト列島の北側に沿って針路をとり、航海を開始しました。濃霧と暴風、そして何よりも船体が斜めに傾いた状態で建造されたマリア号の不良により、われわれの航海ははなはだ困難なものとなりました。しかし、順風に恵まれたため、喜ばしいことに30日にはウナラシュカ島に到達できました。しかし、この島のカピタン港のまさに入口で風のため船が進まなくなり、われわれは30マイル沖合で間切り帆走をしました。7月1日、南から逆風が吹き始め、刻々と強さを増し、われわれを北へ流しました。私はこの風を利用してコトヴィエ諸島[プリビロフ諸島]へ向うことを決定しましたが、霧の中で両島[聖パーヴェル島と聖ゲオルギー島]を通り過ぎ、北緯58度に達しました。運命によってすでにベーリング海峡へ流されているのだと思ったとき、風向きが変わりました。船がもと来た方向へ進むにつれて、聖パーヴェル島が見えました。この島の北側に投錨し、バイダーラで島へ向かいました。われわれは無数のオットセイを見つけました。われわれには食糧がまったくなく、これを捕らえて食べ物として貯えました。気分転換ができてとても満足しました。人を見かけなかったので南側に向けて出航し、海岸付近を間切り帆走してから、上陸し、ロシア人12人とアレウト人15人を見つけました。われわれは、古くなったオットセイ皮22万7,000枚と、新たに仕留め、乾燥させたオットセイ皮1万6,000枚を発見しました。乾燥させたオットセイ皮の大半は干からびてしまっていました。私は毛皮採集の中止を命じました。というのは、多数のオットセイを見かけたとはいえ、採集者たちの話によると、オットセイは以前の十分の一に減ってしまったからです。乾燥させて干からびてしまった毛皮は輸送する価値さえないので、私は以前、採集した毛皮の選別を命じました。この島で私が出した指令書の写しを添付して皆様にお送りします。ただ、干からびてしまったオットセイ皮からも会社は何らかの利益を得るように、カムレイ[アノラック]の代わりに衣服としてこれらをウナラシュカやその他の島民に供給できるのではないかと考えております。アオギツネの毛皮は526枚採集されており、私自身がこれをウナラシュカからオホーツクへ運びます。広東では値がつけられぬ程の高値で売られ、ロシアでもアオギツネ皮1枚に15ルーブルないしはそれ以上を喜んで支払うからです。自分たちのためにオットセイ皮2,000枚を、またカディヤク島のためにセイウチ皮を120枚、船に積みました。セイウチの牙も持って行きましたが、2ブード足らずで、しかもそれだけしかありませんでした。

聖パーヴェル島の近くにはモルジョヴィ[セイウチ]島があります。もともと、毛皮採集者たちは難なく捕らえることができるオットセイの猟だけを行っております。われわれ自身も半時間で自分たちのために18頭を仕留めました。その後、われわれは聖ゲオルギー島のすぐそばまで近づき、上陸する準備を整えましたが、バイダーラが浸水したうえ、岸からの強風がこれを阻み、果たせませんでした。われわれはウナラシュカ島へと針路をとりました。私はこの島を必ず視察するこ

とにしていました。霧がいつこうに晴れず、しけにも遭いましたが、7月15日、ついに霧が晴れ、アクン島とアクタン島が見えました。その後、逆風が吹いていたにもかかわらず、非常に強い潮流を利用してティガルダ島とアクン島間の海峡を南へと通過しました。両島のそばでは島々が二手に分かれ、海峡を形作っていました。カピタン港への入口が見えたにもかかわらず、逆風のためそこには近づけませんでした。われわれは一晩中、間切り帆走をし、16日、順風を利用して港へ向かい、ウナルグ島を迂回しようとしたのですが、そのとたん風向きが変わり勢いを増し、なんとかボプロバヤ[ラッコ]湾に入ることができました。この湾の東部にある、入り口が非常に狭い小さな入り江に午後5時、投錨しました。

湾を粗末なバイダーラで横切りました。バイダーラが浸水したので、始終海水を汲み出さなければなりません。岸に着き、断崖を真下に見ながら山や絶壁をよじ登り、困難な道のりを16露里程進み、疲労困憊してついに翌日の夜明けにカピタン港の中心的な集落にたどり着きました。以下から読みとっていただけるように、私は非常に喜ばしい事情からこの村をソグラシエ[和合]と名づけました。われわれはこの地で2隻の社有船、すなわちカッター船聖コンスタンティン号および聖アレクサンドル・ネフスキー号を見つけました。聖コンスタンティン号は、私の命令にもとづき取締役デラロフ氏が出した指令に従い、ナジェーシダ号に提供するオットセイを捕るためにセーベルヌイエ諸島[プリピロフ諸島]へ向かうところでしたが、当地に寄港して一息ついていました。この船の指揮者である航海士ボタポフは、アトハ隊の隊長でもあります。彼は賢明かつ活動的な人物という印象を受けました。今後のことは分かりませんが、彼がこれまでに出した命令は賞賛に値します。私は彼に報告書を提出するよう求めました。彼から提出された覚書の写しを本状に添えます²。

もう一隻の船、聖アレクサンドル・ネフスキー号は航海士ペトロフの指揮下、シトカから当地に直行しました。私は彼から以下の情報を得ました。バラノフ氏はシトカで越冬しました。カロシ[コロシ]人はきわめて不穏な動きを見せており、しかもカロシ人はボストン人から銃火器の供給を受けて装備を充実させていました。彼らは帆柱用材で三重に固めた要塞を築き、そこに住み着こうとしましたが、われわれが攻撃を仕掛け、激戦となりました。われわれの側では、6名の死者と多数の負傷者が出ましたが、もしネヴァ号のシトカ到着が遅れていたならば、損失は甚大であっただろう、とのこと³。バラノフ氏はこのとき手を撃ち抜かれ、海軍中尉アルブーゾフは胸に傷を負いました。[停戦]協定にもとづいて要塞は占領され、カロシ人は要塞から立ち退き、ファルコネット砲2門を残していきました。正直に申し上げますが、私はこれらのことすべてがあ

² АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-7, 1802 г., д. 1, п. 32, лл. 32-34 を参照。

³ 史料⑥No. 59 参照。

まり気に入りません。どんなに高価であろうと、今の時点でラッコにこれだけの犠牲を払う価値はないと思います。われわれは1万7,000枚のラッコ皮を保有しており、そのうえボストン人が毎年、莫大な量を広東に運んでおりますので、これらを捌いて儲けが出れば上出来です。たしかに、われわれだけが中国でラッコ毛皮を独占的に取引できるようになるでしょう。ただし、われわれが保有している性能の低い船を使うのではなく、良い船を増やさなければなりません。われわれの沿岸を脅かす不敵な到来者どもに対する防御拠点を設置し、30門の砲を搭載するフリゲート船を少なくとも一隻所有する必要があります。そうすれば、ボストン人は一人も姿を見せなくなり、カロシ人は好まずともわれわれとの取引を余儀なくされるでしょう。私は現地にいたわけではありませんが、常識的に考えるならば、防御の手薄なこの地方はたえず強者の攻撃にさらされていると結論づけることができます。

私は当地からカディアクに向かい、武装したうえでそこからシトカへ南下します。私の配下にある士官のフヴォストフとダヴィドフは経験豊富で知識もあり、進取の気性に富む者たちです。つまり、われわれの事業にとって彼ら以上の適任者は見あたりません。ラッコのかわりにイギリス船か何かを拿捕しないとも限りません。今日も、アメリカの旗を掲げてブリストルから船が1隻やって来たところです。ともあれ、会社の商業活動全体が今後の展望を持たなければ、毛皮事業がそうであるように、実際には労力に見合わなくなってしまう、見込んでいた利益もすべてが莫大な損失と破産で終わるでしょう。(略)⁴

来年までにペテルブルグから船舶を配備していただけるならば、このご好意は出資者たちにとって格別の名誉となるのみならず、アメリカにとっても非常に大きな支援となるでしょう。ネヴァ号やナジェージュダ号の到着を長期間待たねばならず、その到着は早くとも1808年に降になるからです。その間、時間が無駄に過ぎていくばかりでなく、混乱を招く恐れがあります。バラストのかわりに6フント砲と12フント砲、そして榴霰弾、砲丸、銃弾四分の一セット、十分な量の弾丸、少なくとも200丁の兵士用の銃、ただし上等で手入れの行き届いたものを補給してください。またクロノメーターを2個、天候を予知するための航海用気圧計3個、羅針盤、アロースミスの地図帳2冊、細めのロープ、フリゲート船用のロープを2、3本、大きな磁石を一つ、それから錨も送ってください。ネヴァ号で送っていただいたものは、まったく役に立ちませんでした。以上のものを提供していただくにあたり、国庫からの補助を海軍大臣に請願するよう、さらに小型の錨ではなく、フリゲート船や中型のブリッグ型帆船に適した錨を送ってくださいようお願い申し上げます。また、ピリングスの遠征後、オホーツクとペトロパヴロフスク港にて使用されずに放置されている錨を会社が引き取る許可を願い出てください。

⁴ 北アメリカのロシア人入植地への食糧供給にかんするテキストが省略されている。

以上を実行に移していただきますよう、皆様に今一度、切にお願い申し上げます。イギリスの船かボストンの船かは分かりませんが、ともかくそれらの船がすでにカディヤク島へ到着し始めているのに、そこにはいかなる防御拠点も存在せず、まさしく会社の基盤が、その弱点を見抜いた先見の明のある者たちによって突然どうにかなるようなことがあれば、ロシアにとって恥ずべきことになるでしょう。

どこで越冬するかまだ分かりません。神の御心の命ずるままですが、できるならばチュガチ湾が望ましいと考えております。そこでなら、フヴォストフ氏やダヴィドフ氏のような尊敬に値する熱意あふれる協力者を得て、彼らの助力により 2 隻の船を建造し、同行させることができるでしょう。すなわち、大砲 12 門を搭載する戦艦のようなブリッグ型帆船そして接岸用の小型単檣帆船です⁵。ただ、もしもシトカ付近に造船所が建設可能でそれが好都合であるならば、われわれはそこにも滞在します。

つまり、われわれは労力や努力を少しも出し惜しみいたしません。皆様は同様の強力なご支援で応えていただきさえすればよいのです。慈悲深き皆様にあえて申し上げます。皆様がこの機会を十分に活用なさらなければ、会社のみならず政府自体にとっても、栄光をもたらし、重要な商業を拡大するこれ以上の機会を二度と期待できないでしょう。われわれは持てる力を捧げるべき時にそれを捧げなかったことを、永久に悔やむしかありません。ただ、私は商務省がかくも大規模な活動領域を見逃すはずはないだろうと希望を抱いております。この 2 年間、私はヨーロッパの商業と政治事情にかんして、一行の便りも受け取っていません。それにもかかわらず、私が派遣された事業よりもこの領域がほかならぬ私個人と深く関わっていると信じ、気を晴らしております。まさか、本当に私が戯れのために世界を一周すべき運命にあったわけではありますまい。これは今日のご治世でなくとも、はなはだ残酷だといえるでしょう。

この船には平鉄 1,000 プードとねじ鉄 200 プードを積んでおります。残りはまだナジェージダ号が運んでいます。遺憾ながら、ナジェージダ号は長時間にわたり無益に停泊したのち、これ以上は荷を降ろしませんでした。これが無秩序の結末です。ネヴァ号について報告しますが、この船は昨年 6 月初めにカディヤク島に戻り、つづいて 8 月にシトカに来航し、10 月 12 日にそこからカディヤク島に帰還し、そこで越冬しました。聖アレクサンドル・ネフスキー号がシトカを出港したあとも、ネヴァ号はまだカディヤク島に留まっていました。しかし、シトカ近辺では人びとが今か今かとネヴァ号を待っていました。そこへ直接、毛皮を運ぶようバラノフから指示が出されていたからです。

エリザヴェータ号はマリア号より早くオホーツクを出港し、10 月 27 日、ウナラシユカ島のカ

⁵ 史料⑥No. 78 を参照。

ピタン港に到着しました。エリザヴェータ号はここで越冬し、6月11日、出航しました。エリザヴェータ号の出航が遅れたのは、同船が給水のためにマクシン湾[ウナラシュカ島にある湾]に寄港しようとしたところ、そこで1か月間、逆風のために入港できなかったからでした。私はこの航海に驚いています。われわれの方は出港後、1か月間で、セーベルヌイエ諸島に滞在したうえに、当地に到着することができました。そして、神のご加護がありましたら、明日出航し、カディヤク島に立ち寄り、シトカ方面へ向かいチュガチで越冬できればと思っています。(略)⁶

さて、ウナラシュカ島について申し上げます。ラリオノフ氏を見つけ出しましたが、彼は脳卒中のため記憶を失ってすでに2年がたっていました⁷。カピタン港の集落は土造りのユルタからなっていますが、そのすべてがこれ以上は望めない程よくできています。どの土の山に入ってみても、すばらしい小部屋が続き、部屋には壁紙が張られ、広々とした窓があります。職場とは別になっており、住人には快適な空間があります。会社の倉庫、小屋、兵舎、鍛冶場、金属加工工房、また漁猟、油脂を燃やす炉、そしていくつかの菜園、つまりあらゆる経営部門が整えられ、かつての彼[ラリオノフ]の活動を物語っています。カムチャツカでは木材資源が無尽蔵にあり、どの点をとっても自然はウナラシュカ島よりも豊かです。こちらでは流れ着いたもの以外、小枝1本さえありません。とはいえ、いつの日か、カムチャツカのペトロパヴロフスク港もこの集落と肩を並べられるようになればよいのですが。アメリカ人[原住民]から彼の行動について聞いたところ、彼は父のように愛され、尊敬されていました。私はトヨンや通訳を集め、彼らに対する抑圧はないのか、何が不足しているのか尋ね、君主が彼らを庇護し、保護しているからこそ私はやって来たのだと教え諭しました。彼ら全員が、「わたしたちはみな満足しています。自分たちの働きに対しては自分たちが必要としている物で、いつもきちんと支払われています。それ以上、まったく不足はありません」、と口を揃えて言いました。しかし、率直に、また何も恐れずに発言するようにと彼らに執拗に求めたところ、とうとう彼らは、「一つお願いがありますが、それはあなたではなく、[ラリオノフ]支配人に対してです」、と答えました。さっそく願いをかなえるために教えてくれるよう促すと、「これまで同様、われわれを愛し、われわれに対して変わらない態度でいてください。あなたの態度にわたしたちは安心し、幸福を感じています」、と彼らは答えました。この予期しなかった出来事はとても感動的だったので、そこに居合わせた士官諸氏は感涙にむせび、この返答の証人であるドクトル・ラングズドルフはすっかり有頂天になりました。外国人がロシア人による、温情に満ちた統治の証人になったことに、私はことさら満足を覚えました。(略)⁸

⁶ 遠征中に発生しうる困難にかんするテキストが省略されている。

⁷ K.T.フレブニコフの記述では、イルクーツク商人であるウナラシュカ支部支配人 E.G.ラリオノフの発病が、誤って1806年の初めとされている(Русская Америка в неопубликованных записках К. Т. Хлебникова / Сост., введ. и комм. Р. Г. Ляпуновой и С. Г. Федоровой. Л., 1979, с. 109)。

⁸ 毛皮採集隊のウナラシュカ島滞在にかんするテキストが省略されている。

格別の賞賛に値する人物として、海軍少尉ベリングスガウゼン男爵をご紹介申し上げます。彼は航海の間中、天文学者ホルネル[ホーナー]から得た知識を生かし、全員の中でただ一人、時間を有効に活用し、会社と祖国のためにいつでも役立ちたいという姿勢を見せました。全体の福祉に向けて努力する姿を見ると、私は個人的な遺恨を忘れます。その上、この人物はただ若いという理由だけで、また他には何の理由もなくこの不愉快な事件に巻き込まれたのです。また、航海士ポタポフの功績を評価し、彼を完全に会社の社員にするよう請願していただきたく存じます。彼はわれわれに対してこれを希望しましたが、オホーツク長官が難色を示すのです。

敬意の念をこめて。

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-7 1802 г., д.1, п. 37, л. 279-286. 発信書類簿内の記録

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

3. 商務大臣・伯爵 N.P.ルミヤンツェフより皇帝アレクサンドルー世宛の報告。イルクーツク国民学校の日本語生徒について

1805年7月21日

日本語生徒について

シベリア総督セリフォンツフは、元総督ピーリへの勅令によって、イルクーツク国民学校で日本語を学ぶことになった神学生出身の生徒達を、彼らの扶養が不十分なため、別の施設に移す許可を求めておりました。

本件に関する私の報告に対し、皇帝陛下は6人の生徒全員を商務大臣の管轄下に置くよう命じられました。

これを受けて私は、総督セリフォンツフ氏に、上述の生徒全員が日本語をよく学んだのか、彼らに給付金をいくら払っているかについて尋ねました。これに対して、生徒たちは日本語の知識をかなり習得したけれども、日本語の書物が十分にあればもっと成果を治めたはずである、彼らには県予算から年に54ルーブルずつ給付していると彼は答えています。

やがて彼らを日本との交易関係に使えるようにするという目的を重視し、彼らに不自由のない給付金を与え、それによって今後の成功を促すよう、大学生への給付水準に等しく、現在受け取っている年54ルーブルにさらに96ルーブルずつ、総額576ルーブルを加えて150ルーブルとすること、1803年に72万0,325ルーブル、1804年には87万8,912ルーブルに上ったキャフタ税関の収入からこの金額を支出することを考えております。

この提案を陛下が御裁可くださるのであれば、私より大蔵大臣に陛下の御意思をお伝えします。
商務大臣伯爵ルミャンツォフ

(3)РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 9-9 об. [史料筆写者による注]第9頁の余白左側に、ルミャンツェフの自筆で「皇帝陛下より、本報告への裁可を受けた。ルミャンツォフ伯爵。ペテルゴフ、1805年7月21日」とある。

(オイドフ・バトバヤル、寺山恭輔 訳)

4. キャフタ税関長 F.ゴルブツォフより商務大臣 N.P.ルミャンツェフ宛の通知。イルクーツク国民学校日本語生徒への給付金増額分支出を指示したことについて

第2660号

1805年8月16日

ニコライ・ペトローヴィチ伯爵閣下

本年8月2日付の私宛で勅令には、「商務大臣の管轄下に置かれ、県予算から年間54ルーブルずつを受け取っているイルクーツク国民学校で日本語を学ぶ生徒6人に、キャフタ税関の収入から一人当たり年間96ルーブルを増額して付与することを命ず」と述べられておりました。上述した生徒たちにこれだけの金額分を増額することについては、勅令を受け取ってすぐに私からイルクーツク国庫局にはしかるべき指示を出しましたが、常に忠実であることを名誉と考えております閣下にもこのことをお知らせすることは義務であると考えます。

閣下の忠実な僕

フョードル・ゴルブツォフ

(3)РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 12.

(オイドフ・バトバヤル、寺山恭輔 訳)

5. J.ド・ヴリフ[ウルフ]の回想より (①No. 220)

[1805年8月25日～9月23日]

【ノヴォアルハンゲリスク】

(略)⁹ふたたび船を艀装し、薪水を十分に補給し、航海にむけて積荷を最適な状態に配置してか

⁹ ド・ヴリフによるアメリカ北西部沿岸滞在のうち、これ以前の時期にかんする情報については史料①No. 217

ら、ニュー・アルピオン¹⁰南岸とカリフォルニアへの遠征計画をバラノフ県知事 gubernator の審議に付した。この計画を知事は快諾した。私は、この沿岸に多数生息しているラッコの猟のために、カヌーを小船艇に乗せて、カディヤク・インディアンを 50 名から 60 名連れて行くことを提案した。この計画については細部に至るまで合意に達し、確認された。あとは 2 隻の小型船の護衛のもとで狩猟遠征に出ているインディアンの帰りを、10 月初めまで待つだけだった。彼らは月末には戻ってくる予定だった。

インディアンを待っている間に、入植地にロシアのブリッグ船マリア号が入港した。その指揮者はアンドレイ・V・マシシ海軍中尉だった。この船には客としてニコライ・レザノフが乗っていた。彼は貴族で、遣日使節の任務に失敗後、アメリカ北西海岸にある露米会社の商館に向う道中、カムチャツカに立ち寄った。レザノフは露米会社の筆頭株主だった。彼と一緒に、2 人のロシア海軍中尉、すなわちニコライ・フヴォストフとイヴァン・ダヴィドフ、そしてドクトル・G・ラングスドルフ、船大工 2 人、すなわちコリュキン氏とポポフ氏も到着した。最後の 2 人はこの地で船を建造しなければならなかった。新たに到着した人びと全員に対して、友人である知事は私を正式に紹介してくれた。私はレザノフ男爵 baron 閣下より、私のカリフォルニア計画の実現を閣下の裁量下にあるすべての資金で支援するとの保障を得た。一行が入港してからの数日間は、お祭り騒ぎで過ぎ、事業は完全に止まってしまった。県知事の権力さえもしばらくの間かけらせる程の権力を持つ、かくも傑出した人物の来訪は重大な出来事だった。

ドクトル・ラングスドルフと、必要な物資の不足から大型船の建造や艀装が困難であることについて話し合った。その際、私が彼らに自分の船を売れば、彼らが必要に迫られて新船を建造する手間も省けるだろう、と冗談で言った。この内容は男爵閣下の耳に入った。閣下は私が本当に自分の船を売る気はないか、売る気があるならばその価格はいくらなのか知りたがった。いままで真剣に検討しなかったこの問題について、熟慮する必要がある。小船艇には私の荷物の三分の二ほどが積まれていたので、その内容を確認し、価格を決定しなくてはならなかった。積荷を除いて船だけ売るわけにはいかないことを十分理解していたからだ。もう一つの深刻な問題は、わが船の乗組員がどうやってこの沿岸を去るのかということだった。しかし、私がこの方策の妥当性について熟考している最中に、先ほど述べた 2 隻の小型船、すなわちエルマーク号とロステイスラフ号が狩猟遠征から戻ってきた。このうちエルマーク号は排水量 40 トンで、私の目的に合致しているように思われた。それゆえ、私はこの機をとらえて、自分の船と残っている積荷を 6 万 8,000 ドルで売却することを申し出た。代金の支払い方法は以下のとおりであった。すなわち 5

とその注 1 および 4 を参照。

¹⁰ 【編訳者補注：北アメリカ西海岸、現在のオレゴン、ワシントン両州の沿岸部】

万 4,638 ドル分をサンクトペテルブルグの露米会社本部宛の手形で、1 万 3,062 ドル分をラッコ皮 572 枚で、そして 300 ドルを現金で支払うというものだった。さらに上述のエルマーク号を完全に儀装し、帆 2 組と移動可能な大砲を 4 門、マスケット銃 30 丁とその弾薬、乗組員の食糧 100 日分を付けたうえで引き渡してもらわなくてはならなかった。この提案は受け入れられ、そしてユノナ号は露米会社の所有船となった。10 月 5 日、砦と船から礼砲が撃たれるなか、私は船を引き渡し、私の所有船となったエルマーク号にアメリカ合衆国の旗を掲げた。(略)¹¹

(6) D' Wolf, J., *A Voyage to the North Pacific and a Journey through Siberia more than a Half Century Ago*, Cambridge, Mass., 1861, p. 29-32. 手稿は発見されていない。

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

6. N.P.レザーノフから海軍中尉 N.A.フヴォストフと海軍少尉 G. I.ダヴィドフへの指令。近く予定されている遠征に向けた船の準備について(ⒸNo. 79)¹²

第 475 号

1805 年 8 月 29 日

バラノフ島、ノヴォアルハンゲリスク港

慈悲深きニコライ・アレクサンドロヴィチ[・フヴォストフ]殿、

ガヴリイル・イヴァノヴィチ[・ダヴィドフ]殿!

諸君のアメリカへの第一歩から、諸君の決断力に満ちた旺盛な意欲を見てとり、満足している。諸君が無事にヨーロッパに帰還したことは、諸君にとって熟練を積むための経験になったであろう。この地方への諸君の 2 度目の航海は、祖国に対する真実の愛という高潔なる感情が諸君の心にかくも深く宿っていることを証明した。最後に、私自身も諸君とともに幾度か航海を成し遂げ¹³、偉大なる精神は何よりも万人の利益に重きを置くのだという心地よい印象をずっと抱いている。この地方の支配人[バラノフ]の中にも、同様の模範的な熱意や努力が見出される。後世の人びとはそのような模範に、いつかわれわれ以上に驚嘆するだろう。かくも幸運なことに、ただ一つの目的に向かっている理性の持ち主たちがめぐりあったのだから、私はこれを利用し、来年、遠征を行うことを決意した¹⁴。この遠征が新たな商業への道を切り開き、この地方が必要とする力を与

¹¹ このあとの部分では、ド・ヴリフはノヴォアルハンゲリスクでの越冬を決定し、エルマーク号に毛皮を積んで広東へ派遣したことを記している。ド・ヴリフの報告からのもう一つの抜粋が史料Ⓒにある。史料Ⓒ No. 247 を参照。

¹² 【編訳者補注：訳出にあたって、有泉和子「海賊にされた海軍士官フヴォストフとダヴィドフ」『SLAVISTIKA』、第 19 号、2003 年、197～198 頁所収の翻訳を参考にした】

¹³ 史料ⒸNo.75 を参照。

¹⁴ 史料ⒸNo. 81, 90 を参照。

え、この地方の困窮を未然に防ぐかもしれない。遠征のために、2隻の軍艦、すなわちブリッグ型帆船と単樁帆船が必要である。両船は当地で建造可能であろう。私はすでに本件について支配人に指令を与えた¹⁵。今、私に残されているのは、親愛なる諸君に以下を伝えることである。最重要の遠征に用いられるこれらの最高の船は、最高の士官を乗組員としなくてはならない。私は海軍士官ではないので、諸君の努力、活動、業績だけを証明することができる。門外漢の私がこの技能[航海術]に深く立ち入ることはできない。私はこれまでに得てきた経験と単純に比較することで、表面的に判断することしかできない。諸君の航海日誌は、いつも私の見解の正しさを裏付けているものと確信している。私は、偉大かつ高潔なる発意に真の敬意を抱きつづけるであろう。この発意こそが、諸君に第一級の士官となる権利を与えているのだと、愛国者たちは考えている。われわれがかくも喜んで身を捧げている全体の福利のためにわが身を顧みない友人として、今、諸君にお願い申し上げたい。諸君の序列に従い、出航予定の船を分担し、指揮する用意を整えられたし。その目的で、これから造船職人諸氏が提出する設計図の検討にとりかかられたし。設計図を承認後、船が上首尾に建造されるように監督し、4月末には船が完成し、5月上旬には出航できるようにされたし。不足するものが多々あることは承知しているが、困難なくして偉業が成し遂げられたことがあつたらうか。われわれにとってこのことは恐れずに足らず、なお一層の栄光をもたらすのみである。

私の遠征について詳細を説明する必要はまだないと考える。必要な時が来れば、諸君は私から遠征についてすべての指示を受け取るであろう¹⁶。良質の船を造ろうとする建造者たちの熱意を感じ、私は航海に期待を寄せている。諸君の豊富な経験と努力は成功を約束している。実を言うと、私は諸君の偉業の証人になる時を待ち遠しく思っている。では、力を合わせて偉大な事業の遂行に着手し、全世界に示そうではないか。われらの幸福なる世紀に、一握りの進取の気性に富むロシア国人が、数百万人の他国民が数世紀に渡って参加している大事業に一石を投じたのだと。

慈悲深き諸君に心からの敬意を抱き続けます。

忠実なる僕

ニコライ・レザーノフ

(2)РГАВМФ, ф. 212, оп. 11, д. 2944, л. 77-78. 原本

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

¹⁵ 史料⑥No. 78 を参照。

¹⁶ 史料⑥No. 90 を参照。

7. 露米会社手代 F.ヴィホドツェフから露米会社本部への報告

1805年9月5日

ペトロパブロフスク港より

皇帝陛下の庇護下にある露米会社の総本部に宛てた

カムチャツカの手代 kommissioner フォードル・ヴィホトツェフからの

報告

さる 1804 年 12 月 15 日付文書にて、総本部に以下をご報告いたしました。カムチャツカ沿岸で日本船が不運に見舞われました。6 人の日本人は長官側から与えられた破滅的な運命を受け容れようとしなかったため、わが社の名において引き取られ、できる限りの援助、そして通常的生活で不可欠な給与 *traktament* や衣類の支給を余剰が生じない程度、受けました。本件につきまして、ニコライ・ペトロヴィチ[・レザノフ]閣下からも、閣下が日本から無事に到着後、ご承認をいただきました。その後、閣下は本件にかんし、国が彼らを保護するよう、カムチャツカ警備司令官であられる陸軍少将パーヴェル・イヴァノビッチ・コシェレフ氏に彼らを引き渡すことを決定しました。しかし[レザノフ]閣下がアメリカに向けて聖マリア号で出発したのち、パーヴェル・イヴァノヴィチ[・コシェレフ]閣下のご計画にもとづき、上述の日本人たちに対して、ヴェルフネカムチャツクに送られて耕作に従事することが決定されました。出発の準備が十分に整っていた最中の6月30日夜、作業から逃れようとしたのか、あるいは何か他の誤解によるのか不明ですが、彼らは自分たちのカラマツ製ボートの中に隠れました。これを知った長官らはあらゆる手段を使い、彼らを発見しようと全力を尽くしましたが、失敗に終わりました。

彼らが会社の保護のもとで滞在中、彼らの毎日の食費として 1,162 ルーブル 17 コペイカ半が支出されました。これに関して私が作成した勘定書と明細書を添付のうえ、総本部に帳簿を必ずお送りいたします。

手代フォードル・ヴィホトツェフ

(3)РГИА, ф. 15, оп. 1, д. 2, л. 230.

(渡邊 潤・ 畠山 禎 訳)

8. シベリア総督より商務大臣 N.P.ルミャンツェフ伯爵宛の感謝状。イルクーツク国民学校で日本語を学ぶ生徒への給付金増額について

第 4195 号

1805 年 9 月 11 日

イルクーツクにて

ニコライ・ペトローヴィチ伯爵閣下

7 月 24 日付の閣下からの書簡第 1989 号を拝受しましたが、閣下には、日本語生徒に対する給付金増額にあたっての御請願に心より感謝申し上げます。生徒達はもちろん、皇帝陛下から受けた恩恵に対し、その天命を見事に果たすべく研鑽を重ねるよう鼓舞されております。

閣下の忠実な僕

イワン・セリフォントフ

ルミャンツェフ閣下

(3)РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 13.

(オイドフ・バトバヤル、寺山恭輔 訳)

9. N.P.レザーノフから露米会社取締役への書簡*

1805 年 11 月 6 日

ノヴォアルハンゲリスク

慈悲深き皆様

7 月 25 日、ウナラシュカ[ウナラスカ]島を後にし、31 日、私は無事にカディヤク島に到着しました。幸運なことに、この前日にウガク[カディヤク島の湾]付近で遭遇した暴風により、新船すなわち聖マリア号の致命的な脆弱性が露呈しました。長さ約 30 フィートの船首斜檣[バウスプリット、船首から突き出した長い円材]は、わずか 3 フィート 3 インチしか船体に差し込まれておりませんでした。荒波が船首斜檣を船首材もろとも船からもぎ取りました。風が最も強かったとき、われわれは中檣帆を降ろさねばならず、やっとのことでチニヤック入江[チニアック湾]に入港できました。オホーツクの船はこのような建造状態なのです。つまり、ここでは造船者たちの無知、そして会社から任命された者の恥知らずでこれ見よがしの略奪行為のために、わが社はどこよりも高い値段で、まったく役に立たない船を手に入れているのです。いまだアメリカへの処女航海

* (出典文献の编者による注) ここではやむを得ず、レザーノフから会社取締役に宛てた書簡の抜粋を掲載した。これらの書簡は大量の情報や構想などを含んでおり、それらだけで厚い書物ができる分量に達するからである。今後、この課題にかんする研究が容易になるよう、すべての省略箇所印が付されている。

の最中にある、最良かつ最新の社有船の修理のためにカディヤク島に3週間滞在してから、8月20日に発ち、同月26日、わずか5昼夜でノヴォアルハンゲリスクに到着しました。ただ、この快挙が船の高い性能によるものだとは決して考えないで下さい。われわれがずっと順風に恵まれたことが幸いしたのです。たとえ筏でカムチャツカから出発したとしても、ここに辿り着くことができたでしょう。(略)

さて、ノヴォアルハンゲリスク港、そして現在までにそこに建設された諸施設についてご説明申し上げます。アレクサンドル・アンドレエヴィチ[・バラノフ]はここに首尾よく居を構えました。広大な入江に浮かぶ、森林で覆われた無数の島々は、船にとっては[荒天時の]格好の待避所となり、また風光明媚です。ある島には灯台が設置されています。10マイル先には威風堂々たるエジェクム山¹⁷が見えます。その山には大きな噴火口があるのですが、非常に強い雨のために近くまで行って調査することはできませんでした。高くそびえる山々がこの入江全体を取り囲んでいます。それらの峰は、山頂まで建築に適した木々で覆われています。入江に半島のように突き出た高い岩、すなわちケクールが要塞の立地に選ばれました。そしてこのケクールがある半島の左側中腹には巨大な兵営が建築されました。この兵営にはこの地を防御するために2つの哨舎、つまり塔が設けられました。建物全体がほぼマスト用材からできております。この建物は、山の斜面に沿って水面間近まで伐り倒したカラマツ、そして積み上げた丸石で造った基礎の上にあります。この基礎部分には貯蔵庫が設けられています。さらにその付近には、購買棟1棟、資材倉庫2棟、地下室を備えた建物2棟があります。その近くには、食糧を保存するための巨大な高床式の納屋があります。この納屋の下部全体が一種の物置ようになっており、会社の作業場として使用されています。この納屋の横には、要塞と向き合う形で荷物を置くための巨大な納屋があります。納屋の海側には丸太でできた倉庫が付属しています。この納屋と要塞の間には船着場があります。半島の右側には、山麓にコの字型の建物があります。そこには台所、風呂場、会社従業員用のいくつかの部屋があります。海岸に沿って、奥行き9サージェン、間口5サージェンの大きな長屋があります。長屋の間には3つの炉を持つ広々とした鍛冶場があり、鍛冶場の両脇には工房があります。そのすぐ隣は家畜小屋です。これらの建物がある場所から山を登ったところにもう一つ風呂場があり、さらに要塞から下へ降りたところにも明るい小部屋付きの風呂場が一つあります。ケクールの上部には奥行き5サージェン、間口3サージェンの仮設長屋があり、それには2つの小部屋と玄関の間が付いています。私はこの小部屋の一部屋に住み、もう一部屋には造船職人が2人[コリュキンとポポフ]住んでいます。私はここで多くの建物をあげましたが、ようやく10月初めになって人びとはテントから屋根の下へと引っ越すことができました。屋根が葺かれる

¹⁷ [訳者補注：エジコム山。クルゾフ島の山。海拔3,201フィート]

やいなや、その日のうちに入居しました。コロシ人のユルタもいくつかあります。そこには、わたしたちが雇ったカユル kaiury[原住民の隷属民]とカディヤクのアメリカー人[原住民]が住んでいます。われわれはみな窮屈に暮らしています。しかし、この地の獲得者[バラノフ]は誰よりもひどいところに住んでいます。彼は木造のユルタに住んでいますが、湿度がとても高く、毎日カビを拭き取っているほどです。当地に強い雨が降ったときには、ふるいをかけたようにあらゆる場所から雨が漏れます。まったく驚くべき人物です！ 彼は他の者が落ち着いて暮らせることにのみ気を配っています。自分のことにはまったく無頓着で、一度など、私は彼のベッドが水の中に浮かんでいるのを発見し、風が家屋の横板を剥ぎ取ったのではないかと尋ねました。彼は、「いや、床から浸水したようです」と落ち着いて答え、仕事を続けました。皆様に申し上げます。バラノフ氏は実に独特な、しかも非常に幸運な自然の産物です。彼の名は西海岸一帯、まさしくカリフォルニアにまで響き渡っています。ボストン人は彼を崇敬し、敬意を払っています。アメリカ人は彼を恐れ、最遠方の地に住む者も彼と友好関係を結ぼうとします。彼が再度ノーフォーク・ズンド[シトカ・サウンド]に定住したことも¹⁸彼らの間でたちまち広まり、シャーロット諸島[クイーン・シャーロット諸島]の対岸にあるカイガニ島[カイガン島](この島はヴァンクーヴァーによってプリンス・オブ・ウェールズ島と名付けられました)の南端に住んでいる有名なトヨン、カウはこの春、シトカが本当にロシア人に占拠されたのかじかに確認し、またバラノフに会って面識を持つために、ボストン人の船で自分の息子を送りました。実を申し上げますと、私はこの人物に特別な関心を持っております。彼の獲得物からは重大な結果がもたらされます。それによって、彼はまもなくロシアにおいても高く評価されるでしょう。彼という人物を正確に特徴づけることで、多くの同胞を満足させたいと思います。わが同胞は外国にかぶれておらず、ロシア国人の諸事業の真の姿を見ることを好んでいます。つまり、欠点や弱点は人間につきものであり、その原因は養育や長年にわたり強いられた習慣にあるのですが、彼らは事業を正當に評価し、人間の欠点や弱みに対する偏見を持たずに事業を吟味できるのです。しかしながら、残念なことを皆様にお聞かせしなくてはなりません。目下のわが社の状況において、わが社のみならず、国益のためにも不可欠なこの人物がこの地方を去る決意をしました。彼が自分の後任に指名したクスコフ氏は非常に立派な、善良な人物です。私は彼に金メダルを授与しましたが、それを彼は感謝の涙とともに受け取りました。しかし彼もまた、この地に残るつもりはないときっぱりと答えました。彼らには当然の理由があり、皆様は彼らを許さねばなりません。もともと、当地の事情を見知り、深く探求した立場から皆様に率直に申し上げます。今日のこの地方の整備状況では、当地で新たな人材をすぐに見つけることはできません。新しく入った人物がこの地方を視察している間に、莫

¹⁸ [訳者補注：1804年9月のシトカ奪還をさす]

大な、取り返しのつかない損失を被ったことを会社は認識するでしょう。くわえて、この地方全体をたやすく喪失することさえあり得ます。わが社の商業は、このような情けない整備状況にあるのです。

以前、皆様から送られた書類から、コーチ・シナ[ベトナム]、トンキン[ベトナム北部]、ビルマ帝国、そして一言でいうと全インドを入れた壮大な展望を拝見しました。私は祖国の偉大な展望に自らを捧げているのであり、皆様の壮大な事業計画を読んで感激しました。それと同時に、この地の事情はそのような賞賛すべき事業の遂行に対してまったく責任を持っていない状況にあり、皆様の先見の明が成就するのを一緒に喜ぶことはできないのではないかと心を痛めております。ただ、私がこの大計画[の作成]に参加しなかったので、計画に反対しているとは思わないでください。そういうわけではまったくありません。私も人間ですので、自負心がないわけではありませんが、自惚れているわけではけっしてありません。それにほんのわずかでも実現の可能性があれば、皆様の偉大な計画の実行のために真っ先にわが身を犠牲にするつもりでおります。全体の利益のために、経験してきた困難について沈黙し、筆舌に尽くせないほど飢えや寒さに耐えてきました。会社が私を正当に評価し、信頼なされることを願っております。実行するための手段が少しでも残されており、また微力ながら貢献することができるときには、重要かつ偉大な事業の達成に必ずや一身を捧げる所存です。もっぱら商業において旨味のあるとされる当地全体について、現在、私が皆様よりも通じていること、そして自然に対する正しい対応とそれがもたらす幸運な結果の相互関係について、私がおそらく皆様よりも正しく理解していることにご同意いただけるものと思います。もっとも、正直に申し上げますと、私の献身がお役に立つのかどうか私には分かりません。それゆえに、進取の気性と功名心によって私が驚くべき決断をすることもあれば、許しがたい、非常識に思われる行動をとることもあります。私が受けた指示の枠を越えた詳細な見解を述べることを慎みます。このようにとどめ、自制に努めてはおりますが、隠さずに申し上げますと、感情の力に押されて月並み以上の発言をしないという自信もまったくありません。アメリカにおける皆様の商業が私の領分のすべてであるように最低限努力したうえで、この商業について申し上げます。

今、わが社のすべての問題点と富の源泉を把握し、わが社の活動の大混乱を実体験にもとづき確認しました。この混乱を、すでに出航前から一度ならず予想しないわけにはいきませんでした。私はこれを正そうと努力しました。壮大な商業[計画]の目新しさのせいで、会社にとって重要な原則にさえも配慮がなされていないと感じております。他方で、わが社には必要な情報や秩序立った組織が欠けていることも認識しております。つまり、会社がまるで運命の気まぐれに委ねられた孤児のように見えるのです。エリサヴェータ号[聖エリザヴェータ号]が大量の荷物を送り届けた

としても、現在の基盤では会社は必ず失敗すると断言いたします。皆様に全体計画をお届けしたにもかかわらず、しかるべき積極的な方策が採られない場合、わが社がいつ頃破たんするのか、私は予想できません。皆様はこれを妄想だと思われますか？ しかし、私は根拠をあげることができません。私が述べる真実は不愉快なことでしょう。しかし、それをどこに隠せばよいというのでしょうか。会社は私を会社代表に起用し、皇帝陛下はこの地方の形成を委ねられました。私はかかる任務の重大性を強く感じております。運命が私に苦難にみちた人生を定めていることを承知しております。その一方で、数千数万の人びとの運命が私に委ねられていることも承知しております。それゆえ、私は全力を尽くし、全精力を注ぎます。私の業績がどのような評価を受けても構いません。しかし、神のご加護によって、これをうまく遂行できればと考えております。私には万人の利益以外には何も見えません。また、見たいとも思いません。何もかも後回しにし、すべてを犠牲にしながら、私は今、賞賛や褒美を受け取らなくても幸せだと考えております。私はこの地で死ぬかもしれませんが、幸福者として死ぬのです。全体の幸福のために、いわばナイフの刃の上をさまよう、この地で最初のロシア国人になるという幸福を私は陛下から賜りました。この陛下の慈悲深きご決定によって、陛下からすでに身に余るほどの褒美を与えられたのだ、と私の良心が絶えず私に言い聞かせているのです。心中の吐露はふさわしくないと非難されても構いません。しかし、少なくともこの感情が非難に値するとは言われなないでしょう。とはいえ、私は会社に向けて書いているのです。会社の委任にもとづき、私はここで会社を代表し、それゆえ自分自身に対して誠実になっているのです。非難を受けるべきことは何もありません。

当地でネヴァ号を見たのは、少しの間だけでした。ネヴァ号は出航を大変急いでいたので、支配人[バラノフ]は22日、外洋へ至急便を送らねばなりませんでした。ネヴァ号は当地で新しい後檣を取り付け、大量の荷を積んで広東に向かいました。

ここでまた、皆様は50万[ルーブルか]の積荷で本当に限界なのかとおっしゃるかもしれません。これは皆様の壮大な商業においては輸送の単なる一時しのぎや息切れにすぎず、本当の実力ではない、と私の方からは再度申し上げます。ご辛抱いただき、ご了解下さい。

コロシ人、あるいはカディヤク・アメリカ人が呼ぶところのコリュジ人は、いつまで続くかわかりませんが、おとなしくなったようです。彼らはボストン人が提供する上等な銃や小銃で武装し、ファルコネット砲を保有しております。そして、海峡の至るところに要塞を築いています。われわれは600名以上のロシア人とカディヤクのアメリカ人からなる毛皮採集隊を擁しており、

9月1日頃までに彼らが帰還するのを大いに心配しながら待っていました。とりわけ、フツヌ[島]のアメリカ人が彼らを攻撃し、われわれを無力にすると脅しているという知らせが隊長のクスコフ氏から届いたときにはそうでした。支配人は隊を迎えに大砲6門を有する聖エリサヴェータ号を派遣しました。この船は隊とは行き違いになりましたが、9月17日、まことに喜ばしいことに、毛皮採集隊はエルマーク号とロスティスラフ号の護衛のもと無事帰還しました。他の者たちは別れてカディヤク島に向かい、またある者は当地へ1,700枚の獲物を持ち帰りました。

すでに一度アメリカ人から残虐行為を受けておりますので、みな非常に用心深くっております。砲には常時、弾が込められ、装填した銃を持つ番兵が至る所に立っています。それらだけではなく、各人の部屋では武器が最高の調度となっております。毎晩、点呼の号音が鳴ったあとも、警報が朝まで鳴り続き、哨戒隊がすべての歩哨詰所を見回っています。つまり、完全に戦時の規律下であり、夜の闇や悪天候に乗じて攻撃を仕掛けるのに慣れている賓客を迎える準備がいつでも整っています。しかし、神のご加護のおかげで、今のところ平穏です。私が当地に滞在中、シトカのコロシ人がやって来ました。彼らは例のごとく全力で踊り、友好を誓いました。これを真に受けてはいけないことを、われわれは知っています。この海峡域には、穏健そうに見えるものの、いまだ人質を差し出していない集落が多数あります。支配人は偶然、シトカのトヨン、アコイコクノウトの息子たちを捕らえました。息子たちは今ここに住んでいます。

アメリカ人がどれほど信用できないのか、また彼らがどれだけ大砲類を蓄えているのかを示すために、この春ここで起きた出来事をお伝えいたします。[1805年6月]ボストン人のポーター船長がラッコ交易を目的に、三檣帆船[アタルバ号]でシャーロット諸島に寄港しました。この地では逃亡したヨーロッパ人の手助けにより、かなり堅固な要塞がすでに築かれていました。18門の大砲には十分な弾丸がありました。船長が湾の一つに投錨するやいなや、住民はラッコ皮を満載した数艘の小舟でやって来ました。トヨンは交易話をするために船長室に入り、自分たちの毛皮を見て欲しいと頼みました。船長が後甲板に出て、そこから身を乗り出してかがんだとたん、トヨンは彼の胸に短剣を突き刺し、同時に航海士2人を拳銃で撃ち殺しました。流血の沙汰が始まりました。水夫たちは船倉に駆け込み、船倉から甲板へとつうじる穴があったので、鹿弾[大型の散弾]を撃ちました。甲板上ではファルコネット砲一発で未開人をロープから下に落すことができました。ボストン人はこの機会を逃さず、6名で船を動かし海へ逃れました。他の者は殺され、10名ほどが負傷しました。彼らはカイガニ(プリンス・オブ・ウェールズ)島に着きました。この地の住民であるコリュジ人またはコロシ人はいつでも彼らに対し友好的なふりをし、また英語を流暢に話しました。しかし、彼らが無力なのを見ると、この島民たちもまた船を奪おうと企てました。ボストン人たちは舟や人が異常なほどたくさん集まってきているのに気づき、すぐさま海

に遁走しました。幸い、彼らは同じ会社で働くスタージス船長[キャロライン号]に出会いました。彼[船長]はこの2隻の船で入港し、船[三檣帆船]の人員を増強し、この船で自分の獲物も広東に送りました。ボストン人自身が私に語ったところによると、彼らはこの交易で今までに6隻を失いました。それにもかかわらず、金儲けのため彼らは毎年ここに引き寄せられるのです。

当地ノヴォアルハンゲリスクには、この夏、ボストンから2隻の三檣帆船がやって来ました。一隻はトレスコット船長のマリア号で、広東へ出発しました。もう一隻はグリフ船長のユノナ号[英名ジュノー号]です。私は当地でユノナ号と出会いました。この船の件でお祝いを申し上げます。私はわが社のためにこの船を一切の積荷と武器とともに6万8,000スペイン・ピアストル**で買い取り、その際、彼らがサンドヴィッチ諸島[ハワイ諸島]まで辿り着けるようエルマーク号を提供しました。彼らが自分たちの勇敢な行動に対して、非常に高い代償を支払う結果となりませんように。

エルマーク号は10月17日出航しましたが、グリフ船長は当地に留まり、越冬したのち、オホーツク経由で皆様のもとへ向かう予定です。ボストンの水夫5名が月10ルーブルの賃金で会社に雇用されました。衣服は彼らが負担しますが、魚の干物はわれわれが負担しております。彼らの賃金は[飲酒により]すでに皆様の購買棟へと渡っています。

私の強い決意は、皆様には理解しがたいものかもしれませんが、私は無為に時を過ごすつもりはありません。この地に到着した直後、私はボストン人たちに滞在許可証を提示するよう要求しました。彼らはこれを提示しました。彼らに丁重に、わが国の皇帝陛下がこの地方にご関心を持っておられること、まもなくアメリカ人との交易においてわれわれが彼らよりも優位になるであろうことを理解させました。その上で、われわれと交易をした方が得になると提案しました。その後、私にとって、すみやかに造船場を建設することが最優先課題となりました。われわれは少しも手間取ることなく、計画中の軍用ブリッグ型帆船と単檣帆船を建造するために船渠の清掃をしました。われわれが着手した活動、そしてそのために必要となる資材の荷揚げを見て、ボストン人たちは考え込んだようです。われわれは彼らの一挙一動を注意深く観察していました。ついに彼らはコロシ人との交易を中止することを考えるに至り、それは、ドクトル[ラングスドルフ]を通じて私に通知されました。彼らの決断は、われわれによるユノナ号購入の可能性を高くしました。この購入の機会を私とアレクサンドル・アンドレエヴィチ[・バラノフ]は見逃しませんでした。われわれが置かれている状況下では、これ以上考えられないほど有利な買い物でした。第一

** (出典文献の编者による注) この金額は、『露米会社の形成と現在までの活動の史的概観』[Тихменев П. Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени]第1巻145頁で示されているユノナ号の購入代金と異なっている。おそらくそれは、同書第1巻の価格の出典となった明細書では、船の財産目録に入っている大砲その他の物品の代金が含まれていなかったためであろう。

に、われわれは以下のような不幸な状況に置かれていました。200人分の穀物は、1週間あたり1フントと計算して、10月分までしかありませんでした。魚が獲れる季節は終わり、ときおり、かろうじてアザラシを捕まえることができました。これにくわえて、セーヴェルヌイエ諸島から送り届けられた乾燥トド肉と少量の干魚が食糧のすべてでした。人びとは十分な食糧がなく、重労働で疲労困憊していました。土砂降りの雨が昼も夜も止まず、病人が増えました。建築用に木を伐採する一方で、人びとはテントに住んでいました。冬の到来に、われわれは悲観的な見通しを持たざるをえませんでした。われわれは、どんなに値段が高くとも船の購入を決意していたので、外国人がわれわれに不利な条件を提示しないように、外国人の目をごまかさなくてはなりません。第二に、火薬、銃その他の物品をすぐさまコロシ人が入手したならば、彼らはわれわれよりも強力になったでしょう。第三に、われわれが船を購入することによってこの海峡の外国船が1隻減ることになります。第四に、われわれが入植を強力に推進していることや当地への大艦隊の来航など、私が意図的に広めた噂が他のボストン人の意欲をそぎ、当地の住民[アメリカ人]も火薬やその他の必需品を入手できず、まもなく降参するでしょう。今でさえ、われわれの船の購入はすでに彼らを少しおじけさせています。第五に、われわれの港の防衛が強化されました。われわれは、購入した、整備の行き届いた銃に加え、予備の大砲8門と弾丸一式、ファルコネット砲2門を保有します。第六に、グリフ船長はわれわれと交易することを決意し、われわれの必需品の目録を持って行きました。物品はボストンからわれわれのもとに、今回われわれにとって非常に有利な価格で送り届けられるでしょう。さらに、もしエルマーク号が無事サンドウィッチ[ハワイ]諸島に到着し、そこから彼の貨物上乗人モアフィールドがすぐ広東に行くことができれば、春にも広東から当地へキビpsheno、南京木綿、茶、その他の品を運んで来るかもしれません。そして第七に、今や会社には整備の行き届いた新しい船があるのです。この船は軽快に航行し、カシ材で建造され、銅板で被覆が施され、大砲を除く索具、帆、武器類一式が揃っており、積載量は206トンで、価格は6万5,000ルーブルです。船は1799年、北アメリカのブリストル港で建造されました。大砲を14門搭載していましたが、われわれは四と二分の一フント口径の砲を8門だけ受け取りました。他の砲は木製でした。彼らはエルマーク号の武装を目的に、6門のファルコネット砲のうち4門を手元に置きたいと申し出ました。彼らはこのエルマーク号で出航しました。(略)

私は未開人の気質を探求し、彼らの心の動きを注意深く研究しました。彼らは善良ではありませんが、屈辱を受けると執拗に復讐しようとし、怒りっぽく、怠惰で、物欲は穏当、名誉欲が強く、飲みこみが早いことが分かりました。厳格な手段が用いられさえしなければ、彼らの能力からして、彼らを教育することは難しくないでしょう。彼らには崇高な感情さえ認められます。私がか

ディヤク島に滞在している間、学校設立の準備をしているとき、私は毎日、子どもたちに囲まれていました。私が子どもたちをかわいがる様子を見て、アメリカ人は自分の子どもを私に引き合わせる決心をしました。私は子どもたちを褒め、父親たちに小間物を与えました。私の滞在も終わりに近づいたある日、たいへん奇妙な出来事がきっかけとなり、しまいには子どもたちを全員受け入れることができなくなるような事になりました。私は4日間で22人を受け入れましたが、自分が出発したあとも、自発的にやってくる子どもの受け入れを続けるよう命じました。その奇妙な出来事とはつぎのようなものです。ウガトックの名誉あるトヨン、アキルカクが自分の息子を私のところに連れて来ました。私がこの子を愛撫し、キスをして胸に抱き寄せたとき、子どもの髪が私のボタンに絡まり、外すのに手間取りました。トヨンは自分の息子が私の息子になるように天に定められており、息子を私の学校に預けると叫びました。私は彼に感謝し、息子に何を勉強させたいのか尋ねました。息子を自分以上に立派なトヨンにするために必要なことをすべてです、と彼は答えました。ここで迷信がある程度影響したことは疑いありません。しかし、彼の答えには感心しました。私は彼に皇帝陛下の名においてメダルを与え、会社からはラシャ製の服を与えました。そしてこの夜からアメリカ人が自分の子どもを連れて来るようになったのです。私は各人に相応のタバコ、ラシャ布、カムレイ[アノラック]を与えました。

皆様に申し上げますが、アメリカ人に必要なのは家族の生活や家政の模範だけなのです。ところが、それがこの地にはないのです。これらに着手する必要がありますが、忘れられています。善良な道徳の模範が必要なのですが、それはごくまれにしかありません。毛皮採集に従事する者はその大半が乱暴で、酒飲みで、あまりにも墮落しているので、どの社会も彼らを厄介払いできて大喜びに違いありません。もっとも、当地では極度の貧窮状態のために彼らは少々おとなしくならざるをえません。ここでは暇もなければ、酔っ払う方法も少ないからです。オホーツクに帰るやいなや、彼らは以前の得意技に取りかかり、4年間の稼ぎを数週間で飲み干してしまい、またアメリカに戻ってくるのです。こんなわけで、いったい彼らからどのような模範を期待できるのでしょうか。彼らが当地に留まることを許されるのであれば、各人は自分の生計についてわれ知らず考え始めるようになり、ひょっとすると半数くらいは善良な人間になるかもしれません。しかしオホーツクに帰還すると、彼らはふたたび社会にとってまったく有害な人物となってしまうのです。皆様、政府にこれらの者たちの素行について報告し、当地に永住する自由を各人に与えるよう請願する必要があります。わが社には数千人どころか、数百人の入植を組織する力もありません。もし、この入植に問題点があれば、政府はいつでもこれを自由に中止することができます。

この地の人口を停滞させている、人類にとってきわめて破滅的なもう一つの悪について皆様に

申し上げます。毛皮採集者はアメリカ人の女性と結婚し、妻子を当地に残すか、あるいはオホーツクに連れ帰り、有り金を全部呑み尽くしたあげく、妻子を捨て、物乞いをさせています。その後、妻子は気候や食物が合わず、衣服が十分でなく、そして何よりも天然痘が原因でみな死んでいます。祖国の民は増加せず、当地の小集落は極貧の状態にあり、民を衰弱させています。その一方で人びとは無駄に死滅しているのです。私は当地でのこれらのプレイボーイたちの結婚を、ここに留まるという意味を表明しないかぎり禁じました。また今後、指令が出るまで妻子の連れ出しも禁じました。本件につきましては、私の全体計画の中でご説明いたしますが、恐れ多くも皇帝陛下を細事で煩わせたくはありませんので、どうか皆様が事前に皇帝陛下に本件についてご報告いただき、また私の処置に対する皇帝陛下のご評価をロシア領アメリカ支配人[バラノフ]にご通知くださいますようお願い申し上げます

当地の住民の中から教養のある人びとを育成するための方法を提案し、それに要する時間について見通しを立てましたが、つづいて入植の方法について申し上げます。これには帝室からの援助が必要です。第一に、帝座にご慈愛を請願し、毎年、流刑囚の中から当社の選抜にもとづき、少なくとも100名から200名をご提供いただき、このうち所帯持ちはアメリカに送り、独身者にはウナラシユカ島の女性を娶らせませす。この島の女性の人数は男性の人数の倍です。これだけ少人数であるならば、[シベリアの]諸官庁の活動に何の支障もないでしょう。罪人にとっても恩赦となるでしょう。第二に、領主が自由意思で会社と契約を結び、領主が所有する健康で、熟練した技能を持ち、作業に適した大酒飲みを領主と会社双方にとって有利な条件で会社に提供するように説得したうえで、彼らをこちらに来させませす。多くの領主は酒飲みを抱えていることを重荷に感じているでしょうから、わが社が一人につき年25~50ルーブルの貢租を納税人口調査まで支払うことを約束するならば、大変喜ぶでしょう。ただし、領主が彼らの帰郷を決して要求しないように証書を取っておかなければなりません。モスクワだけでもこの地域に十分な人数を供給し、それでもなお穀つぶしの半分がモスクワに残されるでしょう。第三に、意図的に破産したすべての商人はその犯罪の摘発後、アメリカ入植地に送られ、彼らは当社から一定額の現金を給料として受け取り、それを債権者への返済に充てるという旨の法律の発布を、皇帝陛下に請願すべきです。人びとはこの法律の適用を恐れ、恥ずべき行為を思いとどまるでしょう。彼らには、いわゆる特例によって処罰を免れることができるという見通しがもはやなくなるからです。それによって、商業においては全般的な信用が一層保たれるでしょう。換言すれば、このような犯罪者や不道德な人間は全員、当地で強制的に矯正されるとともに、利益をもたらすようになるでしょう。1803年、ロンドンに滞在中、私はニューゲート監獄で400人以上がボタニー・ベイ[オーストラリア東岸]への流刑を待っているのを見ました。すなわち、国家はある場所では有害な成員から解

放され、その一方で、別の場所では彼らから利益を得るだけでなく、彼らによって都市を建造できるのです。他の方策も私の構想の中にあるのですが、私の労力のすべてが嘲笑で迎えられるのではないかとまったく自信がなく、わが社が非力なので、それを披瀝する勇気はありません。(略)

さて、守備隊について申し上げます。イルクーツクの毛皮愛好者は当然、騒ぎ立てるでしょう。「いったい何のために、何の目的でこのような企てが要るのだ」、と。彼らが人間の数ではなく、もっぱらラッコの数だけ勘定するのは随分哀れだ、と彼らに対して答えましょう。このようなラッコ愛好者がラッコにどれだけの価値があるのか、つまりラッコのためにどれだけの人間が切り殺され、死んでいるのかよく考えたならば、彼らはラッコ皮の帽子をもっと目深にかぶるでしょう。

シトカがなければ、わが社は消滅するでしょう。2度目の獲得[バラノフによる 1804 年秋のシトカ奪回]が[原住民の間で]引き起こした脅威はまさしくヌートカまで広まりましたが、今やわれわれは武装した民や銃兵との間で事を構えているのです。したがって、要求どおりに守備隊によって補強がなされないのであれば、人数で上回るアメリカ人は必ずわれわれの軍事力の弱さに乗じるでしょう。攻撃の成功は彼らを大いに傲慢にさせ、いかなる策略も実現可能だと考えるようになるでしょう。われわれをうらやましげに見ている外国人たちは、彼らにわれわれの施設の脆弱性について吹き込んでいます。数千人からなるコリュジュ人[コロシ人]のうちの百名の銃兵がカディヤク島を急襲し、徹底的に破壊したとしても私は驚きません。彼らはイギリス製の火器を有していますが、われわれのものはオホーツク製です。この代物は到着後、まっすぐ倉庫に引き渡されて会社の資本を増やし、それからはその性能の低さからまったく何にも使われておりません。私は倉庫で 500 丁程が山積みになっているのを見ました。そういうわけですから、どうしてオホーツクのろくでなしどものことを思い出さずにいられましょうか。彼らから損失を取り立てるだけでは不十分です。全社をあげて陸下に請願し、取り返しのつかない害を彼ら自身が理解するように、彼らをアメリカに永久に送るのが正当であると考えます。彼らのいかさまによるこの害が多くの人命を失わせたのです。彼らは私に「いったい何のためにアリヤスカや別の場所に行かなければならないのか?」と聞くでしょう。私は、至るところで人が殺されている、と答えます。すでにアリヤスカでは山岳民がロシア人を殺戮しています。メードナヤ[コパー]川でも、ヤクタットでもです。いくつかの要塞が建設されましたが、毛皮採集者はわずかで、しかも彼らは食糧確保のために持ち場を離れなければなりません。未開人はまさにその時を利用し、殲滅の機会を逃さないのです。くわえて、会社の無防備な施設は、私掠船にとって間違いなくいいカモになるからです。1802 年、イギリスのバーバー船長が厚かましくもカディヤク島のパヴロフスク港に入り込みました。彼はシトカから連れて来た 26 人のカディヤク人捕虜と引き換えに、1 万ルーブルを

要求してきました。バラノフ氏はこの金額をラッコで支払わざるをえませんでした。しかし、サンドウィッチ諸島に戻ったバーバーは、当時、イギリスが宣戦布告していたことを知りました。彼が告白するところでは、会社の弱点を見ていながら、それでなくとも幾度か企ててきた略奪を行わなかったことに、悔しさのあまり彼は髪をかきむしりました。当時、エリサヴェータ号に積まれていた毛皮のすべてがカディヤク島にありましたが、彼には隠されていました。彼はこのことを知りませんでした。それにもかかわらず、彼は戦利品を獲るためにサンドウィッチ諸島からふたたび出航しようとしてしました。しかしながら、わが社にとって幸いなことに、彼は船の同僚のリュードスと諍いを起こし、その間に戦争終結の知らせが届きました。終戦後、彼の略奪行為にかんする審理が両国の間で行われたとしても、少なくとも会社は財産を失ったままとなるでしょう。皆様、今や海洋列強との間の平和関係が崩れたならば、会社はその領内に貴賓が入ってくることを覚悟しなければなりません。これがこの地方全域を、それもできる限り早急に、守備隊で防御しなくてはならない理由なのです。(略)

皆様、私は自分の考えの概要を急いで書きました。私も人間であり、いつ死ぬとも知れない身ですが、せめて私に託された全体の利益に気を配らなかつたなどと非難されずに死にたいと願っております。もちろん、私が思い違いをしていることも多々あるでしょう。ですが、私が書いたものの中から、何か役立つことも見出せるはずです。疑わしいと思われることも、時がたてばその正しさが証明されるでしょう。諸事情により、私の任務に応じて、編成する船舶の数を変える必要があるかもしれません。また、私自身が全般的な計画の枠内で検討しつつ、別の船や、より大型あるいはより小型の船を建造する必要性を見出すことも十分あり得ます。しかし、造船所の定員と造船用の資材や道具の数量は以前と同じ規模となるでしょう。私は断片的に書いていくと、以前にも申し上げました。今回もそのような形で、必要な情報を皆様にすべてお伝えできればと思います。それゆえ、私の頭に浮かんだ、会社が必要とする、アメリカ領の繁栄に有益なことをすべて書きます。こういうわけですので、私の熱意に免じて、まとまりのない文章をお許し下さい。ここで、われらが商船隊の任務およびこれと関連した定員の整備についても申し上げます。現在、士官と航海士の俸給だけでも年間3万2,000ルーブルが支払われております。まったく不必要な人を雇用し、俸給は年々増加しています。しかし、利益は上がっておりません。定員が整備されなければ、最終的にはわれわれは任務を引き受けることができなくなるでしょう。地方を管轄する総本部自体も権威を失い、失礼ながら乱暴に言うならば、この点において総本部は雑貨店のような状態にあります。店には皆が値段交渉のためにやって来て、取り入ろうとします。双方にとって重要なのは、何かをだまし取ることだけなのです。しかし、定員が整備されればその欠員も明確となり、就職希望者自身が会社に申し出るようになるでしょう。希望者については調

査し、勤務歴証明書に目を通します。採用するかしないか、駆け引きをする余地は少しもありません。そうすれば、総本部が士官たちのご機嫌を取るのではなく、士官たちが総本部のご機嫌を取るものと私は確信しています。イギリスの東インド会社は海軍士官について独自の定員を持ち、聞くところによると、イギリス王に対する勤務から会社への勤務に移動する際に一官等昇進し、その後は会社の規定にもとづいて昇進します。西インド会社も同様です。われわれのところでもいずれはこうなるかもしれませんが、現在、われわれはまったく違った状況に置かれており、これはわれわれの実情には合っておりません。しかしながら、船数に応じて定員を整備し、海軍士官の官位を定めるべきです。入社する者が皇帝のもとで勤務していたときに持っていた官位について知る必要はありませんが、その人物の技能や品行については知っておかなくてはなりません。われわれは欠員に佐官、中尉、少尉、航海士、そしてその他の官位の者を勤務歴証明書にもとづいて採用し、入社後には熱意と技能に応じて、わが社の規定に沿って任用すればよいのです。守備隊にかんしても同様です。官位に縛りつけられるのではなく、その人物の長所が重視される必要があります。品行方正で業務に通じた陸軍少尉がわが社の勤務では海軍佐官の地位に就くことも可能です。在職中、彼はこの官位に備わるすべての権利を持たなくてはなりません。ただし、退職後、彼は希望先に自由に就職でき、したがって、おのずと以前の状態に戻ります。われわれは今では守備隊を保有しておりますが、それは毛皮採集者から構成されております。彼らは歩哨を務め、起床を知らせ、巡回し、誰何し、報告します。規律は正しいのですが、規則や敬意によって奮い立たされてはおりません。彼らは武装した民間人にすぎません。このためアメリカ人はロシア人を殺すのです。この害悪を防ぐため、非常に堅実かつ不可欠な原理原則の決定についてわが社が陛下に説明していただけるならば、陛下もご寵愛をもって承認してくださるものと確信しております。

遺憾ながら、海事にかんする私の結論に以下を付記しなくてはなりません。会社の側からすれば、外国人の航海者あるいは退官者を雇用するほうがはるかに有利です。ただし、皇帝への勤務に就いている者はけっして登用すべきではありません。そうしなければ、また面倒なことになります。君主のご慈悲が大きいにもかかわらず、わが国の士官教育の方法ゆえに、またこの地方が遠くにあり、ここでは何でも許されるように見えるがゆえに、会社が損害を被り、祖国はアメリカ領を喪失することもあり得るのです。教え諭すことで、不幸な、欺瞞に満ちた規則を一掃することは困難です。それは人間を再教育することに取り組むようなものです。これには法律にもとづき厳格に罰せられるという恐怖が必要ですが、それは存在しません。長が必要ですが、彼は支持されていません。良家の身分[貴族身分]に根づいている商人身分への軽蔑が、ここでは皆を主人にしてしまい、「船頭多くして船山に上る」というわけです。功勞により官位を得た[貴族身分を

取得した]支配人もいますが、彼が以前、商人身分であったことを記憶から消し去ることはできません。祖国にとって不幸なことに、われらが兄弟[士官などの貴族身分出身者]の大半にとって、このことは彼がごく最近までろくでなしだったということと同じなのです。それゆえ、商人身分出身の支配人への服従は彼ら士官にとって屈辱なのです。彼らは、祖国にもたらされる利益を尊重できません。彼らは自分自身で利益を実感しなければならないからです。彼らのつまらないわがままに対するへつらいが少しでも足りなければ、彼らは叫ぶのです。「われわれは自由な人間なのだ。勤務したくない。帰る」。たしかに、勤務には契約書が存在しないとはいえ、わが社の本部のご慈悲により、みな自由に退任できます。もっとも、わが社に勤務中は命じられたことを遂行しなければなりません。それに反する場合、意志の決定や自由を有する身であるとはいえ、彼は厳密な事情説明が求められ、自由そのものを奪われます。ただ、当地では処罰は定められておりません。それゆえ、支配人は処罰しようにもできないのです。したがって分別をもって辛抱し、事を回避するのが無難なのです。ふたたびある特定の個人のことを話しているのだと思われぬように、私はここで多くの事柄について黙します。時がたてば、私が言わなくともアメリカでの出来事すべてが総本部に明らかになるでしょう。

私がどれだけ控え目にしたとしても、ある人物の性格については不本意ながら指摘せねばなりません。私はこの人物に人生で3度会いました。最初に会ったのは、私がここに到着してすぐのときで、彼はフロックコートに外套といういでたちでお見えになりました。私は彼にいったい何者か尋ねました。彼はロシア海軍中尉スーキン、エリサヴェータ号の指揮者であると答えました。これに対して私は、自分はロシア帝室侍従長何某で全アメリカの指揮官であると答えました。その後互いにきちんと自己紹介し合いました。彼は上陸するとすぐに、私のもとへ軍服姿で報告書を携えて現れました。私は彼に礼を言いましたが、彼からは報告書を受けとりませんでした。支配人から全体報告書を受け取っていたからです。アメリカでもその地方の主として、すべてを支配人の管下に置くように職務規定が求めており、また君主ご自身もそれをお望みであると述べました。あとの2回は、勤務とのかかわりで彼と会いました。これ以上、彼と会うことはおそらく一生ないでしょう。ただ、以下の件について申し上げます。支配人が不服なスーキンに船を委ねることを危惧しているとの文書が私のもとに届きました。そのため、私はスーキンに無駄な俸給を与えないよう、彼をロシアに送り返すよう命じました。もしも、彼の退職日以降の俸給について支払い停止を決定なされるならば、それは正当であるのみならず、他の者の行動も抑止することとなるでしょう。なぜなら彼は2年間で5,000ルーブルも受け取ったにもかかわらず、会社に損失をもたらし、支配人を嘆かせた以外には何も成さなかったからです。スーキン氏は1804年、マリア号出航に先立ってオホーツクを発ちました。彼はカディヤク島に直行するよう命じら

れましたが、幻の島々を探しに出かけてしまいました。霧の多いこの海では島影のようなものがよく発生し、たぶらかされます。われわれもよくこれを見ました。彼はカディヤクではなくウナラシュカ島で越冬し、修理のために船を岸に上げ、長逗留を決め込み、会社の業務を取りしきり、婚礼を執り行いました。また毛皮採集者の飲酒を認め、好き勝手にさせました。ウナラシュカ支配人は、バラノフ氏から命令を受けていました。この命令によれば、バラノフ氏は聖エリサヴェータ号で増援部隊が来ることを期待していたので、ただちにシトカに向かわせるためにこの船にカディヤク行きを指示していました。ただし、この船がウナラシュカに来た場合には、シトカへ行くように伝えることを求めています。ウナラシュカ支配人はスーキンに命令を伝え、急ぐように頼みましたが、スーキンは急ごうとはしませんでした。ここでの生活が気に入ったのです。乗船していた造船職人ポポフと海軍少尉カルピンスキーが異議を表明し、やっと6月に出航しましたが、シトカではなくカディヤクに向かい、毛皮採集者らの話ではその近くにあるという島々を探しに行きました。カディヤク島でスーキンは士官たちと口論になりましたが、なんとか和解し、カディヤク支配人は彼を体よくこちらに追い払いました。シトカに到着したスーキンはバラノフ氏に通知を送りました(この地では皇帝の士官諸氏は、自分が[支配人の]管轄下にあるとは思っていないので、支配人に上申書を提出しません。そのかわり、ありとあらゆる失礼なことを書いた書簡を送るのです)。その通知の中で彼は、島を見つけたのでただちに自分のために別の船と船大工を含む毛皮採集者24名を用意するよう要求しました。また彼はその地で会社の利益のために海獣を発見したいと考えており、ふたたびウナラシュカ島で越冬し、春にそこから毛皮猟に取りかかるつもりであるとのことでした。このようなたわごとを受け取ったバラノフ氏は、彼と会う前によくよく通知を検討し、彼の熱意に感謝し、エカチェリーナ号を武装して彼に託すことを約束しました。そのうえで、シトカが危機に陥っている今はそんなことをしている場合ではなく、これらの緯度上の島々を探索するチャンスはいつでもやってくるのだから、それを発見した者の名誉はいつでも彼のものになるとバラノフ氏は説得し、総本部に提出すべく航海日誌を自分のもとに送るよう依頼しました。スーキンは落胆し、航海日誌の提出を拒否し、ばかげた行為に出始めました。荷降ろしのために寄港しても、乗船者を下船させず、食糧も与えず、商人よりも上に立つ士官に与えられた全般的な権利にもとづいて、手代たちを殴ろうとしました。手代たちが支配人のところへ逃げ込み、バラノフは彼に道理をわきまえさせようと努めました。そして最終的に私が到着して騒動がおさまりました。この間に、フツヌのアメリカ人が毛皮猟から帰還中の採集隊を攻撃すると脅迫してきたとの知らせを支配人は受け、それを私に報告しました。バラノフが報告してきたこの用件に対応し、大砲を6門搭載する聖エリサヴェータ号をただちに向かわせ、毛皮採集隊を出迎えるために船がとにかく海峡に姿を現すよう彼に命じました。スーキ

ンはバラスト[底荷]積みにもたもたしました。私は彼に対してマリア号から応援の人員を出すように命じましたが、彼は配下の者にそれを命令しませんでした。(この地では、詐術で毛皮採集者が買収されています。彼らはすっかり墮落しているのです、一杯のウォッカのために仲間を皆殺しにするでしょう)。とうとう錨を上げる時が来ましたが、彼を海に出すことができません。水が足りない、食糧がまだ全部運び込まれていないなどと言うのです。結局、すべてが供給されましたが、その間に3日が過ぎていました。それでもやはり彼は出航しようとしません。理由を聞きますと、バイダーラが水漏れするとのこと。私はバイダーラを陸に揚げるように命じました。なめしセイウチ皮のカバーに穴が開いていました。1時間でそれを修理しました。このおふざけを止めさせるため、翌日の朝までに出航しなければ彼を指揮からはずす、と彼に伝えるよう命令しました。翌朝、彼は錨を上げ数マイル進み、また投錨しました。そこで一昼夜過ごしましたが、風は順風で潮の流れも良好でした。私が彼に出航命令を伝えると、ふたたび彼は少し進み、また投錨しました。われわれが危機的状況にあり、600人以上のロシア人とカディヤク人が、いわばアメリカ人の剣の下にいるというとんでもない時に、スーキンがふざけるつもりだと私は判断し、指揮と船を海軍少尉カルピンスキーに引き渡し、スーキン自身はただちに私の元に出頭するようとのバラノフ氏からの命令書を持たせて、海軍中尉フヴォストフをスーキンに派遣することを余儀なくされました。フヴォストフが行ってみると、船は浮流していました。フヴォストフがカルピンスキーになぜ出航しないのか尋ねると、船長に聞いてくださいという返事なので、彼はどこかと聞くと、寝ていて、いくら起こしても起きません、とのことでした。ようやく、なんとかスーキンを起こしました。スーキンは文書に目を通すと、船はなぜ停泊しているのかという問いについて、その原因は自分だけが知っていると答えました。そして、スーキンは文書中のバラノフの署名を見ると命令書を粉々に破り、口の中に詰め込みました。それから、カルピンスキーから[航海用の]器具を取り上げ、これらの器具は会社のものではあるが、自分の支払明細書によるものであり、それらについては自分が署名したのだと言い張りました。カルピンスキーは航海用の器具がなく、フヴォストフの説得でようやくスーキンは計測器と測角器を手離しました。スーキンは乗組員を集め、フヴォストフを船載ボートに乗せました。そしてスーキンは間もなく[シトカに]到着すると約束しました。フヴォストフはこの報告を携えて帰還しましたが、スーキンは上陸し森の中に落ち着きました。彼は猟から帰る途中のバイダルカを介して、バイダーラを自分のところに送ってよこすよう港に指図しました。彼の言い分によると、カルピンスキーが船載ボートをよこさず、コロシ人から襲われる危険があるとのことでした。一方、カルピンスキーも同じバイダルカを使って報告してきました。それによると、カルピンスキーは航海を開始し、スーキンは徒歩で港まで行くつもりだったので、船載ボートはスーキンから彼のもとに返されたとのこと

でした。これらの知らせを携えたバイダルカは真夜中近くに到着しました。人びとは作業場から離れたばかりで、雨も激しく降っていました。私はこの放蕩者のために人びとを煩わせたり、危険な目に遭わせたりしてはならないと命じ、夜が空けるとすぐにスーキンのもとに人を派遣しました。スーキンは連れて来られましたが、彼は私の所には来ませんでした。彼を呼ぶよう私が命じると、スーキンは出頭しました。私は彼をきつく叱り、それでこの件は終わりました。スーキンに航海日誌の提出を求めましたが、その中には日付も観察事項の記入もありませんでした。何のためにシトカではなくカディヤクに向かったのかと聞くと、スーキンは水がなかったためと答えました。しかし、日誌には水が底をついたという記録はありませんでした。乗船者は、水は十分にあったと言っております。私は航海日誌の原本を提出するよう命じました。船乗りならば、風の力ではまったく説明のつかない行動を日誌の中に見出すでしょう。同封いたしました彼の書簡や彼にかんする書簡から、私の言葉に偽のないことをご確認ください。その他の、よく整備された管理の下では聞いたこともない、他の者たちの出来事についても、私は支配人に対してすべてを書きとめ、その中の主要部分については参考までに皆様に報告するよう命じました。私個人の労力に報いるため、どうかそれらを内密にさせていただき、取調べを一切行なわないよう謹んでお願い申し上げます。実際のところ、これまでの人生においてかかる狼藉や大酒を見たことなど一度もありませんでした。私が皆様にお知らせするよう命じたのは、ひとえに、皆様の支配人がどんな状況に耐えているのかを分かっていたくためです。ここで起こっていることをご理解いただければ、この地方の編成と厳格な処罰の決定にすぐにでも着手していただけるものと存じます。仲間内で深酒をし、毛皮採集者にも飲ませていますが、こんなことを続けているといつかコロシ人というよりも自分たちが会社を破滅に追い込まないとも限りません。これらのならず者を全員、徐々にロシアに返す以外の方法を私は思いつきません。毛皮採集者の品行ゆえにこの地方が破滅の危機に脅かされていなければ、私はとうの昔に彼らを屈服させたでしょう。(略)

宣教師団について申し上げます。彼らはこの地で数千人に洗礼を施しました。ただし、文字どおり洗礼しただけです。カディヤク人の気質はいくらか和らぎましたが、それが宣教師団の努力によるものとはまったく思いません。それは時間の経過や彼ら自身の能力によるものです。われわれの修道士たちはパラグアイのイエズス会師の例にけっして倣わず、未開人たちの理解を高めようとはしませんでした。また彼らは政府そしてわが社の全般的な計画に加わることもできませんでした。彼らはアメリカ人を[洗礼の儀式として]水浴させ、アメリカ人の飲み込みが早いのがゆえに半時間で上手に十字を切れるようになると、その成果を自慢しました。それから先は彼らの才能を生かさず、うなずいたり、瞬いたりしているような短い時間にすべて成就したとみなし、鼻高々で引き上げてしまうのです。そして、暇を持てあました挙げ句、国家の側の者だと自称し、

管理の世俗領域に干渉するのです。不穏な士官らはそんな彼らを支配人に対抗するための武器として利用します。このような状況が遺憾であるのみならず、この地方全域が破滅の危機にあります。ここで一つの例をお話ししましょう。陛下のご即位に際して、修道士たちは支配人には何も告げず、全域に命令を送り、すべての民が忠誠を誓うためにカディヤク島に集まるよう求めました。カディヤクには食糧がなく、もし支配人が自分の部下を派遣し彼らが集まるのを思いとどまらせていなかったら、集まった数千人が飢えたという理由だけで皆殺しを始めたでしょう。あげくの果てには支配人に無断で急に思い立った所に赴き、無益に布教を試みるのです。アリヤスカ半島ではシェリホフ湖とも呼ばれるイリヤムナ湖の畔で山岳民との間で交易が開設され、多大な利益がもたらされておりました。ユベナリイ修道士は布教のためすぐさまそこへ行き、無理やり彼らに洗礼を受けさせ、婚儀を執り行い、ある者から娘を取り上げ別の者へ与えました。アメリカ人は長い間、彼のあらゆる横暴や殴打にさえ耐えていましたが、とうとうこのろくでなしから逃れることができるのだと気づき、自分たちの間で諮り、聖なる修道士を殺害してしまいました。彼は憐れむにも値しませんが、ロシア人とカディヤク人のアルテリ[狩猟団]はアメリカ人の激昂の犠牲となり、皆殺しにされてしまいました。それ以来、この民は復讐心に燃えており、さらにはロシア人の入植に警戒し、ロシア人が少しでも油断するとまったく容赦ありません。去年、またロシア人が殺されました。私は神父様たちに、支配人に伺いを立てずに行動し、世俗事にあれこれと介入するならば、私から命令を発し、犯罪者としてロシアへ追放され、その者はロシアで社会の平穏を乱す行為により破門され、見せしめに処罰されるだろう、と言いました。彼らは泣き崩れ、私の足元に這いつくばり、官吏たちが彼らに指図したのだと言い、今後、支配人にもつばら称赞されるように振る舞うことを約束しました。ゲデオン神父同席のもと、彼らに対して内密にこのような訓戒を行なったのち、彼らの聖職位にふさわしい敬意を最大限に払いながら彼らを待遇しました。わが修道士たちは自分たちの愚行を自覚し、農業や若者の教育でも貢献していることを会社に示そうと懸命に努力しています。教育についてはネクタリイ神父が非常に有能なので、彼を学校長に任命し、彼に定員規定にもとづいた給与を支払うことを約束しました。この給与は、真に彼が自分の労働に対して得たものです。また、農業を実地に学ばせるために20名の少年をゲルマン神父に任せました。ゲルマン神父は彼らをエロヴォイ[スプルーース]島に連れて行き、そこで穀物の播種を試み、じゃがいもと野菜を栽培し、きのこやベリー類の保存食作り、漁網作り、魚の貯蔵方法などを教えます。冬には少年たちを学校へ戻し、彼らは学校で読み書き、教義問答を学ぶでしょう。私はこの方法で最初の農耕家族20世帯を会社のために作り出せるものと期待しております。また、少年たちが仕事に慣れ、会社にとって屈強で読み書きのできる耕作者になるものと考えております。さらに、私は彼ら[宣教師]に宣教師団の責務が何かを説明しました。

彼らがいまだアメリカ人の言葉を知らないので、祈りの言葉だけでなく説教自体もアメリカの言葉で書くぐらいにならないと、とたしなめました。通訳たちによる、ときにはまったく矛盾した翻訳の犠牲にならないよう、彼らに辞書の作成を委ねました。しかし、どのようなものでも新事業というのはとっつきにくいものなので、私自身もこの辞書の作成に取りかかりましたこの事業は大変な労力を要しましたが、その辞書を本状に添付いたします。アメリカ人の学校のためにこれを印刷、製本し、こちらへ送ってくださいますようお願いいたします***。この辞書がその目新しさゆえに祖国においても売り切れ、その売上の一部をたとえ少額であっても生徒のために使うことができると願っています。宣教師団が本物の適切な規律を持つに至ったことをお見とどけください。

生徒と関連して、彼らの給養方法について補足いたします。情け深いバラノフ氏は[会社の株式を]5株、学校のために寄付されました。会社から故イオアサフ神父に提供された15株も、この神意にかなう事業に振り向けることができるでしょう。そうすれば、生徒の持ち株は20株になります。ただ、株式からの配当は2年ごとに支払われるにもかかわらず、生徒の扶養料は毎年、必要となります。したがって、会社はこれらの株式を自己が保有する現金資産と交換し、株主の負担でこれらの株式を株主の共有財産とし、これらの株式からの配当を全株主に分配するように努めるべきです。(略)

現在、住民は物資が不足し、不満を抱いております。そうしたなか、アレクサンドル・アンドレヴィチ[・バラノフ]が不愉快な立場に置かれていることをお察し下さい。彼はあらゆる困難を克服することができ、彼自身が毛皮採集者全員の良き手本となっています。しかし、会社に勤務する士官たちからの度重なる侮辱のせいで、彼だけでなく、クスコフ氏、さらに彼らに続いて他の人びともこの地を去ることを固く決心しています。ここは現在、長が不在なのです。船の指揮者や造船作業の指揮者はみな、会社から独立した長として振る舞っています。このような状況で、何が期待できるでしょうか。支配人はこの地方の主として、彼に委ねられた数少ない人材を必要や能力に応じて配置してきましたので、どんなに経営上の必要に迫られたとしても、彼からは一人も提供させることはできません。不服従には即刻鞭打ちという脅しがあっても、また毛皮採集者がどんなに厳格な服従関係にあったとしても、支配人への敬意は日に日に失われています。その一方で、会社は自己資金で災いに金を支払い、会社の業務遂行のいたるところで不服従により作業が中断しており、取り返しのつかない損失を被っています。これらの状況がどのような結末を迎えるのか、私には見当もつきません。バラノフ氏は相変わらず熱意に満ちております。彼は

*** (レザーノフによる注) 会社への勤務を目的にアメリカに出発する者はみな、間違いなく本部でこれを1部入手するでしょう。現地住民のうち文字が読める者も、皆これを欲しがらるでしょう。シベリアの支部にはいつも予備があるようにする必要があります。

毎日のように退職を申し出ていますが、それにもかかわらず、もしも会社が彼に長としての真の権限を与え、彼の立場を強化し、当地の者がみな彼に服従しなければならないことを証明するために、くだらない内容の書簡を送りあうのをやめさせたならば、ひょっとして彼は引き続き留まるかもしれない、とはかない望みをいまだ持っております。しかしながら、会社は本件にかんして陛下に報告を行ない、陛下のご決定を仰がねばなりません。この報告書では、会社総本部が君主の大意に則ってアメリカ地方をしかるべく整備する事業に着手するにあたり、勤務員に酒を振舞う前に、知事の訓令にもとづいてアメリカ地方の支配人に対し長官と同等の指揮権をご承認なされることを求めている、と個人名には触れずに皇帝陛下に上奏すべきです。皇帝陛下のご承認がなければ、間違いなく誰も会社本部の指示に従わないでしょう。守備隊がいなければ、一層それが危ぶまれます。ウォッカの瓶が何事もしかるべく検討することを妨げるからです。いくら言葉盡したところで、荒れ狂った者に祖国の利益への敬意を抱かせることなどできるでしょうか。彼らが節度を欠いた生活を送っている証拠として、私は支配人に対し士官諸氏の掛け買いの記録を皆様に提出するよう命じました。ご覧のとおり、一年分の給料を飲んだ者がおります。カムチャツカ、オホーツク、カディヤクでの掛け買いの記録を提出するよう求めたとしても、やはりその品目がウォッカだけだということがわかるでしょう。このウォッカの嗜好をもとに、彼らの振る舞いについても正確に判断できるかと思えます。より確かな証拠をお求めでしょうか。全域から彼らの生活と滞在にかんする記録をお取り寄せ下さい。私の首をかけて申し上げますが、彼らがどこに逗留しようと、皆様がたの手代のところの窓が幾度となく割られております。ただし、私の報告を極秘扱いにさせていただきますようお願いいたします。規則と処罰を徹底していただきましたら、彼らは自分自身の責務をよりよく理解するでしょう。真に国益を思うあまり、今回もまた私は率直に過ぎるほど申し上げてしまいました。どうか皆様、彼らの掛け買いは物価高のせいだと思えないでください。当地では下層民にとって物価は高いですが、食料品はわずかとはいえオホーツクの価格よりも安いです。また食料品のかわりに魚と野鳥がただで入手でき、非常に貴重な代替物となり、物々交換できるのです。それに、人が生きていくために必要な食糧はそんなに多いでしょうか。高額な給与からわずかに支出されるのであれば、間違いなく半分は残るはずですが。しかしながら、毎日ウォッカを2、3本空けてしまうなら、どんな俸給も十分ではないでしょう。スーキン氏は今日までに3,000ルーブル以上のツケがありますが、その主な品目がウォッカであることを記録からご覧いただけますでしょう。9月2日に彼はすでに乗組員からはずされているので、私はこれ以上彼に掛け買いを許さないよう命じました。しかし、まだ会社に勤務している他の者たちには、それを認めています。さもなければ、彼らは横暴なので、船の指揮を拒否するでしょう。皆が勝手気ままに行動すると、新しい会社は混乱に陥るでしょう。混乱を

鎮める手段ありませんし、それができる人もいません。いくら皇帝陛下の私に対するご信頼を盾に私が納得させようとしても、彼らは、それはカムチャツカで決定されたことで、すべて内実のないことだ、と言うのです。私がどうかこうにか彼らと奮闘すると、いったんは聞き分けよくもなりますが、理性を麻痺させるもの[ウォッカ]が効きはじめると、彼らは容赦なく罵り、酔っ払いたちが喧嘩を始めて、あるときには死者を出したこともありました。私は夜中、助けに駆けつけました。私とバラノフはあやうく射殺されかけましたが、幸い、私たちは装填された短銃を奪い取りました。不服従という疫病がどれだけ遠くに及んでいるのか記述することは、まことに恥づかしく遺憾なことです。私はただ自分の目的を達成するために、どんなことにも耐える決意をしました。彼らの飲酒をやめさせる方法はないのですから、これ以上状況が悪化しないよう、すべてを耐え忍ばねばなりません。ここには指揮権もなにもあったものではありません。ただ飲んだくれの喧嘩っ早い毛皮採集者がいるだけです。幸い、彼らも少しは従順です。私は細心の注意を払ってこのことを観察しております。しかしながら、それでも私が乱暴狼藉の犠牲になったならば、善良な同胞の誰かが私を憐れんでくれるのでしょうか。このような状況で誰がここに留まりたいと思うのでしょうか。バラノフ氏についてだけ申し上げます。この地方が彼を失うことはわが社にとって損失であるだけでなく、祖国全体にとっても損失です。信じていただきたいのですが、彼は自分の命よりも名誉を大切にする男です。バラノフ氏を失うことによって、皆様は壮大な計画を実行に移す非常に重要な手段を失うことになります。彼の数々の業績が、この計画へと至る、かくも正確な道を切り拓いたのです。この立派な老人の名はアメリカ合衆国では知れわたっておりますが、残念ながら彼の同胞にはそれほど知られておりません。彼は他国民から称賛される一方で、自国民からは冷遇されています。彼が非常にうまく経営をとりしきっているにもかかわらずです。慈悲深くも皇帝陛下から六等文官の位を授けられたとき、彼は感謝の涙にくれました。遠方の地においてなされた偉業にもお心を配られている君主のありがたさを、彼は悟ったのです。当時、彼はカディヤク島にいましたが、シトハを失ったという知らせにひどく打ちひしがれていました。功名心が彼の力をみなぎらせました。彼は大声で叫びました。「いかん、私が褒賞をうけたというのにシトハは失われた。このまま生きてはいられない！ 出発しよう。死ぬか、それともシトカをわが庇護者たる陛下の版図に加えるかだ」。心から忠誠を尽くす一握りの人員を従えて、彼は目的地に急ぎましたが、秋が深まっていたので思うように先に進めませんでした。ヤクタットに到着すると、彼はクスコフ氏をそこに残し、彼が以前、着工した要塞の建設を完遂するように命じました。さらに彼はクスコフ氏に翌春までに船を2隻建造することを命令し、彼自身は同1803年秋にカディヤクにいる必要がありましたので、カディヤク島に帰還しました。彼はそこで越冬したのち、ヤクタットに戻りました。ヤクタットでは、彼の尊敬すべき同

僚が、熟練職人がいない中で建造したロスティスラフ号とエルマーク号を進水させました(エルマーク号は現在、サンドヴィッチ諸島に出航しました)。彼はただちにシトハの近海に赴き、再度これを奪還し、居留地を造り、すぐに新たな土地でボストン人との交易の礎を置き、配下の者たちに精をつけさせようと彼らと物物交換をして必要な物品をできるだけ手に入れました。これこそが真のロシア国人にふさわしい話ではありませんか。株主の皆様がこの偉業の価値を認めていながら、バラノフ氏に新たな褒賞を授けるよう皆が一体となって皇帝陛下に請願しないのならば、せめて彼をあらゆる誹謗から守るべきです。慈悲深き皆様、以下のことを心にお留め置きください。彼はもう60歳近くになります。この前のアメリカ人との戦闘で、彼は腕を撃ち抜かれ、今日、私の目の前で腕の骨を2本抜きました。また、古傷とこれまでの苦勞から彼は疲弊しており、その強靱な精神をもってしても、嘆きと病のために彼はしばしば絶望を感じております。栄誉こそが彼にふさわしく、事業で彼が収めた成功自体が彼にすでに褒美をもたらしておりますが、後世に非難されぬよう、同胞はせめて彼を公正に評価すべきです。皆様、私がバラノフを最良にしているとは思わないで下さい。けっして、そんなことはありません。私はこの地がどれほど困難な状態にあるのかこの目で確かめるとともに、彼がアメリカの領土を守り抜くためにどれほど大変な努力を払ってきたのか知りました。たしかに、彼の偉業の価値をどれだけ認識したとしても、それと同時に彼の欠点も知っています。それでも率直に申し上げますが、彼を今この地から離れさせたならば、わが社にとって大変苦しいことになるでしょう。彼は類まれなる知識を備えており、彼以上に毛皮採集者をうまくなだめることができる者はいないからです。もっとも、この地方が改造され、異なった計画を実行しなくてはならなくなった場合、このバラノフ氏は、その多大なる功績と人徳が過小評価されないにせよ、この地方の管理にはふさわしくないでしょう。第一に、彼は高齢で精根尽き果てているため、このような事業の責任を負うことはできないでしょう。第二に、名誉を重んじ、私欲を持たず、類まれな善良な人物であるにもかかわらず、彼は運命により乱暴な輩の群れの中に放り込まれ、彼らから愛情と服従を得なくてはならず、不承不承にも彼らの生活態度に合わせなければなりません。そうしているうちに、彼は自分の知性や感情とは相反するような考え方を自分自身に強要し、道徳とは相容れないような人びとの弱さに気を配らなくなってしまいました。そのような事情から、わが社が最重要の活動を開始するのであれば、別の考え方に合わせて人員を養成すべきです。私の計画の草案では長となるにふさわしい人物の特徴も示されております。すなわち、品行方正、偉業を遂行するにふさわしい能力、模範的な振る舞い、不屈の精神、忍耐力、先見の明、決断力、深い知識、これらが当地の支配人の称号に必須の特徴です。現地の情報にかんしては、この地方の管理機構が整備され次第、管理機構が各官吏に対して職務と会社の利益について説明しなければなりません。クスコフ氏も、会

社の現状からみて当地では不可欠な人物です。彼は能力があり、私欲がなく、進取の気性に富み、経験にもとづいた豊富な知識を有しており、大要役に立ちます。しかし、彼にはバラノフ氏のような燃える情熱、そして大規模な商業に必要な先見の明がありません。彼は仕事熱心で正直なので、類まれな執行者でありつづけるでしょう。ただ、彼には政治についての知識がないため、長にはなれません。しかしながら、彼を罵倒からは無理でも、せめて暴行から守るために、彼に八等文官の位を授けていただくよう請願をお願い申し上げます。彼は始終暴行にさらされています。皇帝陛下がご慈悲から彼にその位をお与えくださるものと信じております。きわめて公正であられる君主は、後世に輝かしい栄光を残す功績をこのように表彰する機会がもっと多くなることをもちろんお望みでしょう。私は、今は皇帝陛下に彼の功績についてご報告申し上げません。それについては、私の計画を上奏する際に申し上げたいと思います。もっとも、株主の皆様が、私が彼に対して表している格別の敬意をありのままに受け入れ、代表をつうじて請願してくださるのであれば、私がそれを行なうことはもはや必要ないでしょう。ところで、私は幾度となくバラノフ氏が悲しみの涙に暮れているのを見ました。皇帝陛下がこの地方を整備したいと思し召し、私を全権委任として派遣したことを承知している、当地の港で越冬していたボストン人船長[ヴリフ]と私のドクトル[ラングスドルフ]が、ここが酔っ払いの共和国だと気づいたからです。どうか、すぐに規律の確立に着手してください。けっして時期尚早ではありません。乱暴狼藉を抑える力がなければ、私たちは本当にアメリカ領を失うでしょう。ただ自分自身のために今一度お願いしたいのは、一切の調査を行わないということです。そうしていただければ、信じていただきたいのですが、個人的な不満はありません。彼らには温和な態度で接することで、自らの愚行をわからせるとよいでしょう。私の努力に対しては、もしもそれが何らかの報いに値するのであれば、私心なく祖国の利益を願う者がどれほど高潔でなくてはならないのか、この機会を用いて彼らに模範として示すという幸福を与えていただければと思います。(略)

恥ずかしい話ではありますが、士官との[雇用]契約条件に他人の所有物にはけっして手を触れぬこと、という特別条項を入れる必要があります。状況が深刻であるがゆえにそうせざるを得ません。当地では支配人は自分のために何も取り寄せることができません。支配人の兄弟がオホーツクから彼に、ブランディを9 ヴェドロとテーブルワインを3 ヴェドロ送ってよこしました。士官らはそれを飲み干してしまいました。コーフ[コッホ]氏は支配人が頼んでから3年経って、イギリス製の時計を2個送ってよこしました。彼らは包みを勝手に開け、自分たちに必要なものなので、金は払うと言って、憚ることなく身に着けています。バラノフ氏は、皆様を送った金時計の包みが開けられ、すでに使われていたことにとやかく言わず、受け取ったことを喜んでいました。つまり、彼らは何もかも神と自分たちのものだと思っているのです。この地に士官たちが現れて

からというもの、商人たちのうち、哀れで無力な者たちは金銭を支払っても何も受け取れず、ロシアから商品を取り寄せることをやめ、ボストンの商船長をつうじて3倍の値段で商品を手に入れようとしています。なんとまあ賞賛すべき状態でしょう！ 士官の1人などは、会社のウォッカを飲ませなかった手代のクリシヨフを鞭で打ち、ウォッカを飲んでしまいました。ここでは士官たちの暴力は途方もなくひどく、私はどうにかこうにか彼らを少しだけおとなしくさせました。(略)

皆様、乱文をお許しいただき、全体の利益に対する私の熱意だけを汲み取っていただきますよう、今一度お願い申し上げます。流暢な文体ではありませんが、私はただ、皆様にお知らせしなければならない事実を述べることだけに努めております。肉体的にも精神的にも多くの障害があるなかで、せめてそれができたならば大変うれしく思います。木の皮で葺いた屋根からの雨漏りや酷寒のために、仕事を中断せねばならないこと。今、始終私が罹っている病氣。コロシ人の脅威。貴族身分出身者が酔っ払い、助けを求めて大声をあげられること。私個人へのさまざまな中傷。どうか私の身にもなってください。2年間、自堕落な連中と航海を続けた結果、私はあらゆる不快な行為に慣れたので、アメリカ領と商業の再編に取り組むながらも、乱暴狼藉や悪罵に始終気を取られていることにそれほど落胆しておりません。強い悔しさから、どんなに自制しようと努めても、私にみなぎっている誠実な感情が筆からにじみ出ているかもしれません。ただ、私も人間ですから、弱さがないわけではありません。しかも、私は侮辱された人間であり、侮辱に打ちのめされた者のようにも思われます。このようなわけですので、運命によって私の事業をご審議なされることになった偉大な方々が、皇帝陛下ご自身がご採用になられた規則にもとづいてすべてを人道的に判断なされるのであれば、私をお許しになられるのではないかと期待しております。いずれにせよ、私は、ふたたびわが身を荒波に委ね、身のまわりの者を飢えから救うか、あるいは彼らとともに死ぬつもりです。昔の諺で「満腹の者には飢えた者の気持ちはわからない」と言うように、私はこの手紙を無駄に長々と書き綴ってしまったかもしれません。最後に、末筆ながらわが社に幸あらんことを心からお祈りいたします。真の敬意を永遠に抱き続けます。

慈悲深き皆様へ

恭順なる僕

ニコライ・レザーノフ

(5)Тихменев П. Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени, ч. II, прил., с. 197-222.

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

10. N.P.レザーノフから[露米会社取締役へ]の書簡

秘密

1806年2月15日

慈悲深き皆様

前回と同じ場所から追伸をお送りします。この書簡で皆様は当地で起きた一連の出来事をお知りになられるものと存じます。ユノナ号が11月12日に帰還しました。速やかに航海を遂行したフヴォストフ氏とダヴィドフ氏の熟練を褒めたたえなければなりません。聖エリザヴェータ号については、船がここの海峡からカディヤク島へと流れに乗って進み、そこで食糧を積み、ユノナ号よりも1週間早くこちらに向けて出航したとの連絡をわれわれは受けました。しかし、現在までのところ当地にはまだ到着しておらず、船の消息が不明なことにわれわれは悲嘆しております。聖アレクサンドル[・ネフスキー]号もカディヤク島に停泊し、こちらに向けて出航する準備をしておりましたが、どうやら出発が遅れた模様です。もし私がユノナ号を購入できなかったならば、500人以上のロシア人とアメリカ人がここで餓死するところでした。今や皆様もわれわれのすばらしい船がもっぱら破滅をもたらしていることにご同意していただけるものと思います。そればかりでなく、現在の会社本部にとって不利益なものである私の見解がすべて真実にもとづいていることを確信なされたことでしょう。不幸なことに、私の不安はきわめて早い時期に的中してしまいました。ユノナ号がカディヤク島から非常に忌まわしい知らせをもたらしたのです。パヴェル湾からトリヨフスヴァチーチェリスカヤ[三主教]湾へ入った連絡によると、ヤクタットでロシア人が女性や子どもを含む40人のロシア人全員を切り殺し、要塞を占領したそうです。この要塞には銅製の3フント砲が2台、鉄製の1フント砲が2台、装填装置付きの半フント一角砲が1台と砲弾一式、そして火薬が5ブード程ありました。これにより、チュガチ湾とキナイ湾の安全が脅かされることになりました。支配人バンネルはバイダルカで運ばれてきたこの知らせを受けると、すぐにカディヤク島の全集落に必要な防御策をとるよう伝え、チュガチ湾には10名をバイダーラで向かわせました。バンネルはできることはすべて行ないました。しかし、これが一体、増援部隊と呼べるのでしょうか。犠牲者の数を増やすにすぎないのではないのでしょうか。武装した者が数千人必要な事態に、おもちゃの兵隊ではどうにもなりません。皆様も、守備隊や良い船がなければ、皆様がたの施設はつねに危険にさらされることがお分かりになられたでしょう。

海賊のバーバーがまたカディヤク島にやって来ましたが、エリザヴェータ号とアレクサンドル号が停泊しているのを見ると、「バラノフに会いたいのでノヴォアルハンゲリスクに向かう」、と告げて去って行きました。しかし、こちらへはお出ましにはなりません。毛皮の採集に従事していたバイダルカが、湾の入口付近で間切り帆走をする三檣帆船を発見したので、われわれ

は賓客を迎える準備を始めましたが、船は接岸せずに南方へ去って行きました。

ユノナ号がパーヴェル湾に到着していなかったため、バンネルからの報告はユノナ号よりも早く出港したエリザヴェータ号で送られてきました。エリザヴェータ号が今どこにいるのか神のみぞ知るところです。乗組員や大砲のことも気がかりです。われわれが高い関心を持っている情報や、船に積まれた食糧が届かないのも残念です。ゲデオン神父も到着しておりません。おそらく、アレクサンドル号に乗船してこちらに向かっているものと思われませんが、ここに到着するのは私の出発後になるでしょう。もしもヤクタットについての噂が本当だとしたら、かの地の人びとという取り返しのつかない損失の他に、この秋にカディヤク島に帰ろうとしたおよそ 300 名のアメリカ人狩猟団も全滅したのではないかと心配しております。なぜなら、ヤクタットは彼らの旅程の近くにあったからです。わが社が今年、そしてこれから先も、毛皮を獲ることができなくなることは容易にありえます。ヤクタットがわれわれの支配下になれば、われわれの狩猟団はそこを通過してここへやってくることはできません。また、すでにご説明しましたように、カディヤク島では海獣が絶滅し、カディヤクの人びとは他に方法がないので、どんな危険を冒しても、また家族と離ればなれにならなくてはならないのに、新しい獲物を求めて喜んでここへやって来るのです。この人びとの不運な立場にも目を向けてください。私は希望者をここへ移住させたいと思っておりますが、われわれの力はまだ弱く、人数が少ないゆえに自分たちの身をかろうじて守っています。諸事情を皆様に隠しておくのは不適切と考えます。それらは、不幸が発生してから初めて皆様のお耳に入るにもかかわらず、事前にはけっして知らされないのです。とはいえ、私はこの先、目撃することをどのように説明すればよいのか悩みながらも、祖国の利益を望む者なら誰でも書かねばならないことを書くつもりです。包み隠さずに申し上げますと、この地方の再編にかんする私の指令は多くの点で当地の本部には気に入られていないかもしれません。なぜなら、それらの指令はすべての人びとに厳しい義務を課しているからです。このような義務なしには、整備が行き届いた組織は存在しえません。ただ、すべての反対の声が私の述べる真実に道を譲るまでは、自分の判断を押しつけようとは思いません。また、新たな事態に直面しても私が自分の意見を引っ込めなくても済み、それを根拠に私が真実を採用できるようになるまでは、自分の判断を押しつけようとは思いません。私が推測にもとづいて報告書を作成したわけではないということを信じてください。しかも、私が培った経験は、私には非常に高くつきました。私に対する強い要望がなかったならば、だれも私のような代償を支払ってまで経験を積むことに合意しないでしょう。本状に添付された特別書簡を読んでいただければ、私がこれ以外にどのような問題に悩まされてきたのかお分かりになるでしょう。私はこれまで平穏なひとときを過ごしてきたのでしょうか。そして今、過ごしているのでしょうか。しかも、私は自らの病や不慣れな気候と

も闘わなければなりません。ラッコの毛皮のことで頭がいっぱいの者たちは、この気候から命を守るために必要な予防措置をとりませんでした。そのため、人びとは土砂降りの中を昼夜、不可欠な作業のために使われ、湿って腐った服を着て壊血病に罹って、床に伏せるようになり、病人の数は日に日に増えていきました。私は彼らに穀物と糖蜜を与え、松カサを煮てビールを作るよう命じました。このビールは壊血病の解毒薬になり、ここの者はみなこれを飲んでいました。神のご加護により、重病のロシア人 40 人のうち死亡したのは 3 人とどまり*、他の者は回復しはじめております。しかし、自信を持ってみな総じて健康であるとは言えません。他の者たちも立っていることはできず、やつれて見るかげもありません。われわれは病人に対してのみ穀物を週 1 人あたり 3 フント支給しました。他の者は干魚を食べ、毎週日曜日に全員のために糖蜜入りの粥を煮て、さかづき一杯分のウォッカを支給しました。支給を抑えたことで、われわれは今年の航海のために必要な食糧をかるうじて確保することができました。干魚の備蓄が乏しかったので、そうしなければ船を一隻も出せなかったでしょう。ここに食糧がない状態で留まるのも不愉快です。11 月末にはもう漁が終わり、絶え間なく続いた大嵐のために、長い間、海獣も捕獲できませんでした。満月の時期に、われわれは浅瀬の貝をとって元気を取り戻すことができました。これらはこの時期、たいへん栄養があるのです。また別の時期にはワシやカラスを撃ちました。つまり、獲れるものは何でも獲って食べたのです。たまに、モンゴウイカや名前の分からない魚が獲れ、われわれのごちそうになりました。1 月からは晴天が続き、神のご加護により、フィリアザラシとトドが現れはじめました。これらの海獣は今日までわれわれの主要な食糧になっております。というのは、私がユノナ号とともに購入した塩漬け肉は海洋遠征のために取っておくように命じたからです。たまにオヒョウが獲れたり、カモメがニシンの到来を知らせたりすることもあります。しかし残念なことに、十分な量の塩がありません。人手が多くないので、自分たちで海水を煮詰めて必要最小限作るのがやっとです。疲れ果てた人びとには穀物が必要なのですが、手元にはありません。ニシンが去ってしまった後は、またフィリアザラシとトドだけをあてにすることになります。しかし、海獣を殺しても、天候の事情によりすぐには岩場から動かせず、腐敗してからようやく運び出すこともあります。それらはもはや体には良くありませんが、それでも他には何もないので、この蓄えに喜んでおります。以上が、われわれが置かれている状況の記述です。

この地方に食糧を供給すべく、私はカリフォルニアに行かなくてはなりません。私は今月 20 日前後に出航したいと考えております。春分の頃は嵐に遭う恐れがありますが、このままここに留まっていると飢えの恐れがあります。きわめて危機的な状況にありますので、私はここでの生活

* (レザーノフによる注) その他に、まったく回復の見込みのない者が 4 人おります。(略)

を守るために、航海に身を捧げることを決意いたしました。ユノナ号が帰還するまで、私は出航できませんでした。私はエリザヴェータ号とアレクサンドル号が人と食糧を乗せてカディヤク島から来るのを待っておりましたが、今日まで両船は到着しなかったからです。最低限ではありませんが、ユノナ号に配属されている乗組員 40 名のうちの数人が作業に従事し、単檣帆船の建造を手伝ってくれました。ダヴィドフ氏は船の装備を整えてくれました。ダヴィドフ氏の監督がなければ、この業務はこれほどうまくいかなかったでしょう。あとはわれわれのアヴォシ号[単檣帆船]が 5 月に進水するのを願っております。ここを出発したのち、海岸に向かって吹く風に乗ることができれば、ラッコ皮を交易する機会を利用するため、つまり一度の航海で交易も行なうためにカイガン島(プリンス・オブ・ウェールズ島)に立ち寄るか、シャーロット諸島の近くを航行するつもりです。しかし、時間的にも状況的にもカリフォルニアへ急がなければならないので、もし機会があれば私はそのようにしたいと考えているにすぎません。神のご加護があればこちらへは 5 月中に戻るつもりです。そしてすぐに単檣帆船を伴って、ズヴェズドチョトフに会いにアレクサンドル島[ウルップ島]へ出発します。この島からアヴォシ号で皆様に報告書を送ります。一方、ユノナ号はノヴォアルハンゲリスクへ戻り、越冬のためふたたびカリフォルニアに向います。私はカリフォルニアに滞在し、それからイスパニア船でマニラまで行き、そこからバタヴィア[ジャカルタ]とベンガルへ向かいます。そしてオホーツク経由でのインドとの貿易を初めて試みたいと思います。しかしながら、これも当地の状況次第です。キナイ湾とチュガチ湾が不幸に見舞われた場合(神よ、守りたまえ!)、私の計画は全体的な変更を余儀なくされるでしょう。ところで、皆様がまったくご存じない、アレクサンドル島での事件についてお知らせいたします。私は当地にて、アレクサンドル島の部隊にいた毛皮採集者から情報を集めました。以下がその情報です。

この島の地誌は以下のとおりです。(略)

第 19 島[エトロフ島]の毛深いクリル人はわが国の麻布、そしてとくにチェルカスク煙草と喜んで交換を行ないます。チェルカスク煙草の葉 3 枚に対し釜や穀物などの品物をよこします。また、針も需要があり、やはり進んで受け取っています。これらの小物をわが国のクリル人が彼らに供給しております。わが国のクリル人はヤサク税を徴収しに来るカムチャツカの執行者 *ispravnik* からこれらの品物を受け取っています。(略)彼らはあらかじめクリル人をライフル銃や火薬で脅かしておき、船でやって来ると、この貧しい人びとの財産をすべて取り上げています。私はこのことについてカムチャツカの長官に警告しましたが、陛下にもこの職権乱用について私の総合計画書の中で必ずご報告申し上げるつもりです。ヤサク税の総収入は年 300 ルーブル**にも満たない

** (レザーノフによる注) 遠征では国庫収入が非常に少なく、かつ不安定であることが判明しました。クリル人がヤサク税の徴収から逃れた年には、収入がゼロになるからです。

程度ですが、執行者たちは(略)貧しいクリル人を零落させています。政府がクリルを手なづけ、蟻塚の蟻のような多数の日本人たちがいるすぐそばで彼らを臣民にし、移住を推奨し、この地方の力を増強しなければならないときだというのに、そうしているのです。しかし、クリル列島は[露米]会社に属する土地であり、当然、ここではヤサク税を徴収すべきではありません。国庫はすでに交易からの税金で収入を得ているからです。チュクチ人は過大なヤサク税により圧迫されておりましたが、皇帝陛下がクリル人に課しているような税を免除なされた結果、安心して交易のためにやって来るようになり、現在では、以前よりも国は多くの利益を得ています。権力の濫用も起きていません。チュクチ人自身も穏和になり、彼らの乱暴な性格も少しずつ改善されてきています。(略)いつか私が彼らや日本人たちの植民地の長官に任命されることがあれば、計画書の最初に、彼らに信仰の自由を認め、彼らが異教の寺院を建立することにも協力する旨を明記するでしょう。ただ、私が皇帝陛下に自らの業績を報告できる間は、会社も独自にこの問題に取り組み、私の報告にもとづいて皇帝陛下に上奏することもできるでしょう。まったく間違った方向に進んでいることを修正するというのであれば、できるかぎり早く着手することに越したことはないでしょう。皆様、私ならば、すぐにでもメードヌイ島から人員を移動させてクリル列島の部隊を増強いたします。メードヌイ島の倉庫には何十万枚ものオットセイ皮が腐っているというのに、彼らは大量のオットセイを無意味に殺し始めています。メードヌイ島は確実な毛皮供給地であるようにしていかなくてはなりません。広東でオットセイ皮を交易する道が開かれ、これまでに採集された毛皮をすべて売りさばくことができるようになれば、またいつでもオットセイを狩ることができるでしょう。しかし、このような人員の配置ではセーヴェルヌイエ諸島と同様、メードヌイ島でも獲物を獲り尽してしまい、わずかな利益も得ることができなくなるでしょう。ここで意見を申し上げさせていただくならば、ほかならぬ毛皮事業では獲物となる海獣が完全に絶滅してしまわないようにするだけでなく、ふたたびそれが繁殖するように経営方針を立てることが必要です。皆様が船を手に入れたら、セーヴェルヌイエ諸島からシュヤフ島[アフォグナク島の北にある小島]などの島にホッキョクギツネを移して、新たな備蓄にすることができます。それらの場所では、10年もすればギツネはかなりの数に増えるにちがいありません。たとえば、ウカマク島では犬のつがいが連れて来られて野生化し、それが現在、数百頭の群れとなって駆け回っております。いずれこの犬たちの毛皮の採集もできるでしょう。クリル列島へはアトハ部隊の人員を移すよう助言いたします。この部隊にはズヴェズドチョトフとともにクリル列島で3年間を過ごした者が5名おります。この5名に加え、ラッコ猟のためのバイダルカと40名ほどのアレウト人を提供すれば、彼らは他の者とは比較にならないほど大きな利益をもたらすでしょう。アレウト人も大いに喜ぶでしょう。会社にとってもこの上なく有利です。ただし、船の数が増えたら、アン

ドレヤノフ諸島とクリル列島をともにアメリカ本部の管下に入れる必要があるでしょう。同様の商業活動を行っている、全体の中の一部として、中央からの全般的な指令と個別の指令がアメリカ本部から通知されなくてはなりません。さもなければ、秩序は望めません。総本部がサンクトペテルブルグからこの地域を統轄するのは不都合であり、不可能です。そうなったときには、この地域における個別の事態に、新たな職権濫用が忍び込む契機がもたらされるのが関の山です。この職権濫用が不愉快な事件をもたらすのです。ここから指示を送る方がずっと簡単です。航路上のどこにいても、どの船も当地の長の命令書を運び、強化のために必要なすべての食糧を列島の部隊に供給し、かつ総本部へ事業の成果を報告できるからです。つぎにズヴェズドチョトフの到着後にアレクサンドル島で起こった事件について申し上げます。この件について私は長い間調査し、ようやくアメリカで正確な情報を得ることができました。

1795年、先導者ズヴェズドチョトフの指揮下、毛皮採集者31人と入植者4人、女性3人、アレウト人2人からなるクリル部隊が、国有船の聖アレクセイ号でアレクサンドル島に向けて出航し、同年、無事に現地に到着しました。彼らは、かつて商人レベジェフ＝ラストチキンの船が越冬し、東からの暴風により岸に乗り上げた湾の南側に宿営しました。というのは、この湾は東風からまったく守られていなかったからです。聖アレクセイ号もこの東風の被害を受け、異常な上げ潮のときに小川の上流へ打ちあげられてしまいました。春になってそこからようやく船を出すことができました。到着後、彼らはこの湾では住民を見かけませんでしたが、この島の3か所にクリル人たちが居住していました。第一の集落にはユルタがおよそ15棟、第二の集落には2棟、第三の集落には3棟ありました。あるとき、住民たちはアトキスのトヨンとともにやってきました。この者は名前から推察すると、マトマイ島の東側にあるアトキスからの移住者か、あるいはアトキスの住民と商いをしている者です。ただ、彼は第19島の毛深人たちにたいへん敬われております。クリル人は毛深人と交流しており、日本人から物品や衣服を入手しています。トヨンは湾へ挨拶にやってきました。彼は自分たちが到着を待ちのぞんでいた故グリゴリー・イヴァノヴィチ・シェレホフへの贈り物として、若いラッコの皮とキツネの毛皮を持参していました。しかし、毛皮採集者たちの話によると、ズヴェズドチョトフはこれを非常に尊大な態度で受け取ったそうです。彼らに対するこの冷淡な態度は友好関係を一瞬で断ち切ってしまっただけでなく、クリル人たちを失望させ、彼らはロシア人よりも親切で善良な日本人と取引をした方がいいと言い残して、第19島へ去ってしまったそうです。とはいえ、この最初で最後の訪問の際、トヨンは、彼自身が来られなくても春には必ず毛皮を送ると約束して、黒っぽい色の中国製絹織物や南京木綿、さまざまな小物を300ルーブルほど、ツケで買いました。彼は翌年、約束しただけの枚数のラッコとキツネの毛皮、穀物2袋、酒の小樽を一つ送り届けてその約束を果たしました。しかし、ト

ヨン自身とクリル人たちは二度と現れませんでした。

亡きグリゴリー・イヴァノヴィチがズヴェズドチョトフを登用したのは、ズヴェズドチョトフがクリル列島を隅々までよく知り、何度もそこを訪問し、商人レベジェフ＝ラストチキンにより毛皮採集を目的に派遣されていたからです。しかし、グリゴリー・イヴァノヴィチはズヴェズドチョトフが品行方正な人間かどうかについては知りませんでした。そもそも、短時間で人物を見極めることなどできるでしょうか？ 民の撫柔にかんする故人の命令がたとえどんなに厳格で十分な内容だったとしても、遂行者はそれに応えて行動しようとせず、酒に溺れて放埒な生活を送り、ついにはこの者に委ねられている指揮権を濫用して、無実の毛皮採集者を処罰するまでになりました。航海士のオレーソフ以外に彼を止めた者は誰もいませんでした。オレーソフは止めようとしたのですが、事態を解決できるだけの度胸がなく、ズヴェズドチョトフに弱みを握られて逮捕され、鞭で打たれたうえにオホーツクへ送られてしまいました。オホーツクに着いてから、オレーソフは病気にかかって死亡し、彼の死とともにそれ以上の取調べは行なわれませんでした。越冬後、ズヴェズドチョトフはライ麦と小麦、燕麥、亜麻の播種の試みを開始しました。穀物は出穂しましたが、実は熟しませんでした。エンドウはきわめて細いさやしなかつけず、実も大きくなりませんでした。亜麻は大収穫でした。農業が労多くて益なしということがわかり、そのうえ持参していたウオッカが底をついたので、ズヴェズドチョトフは耕作をやめて穀物から蒸留酒を造り始めました。部隊でスターロスタ [長]を務めていたエイセイスク町人イヴァン・スヴェシュニコフがこれに反対すると、ズヴェズドチョトフは彼に言いがかりをつけ、鞭で打ち死なせてしまいました。この行為は当然ながら人びとを憤激させました。彼らは会議を開いてズヴェズドチョトフを指揮者から罷免し、コシエチキンを先導者に選出しました。そしてズヴェズドチョトフを縛り、第17島[チルポイ島]へ送りました。彼らが作成したズヴェズドチョトフの行為にかんする報告書を携えて、クリル人がズヴェズドチョトフをカムチャツカへ送り届けることになりました。その一方で、ズヴェズドチョトフには旅に必要な物資が与えられました。クリル列島の全島に精通していたズヴェズドチョトフは、さまざまな小さな装飾品で島民をそそのかすことに成功し、彼らとともにアレクサンドル島へ戻ってくると、自分を解任した首謀者としてコシエチキンとコリュコフ、スカチコフ、スタソフに枷をはめ、カムチャツカへ追放しました。このうち3人がカムチャツカで死亡しましたが、スタソフは現在、アメリカにいます。その後、ズヴェズドチョトフはもはや底なしに酒を飲むようになりました。彼はクリル人を介して日本の酒を手に入れ、配下の者たち全員に厳しい態度を取り、暴力で脅して、彼らに漁やサラナ[ユリ]の根の採集、フィリアザラシやトドの捕獲などを分担させました。ついには15人の部下たちに対し、カムチャツカ経由でロシアへ戻り、増援部隊の派遣、そしてラッコ皮の採集を目的とするアレウト人とバ

イダーラの発送を請願すべしと言いつけました。そして、そのために自分たちでバイダーラを造るよう彼らに命じ、彼らを島の北側へ送り出して流木を集めさせました。彼らは命令に従い、1797年から1798年の冬をそこで越し、船を完成させると、春にはすぐに湾へ戻ってきました。彼らが湾へ入ると、ズヴェズドチョトフは武装して岸に現れ、彼らに向かって、上陸しようとするならば撃つぞと脅し、別の入り江で夜を過ごすことを許可しました。そして、荷物を取りに来るのも多くて2、3人ずつとし、翌日には必ず出航するように命じました。彼らはやむを得ずそれに従い、飢えに苦しみながらクリル列島を遍歴し、第1島[シュムシュ島]で越冬中のバンネル氏とその船を発見しました。彼らはバンネル氏に合流し、一緒にアメリカに向けて出発しました。ズヴェズドチョトフはアレクサンドル島に12人の男性と3人の女性とともに残りました。商品からなる高価な所有物以外に、ズヴェズドチョトフには2台の銅製3フント砲、彼とともに送られた人員と人数分の銃、ライフル銃、短銃、サーベル、火薬2缶と十分な数の弾丸がありました。スヴェシュニコフを鞭で打ち殺した罪を犯したので、ズヴェズドチョトフは恩赦があるまで島に残ることに決めましたが、酔っ払うと二度と帰らないとも言っていました。彼のところに残ったのは若く、経験の少ない者たちで、ズヴェズドチョトフはこの者たちもできるかぎり道徳的に墮落させようとしていました。以上がクリル部隊の状態について私が知りえたすべてです。マトマイの日本人の話では、アレクサンドル島にはロシア人がまったくいない、ということですが、わが国の者たちはかなりの武器をもっているの、それは真実ではないと思います。日本人たちはこれを排除できないと思います。むしろ、ズヴェズドチョトフは日本人と交易をしていて、彼自身が日本人を介してそのような噂を流したのではないかと思います。しかしながら、ズヴェズドチョトフには島を離れて他に行く場所はありません。できるのであれば、私自身が彼のもとに立ち寄ってみたいと思っております。

すでに書きましたように、湾は東に開いておりますが、さらにつけ加えますと、海岸一帯は湿原になっており、とくに右側は湾口から湿原だそうです。(略)

クリル人は彼らに対して、1797年にどこかヨーロッパの三檣帆船が湾の水路測量作業を行なったことを話しました。しかし、三檣帆船は湾には入らず、指揮者たちがボートでやって来て、測量したそうです。おそらく、バタヴィアの東インド会社が、自分たちの発見にもとづきサハリンとクリル列島南部に対して何らかの権利を持っているがゆえに、当時、ラクスマンの遠征後、まもなくロシアによって日本との交易が開始されようとしているとの情報を得て、適当な湾を見つけるために船を送ったのでしょう。また、フランス革命の勃発により、会社がさらなる企ての着手を中断させられていたのかもしれませんが。東インド会社以外の船は考えられません。自信を持って申し上げますが、われわれが急いで先手を打たなければ、いつの日か間違いなく、われわれ

にとってバタヴィア人がカムチャツカの近い隣人になってしまうでしょう。われわれもできるだけ毅然とした態度を取り、せめてわれわれの目の前で勝手に探索を行なわないようにすべき時だと思えます。新帝国[フランス帝国]は国内問題を解決して、バタヴィア人の日本交易事業に必ず参加するでしょうし、そのときは間違いなくラペルーズの旅行を宣伝するでしょう。ロシアがこのきわめて有利な時期を逃し、どこかの強国に植民を許し、ロシアにとって壮大かつ利益がきわめて大きな交易への道が遮られるとしたら残念です。願わくは、彼らが武力を用いてわれわれの先手をとることはあってほしくないものです。そのためにも時機を逃さず、植民の計画を立て、あらゆる手段を講じてその実現に向けて取り組む必要があります。このことについて私はカムチャツカから手紙を書きましたが、露米会社はこれを上首尾に遂行できるでしょう。露米会社には政府に本件を上申し、必要な援助を求める義務があります。また露米会社は国家の重大な案件として、どの会社もきわめて重大な案件の遂行を達成する際にそうしているように、命令を受けたまさにそのときから完了まで、本件を極秘で進めなくてはなりません。上述の湾の測量調査が一つのよい例です。この調査は 1797 年に行われましたが、誰が行ったのか未だに明らかではありません。これにつけ加えますと、かのベニョフスキーがカムチャツカ出航後、この島に立ち寄りしました。ベニョフスキーと航海を共にしていた航海士のボチャロフとイズマイロフはバラノフと知り合いで、彼らはバラノフに、この湾の立地が優れていることを主張しました。われわれにとってこれ以上よいことがあるでしょうか？ 私がかつて前にこの湾について知っていたならば、サハリンでそれを探す必要はなかったでしょう。ラペルーズの記録では島の西岸に湾はありません。また、われわれは東岸をペイシェンス岬^{***}まで回りましたが、やはり見つかりませんでした。また、[ウルップ島の湾が]もっと北に向いていたならば、第 16 島[シムシル島]の湾のような便利な湾にはならなかったでしょう。5 月 14 日、われわれはサハリン海がオホーツクからの流氷で覆われているのを見ましたが、クリル列島の湾が流氷に閉ざされることはないからです。これらすべての事情から、今年、私自身がそこに必ず行かなくてはなりません。実を申し上げますと、この湾について語られている利点をこの目で見るができるならば、私の人生においてこれ以上の喜びはありません。それほどこの湾には価値があると強く感じているのです！

前回の書簡で、私は当地の重要性、壮大な商業計画、そして計画を確実に達成する方法について詳細を書き綴りました。特別な論文としてそれらを体系的に叙述する時間は、私にはありませんでした。私がつねに従事していた、これらの書簡の執筆や地方の管理がそれを証明しています。とはいえ、国益とこのアメリカの幸福のために言及すべきことはすべて急ぎ述べました。したがって、さまざまなテーマにかんして私が着想を得れば得るほど、当然それがあちこちの箇所に散

^{***} (レザーノフによる注) テルベニエ岬。

らばっているのにお気づきになられるかと思えます。もつとも、それらはそちらで整理し直すことができるでしょう。まったく同じ理由から、手紙の中にはときには細事も入り込んでいます。それらは、私の予測よりも早く、刻一刻と深刻さを増しております。祖国の利益を強く望むがゆえに、とうとう私は祖国のために自らの自尊心を捨て、陛下に対して提出の義務を負っている報告書の中では自制することを決意いたしました。それとともに、私は皆様にさまざまな定員計画や見積もりを送るよう努めました。それはひとえに、皆様がそれらを事業の第一歩とし、時間を無駄にしないようにするためです。実際にとりまとめる際に内容となるのは、これらの定員計画や見積もりだからです。もしかすると、今、私が算定した支出を見て、皆様は躊躇されるかもしれません。しかしそれは、私が最初の書簡の中で証明したように僅かな金額です。当地ではなおさらそうです。皆様、私は、利益を獲得し、国家の構想を発展させるための正当な手段が存在する場所では、金銭の問題は後列に置かれ、それらを実現するための重荷とはならない手段は、知恵によって必ず見つかるものだと考える主義です。(略)

陛下は、われわれだけでなくすべての隣国が享受している世界の富を、臣民や後世にお恵みになられることを望んでおられます。この陛下のご意志を遂行できれば、私は十分に幸せです。当地の民の運命を改善するという私の考えで陛下を満足させることができれば、なお一層幸福です。当地の事業は広範な領域に及ぶため、数世紀かかっても成就できません。それゆえ、皆様も同意見だと思いますが、この私の望みが実現したとき、私の功名心は完全に満たされるのです。皆様、われわれの領土が南方へと拡張するまで、ノヴォアルハンゲリスク港が会社の管下にある土地の首都、そして総責任者の居住地となるでしょう。われわれがコロンビア河畔に入植するチャンスを得たときには、この入植地が拠点となるでしょう。ここからわれわれは非常に容易にカイガヌイ島[カイガン島](プリンス・オブ・ウェールズ島)を占領し、この島のシャーロット諸島の対岸部分に定住し、新しい造船所を建設できるでしょう。かの地は毛皮採集の対象が豊富で、木材は当地よりもはるかに良質です。また良い湾があり、気候も緯度が2度南になります。カイガヌイ人は、彼らの捕虜になったことがあるカディヤク人から私がたまたま聞いた話では、バラノフの名前を聞いただけで震え上がり、大砲は持っていないそうです。しかし、第一信でお伝えしましたとおり、シャーロット諸島には要塞が築かれ、大砲が設置されています。とはいえ、それらのことはわれわれにとって重要なことではありません。シャーロット諸島の住民は自分たちの毛皮をカイガヌイ島へ運び込むからです。というのは、アメリカ合衆国の船はシャーロット諸島に立ち寄ろうとはせず、住民が合衆国の者たちにかなり前に撫柔されているカイガヌイ島に寄港し、そこから海峡中を動き回っています。島を占領したときには、この海峡もわれわれの船で埋め尽くされるでしょう。コロンビア河畔への入植が成功したあかつきには、そこからフアン・ド・フカ

Juan de Fuca 海峡にも船を出すことができます。そうなれば、われわれはラッコの毛皮事業を完全に独占できるでしょう。これを実現させるためには、当地ですぐにブリッグ型軍用船を建造し、この商業からボストン人たちを永久に締め出し、他方ではコロンビア河畔に集落を形成する必要があります。われわれはそこから少しずつ勢力を南方へ拡大し、カリフォルニアとの境界になっているサンフランシスコ港まで到達することができるでしょう。この事業の第一歩を踏み出す手段が与えられたならば、さまざまな場所から住民をコロンビア河畔へ入植させることができ、と僭越ながら申し上げます。そして 10 年間で勢力を拡大し、ヨーロッパの政治情勢が幸運にもほんの少しでもわが国にとって有利になったならば、カリフォルニア湾岸をロシア領に加えることもできるでしょう****。

イスパニア人[スペイン人]はこの地方ではきわめて力が弱く、1798 年にイスパニア王室に対して宣戦が布告されたとき、もしもわが社が事業に見合った軍事力を備えていたならば、カリフォルニアの一部、北緯 34 度のサンタ・バーバラ公使館*****まで容易に占拠し、この一片の土地を永遠に守り抜くことができただけでしょう。彼らは他でもない自然条件のために、陸路ではメキシコからどんな援軍も送ることができないからです。この土地が豊かな実りをもたらすにもかかわらず、イスパニア人はこの土地を少しも利用せず、ただ自分たちの国境線をより遠方に引くために少し北へ移動したにすぎません。しかし、運命によってまだ覆い隠されている未来についてはこれ以上申し上げず、現在のことについてお話しすることにします。

当地においてわれわれが造船所を強化し、船を増やせば、われわれが採集する毛皮の数もおの

**** (レザーノフによる注) イスパニア人は海洋大国の野心的事業に道筋をつけたにすぎない。イスパニア人は商業的利益を貪欲に追求し、ニュー・アルピオンの肥沃な土壌によってもたらされる利益を得ようと努めるだろう。諸施設がお互いに非常に離れた距離にあり、しかも守りが非常に手薄な状態で組織されており、本来のこの土地への入植計画が完全になおざりにされてしまったように見える。彼らは自分たちに属しているニュー・イスパニアの価値ある領土に対して防御を強化するどころか、他所者に[境界を越えて入り込むという]抗えない誘惑を与えてしまった(『ヴァンクーヴァー旅行記』Voyage de Vancouver からの引用)。[編訳者補注：訳出にあたり、Vancouver, George, *A Voyage of Discovery to the North Pacific Ocean and Round the World, 1791-1795: With an Introduction and Appendices*, edited by W. Kaye Lamb, Hakluyt Society, 1984, vol. 3, p. 1134 を参照した]。

***** (レザーノフによる注) サンタ・バーバラは重要な哨所である。停泊地の北西側の丘に防御目的で砦を築いたならば、守りがとても固くなっただろう。しかし、いまだに彼らはここに 2 門の 9 ポンド砲しか置いていない。この大砲は要 塞 への入口の前に据えつけられている。この要塞はこの高台から 1 マイル程離れた谷底にある。これらの施設が外国の侵入者に対する防御として建てられたのであれば、それはまったく間違った判断である。[北緯 30 度の位置にあるニュー・アルピオンの]南端では太平洋の水に洗われた海岸が、カリフォルニア湾のほぼ奥にある海岸からせいぜい 30 リーグの距離にある。イスパニア君主からニュー・アルピオンの奪取を決意したどこかの大国に、この通路が一度、突破されたら、どんな陸上部隊が施設を救援しようとしても、あるいは敵を苦しめようとしても、それは不可能だろう。それは以下の理由による(略)(Voyage de Vancouver, Tome 4, p. 158)[編訳者補注：Vancouver, *A Voyage of Discovery*, pp. 1133-1134 を参照]。激しく攻撃されたならば、スペイン人は降伏するより他はないだろう。北西アメリカの商業が一層発展すれば、そのような事件が発生しないわけではまったくないだろう。将来、この商業に期待される利点が、大規模施設の建設構想を後押ししている(Même Voyage, p. 160) [編訳者補注：Vancouver, *A Voyage of Discovery*, p. 1135 を参照]。

ずと増えるでしょう。ボストン人たちはその分、アメリカ人との毛皮交易の手段を失い、したがってそれからの利益を失うでしょう。そうなれば、われわれにとって有害な存在だった彼らは、われわれと確固たる交易関係を築き、交易をつうじてわが国の植民地を強化する新たな手段を提供するはずです。現在、ボストン人たちはアメリカの海岸でラシャ、銃、火薬、鋼・鉄製品、厚手の粗い帆布など、イギリス人から購入した商品の交易を行っています。彼らには自前の織物がなく、当地の海岸へやってくる[イギリス人の商品と]ラッコの毛皮を交換します。彼らは中国製品からの儲けを当て込んで、ラッコにほぼ正価を支払います。そして、積荷取引の成否に応じて1年間か2年間この地を回ってから広東へ出発し、そこで毛皮を南京木綿、茶、そしてアメリカ合衆国で需要のあるその他の商品に交換し、その後、その荷を積んでボストンへ戻ってくるのです。彼らはイギリスの商品を積んで、自分たちの故郷から中国に直行できません。彼らがそれらを売却したとしても、イギリス人が売却して得るだけの利益を出すことができないからです。ゆえに、利益を得るために、彼らは自分たちにとって非常に面倒な手段をとらざるを得ないのです。しかし、わが社が毛皮事業を強化した場合、わが社の交易は広東でも増加するでしょう。わが社は船を世界一周で派遣せずとも、広東で交易を行ない、遠洋航海や海賊の危険を避けるために、商品の一部をオホーツク経由でシベリアへ運び、残りをこのノヴォアルハンゲリスクへ送ることができます。ノヴォアルハンゲリスクは商品の主要集積地となり、ボストン人たちはよるこんでここに買いつけにやってくるでしょう。彼らにとって、この地で商品を手に入れることが比べようもないほど有利だからです。彼らはほぼ1年で往復が可能となり、当地の海峡で未開人に襲撃されるというような危険に身をさらす必要がなくなるでしょう。くわえて、ボストン人たちは航海の際、われわれのもとに穀物の粉やひき割り、バター、燈明用オリーブ油、脂、酢、樹脂、そして自分たちの故郷で生産し、彼らにとって売却が困難なその他の物品を運ぶようになるでしょう。もっぱら船の積荷を満たすために必要な大量の外国の商品で大きな負債を抱えずとも、彼らはラム酒や砂糖、糖蜜、コーヒー、そして西インド諸島に近いために彼らが非常に安価で仕入れられるものも運んで来るでしょう。わが社は自社の施設を維持するためにいたるところに倉庫を設置し、余剰となった物資をシベリアやカムチャツカに供給するでしょう。ボストンのスウィフト船長は、すでにこの交易の最初の試みを行なうことを約束しました。バラノフ氏はこの春、スウィフト船長の船が来るのを待っているところです。これらの事情だけを見ても、当地ではたして交易が発展するだろうか、またわずかな資金で、しかも短い期間でこの港が事業においてその名にふさわしいもの¹⁹になるだろうか、と皆様が疑念を抱くには及びません。

¹⁹【編訳者補注：ノヴォアルハンゲリスクの名祖となったアルハンゲリスクは、18世紀初頭までロシア有数の商業港だった】

イスパニア領につきましては、イスパニア宮廷に請願し、わが国の船が穀物やさまざまな食料品の買いつけのためにカリフォルニアやチリ、フィリピン諸島に寄港する許可を得る必要があります。もしかすると、イスパニアの統治機関が疑いを抱き、交易を許可しないかもしれません。しかし彼らは、シベリア経由で本物のピアストル通貨を現金で輸送するのは大変困難で費用もかかるために、われわれが現金で支払うことができないと信じているものと推測されます。自分たちの製品のうち、行き先のない余剰物を交換して臣民が豊かになるのであれば、シベリアにある工場の製品、たとえばラシャや麻布、鉄製品などは彼らにとってはかなり有用になりえるでしょう。これがうまくいかなくても、両国の宮廷の友好関係にもとづき、東シベリアへの食糧支援を彼らは拒否できないでしょう。その場合、彼らは手形の受け取りに同意するはずで、これはわれわれにとってかなり有利です。というのは、手形での決済にくわえ、彼らのもとへ運ばれる商品が彼らのもとでいつでもピアストルで売却でき、これによりわが国の製品の物流はまったく滞らないからです。さる秋、ポストンのヴリフ[ウルフ]船長はチリに立ち寄りしました。イスパニア人はヴリフ船長のヴァリパレズ[バルパライソ]入港を許可しませんでした。船長は別の港、コキンボ港へ強引に入港しました。入港を拒否されたとき、ヴリフ船長は船を修理する必要があり、邪魔をするならば砲撃する、とイスパニア人たちに通告しました。守りの手薄さを自覚していたイスパニア人たちはすぐに威嚇を止め、積荷の中から何か商品を買ってほしいと求めてきました。しかし、ヴリフ船長はラッコ毛皮との交換に行かなければならず、積荷を減らすことはできませんでした。イスパニア人たちは政府の厳しい禁止令にもかかわらず、彼の船の積荷すべてを、本物のピアストル通貨で通常の3倍の値段で買い取りました。ヴリフ船長は、もう一度やってきて必要なものをすべて運んでくると約束して彼らを安心させました。船長は実際にこの約束を守るつもりようです。イスパニア人たちはカリフォルニアでもまるで野蛮人のようにどんながらくたでも食欲に買い込み、ラッコの毛皮で支払いをしています。それは彼らが生産施設を持たず、また交易も行っていないからです。そのため、冬の間中ポストン人の船がイスパニア人の沿岸をうろつき、港にはイスパニアの巡洋艦がおそらく特別に、万が一に備えて待機しています。イスパニアはマニラに自由貿易港 *porto-franco* をもっているかのような話を別のところで聞きましたが、真偽のほどはわかりません。また、そこにはイスパニア海軍の主力部隊が常駐し、カヴィト港 *port Cavite* には司令部とドックがあり、主力艦6隻がいつも停泊しているそうです。艦隊の武装に必要なもの、たとえば麻、樹脂、鉄、錨、帆布などはすべてイギリス人が納入しているそうです。わが社がこれらの物品をすべて供給し、彼らからは穀物やラム酒、砂糖、さらにあらゆる中国製品を広東と比べてわずかに高い値で入手し、マニラの人びともこの貿易をつうじて利益を得て満足することができるでしょう。さらに現地に手代 *kommisioner* を置いて、インド製品の

商業を行なうこともできるでしょう。聞くところによると、イギリス人はそこで自分たちの積荷を売りさばき、いつも本物のピアストルを受け取っているそうです。裕福なスペイン人は、新世界からマニラ経由でヨーロッパへと自己のピアストルを送金する際、金銭を 1.5~2%の利子のついた手形に喜んで換えています。こうすることで、これらの海域でマレー人やさまざまなヨーロッパの私掠船がしばしば行っている海賊行為によって、彼らの金銭が奪われることはないという保証を得ています。彼らは 3 枚の手形をいつも引き受けており、そのうちのいずれかで金銭を受領できることを当てにしています。商売に長けたイギリス人は彼らとともにベンガル湾へ移動し、インドでは他の通貨を使う危険な取引をけっして行ないません。カリフォルニア遠征の試みが新たな道を切り拓くことにならなくても、いささかでも皆様に新しい情報を提供できるでしょう。

つづいて、クリル列島について申し上げます。クリル列島についてはすでに少なからず申し上げましたが、補足したいことがあります。そこでの毛皮事業は広東またはキャフタの交易を強化します。いつか日本との交易の道が開かれたときには、将来の新たな富の源泉、シベリアとアメリカへの新たな食糧供給手段、アメリカ植民の新たな方策、そして祖国産業の新たな起爆剤にもなるでしょう。その一方で、サハリンのアニワ湾への植民が必要であり、かつわが社にとって有利であると考えます。魚は信じられないほど豊富です。湾内で行われる鯨漁は、豊富な森林資源を燃料に用いることによって、大変容易に鯨油を採取できます。フィリアザラシやトドのような海獣も多く生息しております。この地には建築用木材があり、温厚な住民が多数おります。以上すべての事情により、この土地を絶対に手放すべきではありません。さらに、政府はサハリンに臣民を持ち、彼らに対する支配を強化し、政府の他の壮大な計画を実現するために思いがけず彼らを活用できるでしょう。くわえて、もしも第 16 島に湾が発見されたならば、この湾はアニワ湾と同じ緯度上にあり、植民地にとってはこのうえなく好都合です。植民地の守りを大砲で固め、輸送船を保有し、必要に応じて湾に船を送り、物資を補給することができるからです。

鯨油はインド全土で需要のある商品です。ただ、日本は遠洋航海を許可していないので、すべてを買いつけるでしょう。穀物についてこの帝国の主要な食糧である魚についても同様です。うまくいきますと、今年末にも皆様は私から続報を受け取るでしょうが、それまでの間、時間を無駄にせず、どうぞ事業に着手して下さい。ラクスマン遠征後の遅滞は、不遜と無為がどれだけの害をもたらすのか政府に認識させる教訓として、十分だったように思われます。

ここで約束されている貿易や富の新たな見通しについて、私は前回の手紙で説明しました。両方の手紙のあちこちに私が書いたことをまとめますと、できるだけ早く良い船を建造し、皆様の植民地に人員を派遣することが今や皆様にとって急務です。ネヴァ号を永久に当地へ振り向け、

この船の受領後すぐに 450 トンの船を 2 隻建造し、この地方に必要なすべての物資を積み込んで
当方へ送ることを提案します。皆様が策を講じて事業の遂行を急いでいただけのでしたら、われわれはその間、当地でブリッグ船を建造します。皆様に今一度申し上げますが、支出を恐れてはなりません。以前行われていた、人員に食糧として干魚を支給するというまちがったやり方は放棄しなくてはなりません。間違いなく、皆様にとって干魚は穀物よりも高くつくこととなります。ユノナ号は 3 万 5,000 枚の干魚、そして脂とベリーを運んできて、港に 3 か月分の食糧を補給しました。ただ、将校 2 名と航海士 1 名の俸給 8,500 ルーブル、水夫たちの給養費、船の補修と武装の費用、そしてリスクを考慮に入れてください。そのうえで、このユノナ号が当地のためにどこかから穀物を 1 万ブード輸送することを試算してみてください。穀物の購入費と船の維持費は、会社にとって高くても 1 ブードあたり 2 ルーブル 50 コペイカの支出となります。ノヴォアルハングリリスクは穀物の場合、一度に 5 年間分の、すなわち干魚よりも 20 倍長い期間の食糧を確保することができるでしょう。その費用の総額は全部で 2 万 5,000 ルーブルです。皆様が支給される食糧の干魚はおそらく 1 匹 3 ルーブル以上し、そのうえ人びとは飢えに苦しみ、病気になっていることがお分かりいただけるでしょう。今年の終わりには、ユノナ号がこの地方に食糧を供給しているだけでなく、今年のオホーツクの物価と比較した場合、おそらく皆様の支出を減らしていることをお分かりいただけるでしょう。皆様、ここで建造中の船はいずれも 2 度、多くても 3 度の航海で必ず元がとれるのだとご安心下さい。したがって、利益の獲得を達成すべく努力を惜しまないで下さい。すでに皆様に対して十分に根拠を示したように、ボストン人は、もしわれわれが船を增強し、彼らをここの交易から締め出したならば、われわれと交易するために船を送ってきて、われわれに利益をもたらすでしょう。きわめて早い時期に、われわれは広東の主になるかもしれません。皆様からの文書を読みましたが、彼らに対するわれわれの海岸への来航禁止を政府に請願した方策につきましては、現実的ではなく、それが遂行されたことに心を痛めております。その理由をお聞きになりたいですか？ お答えしましょう。われわれの権利を彼らに説明する必要がなく、われわれが国境を越えてくる彼らの行動を武力でいつでも抑えることができるというのであれば、もちろん皆様は北緯 55 度まで、彼らの来航禁止を達成できるでしょう。とはいえ、それによってわれわれはかえって不自由になるでしょう。

支出を要する何千もの案件について申し上げました。おそらく、皆様は「大いに結構だが、資金がいる」とおっしゃるかもしれません。私も皆様と同意見です。しかし、私はつぎのロシアの二つの諺を忘れておりません。その一つは「金のためにするのであれば、災いではない」というもので、もう一つは「災いが金を生む」というものです。(略)

ともあれ皆様、かくも壮大な事業に着手なされる前に、皇帝陛下に請願し、わが社の特権の 20

年間延長をご承認いただく必要があります。かくも重要な基盤は、偉大なる犠牲と引き換えになされるものです。それゆえ株主の熱意と努力が陛下の恩寵を賜わり、確実に報われ、株主に利益をもたらすということが、皇帝陛下の証書 gramota によって株主に対して確認されなくてはなりません。現在の特権の期限が満了する頃になって、わが社の各所がようやくしかるべき状態に整備されはじめています。会社は利益が期待されるどころか、自己の将来がいまだ定まっておられません。まさにこのようにときに、陛下の証書なくしてわが社はさまざまな場所で資金の使用を開始できるでしょうか。それを行ったとしても、確証がないというだけでわが社が事業の遂行に臆病になり、計画の実行そのものも頓挫してしまうでしょう。

会社の経営を根本的に改善するためのあらゆる方策を皆様に示しました。今こそ、皆様がこれに沿って会社評議会を創設し、取締役会を再編し、さらにこの地方、そして計画の立てられているすべての場所へふさわしい指揮者を派遣しなくてはなりません。皆様の地方の総支配人あるいは知事という称号の重さゆえに、あらかじめ指揮者の人選を考えておく必要があります。アレクサンドル・アンドレエヴィチ〔バラノフ〕はその年齢と持病から、皆様が期待しているような長期にわたる管理を担えません。くわえて、本人も再三にわたり退職を願い出ています。とはいえ、新たな、そしてこれほど多くの課題の重要性を考えるならば、当地には彼ほど年齢が高くなく、若く、知識が豊富で、行動力があり、功名心があり、進取の気性に富み、酒を飲まず、礼儀正しく、そして自分自身が経営に喜びを見出せる者が任命されるべきです。もちろん、このような人物を見つけるのは至難の技でしょうが、五等官の中からそれを見つけ出す必要はありません。政府も、われわれの同僚たちの名簿に目もくれず、五等官の中から県知事を探しておりますが、見つからないので退官した者で代わりとしております。おそらく皆様は下位の官等出身者、あるいは官等を有していない優秀な人材の中から探した方が早いと思います。会社の定員に特任の職位を設ければ、その者にとって誇るべき経歴となるでしょう。そうすれば当然、その地位にふさわしい敬意が払われ、彼の尊厳は保たれるでしょう。しかし、皆様、大切なのはその者が善良であるということです。なぜなら、この者の善良な性格があらゆる人びとに影響を与えるはずだからです。また、この者には科学への造詣や博愛心も必要です。それがあれば学校の建設や病院の整備も間違いなく成功するでしょう。宗教にかんして申し上げますと、狂信者も自由思想者もここでは有害です。皆様にモスクワ大学出身者の中から人選を行なうよう助言いたします。この大学で学んだことはその者にとって名誉です。同大学の卒業生で私の部下だった者はいずれも行動的で、かつ仕事熱心、品行方正で、博識でした。彼らの中に名誉心を強く求める者が見つければ、それはこの地方にとって幸せなことです。海軍少尉ダヴィドフは正当に評価されなければなりません。彼は多くの長所を備え、海事やこの地方についての知識の点でも非常に役に立ちます。し

かし、年齢があまりにも若すぎます。ここでは年齢や経験によって培われる忍耐力が必要なのです。この問題については、私が帰還した際に、栄誉を求め高い地位に魅了されるだろう他の候補者についても申し上げますので、それまで話を進めないことにします。

ヤクタットについて、不愉快な知らせを受け取った旨を申し上げました。この土地への入植が持つ重要性ゆえに、この企てによって被った損失をただちに回復することが求められています。苦労や病気で疲れ果てた老バラノフは、最後の力を振りしぼって祖国のために身を捧げております。彼ら自身が建造したロスティスラフ号が、大砲4台とわずか25名の乗組員を乗せて当地から出航します。これ以上、人員を配置するのは無理で、他の船もないからです。私がバラノフを説得しなくても、私が出発した5日後、彼らは出航するでしょう。彼に神のご加護があらんことを！皆様、実のところ、全体の幸福のために倦むことなく重ねられるこのような努力に対し、われわれ株主は何をもって報いることができるのでしょうか。ただ驚嘆し、感謝の意を示す他ありません。バラノフの不在中は、クスコフ氏にこの地方そして皆様の利益が委ねられております。

皆様には会社の計画全般についてお時間を割いていただきましたが、ここで重要な事業の完遂に不可欠な個別の入用について再度申し上げ、ペテルブルグからの最初の船で以下を送ってくださいますようお願いいたします。製材所のために必要な鉄部品、すなわち大型輪2つと小型輪4つ、そして滑り木を4個。それらの寸法を記した図面を同封いたします。それらは全部で100ボードにも満たず、バラストとして好都合に送ることができるでしょう。それから鋸も4組、つまり48本必要です。ここの薄板はどれも削りが粗いものばかりです。木材の入手が難しく、加工作業も遅いことにつきましてはすでに記しました。この製材所は造船所とともに船の建造費に入っており、いずれも費用はさほどかかりません。別の方法では、建築作業は作業員の人数の都合上、会社にきわめて高い支出を余儀なくさせるでしょう。労力を少なくして建築を成功させるために、私は骨組法で建物をつくるように指示を与えました。丸石を建物の基礎とし、丸太を組むのではなく軽量の角材を束ねたものだけを積み、それらの間に支柱を立て、石と粘土、そして細かく切った草をこね合わせたものを中に詰めます。そして、壁の内側と外側から石灰を塗ります。床には砂礫を撒き、その上をひび割れないように粘土で固めます。どの部屋にも煙突付きのかまどをつけます。屋根も草で葺くよう命じました。この草には粘土の溶液を草の茎の空洞をすべて満たすようにしみこませ、それを並べて敷きつめ、端を切り、粘土と石灰をまぜたものを塗るようにしました。この建物は石造りのように見えるでしょう。屋根は軽量なので太い吊り縄が必要なく、耐火性もあります。かまどが床や壁をすばやく乾かします。作業においてもこの建物は好都合です。この地の海岸付近にたくさん生えている細い木や、通行の邪魔になる石を利用し、周囲もきれいになるからです。貝殻から作る当地の石灰は非常に質が良く、この設計にもとづく、

天井の木材を少し厚くする必要があるだけでしょう。にもかかわらず、建築作業は早く終わり、石造りにも負けない丈夫な建物になるでしょう。暖房はかまどや暖炉で十分です。ここでは冬の厳寒はきわめて稀だからです。今年の1月は、7日から15日までは[零下]13度、15度、16.5度でした。それより前とその後は暖かく、[零下]5、6度になることさえもめずらしく、ずっとプラス3、4度でした。つまり、ここで冬だと感じられるのは1週間だけで、それ以上、暖炉は必要ありません。暖炉の大きな利点は、人びとが乾燥した部屋の中で暮らせること、部屋の空気がきれいになること、そして雨の多い秋に人びとが衣類や靴を乾かすことができ、それによって壊血病を予防できるということです。私の考えでは、この病気がこの地で猛威をふるっているのは、人びとが湿った部屋に暮らしているからなのです。壁の湿気とたくさんの人間の汗が空気を腐敗させ、なおかつ人びとは身体をずぶ濡れにして仕事から戻ってきても、腐った衣服を着て、靴を履かねばならず、さらに食べ物自体が腐敗を助長し、その結果、必然的に病気にかかりやすくなるのです。私は一日に何度もトウヒの枝を燃やして、できるだけ予防策をとっておりますが、あまり効果はありません。粘土は8露里離れたところにありますが、私はバイダラを造ってそれを運ぶように命じました。周知のように、どのような新たな試みも皆様には進んで受け入れられないものでしょう。しかしながら、ここでの最初の建物の建築は私自身が行ないたいと考えております。同封いたしました図面から、どんなに簡単にこれを建てることができるのか、どんなにめざましく快適なものになるのか、おわかりいただけるでしょう。したがって、私はカディヤク島その他いたる所でこのような方法で建てるよう命令を出しました。パーヴェル湾には巨大な木造の建物が造られましたが、12年で全体が老朽化してしまい、新しいものを建てなくてはなりません。しかし、ここには建物が朽ちる原因になるものは何もないのです。われわれの造船所も骨組法で建てられるでしょう。本状にこの計画書を添付いたします。

当地の秋は最も耐えがたい季節です。10月からは昼も夜もたえまなく雨が降り続きます。というのは、高い山々が周りを取り囲んでいるからです。当地にはいたる所に建材やマストに適した樹木が生えており、あまりにも密生しているので、ロシア人が来るまで、ここには天地創造以来、一度も太陽の光が差し込んだことがないと思われる程です。その野生の姿を見ていると恐ろしくさえなります。少し森の中に入っただけで、さまざまな珍しいものを目にします。倒木が重なりあって横たわり、山になり、その上にマストに適した樹木が生えています。その根元には窪みがあり、水がいっぱい溜まっていて、その水は人が簡単に溺れてしまうくらいの深さです。つまり、森の中では歩くのではなく、這って行かなければならないのです。開けた場所、すなわち森の中の木のない場所はコケとツンドラに覆われていて、割れ目や深い淵があります。森を焼くことも試しましたが、湿気のために燃えません。また湿気のために、朽木は土に戻らず、赤錆色の沼に

なっています。とはいえ、われわれは入植地の近辺にあるこの密林を、あらゆる用途に適した土地に変えたいと思っています。現在、建築用の木材を伐採し、木炭を焼いています。1万本以上の丸太を切り出しましたが、ようやくところどころで間伐地のようなものができたにすぎません。われわれはあちこちで少しずつ森を切り開き、森の日差しや風通しがよくなるようにしています。森を切り開いたところでは、すでに木も燃えやすくなってきています。いたる所で非常に太い根が絡み合って壁のようになり、その溝の中に水がたまっているのです。これを抜く必要があります。水抜きに成功すれば、繰り返し森を焼くことでよい土地になり、ツンドラも、われわれにとっては牧草地となるでしょう。しかし、そのためには人手が要ります。それゆえ、もっぱら人手不足からこの事業は緩慢に進んでいます。

森林の伐採によって住民に恵みがもたらされるのであれば、炭酸カリやガラスの生産施設の立地として、この地ほどふさわしい場所はないでしょう。特権が延長された場合、会社は寄付金を得て、費用を捻出して職人とその家族を呼び寄せ、職人たちに20年間の特権を与えることができます。その特権により、彼らは税の支払いを免除され、また関税をかけられずに、おのおのが製作に従事し、もっぱら会社に製品を納入し、双方が取り決めた価格にもとづいて製品の対価として現金を受けとることができます。これらの人びとは一財産を成すでしょう。余剰となった家族が入植すれば、この家族は契約によって定められた期限が過ぎたあとも、会社に収入をもたらし、それによって会社の利益は大きくなるでしょう。その間に会社の者たちも技術を習得し、この産業がアメリカの他の場所でも普及するかもしれません。私には皆様に、本状に添付して27通の請願書をお送りする責務があります。この請願書は当地への永住を希望する者たちが私に渡したものです。彼らは当地の最初の市民になるでしょう。しかし、今のところ当地では生活環境がまったく整っておりません。民間産業の見通しが立つまで、目下、この者たちが生計を立てるための確実な手段を思いつくことができません。そのため、彼らはしばらくの間、毛皮採集のために、規定にもとづき決められた人員の中に入ることになるでしょう。(略)

遠方から当地へやってきた同胞につきましては、私は自分の成功を自慢してもよいのではないかと考えております。彼らは人間らしくものを考えるようになってきています。忍耐強く、かつ飽きることなく彼らに接することだけが必要なのです。熊でさえも言うことを聞くようになるのに、人びとを従順にさせることができないのでしょうか？ 学校が設立されたならば、非常に大きな助けとなるでしょう。学校につきましては前回の手紙で書きましたが、ここに女子教育にかんする皇太后陛下[マリア・フョードロヴナ、パーヴェル一世の妻]への恭順なる請願書、そして皆様のご参考のためにその写しを同封いたします。

皆様、建造予定の船に必要な大砲の目録も同封いたします。それから今一度申し上げますが、

海事が最優先に整備されるべきです。会社の本来の力はまさしく海事にもとづいているからです。

(略)

さらに船のバラストとして、獣脂を煮るための在庫の鉄、樹脂を乾留するための鑄鉄製の10ヴェドロと15ヴェドロの大鍋を送ってくださいますようお願いいたします。ここには小さいけれども松林がところどころにあるからです。しかしながら、樹脂の輸送を中止しないで下さい。人手や松の不足から、当地の樹脂では自給自足できないからです。樹脂の樽も、惜しまずに良質のものを送ってください。遠征隊とともに送られた樽の半分は樹脂が漏れていたからです。樽の質に多くがかかっていることを、ボストン人は赤道をやはり2度通過しても、一度も、またいかなる損失も樽から出していないということが証明しています。迫撃砲と爆弾を送るのも忘れないで下さい。必要なときに撃つ数発の爆弾は、皆様が100発の砲弾と弾丸、火薬を送ってくださるのに匹敵し、より大きな勝利を収めるでしょう。

ご支援を必要とする課題が山積しておりますので、私はいつまでも手紙を締めくくることができません。しかしながら、ユノナ号が投錨地で私を待っておりますので、できるだけ早く筆を置くことにいたします。

心からの尊敬を皆様に抱き続けます。

従順なる僕

ニコライ・レザーノフ

追伸：(略)

(5)Тихменев П. Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени, ч. II, прил., с. 222-243.

(前田ひろみ・畠山禎 訳)

11. N.P.レザーノフから露米会社取締役への第二の秘密書簡

1806年2月15日

慈悲深き皆様

私は皆様から信頼されているがゆえに、とうとうきわめて遺憾な責務を果たさなければなりません。その責務とは、将校たちの抑制を欠いた行動や暴力によって生じているこの地方の混乱について、皆様に説明するというものです。将校たちは会社に利益をもたらすために勤務に採用されたにもかかわらず、会社にもつぱら損害や損失を与えております。皆様におかれましては、この件に個人的な不満が潜んでいるなどと考えないでください。不満などいままで一度もありません。

んでしたし、またありません。ひとえに全体の福祉への熱意が、皆様に対して皆様の施設や商業の全容を明らかにするという義務を私に課しております。またこの熱意が、皆様にお伝えすべきこと、そしてこの地方のまさしく根幹において平穩が揺るがされていることを隠すのを許さないので。ナジェージダ号で発生した、会社に不利益を及ぼす多くの出来事、会社が与える気前のよい報酬に対する感謝の気持ちの欠如、彼らが全権委任者を無視して皆様の手代たちを裁こうとしたり、海軍鞭で打とうとしたりするなどの、商人身分出身者に対する悪罵や軽蔑その他につきまして皆様にお伝えしました。私の発言が真実であることを皆様に納得していただくために、私は皆様に数多くの文書を原本にて提出いたしました。しかし残念なことに、もっぱらわれわれの航海の幸運な成功に感わされて、航海そのものに対して期待されている実際の利益は、順風の力に屈服してしまったに違いありません。この順風によって、この者たちは道徳の維持、商人身分出身者の保護、商業の展望、利益の擁護、上司への服従、会社そのものに対する侮辱、将来の偉業への鼓舞、つまり彼らが特別な敬意を払うべきことすべてから引き離されてしまいました。ようするに、彼らの目には私がまるで罪人のように映っています。私は自分の無欲、苦勞、献身に対して思いもよらない返礼を受けました。しかし、断言しますが、私はひどく落胆はしましたが、怨恨は持ちませんでした。怨恨というものはつねに、真実に与えられる文字どおりの侮辱に対して感じるものだからです。祖国の利益を完全に見落とし、秩序そのものを乱す人物や行動をひたすら熱烈に支持した結果、彼らが自分たちの名誉を重んじなかったことが残念でなりません。この見事な決着を見出すと、私はすぐに会社の利益を運命にまかせ、二度目のカムチャツカ到着の際には一切、口出ししませんでした。しかし、皆様、私はこの悲嘆すべき事態の中でも、皇帝陛下より託されたアメリカ地方の視察という忠実なる臣民の責務を忘れませんでしたし、そのときも自分を見失っていなかったと思います。ご存知のように、私は当地でも、皆様がこれまでお考えになられたことのないような、この地方や商業にかんする構想を皆様に提案できるように努めてきました。これに対して、私はまったく賛辞や感謝を求めておりません。正直に言うと、賛辞は人びとがそれに執着するがゆえに、私にとっては価値を失ってしまいました。感謝については、それが私の活動の動機となったことはこれまで一度もありませんでした。なぜならば、会社のためになるのであれば、私の心の中では最高の満足という褒美が与えられているからです。私がこのように釈明することをお許し下さい。私は前置きをしておく必要があると考えました。それは、皆様がこの私の報告を何らかの人物調査書とみなさないようにするためです。そうではなく、皆様が私に対してほんの少しでも公平でいてくださったならば、また何らかの情をかけることを望まれるならば、そして私の願いをせめて一つだけでも遂行可能とご確信いただき、皆様のために行使する権利を与えてくださったならば、非常にありがたく思います。私の説明をうけ

でも皆様が調査や公表を一切行わず、罪を犯した人を己の良心の呵責に苛まれるままにしていただけならば、そのことによって皆様は私の屈辱を癒すのです。皆様は、私のこの感情を賞賛すべきものとご判断なされることで、実際に私を納得させて下さい。そのご判断は生涯にわたり私に快いひとときをもたらすでしょう。私は皆様のご判断を私の忍耐に対する真の褒賞として受け入れます。それでは、このたつての願いに沿った行動を皆様に期待し、当地で勤務する者たちについて、彼らがどんな人物で、会社に利益をもたらすのかそれとも有害なのかという観点から、以下、ご説明いたします。

S 中尉については以前の手紙でもすでに書きました。ここでは越冬中に5回しか見かけなかったことを補足いたします。中尉はいつも自分の部屋に閉じこもっています。楽しみはウォッカと居眠りだけです。ただ、彼は静かにウォッカを飲んでいる分には、自分自身の健康を害する以外に何の害もありません。訓練をまったく行ないません。どこにも行かず、人を訪ねることもありません。つまり、彼はまるで存在していないかのように静かに暮らしているのです。航海日誌をご覧いただければ、S 中尉には技能が不足していることが確認できるでしょう。支配人との通信内容や彼の不服従からはその頑固さがわかるでしょう。彼は指揮者の職を解任された日から数えて向こう一年半分の給与を会社から前借りしておりますが、それは過度のアルコール摂取で消えました。彼については、これ以上、良いとも悪いとも言えません。S 中尉は役に立たず、取り柄のない、そんな性質の人物です。しかし、そのような者に支配人は信頼して船を任せることができませんので、私は彼を皆様のもとに向かわせることを決意しました。彼の給与の過払いにつきましては、皆様の判断に委ねます。

M 中尉は彼自身が退職を願い出ています。M 中尉の勤務歴は支配人によって記録されております。ウォッカへの出費を考慮に入れても、彼は会社の利益のために十分に尽力しました。したがって、私は感謝の気持ちから、これ以上彼を職務に引き止めることはできません。M 中尉はしらふのときは非常に静かですが、少し酩酊すると自分の大胆さを後悔することになります。M 中尉はS 中尉と同じ部屋に住んでいて、訓練も一緒でしたが、聞くところでは、変わった生活をしているそうです。彼らは交代で眠り、順番に散歩に出かけ、過去であろうと現在であろうと将来であろうと、とにかく気にかけるあまり、お互いの会話の話題さえ見つけようとしません。

造船職人のコリューキン氏とポポフ氏は仕事の腕はたしかなようです。厳しく監督しているときは、彼らはたいへん役立ちます。コリューキン氏は図面やデッサンが上手で、ここでは土地の測量を行なっています。彼は委ねられた仕事を正確かつ精力的にこなす、皆を満足させています。ポポフ氏も本業の技能以外に帆作りの名人でもあり、機械にも熱中しています。そのため、製作所の建設にも役立つ人材です。彼らは二人とも、しらふのときにはずっと一緒に暮らしてもいい

ような人物なのですが、酔っ払うとまったく逆に何の役にも立たなくなり、その乱暴ぶりからあらゆる損害を覚悟しなくてはなりません。彼らはこの放蕩にふけているわけではありませんが、その若さゆえにたやすく自分を見失い、ひんぱんな飲酒により、それを悪習慣にしてしまう可能性があります。当地に設立された本部が厳格な態度をとることで、彼らのためにもなるでしょう。

多くの人物の性格について描写してきました。つぎに私にとっては残念な記述になりますが、Kh氏に移ります。彼は軽率に振る舞い、会社に害を与えているという点で中心的な存在ではありますが、本来の規制を守っているときには役に立つ、愛すべき人物でもあります。

私は Kh 氏の高い航海技術と決断力をこの目で見て、彼が協力者であることを見出し、彼にはどんな困難にも立ち向かう覚悟ができていることを知り、喜びました。ウナラシュカから陛下に、彼を称賛する内容の手紙をお送りしました。しかし、カディヤク島に到着したのち、彼について気づいた点がありました。彼はすぐに経営の問題になんでも頭を突っ込みはじめ、倉庫で物色するようになりました。たえず支配人バンネルを中傷し、支配人の前でも平気で支配人は嘘つきだ、私のことを騙していると言うのです。他方では会社に多大な貢献をした者たちを多数、私に推薦するのですが、彼はその者たちを好きではないのです。彼は自分ひとりが私の信頼を勝ち取り、他の者から自分のそれまでの行動が暴露される手段を奪おうとしていることに気がつきました。私は到着した当日にはもう、彼の行動について何か彼に不利なことを知るようになりました。彼に対して、会社の経営は彼の職務に入っていないことを暗にほめかしました。そして秩序を確立すべく、全将校に対して、私は支配人に自分の決定を伝えるので、着岸後はかならず支配人を介して私に連絡を取るよう求めました。彼らが何らかの越権行為を知っている場合、支配人の面前ではなく、内密に話してもらえれば非常にありがたい。もしもそれが有益であれば、もちろん彼らの助言や各地の情報をすべて役立てるだろう。しかしその一方で、会社が任命した管理者[支配人]は、この者の越権行為が完全に摘発されるまで、いかなる侮辱も受けないだけでなく、この者に完全に敬意が払われるよう求める。さもなければ、いかなる秩序も守られないだろう、と。Kh 氏には私のこの見解が気に入らなかったようでした。とはいえ、私は将校たちと支配人を和解させたいと考え、私はこの老人[支配人]に尋ねました。一体何が原因で Kh 氏は支配人に不満を持っているのか。航海中、私はあなたについて賛辞以外には何も聞いていない。皆、あなたがもてなし好きで、よい妻がいて、二人ともとても親切だと言っているのだと。バンネル氏は、自分たちを破滅させるために私が彼を連れてきたと答えました。バンネル氏によれば、Kh 氏はアメリカで最初に越冬したとき、飲酒と乱暴以外には何もせず、もてなしのときにも部屋の窓ガラスを割ったり、部屋の中に銃弾を撃ち込んだりしていたそうです。バンネル氏はドアの側柱に撃ち込まれた銃弾を見せてくれました。誰のことか名前を言わなくとも、皆が一致してそれを証言しまし

た。つけ加えますと、アレクサンドル・アンドレエヴィチ[・バラノフ]も夜、Kh 氏を避けてかならず戸締りをするようにしていました。私はアレクサンドル・アンドレエヴィチからもっとよく知ることができるでしょう。(略)私はこのような勤務評価を聞いて驚きましたが、それはむしろ彼らの個人的な不満のせいだとみなしました。そして、ノヴォアルハンゲリスクに到着しました。私がアレクサンドル・アンドレエヴィチと会ったとき、彼が「いやはや、ニコライ・アレクサンドロヴィチ[・フヴォストフ]、あなたがまたこちらにいらっしゃると思ってもおりませんでした」と尋ねたのを忘れられません。私が「どうやらお二人を引き合わせる必要はなさそうですね」と言うと、彼は「ええ、その必要はまったくありません。昨年冬、お互いに十分に知り合いになりました」と皮肉な調子で答えました。彼は海軍少尉ダヴィドフに対してより親しみを感じているようでした。支配人と知り合いになってから、過去の出来事について聞き出そうとしましたが、彼は慎重深く、また私の好奇心に対しても徹底して口を閉ざしていたために、私はそれ以上聞き出すことはできませんでした。支配人自身もいつも冗談ではぐらかし、もう過ぎたことで、それはもうありえないことだと言っていました。その一方で、Kh 氏はここでも経営に口を出し始めました。私は再度、すべてを支配人に任せるべきだ、と言ってそれをすぐにやめさせました。Kh 氏は、それには我慢ならない、自分は床を這い回るために生まれてきたのではない、と答えました。この深刻な問題を回避せずに、私はおだやかな方法で彼の誤った考えを悟らせました。私が秩序を監督していることに対して彼が不満を抱いているのはすでにある程度、気づいていました。しかし、それは9月15日、思いも寄らなかった乱暴狼藉で明るみになったのです。(略)

翌日、私は彼らを自分の元に一人ずつ呼び、彼らがどれだけ恥ずべきことをしているのか、もっぱら脅しだけで抑えつけられなくてはならない毛皮事業者たちに対し、どれだけ忌むべき影響を与えているのか恥じ入らせました。Kh 氏は謝罪のかわりに乱暴な言葉を多く吐き、自分にとって有利なことをあげて脅迫し、最後には厚かましくも、私の任務をすべて知っており、それはカムチャツカですでに結論がついていて、私はただ意味の無いことをしているのだと言いつつ放ったのです。そして、もしも私が望むのなら、同じことを皆の前でも繰り返すと断ったのです。私は彼にそれを止めさせました。そして、私は厳しい措置を取らざるを得なくなり、それはあなたの両親の命に関わることにもなるので、自分の両親をそのような措置から守るように求めました。ダヴィドフ氏が彼にどのような結果がもたらされるかを十分に説くと、Kh 氏は後悔し、自分はそうは言っていない、あなたは誤解した、と言いつつ謝罪しました。私は彼の愚かな振る舞いを不問としました。その後、Kh 氏は私に取り入ろうとしておりましたが、的外れなことばかりしていました。私がカディヤク島へ行って食糧を調達するよう命じた M が出発を遅らせているとか、S には船を任せられない、役夫たちはしかるべき仕事をしていないと説明していました。

私は忍耐強くその話を聞いてから、すべて承知している、利益を得るために機を逸さずしかるべき方策をとる、といつも答えていました。ちょうどその頃、私はユノナ号を購入しました。それを買うとすぐに Kh 氏を船の責任者に任命しました。そして、これで彼は自分の任務に従事し、他の業務には首をつっこまなくなるだろうと喜んでいました。同時に、海軍少尉ダヴィドフを副官に指名しました。しかし、Kh 氏は船に乗り込むと大酒を飲み始めました。それは3か月にわたり続けました。彼のつけの勘定書を見ていただければわかりますが、彼一人でコニャックを 9.5 ヴェドロー、強いアルコール飲料を 2.5 ヴェドローも飲み干してしまっただけです。さらに、他の者たちへの奢りがあります。つまり造船職人や航海士、将校を酒飲みに行っているのです。私は支配人に命じて彼を止めようとしていました。最後には私自身が彼に対して、食糧の調達を目的に彼をカディヤク島へ派遣すること、マリア号は不備があるのでここに残すことを伝えました。彼は、私が大きな期待を寄せている将校であるため、心を入れかえて欲しかったのです。彼が喜んでこの任務を引き受けたことについては、正当に評価しなくてはなりません。私は、彼が食糧を積んで帰還すれば、彼の手柄になるとも思っていました。しかし、実際には品行や節度の点ではまったく変化が見られませんでした。(略)

私は彼に自制を求めましたが、むだでした。彼がカディヤク島に留まるのではないかと、われわれ全員を飢えさせるのではないかと心配しましたので、私は不本意ながらも彼の機嫌をとり、最終的にはおだやかな方法で彼に規律を回復させることに成功しました。出航後まもなく、Kh 氏は人手を2人求めてきたので、すぐに送り出しました。彼は、会社の手代が食糧の支出に口出しするのを嫌がりましたので、それも認めました。(ここでは、彼を満足させ続けるために取り計らったささいな出来事について伏せておきます。たとえば彼は、支配人が白砂糖ではなく粉砂糖を渡し、自分のために手元に置いていると苦情を言っています。実際はそうではなく、われわれはカリフォルニア用に2塊を保管し、1塊を彼に渡しました。また彼は上質の小麦粉を要求しました。これは全員のために3ブードしかありませんでしたが、彼には半分分けてやりました、など)。船には乗組員以外に、カディヤク島へ帰るアメリカ人たちが乗船しました。しかし、帰路は乗組員の人数が十分ではなく、それが理由かどうかはわかりませんが、水夫が一人、帆船から落ちて溺死し、小錨も失くし、船は危うく遭難するところだったそうです。いずれにせよ、ユノナ号は食糧を載せて帰還しました。積荷の送り状では干魚は7万5,000枚のはずでしたが、受け取ったのはその半分だけでした。またその他の食糧についても数が足りませんでした。それらの食糧を受け取らなくてはなりませんでした。Kh 氏はすべての荷を降ろそうとはせず、水夫たちが海岸のあちこちに運んでいきました。パイダーラを送りましたが、彼は就寝中であつたり、翌日まで延期したりしました。私が呼び出すと、足が痛いという返事が返ってきました。人手不足であるに

もかかわらず、彼は自分の配下の者を下船させず、考えうるあらゆる残念な行為で必要不可欠な作業を中断させました。その一方で、酒はいっこうにやめず、皆に対し信じられないような暴言を吐き、脅迫を行い、夜中に大砲を撃ったりしました。造船所でも飲酒が原因で造船職人の作業ははかどらず、水夫たちも酒盛りをしていました。(略)

このように、ある者が犯した一つの罪はこの者をつぎの罪へと向かわせるのです。ダヴィドフはけっして酒を飲みません。毎日、彼は私のもとを訪れると、私のつつましさに驚いていました。そして11月29日、私のもとにやって来て、下船の許可を願い出てきました。彼はつぎのとおり打ち明けました。彼が Kh の親族全員に対してどんなに大きな恩義を感じていても、Kh と一緒にいると放蕩三昧になり、自分自身を見失うかもしれない。Kh は際限のない飲酒のために理性を失っており、毎晩、錨を上げて出航しようとしている。しかし、幸い、いつも水夫たちが酔っ払っているので事なきを得ている、というのです。ダヴィドフを泊まらせる部屋はありませんでしたが、彼はユノナ号にいるよりは外の海岸で寝た方がましだと言いました。彼には暖房が入れられていない寒い部屋があてがわれました。ダヴィドフがそこへ向かうのをあまりにも急いだために、暖炉に火がつけられたのは彼が部屋に入った後になりました。

ダヴィドフの下船は全員に何らかの影響を与えたようで、造船職人たちもいくぶん酒を控えるようになりました。私はダヴィドフに、彼とともにカリフォルニアへ行くつもりだと伝えました。ところが彼は、彼が自分の考えで Kh との関係を絶ったと思われぬよう、船長には M 氏を任命するよう頼んできました。ダヴィドフは Kh との航海は終わった、これ以上一緒に勤務したくないと言うので、私はこのような形式的措置 otomat をとることに同意しました。(略)

その一方で、私は人びとにたくさん飲ませないように、出すウォッカを1日につき1本にするよう命令しました。というのは、彼らはすでに人員を配分し、われわれの造船所からの者たちだとか、われわれユノナ号の者たちだと大声をあげて、自分たちのものにしはじめたからです。酔っぱらって正気を失くした者たちは、要塞を攻撃したり、私とバラノフを捕らえようとしたりしました。このような叫び声を耳にして、われわれは警護を増やし、武器を用いてただちに彼ら全員を拘束できるよう人を配備して、彼らの愚かな行為を笑っておりました。ウォッカが底をついたので、Kh は支配人に手紙を書いてきました。支配人は私の名前をあげたので、彼は釈明のために私のところへやってきました。そして、これは横暴であり、自分は飲んでいないときの方が落ち着かないのだと言いました。私は彼に、乱暴を働いただけでなく無礼を働いたならば、ただでは済まされないぞと明言しました。その一方で、支配人は辞表を提出しました。クスコフも職に留まるのを望んでおらず、手代たちや他の者たちも彼らに続こうとしています。彼らは給与の受け取りさえ拒否しました。私は、会社側からの返答があるまでここに留まるべし、と支配人に命

じざるをえませんでした。支配人はこの命に従いました。このことは皆の知るところとなりました。すると、Kh はこれほどの深刻な結果がもたらされたのを見て突然、静かになり、彼とともに全員がおとなしくなりました。クリスマスに彼は私のところに来ましたが、私は会いませんでした。その一方で、M は航海の準備をしていました。Kh は夕方、支配人に深く謝罪しましたが、その後、深酒をして、コリューキンと切り合いをしました。これによって彼の数々の愚かな振舞いにも箔がつかしました。(ここで、神が Kh を死から救われたというきわめて不思議な出来事をお話します。Kh がコリューキンを刺すとすぐに、コリューキンは自分の部屋へ連れて行かれました。Kh はバラノフ氏のもとに残っていました。要塞にいたことのあるアメリカ人が、支配人が危険だと仲間たち全員に知らせました。アメリカ人たちはナイフを持った者を 3 人送りました。3 人は玄関の間に忍び込み、窓の下で耳をそばだてているアメリカ人の最初の合図で彼をずたずたに切り殺そうとしました。しかし、Kh は幸運なことに、友情を誓い、謝罪をした以外にはなにも話さず、そのため死を免れたのです。この 3 人は一晩中、扉に鍵をかけられ、閉じ込められたあとで発見されました。そして彼らがこのことを告白したのです)。

その後、Kh は突然、行動を改めました。Kh は何度もやって来ては涙を流して許しを乞いました。私はすべてを忘れ、彼とともに航海に出発しようと思います。彼の悔恨を信じ、きわめて寛大な心で彼を許したダヴィドフ氏も帯同するつもりです。バラノフ氏やクスコフ、そして Kh に恨みのある他の人びとも、このようなことが再発しないという条件で、これまでの一切の事件について永遠に沈黙を守ることで満足しようとしています。

皆様、以上が彼らの行状です。私が受信した書類や日誌の写しも本状に同封いたします。これらの書類をお送りするのは、人びとを不幸にするためではなく、ひとえに将来の乱暴狼藉を未然に防ぐ措置をとるためです。

当地の[海軍]勤務員が支配人から勤務評価書を受け取ったり、会社総本部が毎年、海軍参議会へ彼らの職歴表を送付したりすべきだと考えております。ロシアにおいては勤務員が乱暴狼藉を働くことは許されていませんが、ロシアの遠隔地ではそれはあまり厳格ではないからです。勤務員が越冬または航海のためにどこに向かおうと、どこにいても、会社の管理者、すなわち支配人であれ現地の誰であれ、この者に対して勤務員の品行方正にかんする勤務評定書を提示することを会社本部の規則で定めるべきです。これはロシアでも行なわれています。つまり、新兵を移動させる際に、その道中にあるすべての村から無礼や抑圧がなかったことを証明する書類を集めています。誠実な人間にとっては、どのような賞賛も不愉快にはならないはずです。

俸給の過払いの件、たとえば Kh らは 1 年半以上の前渡しを受けていましたが、これにつきましては彼らの前借りを止めました。しかしながら、その一方では彼らに生活費を支給しなければ

なりません。どんなことがあっても1か月以上の前渡しはけっして認めないという規則を定める必要があります。本来の秩序を保つためにこのような規則が求められているのです。

安直に判断される方は、私のことを気弱だと非難されるかもしれません。しかし、そのような方は、窮地に追い込まれ、全員が餓死するしかないという私が置かれた立場に立っていただけたらと思います。厳格な措置をとって抑えつけることは賢明な方法ではありません。ただ、当地では管理者は結果を尊重しなくてはなりません。もちろん、彼らの愚行は私にとって高くつきました。とはいえ、忍耐でわが身を守り、最低限の自分の目標に到達しました。私はしかるべき時にこの遠征を遂行するでしょう。この遠征はこの地方に幸福への道を示し、隣人を死から救うとともに、罪人たちには矯正と功労への手段を与えております。さもなければ、私はこの地方を放り出して、運命に身を委ね、ロシアへ戻り、罪人たちを法廷へ送っていたにちがいません。法は、われわれが望むような、隣人に対する寛大さを必ずしも持っているとは限りません。したがって、どのような恥ずべき判決も、感じやすい両親にとっては死刑の宣告と同じなのです。彼らを守るために耐える決意をしました。このような忍耐力は彼らにはないでしょう。自分よりも隣人の利益を考えたことで得たこの勝利は、私があらゆる痛ましい出来事と引き換えに得たものでした。この勝利を心の慰めに、私はどんな嘲笑にも甘んじる覚悟です。私のこの報告をけっして外に漏らさず、そうすることで私のこれまでの誠実さに報いてくださることだけをお願い申し上げます。

皆様にいつまでも完全なる敬意を抱きつづけます。

従順なる僕

ニコライ・レザーノフ

(5)Тихменев П. Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени, ч. II, прил., с. 244-252

(前田ひろみ・小野寺歌子 訳)

12. N. P. レザーノフからアレクサンドル一世への上申書。カディヤクでの滞在について(⑥No. 85)

1806年2月15日

アメリカ北西海岸

ノヴォアルハンゲリスク港

旧ノーフォーク・ズンド

慈愛深き皇帝陛下

私はウナラシユカから、陛下に宛てた前回の報告を謹んでお送りしました。さる1805年7月25日、この島を出発したのち、私は聖マリア号でカディヤクに到着いたしました。カディヤクでは船の修理のために3週間の滞在を余儀なくされたものの、8月26日、ついにノヴォアルハンゲリスク港に到着しました。当地では、ここにふたたび入植したバラノフ氏に会いました。当地の住民[原住民]はカロシ[コロシ]人またはコリュジ人です。この民の人口はかなり多く、さまざまな部族が独自の、互いに独立した長によって統率されています。これまでのところ、彼らはわれわれに対しいかなる襲撃も企てていません。私のもとに3度ほどやって来て、友好を誓いました。しかしそれでも、物の交換はまったく行なっておりません。われわれが防備を弱めれば、当然、彼らがすぐにでも誓約を破って、襲撃してくることをつねに想定しておかなくてはなりません。われわれは絶えず危険にさらされており、すでに不幸な野蛮行為も体験しました。われわれはいつ何時も警戒を少しも怠っておりません。当地の海峡はラッコが豊富です。そのことは、ロシアが広東での毛皮交易を完全に支配し、大きな利益を得ることを約束しています。現在、わが国の領海を訪れているアメリカ合衆国がその支配権を享受しております。しかし、多くの観点から見て、有利な自然条件が壮大な規模の商業へと通じる地域的展望を[わが国に]与えています。われわれにとって幸多き皇帝陛下の御世に神の定めにより恵まれたこの商業は、われらが帝国を全世界の富の分配に参加する海洋大国の一国へと導くでしょう。この功績が後世にとってどれだけ偉大かつ絶大なものになるにせよ、まさしく今、その着手はすべて陛下のご意志にかかっております。

露米会社の施設、地方、商業、商品の生産、そしてまさしくその経営が、かくも有望な商業をするうえでまったく整備されていないことに気がつきました。陛下がご関心をお持ちくださらないのであれば、露米会社は現在、消滅の危機にあります。このたびもすでに、露米会社は陛下のご配慮により破綻を免れております。当社はたった今、自社についての情報を受け取り、その非力を認識するとともに、体力を強化する方法も悟ったからです。当地では、ロシア国人約200人とカディヤクのアメリカ人300人が食料や備蓄のまったくない状況に置かれていました。私自身が体験したのですが、食料を求めて派遣された社有船は性能が低く、そのため最低限必要な食料も受け取ることができませんでした。困窮する前に先手を打って、ボストン人から三樞帆船と一

切の積荷、そして残っていた食糧を買い取ることを決定しました²⁰。この食糧はわれわれの人数からすればわずかな量でした。とはいえ、食事をつつましくすれば、春までもつでしょう。実のところ、帰還した[社有]船は 1 隻もありません。それゆえ、この先も餓死が危惧されておりますので、私はカリフォルニアへ行き、イスパニア政府に食糧の購入を支援してもらえるようお願いしなければなりません。順風が吹き次第、すぐにも錨を上げ出航いたします。神のお恵みがあれば、5 月にも帰還し、ただちに当地で建造中の単檣帆船を伴って日本沿岸へと向かいます。そしてサハリンからそこに住み着いた隣人たちを締め出し、アメリカにおけるわが国の人口を補強するためにこの入植地にこれらの捕虜を送ります。彼らは圧制から逃れ、当地で私の監督下、本当に恵まれた運命を見出すでしょう。のちに彼らの同胞を当地に入植させるときに、われわれにとって彼らは[日本人の]最良の案内人となるでしょう。

恐れ多くも、現在の会社の危機的状況のごく一部を陛下に申し上げ、ご納得いただくつもりはありません。陛下の従順なる臣民の責務として、当地方と商業の改革にかんして私の計画の全容をご提示しなければならぬことを承知しております。ただし今回は、時間不足や収集した情報の不足が忠誠を尽くす妨げとなっています。しかしながら、慈悲深き陛下、私は会社の管理にかかわることすべてを断片的にお伝えしてきました。その中で私は、公平無私で職権の濫用、当地方の問題点、職務怠慢をすべて明らかにしました。同時に、全世界の年代記にロシアの黄金時代を刻み込むべく、陛下のご意志だけを待ち望んでいる巨大な利益と富の源泉についてもご説明いたしました。現在、露米会社は陛下にご支援を求めています。それは会社に期待されている栄光や利益と比べれば微々たるものにすぎません。とはいえ、ご支援がなければ会社は破綻し、国家は壮大な計画の実現に挫折するとともに、当地も喪失するのです。どうか今こそ、新世界において陛下の権力下にあるものについての確実な構想を商務大臣より得てください。私が明らかにした真実は、お情け深い陛下のお心を悲しませるにちがひありません。しかし、数百万の同胞が利益を得て、その利益によって喜ばしいときを増やせば、陛下のご負担も幸福なものになるでしょう。

慈悲深き陛下、今こそ当地に役所や裁判所を整備するという陛下のご意志を実現したいと存じます。しかし、当地出身の市民は存在せず、ロシア国人はみなアメリカに一時的に滞在し、各々が移動生活を送っているため、計画を中断せざるを得ませんでした。このカディヤク島の民もいまだ未開人ですから、彼らが極力気づかない方法で、彼らに社会的な権利の意識を植え付ける必要があります。少しでもこれを彼らの頭に入れるため、陛下の全臣民に下賜された権利を彼らに理解させ、自分たちが平等であることを感じさせました。これを目的に、ロシア国人とアメリカ

²⁰ 史料⑥No.80 を参照。

人がおのおのの中から2名ずつを選出し、そして会社側から5人目を出し、彼らに宣誓させ、「毛皮採集者とアメリカ人の裁判所 rasprava」という名の司法機関を開設するよう命じました。このような裁判所を、会社の管下にある他の場所でも開く予定です。この二つの集団は自分たちの間で起こった民事事件をすべてそこで解決するでしょう。会社支配人は不満を持つ側から先入観で非難されることもあります。こうした非難を免れることができます。その一方では、この地方の形成の第一歩がすでに踏み出されたことになるのです。

カロシ人はカディヤク人よりも粗暴で、楽しみのために蛮行を働くことさえもあります。カロシ人たちはわれわれが完全に無防備になる機をうかがい、それを逃すまいとしていました。しかし、われわれがつねに警戒し、食糧を確保していることを知ると、われわれの手薄な部分を攻撃してきました。彼らはヤクタットを占領し、そこにいた40人以上のロシア人を切り殺しました。老齢なうえ、任務で疲労困憊のバラノフはこの凄惨な知らせを受けて、ふたたび祖国のために身を捧げる決意をしました。バラノフはロスティスラフ号に25名の乗組員と大砲4門を乗せて、ヤクタットを奪還すべく出発しました。バラノフはこの任務を果たしたのち、ただちにロシアへ帰国することを希望していました。しかし、地元精通した管理者を失い、また最良の人材が彼の任務を引き継がず、この地方が取り残されるのを見て、バラノフに対し、ロシアから後継者が派遣されるまで彼が当地に留まったならば、陛下がお喜びになられるだろうと伝えたところ、彼はそれに従いました。バラノフの多大な功績は公正に判断して、勲章に値するものです。私は陛下のご判断にこれを委ねるとともに、子のいない彼に、彼が養育しているアンティパトルとイリーナの2人を養子にすることによってご慈悲をお与えくださいますよう謹んでお願い申し上げます。この2人はバラノフが人間の弱き性ゆえに当地で得たものです。彼はアンティパトルを学校へ行かせています。バラノフは当地の青少年を教育し、陛下にとって有益な臣民にするうえで、他の者たちにとってもきわめて賞賛すべき模範となっております。

この上なく慈愛深き皇帝陛下！ 人として私は、父親が身を捧げたために命を縮めて、あるいは力尽きて子どもたちに会えなくなった場合、この孤児たちの養育をここで陛下にお願い申し上げます。

皇帝陛下の従順なる臣民

侍従長レザーノフ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-7, 1802 г., д. 1, л. 33, л. 81-82. 原本

(前田ひろみ・畠山禎 訳)

13. フリゲート船ユノナ号航海日誌より（オホーツクからアニワ湾まで、およびカムチャツカのピョートル=パーヴェル湾までの復路）

1806年9月27日～11月10日

1806年10月6日午前11時過ぎ、アニワ岬に接近した。(略)私は島民が住む村や日本人が新たに入植した村をより詳しく観察するため、岸から3イタリアマイル²¹以上離れないように努めた。(略)正午、3イタリアマイルの距離を保ったままアニワ岬を通過した。(略)午後6時少し過ぎに、岬から12マイル離れていない地点で最初の村を発見し、投錨する。

10月7日、3時過ぎ、追い風はほとんど止んだため、船の動きも同様に止まった。ボートを海上に下ろした。私は搭載ボート shliubka に乗り込んで海岸に向かったが、湾内補助艇 barkas にはカルピンスキー中尉が武装した16名、ファルコネット砲²²1門をのせて向った。暗くなったため夜8時にやむを得ず帰艦する。上陸の際、われわれは5人のサハリン人の出迎えを受けたが、いずれも50歳以上の年寄りだった。上陸するとすぐにわれわれは身振り手振りで水が欲しいことを伝えたが、ユルタからはたくさんの人々がのぞいていた。私は語彙集をつかって彼らの村がどこにあるか聞き出そうとしたが、彼らは恐れているかのように何も答えなかった。われわれが住民たちを恐れているとか、敵対する何らかの意図があると思わせる根拠を与えないよう、私とカルピンスキー中尉は武器を携行せず、毛皮業者2名を連れて彼らの方へ向かった。山の右側に、サハリン人或いは彼らの自称にしたがえばアイヌ(アイヌ)のユルタが散らばり、その麓には小川が流れていた。4人の男に樽を2つもたせて水を汲みに行かせたが、彼らには銃声がしたらこちらの方へ逃げるよう命じた。ボートに残ったものにも同様の命令を出した。島民は我々を一番高い場所にある他よりも大きなユルタに案内したが、そこには囲炉裏が二つ並び、その周囲に男15人と女6人、子供数人が座っていた。ユルタ全体を囲む台の隅には、日本製の大きな漆塗りの小箱数個、コメがいっぱい入ったさまざまな器があった。われわれは、囲炉裏のそばの日本製のマットレスの上に彼らとともに腰を下ろし、まず、最近ここへどこかの船が立ち寄らなかったかを聞き出そうとしたが、理解できた限りでは船は見かけていないようだった。住民たちはわれわれに、干し魚(ユコラ)と、アイヌが「ウチ ut」と呼ぶ干したゴカイ morskoi cherviak を振舞ってくれた。

私は家の主たちに、長上着やビーズ、はさみ、飾り紐、タバコなどの贈り物をした。その後で彼らははるかに打ち解け、私をボートのところまで見送ってくれた。日本人の住む村のある場所

²¹ 【編訳者補注：1イタリアマイルは、1.489キロメートルの長さ】

²² 【編訳者補注：fornaket を fal'konet のことであると解釈した】

を知りたいのだということをまったく疑われないように努め、別れを告げて船へ戻った。

(略)午前8時、2隻の船で私とカルピンスキー中尉、カルピン副操縦士は同じ村へ向かった。岸に接近する際、搭載ボートには軍旗を、補助艇には商用旗を掲げた。我々の船をすでにたくさん善良なアイヌたちが出迎え、ひざまずいていた。われわれ3人は上陸すると単語をならべて、われわれロシア人が彼らの友人であることを説明しようとしてつとめた。私は海岸に旗竿を立てるよう命じ、そこに軍旗と商用旗を揚げさせた。船の方を指し示しながら、全員に手ぬぐいや様々な小物を贈り、6丁の銃を3発ずつ鳴らして、トヨン、つまりこの集落の長に上等の長上着を着せ、ウラジーミル勲章綬のメダルを授与した。船ではこの銃声ごとに大砲が発射された。アイヌたちは銃声に怯えることは決してなかったが、大砲が火をふいたのにはびっくりして頭を抱え込んだことをここで指摘しておくべきである。集落の長にはメダルとともに、「1806年10月、フヴォストフ中尉率いるロシアフリゲート船ユノナ号は、サハリン島とこの島の住民をロシア皇帝アレクサンドル1世陛下の庇護下に受け入れる印として、アニワ湾東岸にある集落の長老は、ウラジーミル勲章綬の銀メダルを授けられた。ロシア船、外国船を問わず当地を訪れるいかなる船も、この長老がロシア臣民であることを認めるよう要請する」と記した書面を手渡した。この文書には私が署名し、下に自分の判を押して、両脇に二つの旗の絵を描いた。この紙をファンザ²³で巻いて長に手渡した。メダルを授与する際、アイヌたちにその像がロシア帝国を表していることを説明すると、アイヌは地面にひれ伏した。われわれは聖なる像としてそれに口づけをし、集落の長はメダルとファンザをこの上ない特別な贈り物として受け取った。私は語彙集からことばを探し出し、ここにある武器はアイヌが身を守るためのものであると話した。カルピンスキー中尉とカルピン副操縦士が、ここに日本人はいるかと尋ねたところ、アイヌたちは笑いながら、いないと答え、近くに建てられていた一軒の小屋を指差した。小屋の中で我々はその箱、(略)他のごく簡単な建物を見つけた。アイヌたちはわれわれを昨日訪ねた同じテントに連れて行ったので、われわれは村全体と新たな帯勲者に贈り物や与えた。われわれはそこで昼食をとり、アイヌたちにロシアの食べ物を振舞った。集落の長は友情のしるしとして人間の形に削った二本の棒を私に与え、さらに日本製の茶碗や様々な小物を贈り物として持って来たが、私は受け取らなかった。手代に、品物の交換を試してみるよう命じたところ、アイヌたちは、品物はすべて日本人が持って行ってしまったと身振りで示し、交換品として彼らが何も要求しなかったラッコの尻尾2本以外に村中で何も見つけられなかった。昼食後、私は新しい知人たちと一番高い山に登ったが、第一にこの地域を概観し、日本人の大規模な入植地がどこにあるのか指し示してくれるのではないか見るためであった。アニワ湾自体は、地図に記されているほど北には広がっておらず、その位置はコス

²³ 【編訳者補注：中国製の精巧な絹織物】

トリコムトリスコムの船の地図のものに近い。私は様々な方位から湾全体の状況を回って見るように努めた
が、これは私の遠征の第一の目的ではなく、絶え間なく突風が吹きつけ、岸に運び込むためにボ
ートが多数必要で、時期も遅くなっていたので、私はアメリカへの帰還を最優先課題に設定した。
アニワ湾やカラフトのいくつかの岬の記録は断念したものの、日本人の入植地を探そうと努めた
が、それは来春、それもできるだけ早くのことだが、この遠征を復活することが好都合になるな
らば、アメリカ会社の利益となり、日本の商業とニッポン、松前周辺マツマエでそれを行っている人々
に対し、より大きな損害を与えることになるだろうと考えたからである。

(略)10月11日、サハリンでの日本人の入植が年々増えていることが明らかになる。わずかな調
査の中でわれわれは非常に多くのことを知ることとなった。われわれが島で訪れたどの集落でも、
また岸から少し離れた場所でも、日本人による初歩的な建物、納屋、たくさんの切り出された木
材、挽き板を見ることができたことから判断して、まもなくアニワ湾岸全体に日本人が入植する
ことは間違いないと考える。アイヌの人々にこの湾の名前を尋ねると、カラフト、と彼らは答え
た。日本人はどこに住んでいるか、という質問に対しては、われわれのいる場所から北西微北
NWTNの方角にある二番目の岬を指さし、われわれの船を指さして、彼らを討たなければならない
と笑った。そのときすでに午後5時をまわり、暗くなり始めていた。私は集落の長(メダルを
授与した者)ともう一人の住民に、いっしょに船まで同行してくれるよう頼んだ。一日中、80度²⁴
の方角から吹いていた風は弱く、正午に観測したときの緯度は46度04分だった。私の客人たち
ははじめ陽気にしていたが、ボートを引き上げ始めた時、その音に怯えて、シャーマンの儀式の
際のカムチャダール人やヤクート人のように低い声で歌い始めた。私は集落の長が手彫りの棒を
2本くれたことを思い出し、それが友情の証であることを理解していたので、すぐにそれを手渡
したところ、彼らはまもなく落ち着きを取り戻した。その後この友情の証を見せればどこでも、
われわれから棒を受け取る代わりに別の棒をくれた。

明け方、客たちにさらに多くの贈り物をし、岸まで持って行くよう命じたところ、彼らは搭載
ボートで岸まで向かう間ずっと船上で踊り、さらに同様の棒を2本送り届けてきた。

午前11時、北北東の風が吹く中、錨を上げ、全ての帆を張り、(略)できるだけ海岸線近くを(略)
航行する。3時、2つの大きな集落と、もう1つの小さい集落を発見する。水深14サージェンの
地点で投錨して、ボートを海上に下ろした。3時半、岸へ出発した。武器を積んだ搭載ボートに
カルピンスキー大尉、補助艇にイリイン航海士が乗り込み、もしもその集落に日本人がいなけれ
ば住民に贈り物をし、もしも(日本人が)いたら、できるだけ穏やかに対処してすばやくフリゲート
船へ戻ることになった。6時、風が吹き始め、やがてかなりの強風になった。ボートに艦の位置

²⁴ [編訳者補注：一応、角度を示すものとして訳したが、風力を示す尺度の可能性もある]

を知らせるため、大砲を打ち灯芯²⁵に火をつけたが、夜は真っ暗闇に包まれ、水平線は雲に覆われ稲妻が光り始めた。8時、岸からボートが戻ってきた。カルピンスキー中尉とイリイン航海士は2つの大きな集落を訪れたが、集落には若者はまったくおらず、老人と子どもばかりだった。カルピンスキー中尉はメダルを一つ渡されていたが、それを身につけてはいなかった。というのも集落で日本人の納屋を3軒見つけ、日本人は皆逃げってしまったと考え、アイヌたちに贈り物をし、水を求めるふりを装いながらフリゲート船へ戻ったからである。

午前9時、私とカルピンスキー中尉は11人の兵士を連れ、2隻の船で岸へ向かった。3つの集落あわせて男12人、女5人以上はおらず、男は全員50歳以上か病気の者だった。最初に訪れた集落と同様の敬意を示すために、その中の一番地位の高い者にメダルを与え、長上着や、鹿皮の冬用上着²⁶、スカーフ、ブーツ、斧や、様々な飾り物を贈り、その納屋が誰のものなのか尋ねた。彼らは日本人のものだと答えた。納屋を見て回り、炉に固定された日本製の大きな釜や、さまざまな種類の本製の器、切り出されたたくさんの木材や挽かれた板、屋根葺き用の草を見出した。しかし、日本人は一人も見なかったので、彼らに敵対する意図を有するきっかけになるようなことは何も起こらなかった。

海岸で昼食をとったが、善良なアイヌたちもわれわれの食べ物をすさまじい食欲で食べた。彼らには銃を2回手にとらせて撃ち方を教えたが、弾が板を撃ち抜くと、銃のそのような威力を見て、皆は驚きのあまり手を上げて頭を傾け、突き抜けて飛んだ弾を探した。われわれの仲間の一人が偶然太鼓をたたいたとき、彼らが急に身を震わせたのに気づいたので、私はもっと太鼓を叩くよう命じた。まさにこの時、一人の若い女が頭を回しながら恐ろしい声で叫び、いろいろな不自然な身振りを始めた。私はすぐに太鼓をたたくのを止めるよう命じ、その若い女を説き伏せつつ頭をなでて、やっとのことでその興奮を静めさせることができた。その時、老人の一人がその女をそのままにしておくように知らせてきた。私は女から離れ、この瞬間女の中に悪魔が入り込んだのだと説明したが、ちょうどその時、別のアイヌの男がさっとナイフをつかんだので、私も鞘からサーベルを抜かざるをえなかったが、実際にはそれを使うことはなかった。この女シャーマンが完全に落ち着いた時、我々は彼女にスカーフ、鉞、さまざまな飾りなどを贈った。彼らにとってはかくも高価な贈り物の後で、女はすぐに太鼓をたたき始めた。カルピンスキー中尉は女に、我々をシャーマンの儀式で驚かそうと企み、今しがた騙しただろうと言うと、女は狡猾そうに笑ったが、老人たちが女をかばった。アイヌたちはわれわれに、近くの岬に日本人が住む大きな村があると教えてくれた。この村の長のユルタには、〈1806年10月10日、ロシアフリゲート

²⁵ 【編訳者補注：ロシア語原文は *fil'shmeriy* だが、*fitil* あるいはそれから派生した言葉であると類推した】

²⁶ 【編訳者補注：ロシア語原文は *piarna* となっているが、*parka* のことと解釈した】

船「ユノナ号」がここを訪れた」と書いた銅製の板を打ち付け、この村をスムニューニエ(疑念)と名づけ、アイヌたちには飾り物を贈り、この板を大切にしよう命じた。(略)

午後4時、フリゲート船へ向かったが、我々がアイヌたちに友好的であることを示し、彼らがいつでも我々のところへ安心してやってくるようにするため、アイヌの若者一人を連れてきた。(略)

(略)8.5 露里進んだところで、大きな集落を見かけた。案内人は、これは日本人の兵舎と商店であると言った。7時に、錨を下ろす。もう遅い時間だったので、朝まで上陸はしないことにした。夜、このサハリン人に胴着[fufaika 綿入れの胴衣]とフロックコート[sertuk、 siurtuk とも]を着せ、私がメダルをつけた。彼はどんな宝物よりもその贈り物に満足しているようだった。彼からサハリンの言葉を聞き出そうといろいろたずねた。彼はこの村には人や米も多いと我々に話したが、日本人たちがアイヌたちをひどく殴るとこぼした。その後、われわれはたくさんの身障者や刀傷を負った者を見かけたが、日本人たちが善良なアイヌたちを無慈悲に扱っているようである。

午前6時、(略)すべてのボートを海上に下ろした。私とカルピン副操縦士は搭載ボート、カルピンスキー中尉は補助艇に乗り込んだ。さらに小型ボートialとカヌーも引き連れて行ったが、全部の船に計22人の兵士、ファルコネット砲1門、大型の火縄散弾銃2丁を乗せた。フリゲート船に残るイリイン航海士には、銃やファルコネット砲の音を1発でも聞いたら、フリゲート船に残っているボートに砲弾を詰めた陸上用銅製大砲と大勢の人間を乗せ、陸へ送るよう命じておいた。岸へはすべての船が一緒に到着したが、そこには長さ約12サージェン、幅約5サージェンの日本人の兵舎が建っており、その壁は精巧な指物作業による薄い板でできており、窓は屋根から地面までの大きさがあり、たいへん薄くて柔らかい紙が張られていた。兵舎の周囲には棒の塀がはりめぐらされていた。8人の島民がわれわれを自由に通すために杭を何本か取り除いた。私は部下たちに銃をピラミッド型に立てかけるよう命じ、ボート1艘に1人ずつ、補助艇のファルコネット砲に2人を残した。サーベル以外の武器はもたず、われわれ3人は兵舎の中へ入ったが、そこでは三か所で火が燃え、最初の2か所には70人ほどの若いアイヌが座っていた(後でわかったことだが、日本人たちが近隣のすべての集落から、病人や年寄りを除いた若くて健康な人間をすべて自分たちの作業にかり出していた。そのため、訪問できたどの村でも中年のアイヌは一人も見かけなかった)。他よりも高いところにある3か所目の火のそばには、マットレス²⁷の上で、4人の日本人が座ってタバコをふかし、その左側には身ざれいな格好をした年寄りのアイヌが5人座っていた。彼らは名誉島民だった。私が日本人に、われわれはロシア人であり、われわれを恐れないでほしい、と述べたところ、日本人はいつものように頭を下げ、手を上げてそれに答えた。

²⁷ [編訳者補注：matrats 莫産か畳、或いは敷布団のことか？]

日本人の一人が島民たちに合図をすると、全員がつぎつぎに「ヤンゴラ！」(サハリン語で「こんにちは」の意)と叫び、さらにわれわれの理解できないことばをつぎつぎに叫んだ。その後、日本人は私に長崎^{ナガサキ}と江戸^{エド}の地図が載った本を渡し、自分たちは日本人であると言った。日本人はわれわれに粥をふるまい、スプーンの代わりに細い棒を手渡してくれたが、われわれのうち誰もその棒で食事をする事ができなかった。さらにわれわれは日本人の小屋をたくさん目撃していたので、もしもそれらが米でいっぱいなら、後で手に入るかもしれないと考えていたが、それは間違いではなかった。カルピンスキー中尉と副操縦士は会話で日本人の気を引くために残ったが、私はピストルに弾をつめて、美しい建物の立つ山へ向かい、それから倉庫の方へ歩いていった。倉庫のうち5つは施錠され、残りの4つは開いていた。扉の隙間からのぞいてみると、施錠された倉庫の中には品物がいっぱい積まれているのを見出したが、それ以上そこに留まるのはやめにした。建物から私を見張っている人々に二度気付き、好奇心が命取りになるかもしれないと心配になり、私は日本人の兵舎へ戻った。

カルピンスキー中尉は3人の兵士と兵舎の南側の扉、コリューキン副操縦士は兵舎の西側の扉をかため、銃を持たない7人が縄だけで日本人を包囲した。残りの連中はボートのそばで直立不動の姿勢をとった。私の一声を合図に、日本人の腕を掴んで捕まえたところ彼らは何か叫び始めた。サハリン人たちはすぐに扉の方へ突進したが、他の者たちはナイフをつかみ、日本人を解放すべく飛びかかろうとした。私は空にむけて銃を数発発射させ、サーベルを抜いた。島民たちは日本人たちが捕らえられたのを目撃し、銃声に驚き、私の説得になんら耳を貸さずに、南側の扉に殺到した。交差させた2丁の銃も住民たちを制止できず、扉のそばに立っていたこの二人の見張りは負傷した。もしも、カルピンスキー中尉とコリューキン副操縦士が鋤や斧が置いてあった場所を自分たちで占拠せず、住民たちがそれを手にしていたら、きっと流血の事態となっていたに違いない。日本人たちはすでに縛り上げられていたが、そのうちの一人はたいそう力が強く、大男3人がかりでも抑え込むのに難儀していた。その男は自分の力が勝っていることを見て取ると、ナイフで縄を切って逃亡を試み、我々の部下の一人を殴った。私はその男のナイフの一撃をすんでのところでサーベルでかわすことができた。私はすぐに監視をつけて日本人たちをボートへ連行するよう命じたが、そのボートは1人を残してフリゲート船へ彼らを運んだ。イリイン航海士は、岸から銃声が聞こえるとすぐに、フリゲート船から銅製の砲と7人の兵士を乗せた最後のボートを送ってよこした。その間にアイノたちは全員四散していた。イリイン航海士は、教育を受けた人あるいは兵士たちと、私が指揮をとっていたならず者たちとの違いをはっきりと目撃することとなった。彼らに射撃や規律を教え込もうとしたすべての努力は徒労に終わった。各人が自分の行きたいところへ走り去ったので、カルピンスキー中尉とカルピン副操縦士がいなけ

れば、おそらく部下たちを集めることはできなかつただろう。

私が最初に努力したのはサハリン人たちを安心させることだった。私は一人で川向こうの彼らの集落(その位置は添付の地図を参照)へ出かけた。私は彼らに怖がらないよう、ロシア人は彼らに何もひどいことはしないと繰り返し説明した。10人ほどがおどおどした様子でひざをついて座り、他の者たちはユルタからひそかに覗いていた。私は彼らにタバコを振る舞い、飾り紐を贈った。その後、一緒に囲炉裏のそばに座った。アイヌたちは私が彼らを怖がっていないことにたいへん驚いていた。アイヌたちの元を去り、すべての倉庫の鍵を保管していた日本人を連行した。彼がこれらの倉庫の鍵を開けたとき、そこにあった蓄えに目を見張った。時間を無駄にしないよう、米でいっぱい倉庫から米をボートまで8人の兵士が防御しながら運ぶよう命令した。しかし、船は積み荷がいっぱいだったので全部の倉庫どころか、一つの容器²⁸も積み込めないことがわかり、悔しい思いをするほかなかった。その上、強い風、とりわけ6日の強風は、帆走時と異なり、停泊中の船には被害をもたらした。(略)

贈り物や優しい言葉で、サハリン人たちがより大胆になってきたので、さらに励ますべく、品物の詰まった倉庫の一つを与え、そこにあるものは自分たちのものにしてよい、そのあとでわれわれの積み込みを助けてほしいと述べた。まもなくして、サハリン人はいたるところから集まってきた。品物を倉庫から運び出しはじめ、自分たちのユルタへ運んでいった。私のそばにいた日本人が彼らになにか乱暴なことばを投げかけると、彼らは皆方々に逃げてしまった。積荷をのせた最初の船でその日本人をフリゲート船へ連れて行くよう命じたところ、サハリン人たちはひどく感激したようだった。すでに日本人が一人もいなくなったことがわかると、アイヌたちは全ての集落からたくさん集まってきた。倉庫は半時間も立たないうちに空っぽになった。その後さらに、岸にあった日本人のボート2隻からも米を積み込み、そのボートを私は自分たちの船の警護のもとでフリゲート船へ送った。今日一日、すべてのボートが陸まで二往復した。

(略)午後5時、建設用の丸太や板、網などがたくさん積まれていた、風下の3軒の倉庫に火をつけるよう命令した。島民たちは初め、火事を怖がっていたが、われわれの兵士が、彼らのユルタまで燃え広がらないよう、日本人が屋根用に備蓄していた草に水をかけているのを見ると、両手を上げて跳び上がって喜んだ。火が消えると、カルピンスキー中尉が兵士15名を引き連れ銅製の大砲とファルコネット砲とともに御堂の立っていた丘を占拠し、合図を送ってきたので、私はフリゲート船へ戻った。

(略)午後9時、私とカルピン副操縦士が岸へ向かった。カルピンスキー中尉は私の不在中、もっとも尊敬すべき長を見つけ出し、可能な限り豪勢に贈り物を与え、三発の大砲を鳴らす中で彼

²⁸ [編訳者補注：ロシア語原文 kryna を urna のことと解釈した]

の首にメダルをかけた。この行いのために彼は自分の仲間約 50 人を集めねばならなかった。この日、3 隻の日本人の船は驚くべき機敏さで、5 回往復した。岸についてみると、我々の船に積荷がつめ込まれすぎ立錐の余地がなかったので、サハリン人たちには欲しい物を日本人の倉庫から持っていくことを許した。彼らがフリゲート船へやってくるたびにウォッカ、油、乾パンを振る舞ったが、この中ではウォッカが一番のお気に入りのように思われた。さらに 2 人の尊敬すべき島民にメダルを与え、初めの長に渡したのと同様の文書をそれぞれに手渡した。その際に長上着や様々な飾り物も贈った。午後 6 時、武器とすべての兵士をボートに集め、フリゲート船に向かった(略)一晩をかけやつのことで積荷を片付け、帆を補修することができた。

午前 8 時、私とカルピンスキー中尉、カルピン副操縦士は、サハリン人たちに別れを告げ着手した仕事をやり遂げるべく岸へ向かった。上陸後、海岸ではアイヌたちの姿をほとんど見かけず、(略)その後、日本人の残りの倉庫を見て回った。倉庫はまったく空になっており、壁や屋根の釘までもが持ち去られていた。あれほど多量の品物を短時間にどこへ運べたのかと驚くが、この近くに人口の多い集落があるにちがいないと判断した。その後、遠くからこちらを観察する住民と、丘の上から補助艇と船上の大砲をむさぼるように眺めている者たちの姿に気づいた。われわれはまったく気にせず、銃をピラミッド状に立てかけ、昼食を取り始めた。用心のため、5 名の兵士を約 2 ヴェルスタの間隔をあけて近くに集落がないか巡回に行かせた。そのとき、日本人に唆された島民の不快な目論見が発覚した。われわれは彼らが密かに銃の方へ近づいていくのに気づいたのである。気づいていないふりをしていたところ、まもなくして巡回の兵士が戻り、ここから 3 ヴェルスタ足らずのところ大きなユルタが二つあり、そこにたくさんのアイヌたちが集合していると述べた。われわれの兵士がそのユルタへ行き、外へ出てきた者たちにさまざまな飾りを贈っていたとき、ユルタから数名の若い島民がとつぜん飛び出してきて 2 人の水兵を捕まえて引きずって行ったので、彼らは身を守る暇もなかった。他の人々も残った兵士から武器を取り上げようと襲いかかったが、水兵たちが所持し彼らの関心を引いた品物を取り上げるという意図からか、あるいは他の理由からだろう。兵士の一人が空に向かって銃を撃ったところ、アイヌたちは驚いて全員その場から逃げ出した。このような不快な行いに会ったので、私はやむをえず数名を捕えさせた。まもなく犯人のうち 4 名が私のところに連行されてきたので、私は報復や脅しのかわりに贈り物、南京木綿、鉄、ビーズを贈り、食事をふるまい、その後、単語集を使って、いかなる理由で兵士を襲ったのか、その日なぜわれわれの元へやって来なかったのかについていろいろと尋ねた。すると彼らは、フリゲート船に乗っていたとき、日本人が彼らを脅し、そうすれば自由になれると断言しながら、ロシア人をどのように殺害すべきかを教え込んだのだと、手振り身振りや単語を並べて知らせようとした。その後日本人からも、この話がほんとうであることを

私は確認した。

1時間後、およそ30人のサハリン人がやってきて、捕らえられた同胞たちが少しも酷い目にあうことなく、逆に贈り物を受け取り親切にされているのを見て、たいそう喜んだ。彼らは北西の方角にさらに2つの日本人の居留地があり、それを恐れていると述べ、自分たちを守るために残ってくれるよう我々を説得した。

すでに暗くなり始めていたが、日本人により大きな損害をもたらし、改めて一仕事させるべく、私はこのとき残っていた倉庫と紙でできた兵舎、御堂に火を放つよう命じた。島民たちは熱心にそれを手伝ってくれた。船へ戻るとき、兵士が食料用として、各ユルタに1頭から数頭飼われている熊を1頭殺させてほしいと頼んできた。兵士の一人が銃をもって熊に近づくと、アイヌたちは全員が駆け寄ってひざまずき、熊に触れないよう頼んだ。このことから私は、アイヌたちが、この獣の力の優越性に関してある種の敬神を抱いていると理解した。島民たちが、自分たちが食べる前にその食事を熊に与えているのを私は何度か目にしていた。約100日の間に増えていた壊血病患者の回復のためには新鮮な食料が必要だったが、彼らの願いを聞き入れ、熊に触れないよう命じた。この後、島民たちはいっそうやさしくなった。

火がおさまって船に戻る時、御堂があった場所の門に、以前と同様の板を打ち付け、その村に「リュボピツトヴォ(好奇心)」という名をつけた。船に戻ると、すべてのボートを引き上げるよう命じた。日本人たちはまったく無関心そうに火事を眺め、とても陽気だった(略)火を放った場所は、北緯46度23分、東経144度00分である。

(略)12時30分、弱風のもと錨を揚げアニワ湾を出た。(略)

ニコライ・フヴォストフ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 46-53.

(前田ひろみ・寺山恭輔 訳)

14. 海軍中尉 N. A. フヴォストからマツマイ知事あての文書

1806年

フヴォストフより^{マツマイ}松前知事 gubernator へ

日本の隣接国であるためロシアは、この帝国[日本のこと]臣民の真の幸福に向けて、友好的な関係と通商を望まざるをえません。そのため、^{ナツツキ}長崎へ使節団が派遣されました。しかし、これを拒否されたことはロシアにとって屈辱であり、ロシア帝国の領土であるクリル列島及びサハリンで日本人が交易を拡大しているため、この大國[ロシア]は、ウルップやサハリンの住民を通じて我々

との交易を望むと知らせない限り、ロシア人は常に日本人の交易に損害を与えうるのだということを示すような別の措置を取らざるをえませんでした。ロシア人は今回、日本帝国にかくも微々たる損害しか与えませんでした、このことによって日本人には、日本の北部はいつでもロシア人によって損害を受ける可能性があり、日本政府が今後も頑なな態度を崩さなければ、その土地を失うことになるだろうということを示したかっただけなのです。

(3)РГИА, ф. 1264, оп. 1, д. 577, л. 35-36. 写し

(オイドフ・バトバヤル、寺山恭輔 訳)

15. 海軍中尉 N. A. フヴォストフによるロシア帝国のサハリン島領有宣言²⁹

1806年10月12日

1806年10月12(24)日、ロシアフリゲート船ユノナ号はフヴォストフ海軍中尉指揮の下、サハリン島ならびにその住民がきわめて慈悲深きロシア皇帝アレクサンドル一世の保護下に入ったことを証し、アニワ湾西岸に位置する村落首長にヴラディーミル大綬の銀メダルを授与した。よって来航する船舶はロシア船、外国船を問わず、上記首長をロシア臣民として遇されんことを請う。

ロシア海軍中尉フヴォストフ

「ここに我が一族の紋を押す」

(4)Дружинин Н. М. Русские мореплаватели в старой Японии. Ленинград, 1924, с. 49.

(藤原潤子 訳)

16. カムチャツカ地方統治者、陸軍少将 P. I. コシェレフから商務大臣 N. P. ルミャンツェフ伯爵への上申書

1806年12月2日

今秋、ペトロパヴロフスク湾に皇帝陛下の庇護下にある露米会社の船舶が到着いたしました。最初の船はオホーツクから9月8日に到着しました。(略)2隻目はカディヤクから9月12日に到着したロスティスラフ号です。3隻目は9月30日にアメリカのノヴォアルハンゲリスク港から到

²⁹ [訳者補注: 本史料は A. A. キリチェンコ / 伊賀上菜穂訳「海賊船ユノナ号とアヴォシ号——ロシア側当事者の行動から見る樺太・択捉島襲撃事件」『東北アジア研究』第6号、2001年、84頁に訳出されているが、日付、西岸の部分が違っている]

着した、海軍少尉ダヴィドフ指揮下の単檣帆船アヴォシ号です。そして4隻目はさる11月8日、オホーツクから到着した、海軍中尉フヴォストフ指揮下のフリゲート船ユノナ号です。

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 3.

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

17. 露米会社総本部からアレクサンドルー世への上申書

1806年12月15日

至高、最強、偉大なるロシアの君主、皇帝、専制者に宛てた

露米会社総本部よりの

恭順なる上申書

オホーツクで会社業務を管理する手代は、当社総本部宛にさる10月31日付の通知をヤクーツクからの急使便にて送信し、[総本部は]本日、これを受信いたしました。以下、ご報告申し上げます。

一、9月15日、社有船ユノナ号がシトハ島よりオホーツクに到着いたしました。この船はかの地でポストンの航海者[ド・ヴリフ]から購入したもので、海軍中尉フヴォストフが指揮しております。

一、侍従長レザーノフも同船で帰還しました。レザーノフは同9月24日にオホーツクを発ち、アルダナ川まで60露里、ヤクーツク市までは400露里の地点で、過酷な旅のために大病を患いましたが少し回復し、10月23日にヤクーツクに着きました。この地でふたたび激しい発作に見舞われましたが、ヤクーツクに滞在する医者のおかげにより完治する見込です。

一、前述のユノナ号はレザーノフにより、オホーツクからシトハ島へ返されました。

一、会社の業務にかんする続報をすみやかに通知できなかったことを手代がお詫びしております。

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 2.

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

18. 陸軍少将 P.I.コシエレフからアレクサンドルー世への上申書。海軍中尉 N. A.フヴォストフが
指揮する秘密遠征隊のカムチャツカ到着について

第 466 号

1807 年 2 月 28 日

ニジネカムチャツクより

皇帝陛下への
陸軍少将コシエレフの
上申書

私は、さる 1806 年 12 月 14 日付第 3003 号文書にて、フリゲート船ユノナ号で海軍中尉フヴォストフ指揮の秘密遠征隊が入港したことを、皇帝陛下にご報告申し上げる榮譽にあずかりました。しかし、この遠征がどのようなものなのか、誰の命を受けたのか、どのような目的で遂行されたのかにつきましては、フヴォストフが私に寄こしたいくつかの文書からは明らかにはなりません。しかし最近になって、私は書簡や噂話から信頼に足る情報を得ました。この遠征は侍従長である帯勲者レザーノフの命により、あたかも皇帝陛下のご意志にもとづいているかのように実施され、先に皇帝陛下の使節が日本宮廷によって拒絶されたことへの報復として、日本沿岸へ行き、彼らの集落を破壊することを目的としておりました。このことは、実際にフヴォストフからもすでに伝えられました。さる 1806 年、この者がペトロパヴロフスク港に到着し、日本人 4 名を連行し、大量の米、その他の物品を運んで来たのを私自身も目にしました。彼らはサハリン島を武力で占領し、日本に属している住居を焼き払い、破壊したかのようなことを言っております。噂によりますと、この春、フリゲート船ユノナ号と単檣帆船イヴォス号[アヴォシ号]の 2 隻の船からなるこの遠征隊はマトマイにも向かう計画を立てております。以上を皇帝陛下にご報告申し上げます。

原本と相違なし：レフレフスキー

(3)РГИА, ф. 1286, оп. 1-1807 г., д. 75, л. 2. 認証済みの写し

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

19. 陸軍少将 P.I.コシエレフから N.P.ルミャンツェフへの書簡

1807 年 2 月 28 日

ニジネカムチャツクより

私は、さる 1806 年 12 月 14 日付第 3006 号文書にて、フリゲート船ユノナ号で海軍中尉フヴォ

ストフ指揮の秘密遠征隊が港に到着したことを、閣下へご報告申し上げる榮譽にあずかりました。しかし、この遠征がどのようなものなのか、誰の命を受けたのか、どのような目的で遂行されたのかにつきましては、フヴォストフが私に寄こしたいくつかの文書からは明らかにはなりません。しかし最近になって、私は書簡や噂話から信頼に足る情報を得ました。この遠征は侍従長である帯勲者レザーノフの命により、あたかも皇帝陛下のご意志にもとづいているかのように実施され、先に皇帝陛下の使節が日本宮廷によって拒絶されたことへの報復として、日本沿岸へ行き、彼らの集落を破壊することを目的としておりました。このことは、実際にフヴォストフからもすでに伝えられました。さる 1806 年、この者がペトロパヴロフスク港に到着し、4 名の日本人を連行し、大量の米、その他の物品を運んで来たのを私自身も目にしました。彼らはサハリン島を武力で占領し、日本に属している住居を焼き払い、破壊したかのようなことを言うております。噂によりますと、この春、フリゲート船ユノナ号と単檣帆船アヴォシ号の 2 隻からなるこの遠征隊はマトマイにも向かう計画を立てております。

以上を閣下にご報告申し上げます。

1807 年 2 月 28 日、ニジネカムチャツクより

送信。

1807 年 7 月 29 日、サンクトペテルブルグにて受信。

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 8.

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

20. 海軍中尉 N. A. フヴォストフから N. P. レザーノフ宛の報告

【日付不明】

(略)閣下は、その指示書の中で単檣帆船アヴォシ号に第 16 島[シムシル島]の入り江を調査、記録し、その後、アレクサンドロフ島、別名ウルップ島へ向かい、そこでズヴェズドチョトフを見つけるよう(略)と命じられました。

(略)私がカムチャツカでこの単檣帆船と合流した際、この船の指揮官[ダヴィドフ]は、(略)彼に命じられていた任務の遂行が失敗したこと、すなわち病人の数、帆の状態の悪さ、水と薪の不足などについて、すでに第 1 便にて報告したということをお教えしてくれました。

(略)私に与えられたこの指令にしたがって遂行すべきでしょうか。第 3 項にはこの遠征に着手せざるをえない諸要因が述べられ、指示書の第 4 項では、日本人の居留地を破壊するためにサハ

リン島へ〔行き〕、集落を焼き払い、役に立つ人間と物資を連行し、残りの者には、我々がいつも行う用意のある交易をする目的以外でアニワ湾を訪れないよう述べること〔と書かれていた〕。

(略)

(略)9月24日に錨をあげオホーツクから定められた航海に出発しましたが、指示書から、日本人は10月以降いなくなるので、アニワ湾で〔日本人の〕船を見つけようと急ぎました。

(略)10月6日アニワ湾に入港し、11日に日本人の居留地を見つけましたが、フリゲート船ナジェージダ号が寄ったのはまったく別のものでした。さらに2、3の居留地があると日本人とサハリン人が私に語りましたが、確実なことは言えません。10の倉、一つの兵舎、一つの御堂、さらに4人の日本人から成る集落に対して私は第4、5項に従って行動しました。船に積めるだけの米、塩、魚網、鉄釜、様々な小物、そして日本人を奪いました、(略)島民だけでなく日本人に対しても非常に穏やかに対応しました。私は船上で彼らに完全な自由を与え、彼らの所持品を全て返してやりました。彼らがそれぞれ二つとった新しい(略)の長持にある所持品の中には、服を除いて何ら貴重なものはありませんでした。

(略)あちこちの村落でサハリン人6名にメダルをかけてやり、その際、彼らに気前良く贈り物をし、日本人の豊かな倉の横領を許したため、彼らの心をロシア人に結びつけたように思えます。しかしながら、ロシア人が日本人を追い出す意図を持ってサハリン島に第一歩を踏み入れたまさにその瞬間から、あわれなアイヌ人達は日本人のくびきを感じて以前より不幸になってしまいました。彼らにとって大変貴重な戦利品にむさぼるように飛びついたのですが、もしロシア人が自分たちをこの野蛮な民族(サハリン人達は彼ら〔日本人〕をこう呼んでいます)から守ってくれなければ、この行為のために自分達は殺されることを理解していたからです。

私は御堂を船に持ってきましたが、まったく見事に作られた祈禱のための聖堂を移すことができずに残念に思い、そのため、御堂とすべての日本人の建造物を燃やしました。一方で、原住民のユルタは部下に命じて火災から守らせました。(略)

(略)これを燃やそうと決め、割れた古板を幾枚かサハリン人に与えました。この居留地から船に積みこんだのは約1,000ブードの米、約100ブードの塩、約100枚の魚網、いくらかの繊維〔麻または亜麻製の〕、鉄製大釜4個と小釜約20個(前者はカムチャツカでの製塩に非常に有用)、茶碗2箱、数十本の斧、鎌、小刀です。この中には日本人達の衣服は数えていません。私達が奪った全てのものは、そこにあったものの四分の一にもなりませんでした。オホーツクの積荷によって狭くなっていたのでそれ以上船に積み込めませんでした。岸に碇泊していた8艘の日本人の小舟と、彼らが時々松前^{マツマエ}に乗っていくかなり大きい帆なし船1艘は、灰と化しました。

第8項では、日本人がクリル列島のどの島々に自分達の施設を持ち商取引を行っているか知る

ように命じられています。このことに関して、私は日本語を知らないので確実なことは言えませんが、彼らの施設はウルップ島にあるのではないかと推測しますし、少なくとも夏になると漁のために数隻の船がこの島を訪れており、日本人たちも時々地図で指し示しています。

サハリンに関して(略)4月半ば、それぞれに船長1名、商人1名、12～30名の使役人を載せた5隻の船が^{マトマイ}松前からアニワに出航します。(略)

米と塩を運び、5月末に、何層も厚く塩を撒いて鮮魚を積み込み、7月初頭に^{マトマイ}松前に向けて出航し、航海中にはほぼ毎回、この交易に従事し最初の5隻同様に積載されていることが多い残りの6隻の船と出会います。これらの船も9月の始めか時にはそれより遅く、帰還します。アニワには冬期、そこに3年住んでいた3名の商人と1名の手代しか残っていませんが、4年目には越冬のために彼らを船でカムチャツカに連れてきました。(略)

(略)私が捕らえた日本人達はその言葉で話します。(略)

また、御堂と私が注目に値する考えるものすべて、特に書籍類と薬を(略)。最後のものすべてに目録を添付します(略)海洋博物館に2部送ることをお許し願います。

(略)第4項では仏教僧を捕らえるよう指示されていますが、本格的な御堂が一つもないためアニワ湾では一度も見かけず、ペンチム・シム³⁰と呼ばれる船の偶像だけが残されています。この像はサハリンに最初に来た船がアニワ湾に設置したもので、船でアニワに着いたり出航したりする日本人は全員、この像のところに拝みに来ます。閣下は御堂をバラノフ・シトハ島へ運んで行くようにとお命じになりましたが、私は訳あってこれをサンクトペテルブルグに送りました。このことに関して私の報告の最後をご覧ください。(略)

(略)年々日本人のサハリンへの定着がより広範になっていますが、あらゆる場所で大量に蓄えられている材木、あらゆる集落で着工されている彼らの建設、島民の衣服の変化、多くの者に見られる日本人同様の剃髪、アイヌ人に強要している日本人の宗教の持ち込みがこれを示しています。私達が御堂に火を放った時、あわれな未開人達は太陽に向かって喜びの表情を見せ、わけのわからぬことを言いながら太陽にお辞儀をするが、このことは、後に日本人からも確認しました。

私が捕らえたのは^{マトマイ}松前からきた商人達で、その服装、知識、暇さ加減、支配好きな様子、斧の数から判断して、祖国の中では良い身分を持っていると結論できます。彼らの名は、ササノ・トミモリ、フジイ・ケンジズィ、ナカムロ・トリジョ、シムバダ・フマズです。何よりも私が驚いたのは、アニワ湾から出港して視界から岸が見えなくなった僅かな時間を除き、彼らはフリゲート船に連れてこられた最初から寂しがっている様子が全然見られなかったことです。彼らは、私が彼らをカムチャツカに連れて行こうとしていると言って自分の羅針盤を取り出し、自分の半島

³⁰ 【編訳者補注：弁天様のことか？】

がある方位を示しました。カムチャツカに着くと彼らも日本でのポルトガル人同様の扱いを受けると当然期待していたので、ペトロパヴロフスク港から私を迎えに海軍少尉ダヴィドフとラングスドルフ博士がやってきたとき、この2人は彼らをととても驚かせ、きわめて陰鬱な様子を見せたことがありました。彼らはフリゲート船ナジェーダ号が長崎にいた時のことを知っており、使節団への拒絶回答によって日本とロシアの間に不愉快なことが起こる可能性があるとして述べています。さらに、この拒絶が我々の遠征の原因であり、私達が彼らを捕虜にしたことは少しも驚いていないが、彼らに完全な自由を与え、我々が非常に親切に対応した事を長い間理解できなかつたも述べました。彼らの話によれば、彼らがサハリン人から受け取る品は魚だけで、私もどんな獣の毛皮もほとんど見ませんでした。日本人が言うには島の奥にクロテン、カワウソ、そしてとても毛質の悪いキツネがいるとのことですが、このことを私はまったく信じていません。

10月16日アニワ湾を出港し、単檣帆船との合流のために第18島に向けて航路を取りました。(略)そして私は指示書の第9項を実行するために(略)カムチャツカに行くことを決定しました。

(略)11月10日に港に戻りました(略)

(略)アメリカへ向けて出航するつもりでしたが、船を検査したところ(略)

(略)ところで、指示書への補足の中で次のように述べられています。風向きに恵まれ時間を失うことがないようになら、アニワ湾に寄港すること(略)

(略)アニワ湾に滞在し日本人の居留地を視察し、想定した第2要因は重要でなく、指示書の中で指示されている事業を遅らせてはならないとはっきりと認識しました。漁は休んでいましたが、どれも倉は魚で満杯でした。しかし、この積荷は米に較べて我々にとって重要性が低く、注目されずにこざるをえませんでした。なぜならそこにあった米を積み込むだけでユノナ号のような船3隻かそれ以上を必要としたからです。第3に、航海中の1806年8月8日に第392文書で出された私への指示をすべて実行するには、1隻の船の兵力だけで十分だということを、経験が立証しました。

フヴォストフ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 57-59.

(齋藤由佳・寺山恭輔 訳)

21. 海軍中尉 N.A. フヴォストフから海軍少尉 G.I. ダヴィドフへの指示

秘密

1807年4月28日

ペトロパヴロフスク

1. クリル列島に針路を取り、第7島(シヤシネコタン)[シャシコタン島]にできるだけ接近し、これを視察すること。
2. 北緯47度30分以降のクリル列島の位置は不明確で、地図の間で食い違いが見られる。島々を記録するために一隻は東側、もう一隻は西側の航路を保つこと。この航海は多大かつ重要な利益をもたらすだろう。
3. しかし、第16島[シムシル島]からは、日本人に対する指示内容の遂行を着手しなくてはならず、全般的に要求されるのは(略)。別れてしまった場合、ここを最初の合流場所とし、われわれは14日後、ここに到着することにする。合流できないときには、前述の港を探し出し、長くとも2昼夜その付近に待機し、目印を残したのち、第18島ウルップ島に向かっていただきたい。この島にズヴェズドチョトフが居る。彼が見つからない場合は、(島を記録するため、またより容易に会うために)この島を一周すること。5昼夜以上滞在しないこと。目印を残すこと。
5. アレクサンドル島[ウルップ島]に行ったのち、そこからサハリンに向かいアニワ湾に入ること。この湾に一昼夜停泊し、原住民を撫柔し、もっぱら好奇心から彼らとの交易の方法について知るよう努めること。この目的で、コペイカ硬貨、刺繍入りのシャツ、ナイフ、ラシャ布、各種の小物をいくらか、また、ヴラディーミル大綬が付いた銀メダル5個を貴殿に送付する。メダルを第16島、第18島、サハリン島の長老たちに授け、メダルに添えて、ロシア帝国の臣民であること、日付、船名、船の指揮者の名前を明記した証書を各人に授与するようお願いする。一昼夜が過ぎても私と貴殿がアニワ湾で合流できず、貴殿の兵力が不十分であっても、彼らの倉庫に荷が大量にあると知ったならば、神のご加護のもと、レザーノフ閣下の指示にあるとおりに行動を開始すること。彼らの倉庫が空で、荷がまだ船上にあり、貴殿の兵力が彼らに対して行動を開始できる程ではないならば、穏当な方法で時間をかせぎ、できるだけ私を待つこと。2隻以上の船を見つけた場合には、投錨せずに湾の入り口で間切り航行するように努めること。日本人と思いがけなく遭遇したり、彼らから攻撃を受けたりした場合は、表面的には人道的な態度をとりつつも、敵として対処すること。
6. アニワ湾で合流したら、以後の航海の計画を立てよう。指示書への補足を私から受け取られたし。

海軍中尉フヴォストフ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, оп. 10, 1803-1812 гг., д. 14, л. 62-23.

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

22. G.I.ダヴィドフから[海軍大臣]P.V.チチャゴフへの上申書。極秘遠征参加者としての航海について(⑥No.102)³¹

1807年4月29日

慈悲深き閣下

海軍中尉フヴォストフと私が侍従長ニコライ・ペトロヴィチ・レザーノフにより用いられた事業は、私が恐れ多くも閣下をこの件で煩わせなくてはならない類のものでした。閣下に、私が勤務しております海軍の大臣として、私がこれから為さなければならぬ活動について調査していただくようお願いいたします。そのような事情で、この遠征について詳細を申し上げなくてはならず、それゆえ閣下にお時間を少し割いていただかなくてはならないことをお詫び申し上げます。といいますのも、私は自分の上官から非難を受けるのではないかと恐れているからです。

カリフォルニアから帰還後、シトカで2隻の船が艤装されました。そのうちの一隻は海軍中尉フヴォストフに、もう一隻は【私に】委ねられました³²。【レザーノフ】閣下はそのうちの一隻で出航しました。両船【の】指揮者として海軍中尉フヴォストフが任命されました。アニワ湾に漁業を目的にやって来る日本人に対して、【レザーノフ】閣下が事業を遂行しようとしていたことは、すでに知って(略)³³、あとになってたびたび思い出しました。しかし、シトカ出航後、われわれはこの件についてまったく命令を受けませんでした。海上では【レザーノフ】閣下はすでにわれわれの遠征を秘密と呼び、海軍中尉フヴォストフに指示書³⁴を送り、またそれを私にも与えるよう命じられました。海軍中尉フヴォストフはこの指示書を【チチャゴフ】閣下にお送りする義務があります。その指示書からこの事業計画をご理解ください。われわれのうちいずれも、【レザーノフ】閣下にどの程度権限が委ねられているのか認識しておらず、かつこれについて質問する権利もありませんでした。それゆえ、われわれは各自がその任務にもとづいて出航しました。その際、【レザーノフ】

³¹ 【編訳者補注：訳出にあたって、有泉和子「海賊にされた海軍士官フヴォストフとダヴィドフ」、193～195頁、有泉和子「19世紀はじめの北方紛争とロシア史料：遠征の後始末——フヴォストフ・ダヴィドフ事件とロシアの出方」『日露関係史料をめぐる国際研究集会 2006 Part 2 予稿集』、日本学士院・東京大学史料編纂所、2006年、19～21頁所収の翻訳を参考にした】

³² 史料⑥No.79を参照。

³³ 文書が破損しているために数語が判読不能。

³⁴ 史料⑥No.91を参照。

閣下がすでにウナラシュカ島から皇帝陛下に本件について報告したことは知っていました。

ウナラシュカ島からクリル列島まで、南西風と格闘しなければなりません。この風はほぼ絶えず吹き続けていました。帆や索具は朽ちており、その修繕作業が絶え間なくあり、航海を妨げました。半裸の乗組員もいました。なかにはシャツを一枚も持っていない者さえいました。途絶えることのない、ほとんど雨のような霧が原因で乗組員の間に風邪による発熱が広がりました。まだシトカにいるとき、[レザーノフ]閣下は、われわれの航海はせいぜい 2 か月間であると見込んでおられました。私には 2 か月間程度の食糧が支給されました。私はこれと同じ期間分の薪と水を用意しておりました。航海中、私はさらに 2 か月分の食糧の追加を受け取りましたが、薪と水の補給はありませんでした。そのためクリル列島に近づく頃には、きわめて危機的な状況に陥りました。相変わらず南西風が吹き、水と薪はほぼ底を尽き、病人の数は増え、私はまことに遺憾ながら、カムチャツカのペトロパヴロフスク港に着岸せざるを得ませんでした。船首第一斜檣が折れ、船にはその他にもいくつか破損箇所が見あたりました。その原因は非常に強い暴風で、私はそれによって危うくクリル列島第 16 島³⁵の海岸で座礁するところでした。それでも、もし前述の不足がなければ、もちろんもう 2 か月間は航海を続けることができたでしょう。クリル列島にかんする指令を遂行しないままにしておくつもりはありませんでしたので、春までに特別命令がなければ春にこれを再開すべく、ペトロパヴロフスク港で越冬しました。

一方、海軍中尉フヴォストフは[レザーノフ]閣下をオホーツクまで送り届け、アニワ湾に寄港し、命令されたとおりにかの地にある日本人の施設を破壊し、キビ[米]をいくらかと日本人 4 人をカムチャツカまで運び、船が損傷したためにそこで越冬しました。今年、航海を始める直前に、彼は両船で真先にアニワ湾に行くつもりであると私に告げました。サハリンの原住民がフヴォストフに対して、日本の船は 4 月末か 5 月に来るはずなので、それまでに彼らのもとに急いで来て欲しい、さもなければ日本人が自分たちの倉庫を建てるために彼らの大半の首をはねるに違いない、と切に懇願したからです。

政府がこの遠征を承認しているという確信が得られるのであれば、私のような位の者が船の指揮者となり、かりに才能を持っているならば、それを発揮する数少ない機会を得たことを非常に幸福に感じたでしょう。しかし今となっては、かような遠方を舞台に【飢え】で憔悴し、ほとんど海を見たこともなく、ほとんど知【識】を持たない者たちを引き連れ、味わったあらゆる苦労から果たして強い意欲が出てくるものだろうか、と上官の判断に対してときどき考えさせられます。つまり、私が味わったことすべて、そしてもしかすると日本人の手に落ち拷問にかけられたかもしれなかったことは、もっぱらこれにかんする海軍大臣や世間の悪評によって報われるかも

³⁵ シムシル島

しれないのです。

閣下、以上が恐れ多くも閣下に貴重なお時間を割いていただかなくてはならなかった出来事です。しかし、この事業は、これに対する陛下のご意向が明らかでないかぎり二様に解釈できるものなので、差し迫った事態から本件を閣下のご判断に委ねるとともに、閣下のご庇護をお願いせざるをえません。私は、この事業に参加したことで、また同様に、かりにこれを拒否し、不服従な態度を取ったことで、過ちを犯したのではないかと恐れています。それゆえ、私は事の成り行きに身を任せることにしました。私の一生はすでに海軍勤務での精励に捧げられたがゆえに、今、なんらかの功績を示そうと努力できるのです。そしてまた、私の勤務が閣下次第であるということを私が思い違いをしているとすれば、悲しいことです。恐れ多くも、閣下に以下を誓って申し上げます。私は自分が選択した道[海軍での勤務]に愛着を抱いており、自分の上官に認めていただけるように、何か立派なことを成し遂げたいと望んでおります。それが、アメリカへ2度、航海を行った理由であり、この新天地ではそのような機会が与えられるはずだと思ったからなのです。

閣下の寛大なご検討にわが身を委ね、永遠に深い敬意を抱き続けます。

慈悲深き主人であられる閣下の忠実なる僕

ガヴリラ・ダヴィドフ

注記：第176号。1808年1月30日。

(2)РГАВМФ, ф. 212, оп. 11, д. 2944, л. 34-35. 原本

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

23. 海軍中尉 N.A. フヴォストフの N.P. レザーノフ宛報告。第二次遠征計画について

1807年4月30日

(略)2隻の国有船が来なかったので、すべての食糧と火薬、子縄、樹脂(タール)、弾丸を除くすべての物資をカムチャツカで引き渡し、引き換えにアメリカ用として約2千ブードの鉄を得ました。単檣帆船アヴォシ号も約800ブード積み込みました。

(略)この冬はずっと、アニワで私が捕えた日本人達と[関わり]続けましたが、そのうちの2名の気をロシアに引きつけることに成功したようです。実際、私達の応対が彼らに感謝の気持ちを引き起こしたことは無理ありません。彼らの誰一人として、何かに拒絶されるようなめにあった事は今にいたるまでないからで、彼らははっきりと悟り、話しています。(略)彼らはロシア語をすでに十分立派に理解し、話し始めており、大変熱心にロシア語の語彙を集めています。

ともに時間を過ごしたことで、私は日本帝国、より詳しくは松前^{マドマイ}の状況についていくらか理解することができました。島の北部全域に日本人はほとんど住んでおらず、そこには原住民と少数の日本人商人がいるだけで、そこで交易をしている商人は倉とたくさんの商品を持っています。

(略)数隻の船で松前^{マドマイ}の北部を一掃できます。私の所にいる日本人は、日本^{ニッポン}には内紛があるということ^をを断言している^{ので}、私は今よりも彼らを(略)と思いますが、増えつつある国内の不満の^声が、この誇り高い政府に貿易する気にさせ、この国はいずれ我が国に、穀物や様々な商品で大きな利益をもたらすようになり、彼らの国の難攻不落の海岸は、少数のロシアの船舶に(略)屈服せざるをえなくなるだろうと思います。

(略)島の西部に住んでいる人々は中国人に従属しているという考えは疑わしいです。なぜならば、サハリン人も日本人も、このことについて語らないからであり(略)この猜疑心の強い政府がサハリンを自国領と見なしながら、日本人に占領されているのを見て、また私の行動に対しても無関心でいるとは不可解だからです。(略)日本人はロシアに対してというより島民に対していらだっているということは、私の所にいる[日本]人達が請け合っています、島民は彼らを差し出した後、私達の運搬を熱心に手伝い、残りの倉を掠奪したからです。

(略)アイヌは自分たちが悪い行いをしたとみなし、自分たちを守るために残るよう私を説得しました。彼らにメダルを配っている時に、再度そのような嘆願を聞きましたが、この民族の不幸な境遇を考えると、私は同意せずにはおれませんでした。我々が守らなければ彼らの多くが斬首されるだろうと、彼らはみな断言しました。そのため、私はこの春アニワに必ず寄港しようと決意しましたが、この遠征から我々は以下の利益を得ます。

- 1) 日本の暴虐からアイヌを解放する。
- 2) アメリカにおける増援物資となる大量の穀物の積荷を受け取る。
- 3) 毎年アニワを訪れるつもりであることを日本人にみせつける。
- 4) アメリカへ送るため、より多数の人間を捕まえることができる。
- 5) 第16島[シムシル島]と第18島[ウルップ島]を記述するよう、アヴォシ号指揮官に命令しなければならない。

7月半ばまでには終了し、オホーツクに立ち寄り、そこからアメリカへ向かいます。

(略)そのため、松前付近を通過し、我々の兵力に見合った³⁶村落を見かけることがあればこれを奇襲しないと断言しません。おそらくこのことはあまりよく受け取られないかもしれませんが、サハリンであろうと松前^{マドマイ}であろうとまたは他のどの場所であろうと、日本人に被害を与えることには違いはないと思います。指示書には、「捕虜を獲得すること、どこで遭遇しようとただ人間性

³⁶ 【編訳者補注：したがって規模は大きくない】

を示すこと」とあり、我々各人にとってこれの遂行が、常にどこにいても第一の決まりとなるであろうことから、なおさらそうでしょう。

私が捕らえた日本人達は、アメリカで疑いなくなんの利益ももたらす事ができないような健康状態なので、私は彼らを松前で解放することにしました。その際に彼らにはロシア語、フランス語、日本語で書かれた書簡を渡しましたので、彼らは翻訳して何か書くでしょう。写しを一部本状に添えています。私達が彼らに親切に対応したので、彼らはロシア人がどのように捕虜を扱うかということ、我々が望んでいるのはただ友好的な関係と、彼らの政府がかくも背信的に拒絶した貿易だけであるということを吹聴するでしょう。

私がこの遠征をする気になったさらに大きな理由は、カムチャツカで我々は無為の時を過ごさねばならないということです。食糧を魚で備蓄することは6月になるまでは不可能で、これ程の人数分の塩漬け肉を買うのは大金がかかるからです。

政府がこの計画を承認するようなら、私とその成功を請け合います。アヴォシ号指揮官たる私ダヴィドフと同志一同はロシアの国力、能力、偉大さを示す最初の機会と日本人の高慢さに報復する好機を得て、自分達の幸せを感じています。

30 キログラムの弾丸が盗まれる。アメリカ国籍のウマン・ミシュエフが摘発される。

(略)書簡や報告書(略)が開封されている例を幾度か耳にしました。

(略)私はこの際用心深く振舞うようになりました(略)

(略)私に委ねられたこの船に乗っている43名全員を鼓舞すべく、米を1.5ブードずつ与え、そのお金で全員に手本通りに制服を着せ(略)

(略)4月15日ヴリフ船長に封印をした至急便を手渡し、錨を揚げ、いざ航路開拓に出航しました。

フヴォストフ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 60-62.

(齋藤由佳・寺山恭輔 訳)

24. 海軍少尉 G.I.ダヴィドフの航海日誌³⁷

1807年4月15日～

1807年4月28日 湾内の氷がなくなったので、ユノナ号が海に入った。

5月2日 湾の外へ出ようとするが、氷があったため湾口に錨を下ろす。

5月4日 外海に出る。

5月9日 第14島(ケトン島)の南の岬が見える。

5月10日 こちらへ向かってくるユノナ号を発見。

5月12日 午前2時過ぎ、指示書にあった湾を探すため陸の方へ戻る。しかし、シャログラゾフとヴァルドゥギン(閣下より全域の水先案内人として各船に与えられた毛皮事業者)は、その海岸に全く見覚えがなく、第16島には湾は一つもない、増水時に小川が流れ込む小さな湖があるだけだ、と言う。カストリヌスク岬の南側に小さな入り江を発見したので、記録させるためバイダルカを送ったが、その価値はなかった。(略)

5月18日 第18島、すなわちウルップ島に接近するため出発。午後6時過ぎ、ユノナ号が島を発見したことを知らせてきた。

5月18日 ふたたびユノナ号からバイダルカが出された。岸に着いてみると、そこで日本人の小さな御堂 *kumirnia*、たくさんの切り出されたトウヒの大木、地面に3人の人間の裸足で歩いた跡を見つけた。バイダルカに乗っていた航海士はそびえたつ巨大なトウヒと白樺の森を発見した。それはこの島がイトゥルップ島にちがいないことを示していた。ヴァルドゥギンとシャログラゾフが証言しているように、ウルップ島にはトウヒの森はないことが知られていたからである。私は、(略)日本人たちから、この地に彼らの7人の同胞が暮らしはじめてすでに4年目になると聞いた。建設が始まった小さな御堂や切り出された木材があることから、日本人たちがこれからも

³⁷ 【編訳者補注：本史料集第一集に本文書と似た文書が翻訳されている(史料 50. 海軍少尉ダヴィドフ指揮下の単樁帆船アヴォシ号による 1807 年のアメリカ[露米]会社航海記録より。藤原潤子訳)。この「第一集版」の原典はロシア国立図書館手稿部であり、時期的に 1807 年 4 月 15 日から 5 月 27 日までの 1 カ月余りをカバーしている。一方で、キリチェンコ氏が発掘し、1807 年 4 月 28 日から 7 月 11 日までの 2 カ月あまりをカバーする本文書の原典は、ロシア帝国外務省史料館サンクトペテルブルグ支部に保管されており、双方の出所は異なっている。これらの文書の他にダヴィドフ自筆の本来の原典がある可能性も否定できないが、この二文書のどちらか一方がその原典である場合、他方はそれを筆写した可能性が高い。「第一集版」のロシア語版は 1994 年に出版された書籍(*Российско-Американская компания и изучение Тихоокеанского Севера, 1799-1815. Сборник документов*, Москва, 1994)に掲載されているが、本文書の原文と比較すると、微妙に異なっているところがある。両文書の原典のコピー文書が手元にないため、この異動がどちらかの文書を当時あるいは後世に書き写した際に生じたのか、両文書を活字に起こす際の編集段階(すなわち 1994 年出版の文書集の編集者やキリチェンコ氏)で生じたのかといった問題の原因を突き止めることはできない。これらの事情を念頭に置いておく必要はあるが、一方の文書で簡潔にすまされている箇所について他方で詳しく述べているところがあり、いうまでもなく本文書は「第一集版」以降の時期をカバーしているので、双方合わせて利用することで不足した情報を補えると考える]

ここに住み続けるつもりでいるように思われた。以上のことから、その場所まで直行はしなかった。というのも航海士は暗闇のため近くにまったく住居を見つけられず、また偵察のため、あえて海岸により近づこうとはしなかったからである。

われわれは今仲間から、ズヴェズドチョトフがまだ毛皮業者たち全員といっしょにウルップ島で暮らしていたとき、日本の役人がわざわざ島までやってきて、クリル人たちに、日本の帝国の領土であるウルップ島からロシア人が居られなくなるようにしなければ処罰すると言いつ渡したという噂が流れていたということを知った。このことから、ズヴェズトチェトフは日本人に連れ去られたか、あるいは殺されてしまったと考えることができたが、もっとも確実な情報を知るためにぜひともクリル人を探し出し、真相を聞き出す必要があった。

(略)夜 9 時、日本人の施設があると思われる場所のすぐ近くまで接近し、灯りを見つけると投錨した。投錨地点は、深さ 9.5 サージェンで砂地、岸からの距離 1.75 マイルである。ユノナ号は風を受けて遠く離されたので、船が戻ってこられるよう、発火筒 falyshfeier の何本かに火をつけ、のろしを上げ、かがり火を焚いた。日本人を脅かしたくなかったので大砲は撃たなかった。

5 月 19 日 (略)7 時(略)船から中の様子がすべて見て取れるくらい近くまで村に接近し、そこで錨を下ろした。

8 時過ぎに上陸し、そこで 2 人の日本人の出迎えを受ける。日本人たちはその慣習にしたがって地面にひれ伏し、その後自分たちの家へ入るよう求めてきた。そこで、コメとジャム、煮込んだスープ、見事な魚の燻製、麦麴と塩を合わせて冷凍保存した大豆(この食品は極めて塩辛い)、これを新鮮な魚と煮込むとたいへん美味であると日本人は請け合っている)をふるまわれ、食後にはパイプタバコが出された。このような供応を受け(もっぱらわれわれへの恐怖心からのもてなしだったかもしれない)、正直なところ、非友好的な振る舞いをする気がまったく消えてしまった。

この施設は魚の塩漬けのために作られたもので、作業はクリル人が行い、少数の日本人はそれを監督するだけだった。草と棒でできた 2 軒の倉庫は、樽や密封された桶に入れられた塩や魚油でいっぱいだった。さらに 2 軒の木製の倉庫は鍵がかけられていて、中に何があるか見たくはなかった。この村の近くに、およそ 15 張りのクリル人のユルタがあったが、人の数がたいへん少なかったことから、人々はどこか別の場所で働いているように思われた。村のそばにはきれいな川が流れ、川には立派な橋が架けられていた。住居の周囲には、切り出された木やきれいに加工された板がたくさん積まれていたが、これは、そこにいた 4 人の日本人だけで行われたものではないと私は思う。日本人の家はたいへん簡素な作りだったが、きわめて清潔で、壁の代わりには油と思われるものが染み込んだ紙が貼られ、床にはきれいな草の敷物(ござ)が敷かれていて、中心に台所があった。

少数のクリル人は日本人のように髪を剃っていた。私がそれはよくない習慣であると言うと、クリル人たちは、とてもよくないが日本人にそのように強制されるのだと言った。私はクリル人たちに、イトゥルップ島は日本の領土ではなく、そこに元から住んでいる住民だけのものであり、ここから日本人を追い出さなければならない、もしもロシア国民がここに住むことになっても、日本人が今行っているようにあなた方に何も要求したりしないだろう、と伝え、その言葉の証として贈り物を配った。

日本人たちは、イトゥルップ島のこの村の近くには他にもう一つ彼らの村があり、現在そこには2隻の船が停泊していると話した。このためにその船に連絡が行って(その村まではよい道があり、そこまでは一日で辿り着ける)、逃げられてしまうかもしれないと考え、ユノナ号が到着するまでは日本人を刺激しないことにした。

私は日本人とクリル人にズヴェズドチョトフのことを尋ねたが、わかったのは、もうウルップ島にはいないということだけだった。ズヴェズドチョトフについては、艦内にいた日本人たちから正確な情報を知りえたが、もちろん島に住む人々にそのことを教える時期ではなかった。

午後、ユノナ号のバイダルカが係留された、村から約3マイル北の地点へ行った。そこで、大型のボートか艦船用のものと思われるかなりの量の木材を発見したが、そこには小さな御堂らしきものもなく、小屋も一つもなかった。木材はトウヒで、もろくなって朽ちかけていた。湾のこの辺りの海岸と対岸は砂浜で、少し遠浅になっていた。(略)

(略)3時過ぎに船に戻ると、ユノナ号がわれわれの船から4、5マイルの地点にすでに錨を降ろしていた。6時頃、ユノナ号からバイダルカがやってきて、船の全ての手こぎのボートが近くの村に向かうため出発したが、近隣の住民の話信じれば日本人はいないようだ、と知らせしてきた。私はすぐにバイダルカを返し、わが方の情報を伝えた。

5月20日 朝、湾内補助艇でフヴォストフがやって来た。われわれはここでこの村を見て回り、すぐにオイダ湾(日本人の船が停泊している湾)へ向かうことに決めた。そのため朝食をとった後、陸へ向かって出発した。日本人たちはたくさん人間がやって来たのを見て仰天し、逃げ出そうとしたが、彼らを取り押さえた。すでに述べたように、この地には塩漬けの魚と塩が多くあるが、コメはたいへん少なかったため、われわれは大部分をクリル人たちに分け与え、この居留地に火を放った。

哀れな日本人たちはひどく怯え、自分たちを切るつもりかと尋ねた。しかし、船に連れて行き、自分たちの同胞を見て、彼らが何も心配することはないと請合うと、完全に落ち着きを取り戻した。私は茶や手元にあったものすべてでもてなしたところ、半時間もたつと彼らはまったく穏やかになった。それぞれの船がオイダ湾までの道を探せるよう、一人の日本人をこちらの船に残し、

4 人はユノナ号へ連れて行った。この湾は、昨日ここへ一日かけてやってきて偶然我々が捕らえた日本人の居留地の手代頭が、その居留地からわれわれの船を見たほどごく近い距離にあった。われわれは、この日本人たち、とりわけ元から船にいた日本人たちに、2 隻の船を奪った後、クナシリ島か別の島に降ろすことを断言し、決してわれわれをだまさないよう伝えた。このイトゥルップ島でもっとも手広く商いをし居留地も所有している商人が、ナンブ(オランダ人の発音では「ナヴォ」)の町から、最近2 隻のうちの1 隻の船でやってきて、現在はオイド湾の北にあるシャナ湾の居留地にいる。

ズヴェズドチョトフについて尋ねたところ、日本人は皆一様に、死亡したと述べ、後に残った10 人は、クリル人たちの話によると、昨年ウルップ島を出たということだが、昨年冬、彼らがカムチャツカにいなかったのは、まったくわけがわからない。

5 月 21 日 (略)ユノナ号のフヴォストフのもとへどのような計画をもっているか尋ねに訪れたが、半時間後、風のために帰艦できなくなった。(略)

(略)5 月 22 日 単檣帆船 tender に戻った。(略)元気だったのは8 人だけだった。(略) ナイボ湾から少し北に別のナイボ湾があり、そこに日本人の居留地と港がある。(略)北の離れた地点にあるシャナ湾という広い湾には、上述のように、さらに大きな日本人の居留地があり、その東にはツルプヌブリという標高の高い山がある。

クナシリの南側に良港があり、日本人の話では、大きな村があるということである。この島には、多数の日本人の入植が始まっていて、すでに馬も連れて来られている。

(略)風は晩の6 時過ぎまで続いてしたが、その時に東微北 OTN[=EtN]の方角に日本人の船が遠く離れた場所に見えた。その船に乗っていた人々は、帆を揚げたり降ろしたりして混乱している様子だったが、そのときおとずれた風のおかげで、危険な状態を脱した。夜の闇でまったく何も見えなくなった。(略)

5 月 23 日 明け方、すでに船の姿が見えなかったため、オイド湾へ入ったか、海岸沿いに先を行ってしまったのだろうと判断した。捕虜の日本人からこの船にツガエモンとその3 人の仲間が乗っていることを知った。ツガエモンは航海士で、嵐に遭って沿岸から遠くに流され、およそ6 ヶ月間漂流し、その間に大部分の乗組員が死んでしまったが、最終的にクリル列島のパラムシル島にたどりついた。日本人たちはそこからクリル人たちによってカムチャツカへ運ばれてそこで1804 年の冬を過ごし、十分なもてなしと手当を受けてたいへん満足していたようである。しかし、彼らは1805 年の春にペテロパヴロフスク湾から自分たちのボートで逃亡した。昨年冬はクリル列島のどこかの島で過ごし、今年の春にようやくイトゥルップ島へ到着し、村の長に、船がオムシル島(そのような名前の島はクリル列島にはない)で破損したと報告したが、ロシア人と会

ったことさえ一言も述べなかった。^{イトワルブ}択捉島の長はツガエモンと3人の仲間を連れ、その船で^{マトマイ}松前島へ出発した。

(略)しかし、この自然は継母と同じ(厳しい、やさしくない)である。クリル列島の霧はたいへん濃く、真夏でも頻繁に見られ、白海やグドゾン(ハドソン)湾の霧にもひけをとらない。

5月24日 気まぐれな弱風の中、ユノナ号に続いてシャナ湾へ入る。ユノナ号には地形に詳しいオイド湾の居留地の手代頭が乗っていた。(略)午前11時台、ユノナ号に接近し、船から見える川のそばに大きな村があることを知り、その村をいち早く観察した。(略)正午過ぎ、その村へフヴォストフ中尉が湾内補助艇と手漕ぎボート、バイダルカで出発し、われわれはわずかな風でも前進した。(略)私も自分の船の手漕ぎボートで出発したが、4ヴェルスタも行かないうちに、風向きが強い向かい風に変わったため引き返さざるをえなくなった。(略)ユノナ号から出た船は村に着いた。

(略)フヴォストフが乗組員たちとともに海岸に船をとめようとしていると、日本人が彼らにむかって銃撃をはじめた。やっとのことで湾内補助艇から銃とファルコネット砲を発射して追い払い、大砲を揚陸した。日本人たちは建物の中から撃ってきたが、だれにもあたらず、わが方は占拠した倉庫から(撃った)。火薬がつきたので、日本人の追撃を受けながら撤退し、その途中占拠していた川の一方の住居に火をつけた。

夕方、日本人たちは、岬の高い場所から私の船に向かって大砲と小銃で攻撃をしかけてきた。すぐ近くの場合に弾が数発まとまって命中したことから、彼らが散弾を持っていると考えざるをえなくなった。はじめ2発の砲弾をとばして応戦したが、その後は彼らがうわべだけの威勢のよさを発揮するがままにさせておいた。

日本人たちは、川の左岸に焼け残っていた建物から銃撃していたが、そこに火をつけ、もちろん残った建物で防戦することに決したようだった。

5月25日 朝、日本人が、焼け落ちた半分の建物から燃えていない半分の方へさまざまな荷物を移動させているのが見えた。その後われわれはすぐに、大砲3門を積み総勢36人が手漕ぎボート4隻とバイダルカ2隻で出発し、大砲はたいへんな苦勞をして、村の左側に延びるおよそ30サージェンの高さの丘の上の崖まで運び上げた。そのおかげで、崖の下の日本人の本部を直接攻撃することが可能となった。河口近くでは、日本人の大砲が当たる岸に出なければならず、わが方の隊員を安易に失う危険があった。すべての大砲を山の上に引き上げ、道沿いに村へ向かったが、途中で2か所染められた布で囲まれた四角い場所のそばを通った。その一つには衝立をバックに仏教僧の³⁸壮大な建物が立っていた。村に面した海岸と村の南側もやはり、木に吊るされ、

³⁸ 【編訳者補注：ロシア語原文は Banchzhosskaia だが、これを bonza(仏教の僧侶)を意味するものと解釈し

白色と紺色の布が縫い合わされた布、その布の向こうに見たことのない種類の武器を2つ発見したが、それは昨日わが方の艦艇を砲撃してきたものだった。その武器は接収してあるので詳述はしないが、砲弾は重さが約1フント、鉛製で、中心部は粘土だということだけ述べておこう。日本人たちがこの場所を立ち去って間もないことは明らかだったが、それはまさに彼らが予想していたのとは違う場所でわれわれが接岸するのを見たときだったのだ。これらの武器のそばには、飲みかけの酒(日本の飲み物)の樽が残っていたが、日本人たちはこれをもちろん景気づけにゆっくり酌み交わしていたのだろう。我々は昨夜われらの船から発射した砲弾が一発、武器のすぐそばの地面を掘り崩していたのを目にした。

その間に村はすでに空っぽになっていた。というのも多分われわれが丘を占拠したのを見て、日本人たちはこれ以上留まって悪い結果を招くようなことはしなかったのだろう。大砲を小高い場所に配置して、私たちは麓におりた。日本人は大慌てで逃げ出したので、弾丸を込めたままの銃や、剣、その他の武器をたくさん残していった。大きな銅製の砲が固定式の台の上に1門据えつけられており、他に、台の付いていないかなり変わった形の大砲も見つけた。火薬はたくさんあったが、その大部分は練った状態のものだった。しかし、砲弾が装填されたまま残されていた大型の大砲の発射音はすさまじいものだった。この大砲の火縄杆は火縄を合わせて4アルシンを優に超えていた。

われわれは、銃や弓、小旗が残された番小屋を手に入れた。それらは、土塁をめぐらした別の場所にもあり、そこは別の番小屋と長官の家³⁹だった。

コメや衣類、さまざまな商品がぎっしりと詰まった倉庫が12、3棟あった。これらすべてのことから、そこが単なるつつましい漁労のための居留地というよりも、ずっと繁栄している植民地であることを示していた。われわれが目にしたものはすべてあまり見たことのないようなものだったので、多くの品物について、何に利用しているのかさえわからないくらいだった。手分けをして海岸から船へ運び始めた。

夕方近くにフヴォストフは、荷を送り出すため海岸で夜営することになった私を残してユノナ号に戻った。人々が酒に手を伸ばすまではすべて順調だったが、多くの者が酔っ払い、日本人以上に手に負えなくなってしまった。酒樽を壊そうと人を送ったが、どの家にもすべてを見つけ出すのは不可能なほど酒は大量にあったので、大きな地下室に見張りを置いたが、ほとんど役には立たなかった。わが国の人間はしらふのときは非常に善い人間であるぶんだけ、酔うと乱暴な振る舞いをし、いうことを聞かず、ありとあらゆる狼藉をはたらくようになる。そのためこのよう

た]

³⁹ 【編訳者補注：doska を家と訳した】

な場合には、何としても酒を飲ませないようにしなければならない。

ある場所で、16 プードの重さのロシア製の錨と、「+ . ; .」 [N.Z.]という文字が縫われたシャツ、ライフル銃の銃床を発見した。このことから、われわれはウルップ島のロシア人は、日本人に殺害されたか連れ去られたにちがいないという結論に達した。

5月26日 朝、突然倉庫の中から姿を現した日本人を1人捕らえ、もう1人を床の下で発見した。したがって彼らは我々の偵察のために送り込まれたにちがいないと考えた。後に、最初の人物はナンブという町から来た商人で、この居留地の中で一番裕福な人間であるということがわかった。昨日の銃撃戦の後、商人はここから逃げ出したが、われわれが船に戻ったと考えて、自分の家に帰ってきたのだった。もう1人の日本人は兵士で、恐ろしさから酒を大量に飲み、その時はじめて目を覚ましたのだった。この者はすぐに船から解放して戻した。この2人を捕らえてから、警備を倍に増やすために、それまでさまざまな荷物をボートへ運ぶのに使っていた人員をそちらへ回さざるをえなくなった。商人は、日本人たちは将校7人を含む50人が、昨日われわれが時折⁴⁰数人の人間と小旗を見かけたこの近くの峡谷におり、残りはクリル人といっしょに川の向こう岸にいると言った。それ以降はもう突然の襲撃を恐れる必要はなくなった。正面の丘の上に据え付けた大砲が、そのような場合には助けてくれるからである。

日本人がいるはずだと商人が証言した峡谷を見回ったものの1人も発見できなかったが、そこには日本人が最近までいたことを示す痕跡があり、道のいたる所にもコメや衣類、さまざまな品物を見出した。また、犬もたくさんいた。日本人たちは、すでに3日前から最も必要な物資をすべて運び出そうとしていた。

夜、カルピンスキー中尉がやってきて、フヴォストフ中尉が、乗組員を全員集め帰艦するよう命じたと伝えた。その理由は錨を下ろす場所がなく両艦が危険にさらされているということ、毛皮事業者たちが酔って暴れており、さらに何をしでかすかわからないということ、人を集合させたところ、ユノナ号の3人と私の船の1人だけは見つけられなかった。夜になったので、やむをえずいくつかの倉庫に火をつけ、大砲とともに乗組員たちと手こぎボートに乗り移った。そのときになってもまだその毛皮事業者たちは誰も戻ってこなかったので、彼らを待つため武器を積んだ湾内補助艇と航海士が残り、船の残りは皆出発した。

昼間、カルピンスキー中尉は南側にあった別の日本人の村へ行って来た。この村もまったくの無人で、魚の倉庫以外は何もなく、それらもすべて燃やされた。

5月27日 朝、ユノナ号の湾内補助艇が帰艦し、4人の行方不明者は誰も戻ってこなかったと知らせてきたが、我々の船からは海岸に立っている複数の人の姿が見えた。海岸には数隻のボ-

⁴⁰ [編訳者補注：原文 po vre knam は意味不明であり、po vremenam のことと判断して訳した]

トが残っていたので、彼らはそれに乗って戻ってくることもできた。ロシア人が全ての建物に火を放ち、日本人に捕らえられて責めを受けることがわかっている場所に、どんな意図があつてあえて留まることを決意したのかは想像できなかつた。おそらく酒を飲みすぎて頭がおかしくなつたにちがいない。フヴォストフ中尉は海岸へ向かい、艦に戻るよう説得したが、彼らは中尉に銃を向け、山の方へ立ち去つた。

(略)午前8時台、フヴォストフは私に、4人を捕まえるために自分の湾内補助艇を出して海岸に行かせると言つた。(略)しかし、戻つてきたのは2人だけで、あとの2人は山の奥へ逃れ、近く仲間を撃とうとしたので、やむなく補助艇は彼らを残して艦へ戻つてきた。(略)このように、単檣帆船に乗っていた中国人1人と、アメリカへの植民のため加えられた流刑者でユノナ号に乗船していた1人は岸に残つたが、おそらく後に酷い目にあわされたにちがいない。

イトゥルップ島のシャナ湾の日本人の村には火を放つたため、見て回る時間が十分なかつたが、コメ、他の種類の穀物、さまざまな品物を蓄えた倉の多さや、大砲、銃、他の武器から推察できるのは、日本人が漁業のため人を送り込んでいるクリル列島の島の中で日本政府はこの村を最重視しているということである。ここは日本最北の地であり、守備隊も置かれていることから、日本人がかなり以前からロシア人を警戒してきたのは明らかに思われる。居留地の大きさやそこにあつたものすべてが、ここへ向かつた人々の漁業の拮がりと日本にとってのその重要性を示している。

ナイボ湾で捕らえた日本人が、シャナ湾には彼らの同国人が300人かそれ以上いたと証言している。もしもこの数が正しければ、いくつかの描写にもあるこの恐るべき民族の勇猛果敢さと、その主な民族的特徴ともされている生への執着のなさについて考えてみなさい。しかし日本人たちは、村の長はロシア人に抵抗できなかつたので間違いなく自分の腹を切りさくと話している。私は人々がいかにして生に執着せず、自分の身を守らないでいられるのか理解できない。しかし、同様の例は他の民族にもしばしば見られることであり、自殺は決して精神の偉大さを意味するものではなく、或いはそうであつてもきわめて稀だと考えられる。

この土地には大規模な指物や鍛冶、金物の工房があつたので、さまざまな種類の手工業者たちがいたと考えられる。ここやナイボ湾で日本人は多数のボートと大きくない船を建造し、それをマトマイ島へも送つていた。一番大きな納屋は酒造り用の道具だけで占められていた。ここで見られたその数の多さは、ここに住む人口の多さか、あるいは墮落した日本人の数の多さを示している。

日本人の住居は独立した家屋ではなく、住居の大きな張り出し部分が可動式の板で互いに仕切られており、その板があまりにびつたりとしているので、はじめそれが最後の壁だと思つていて

も、その板を動かせば、草で編んだむしろが敷き詰められた、いくつものきわめて清潔な小部屋に区切られているのを発見することになる。どの家にも特別の台所があり、水が管をつかって引き入れられ、壁に設けられた栓を引くだけで水を得ることができた。つまり、日常生活に必要なものは可能な限り身の回りにあり、しかもきわめて清潔だった。

建物の一部は要塞のように高い土塁[土壁?]で周囲を囲まれ、両側に川があった。そこには土塁の下から半分の高さまでくりぬかれた門を通して中に入るようになっていた。門は頑丈な木の扉で閉じられ、その両脇にくりぬかれた部屋が1つずつあった。これらの要塞はクリル人の襲撃から身を守ることができるものだった。なぜなら、山の上に大砲が1門、言わば、村の家々の上にはぶら下がるように据え付けられ、大勢の群集でも追い払うことができたからである。要塞の外に立っている建物は、彩色された竿に吊り下げられ、複数の隙間に複数のまだら模様をあらわした白いテントで覆われていた。すでに述べたように、布で囲われたこのような場所は山の上にもあり、そこにはもちろん、緊急時には全集落の指令を出す場所を占領されないよう守備隊の一部が集合した。しかし、日本人たちは、部隊の配置計画だけでは不十分で、防衛できなければならないということを忘れていた。しかし、銃の発射音をほとんど聞いたこともないような民にどのような抵抗を期待できようか。日本では、軍人以外は誰も銃を所持できないことが知られている。われわれの船に乗っていた日本人によれば、銃を扱える者はめったにいないので、それらは見せかけのために渡されているように思われる。日本人たちははじめ、合図のためにときどき発射される大砲の音さえ、身を震わせずに聞くことはできなかったが、しばらくするとそれにもまったく動じなくなった。

家々の上にそびえる山はたいへん険しかったので、直接上まで登るのは困難だった。したがって日本人は山にジグザクの広い道を掘削したので山に入るのはきわめて容易になった。いたるところで日本人らしい清潔好きの仕事を見ることができた。道はどこもよく整備され、砂または小石が敷かれていた。2箇所庭が造成中であった土塁は均等に芝が敷き詰められ、川岸は手を入れられており、川にかかる美しい弓形の橋は見事な眺めだった。

我々は番所を2つ見つけたので日本人は見張りを置いたように思われる。1つは山の中腹にあり、そこで銃と弓以外に小旗や旗がいくつか見つかった。我々の日本人の断言するところによれば、そのうちの2つの小旗は「クボウ」[原文では大文字で強調されている]から直々に送られたものなので、守備隊の隊長はかなり身分の高い役人に違いないということを示しており、どんなことがあってもそれらを放置してはならなかった。死刑を免れないからということである。

日本人の甲冑とかぶとは鉄製で、きわめて薄く、漆が塗られたたいへん精巧に作られたものである。槍と銃剣はその上で滑ってしまうが、銃弾はかなりの距離からでもかんたんに貫通する。

火縄銃もきわめて精巧に美しく作られ、弾は遠くまでとぶが、日本人はそれをうまく撃つことができない。日本にはポルトガル人が置いていった大砲しかないと言う話もあるが、我々が^{イトゥルップ}択捉島で2門の大砲を目撃したので、帝国内に他の大砲がないとは考えにくい。大型の大砲の弾は鉛製で上に粘土が塗られ、紙が一面に貼りつけられている。小型の大砲の弾も、すでに述べたように鉛製で、中心に粘土が入っている。大型の大砲は一角砲に似ていた。日本の槍は長いしなやかな竿で、黒い漆が塗られ、柄の部分には金箔がほどこされている。他に、ヨーロッパ人には未知の、拷問にしか用いられないと思われた種類の武器がいくつかあった。

(略)この地で商いをするナンブの町から来た商人たちの会社と、守備隊を指揮する将校は、当地で行われている漁業や全ての貿易を監視していた。しかし、立派な魚の倉庫がたくさん焼かれ、この本部にとってははずいぶんと不幸なことになった。この損害は、とくにコメが多く収穫できない日本のいくつかの地方では手痛い打撃だったにちがいない。日本の帝国は国土の狭さゆえ、その住民によって重荷を負っているが、一部の住民への食糧の確保が難しくなっているため、日常的に生活するため、あるいは単に漁業のために、たえず遠く北方へ進出していかなければならない。日本の政府はその帝国の臣民の誰一人として国外に出ることを禁じているが、ついに、漁場を拡大することを許すだけでなく、その事業を奨励せざるをえなくなった。それは、ニッポン島へ大量の魚を輸送することが必要になったためである。ラクスマン使節の日本への訪問時には、マトマイ島には現在の半分の住民もいなかった。今ではそれどころかイトゥルップ島やクナシル島、サハリン島にも大きな集落が生まれており、ひょっとすると、やがてはカムチャツカにまで達するかもしれない。これらすべてのことは、この帝国の人口が過剰ですべてを養う食糧が不足していることを証明していないだろうか。なぜなら、この北方の地では魚と脂以外はほとんど何もとれないからである。最近まで魚を獲るためサハリン島で事業をはじめようとする十分な勇気のある人間はまだいなかった。いたとしても^{マトマイ}松前島の住民に限られていたが、現在政府はこの島の住民がサハリン島やクリル列島に渡ることを禁じており、ニッポンの住民にのみ渡航を許可している。それは、多額の関税がかけられる交易所の権益があるためである。イトゥルップ島やクナシル島に駐屯する小さな守備隊は、この地域で日本人の定着が始まりつつあることを示し、また、日本から北方に横たわる島々への日本人の居住範囲の拡大は不可欠となり、この島々へ派遣された漁業はこの帝国にとって非常に重大な意味をもっていること、そして、それを失うことはこの国にとってたいへんな痛手となることを示している。

ここにこそ、この誇り高い帝国の拡張をくい止める道がある。北方は日本にとってきわめて重要だが、防備が甘くたいした抵抗もできないので、そこを奪い取るのに、たとえ誰かが思いついたとしてもこの帝国の南の人口の多い地区に対して必要なものと比べれば多額の資金(いつもの

ようにもとがとれる通常補填される)は必要ではないので、わずかな数の船と 500 人の上陸部隊があれば、松前島を占領し、ニッポンへの魚の輸送を遮断するには充分であり、あまり成功するとは思えないが 5 千人の上陸部隊からなる遠征隊を長崎^{ナガサキ}やその他の場所へ派遣することよりも、こうすることで日本政府により大きな影響を与えられると私は思う。さらに、日本は山が多く、きわめて流れの速い川が流れており、そのため冬期の連絡が困難であり、これこそが日本での商いのほとんどが、沿岸部しか航行できないきわめて粗末な船で海路を用いて行われる根本的要因であることは知られている。性能のいい小型船を数隻、日本のさまざまな緯度の沿岸へ派遣するだけで、この商いを停止させ、諸民族に不満を起こさせ、日本政府にどんな要求にも応じさせるのに十分だろう。このような作戦は、それを実行する意欲のない人間に任せる場合には、きわめて難しく不可能なものに思われるが、榮譽と祖国の利益を求めるまったく私利私欲のない熱意と真実の愛の前には、克服されえない妨害などめったにない。

(略)現状のままではシベリアは長く存在できないであろうが日本との交易によっておそらくはより多くの利益を得られるだろうから、そうなればその人口もはるかに増えていくだろう。

シベリアではまだ進取の気性はなくなっていないからと言って、北からの遠征のために自由民を集めるようなことをすれば、その成功の見込みははるかに小さくなるだろう。少人数の多民族ではなく、人口の多い帝国と戦わねばならないので、当地では厳格な規律や秩序がなければ事業が盤石にいくはずがない。その上、当地では人々を襲う必要はなく、そうすることは一時的な利益を得るだけなので、シベリアの様子を変えるような行いをすべきである。そのためにはこのような事業に、エルマークの後継者は適当ではないのである。

カムチャツカとアメリカで穀物が不足していることはよく知られているが、もしもわれわれの船に積むことができ、シヤナ湾にもっと良い停泊地があるなら、この地域の住民の 1 年分の食糧として十分な量のコメを送り届けることは現在でも可能である。(略)この遠征に必要なのは、役に立たない隊員が少なくとも 3 分の 1 いるとして、せいぜい 50 人ほどである。

日本人が択捉島^{イトゥルブ}にいつから住むようになったのか正確にはわからないが、およそ 20 年以上前、フリゲート船ナジェーダ号が長崎^{ナガサキ}から出航した後、鋸や大砲やその他の武器がこの島へ送られた。そのとき以来、クナシル島と北方のすべての場所に守備隊が配置された。ナジェーダ号が停泊した松前岬^{マトマイ}の NN⁴¹にあるソーヤ湾に、寄港の知らせの後すぐに守備隊と大砲が送られた。船の日本人の話では、ナジェーダ号のナガサキからの出航後、宗教上の皇帝と政治を司る皇帝との間に不和が生じ、一方が他方に対しより大きな権力を獲得したということだった。

(略)日本の政府が外国人だけでなく自国民に対してもどれほど疑い深いかはよく知られている。

⁴¹ [編訳者補注：北北東 NNE または北北西 NNW のことか？]

(略)一例をあげると、ラクスマンの船が停泊したハコダテ(サンガル海峡にある)では、船が出た後、2年で13万人の住民がニッポンから移住させられ、諸設備とともに守備隊も配備され、耕作が開始され、松前島の知事^{マトマイ}はその名前の町ハコダテへ移された。日本人はもちろん他の諸民族の航海について、自分達の船をもとに判断しているので、ロシア人は一度偶然立ち寄った場所にしかやってこないと考えているのである。

日本と安定した貿易を行うためには、日本の近くに港をもつ必要がある。しかし、クリル列島にはどこにもしかるべき港はなく、日本人の話では、クナシル島の南部の湾がかなり良いということである。そこにはしっかりと守備隊が防衛する大きな日本人の村があり、多数の日本人がその島に根付き始め、すでに馬も運ばれてきている。かつてこの地を統括していた役人は松前の町から派遣されていたが、近年政府は、ここの管理をニッポン本土から派遣した将校に任せるようになった。(略)日本政府はマトマイの住民を信用せず、彼らをとくに漁業の分野で抑圧している。松前島ではハコダテ以外の場所では耕作さえ全く禁止され、その財政的負担で、松前の住民がいつの日かニッポンからの分離を考えられないよう生活に必要な物資はニッポン島から運び込まれているということを日本人との話から理解した。この話がほんとうだとすると、マトマイの人々は自分たちの政府に大きな不満を持っているにちがいない。

日本では魚は安くはないと考えるべきである。魚を得るために、大量のコメやその他の物資をニッポン本土から各地へ送り出しているからである。アニワ湾に最近やってきた船は約5千袋、つまり約1万5千ブードの荷を運んできた。北方全域で何がさばかれ、そのかわりにどれほどの量の魚を獲得できているのだろうか？ 魚は日本人の北方における全居留地の主要産物であり、彼らが絶え間なく流通させている産物なので、その加工方法について述べる必要があるだろう。魚はかなり塩辛くなるまで塩をされ、樽に詰められるのではなく倉の中で順に並べられ、その状態のままに船に積み込まれる。この魚はかなり塩辛いので、数日真水につけてからでないといわれわれは食べるができなかった。そのため、この魚は航海中の食料としてはきわめて不都合である。しかし、日本人はそもそもとても塩辛いものを食し、それは魚だけでなく大部分の食品が同じように塩辛く料理されている。梅やその他の果物、ダイコンなどが大量の塩で塩漬けされ、中には塩と麦麴で発酵させてあるものもある。日本の食事はヨーロッパのそれとはまったく異なっていると言えるだろう。それに対しキビに関しては、日本人は塩を加えず特別な料理方法で煮炊きしており、わが隊員たちはそれがどうやっても習得できなかった。日本人が炊くキビは見た目も味もたいへん良く、ヨーロッパ人も喜んで食べるかもしれない。

樽に保存するニシンは、日本人は当地の食料としてのみ塩漬けし、ニッポンへは少しも送って

42 [編訳者補注：原文はObunfun オブニユン、「お奉行」をこのように聞いたと想定した]

いない。ニッポンへ送るニシンははじめに少し塩をし、それから燻製にして束ねている。それ以外に、大きめの魚(サケの一種)を乾し、空になったコメの袋にそれを詰めニッポンへ送っているが、それは食料用ではなくコメの土地の肥料用である。松前^{マツマエ}では住民の食料となる魚は十分にあり、ニッポンでは自分たちの必要な物資をすべて魚の代わりに手に入れるだけである。

日本の船はきわめて粗末な代物で、積めるだけの荷を積んで、天候のよい風の弱いときに航海に出る。もしも嵐に見舞われたときは日本人は荷を海に捨ててしまい、ときには空っぽの船で港に戻ってくる。

日本人は、松前^{マツマエ}とサハリン、南クリル列島の現住民を彼らが自分達をそう呼ぶようにアイヌ(アイノ)と呼んでいる。

(略)アイヌ人たちは商いのために島々を移動するが、松前^{マツマエ}からウルップへは、ラッコの毛皮とワシの羽根を買うために渡っている。ラッコの毛皮は日本人に売り渡され、日本人は中国人との交換のために長崎^{ナガサキ}へ送っている。日本国内ではラッコの毛皮は使われず、他の毛皮も同様である。というのもこの帝国の北方では、冬の衣類は単純な裁ち方をしているからである。長くて幅が広いだけで、厚い木綿の裏地がついている。ナンガサキへは、日本人が集めたわずかな量のクロテン、ラッコ、クマの毛皮が送られるが、この貿易の規模はたいへん小さい。獣の数が少ないためか、現住民がそれを生業とするのをあまり好まないためか、あるいは、日本人がアイノを獣でなく漁業に使役することの方が利益が出るとみなしているためかもしれない。クマの毛皮はたいへん良いもので、ラッコの毛皮も上質である。クロテンの質のいいものには出会わなかった。日本人はサハリン内部には、より質の良いクロテンがよりたくさんおり、カムチャツカ産のものに引けをとらないと断言しているが、私が択捉島^{イトケルプ}で見た毛皮はわざわざ買い付ける価値のないものだった。

ワシの羽根はアイヌが矢に使用している。松前島の大部分(アトキスを除いて)とアニワにはこの鳥はほとんどおらず、より数が多いのは近くのクリル列島、とくにクナシルである。お互いに酷似しているように見えた2種類の鷺がいる。一方の尾の羽根は12本で、その羽根が末端にくくりつけられた矢は向かい風の中でもまっすぐに飛ぶ。もう一方の鷺の尾の羽根は14本だが質が落ちるとみなされている。

日本人は(略)アイヌをあらゆる労働に使役しており、奴隷のように扱い、絶対的な服従のもとに置いている。頭を日本式に剃らせるなど、自分たちの慣習さえも強制している。(略)アイヌが日本人に帰依するはずもないが、何ら行動しようと急ぐこともなく従順なだけである。日本人はすべての集落からアイヌの若者たちを居留地に集め、この若いアイヌがすべての労働を管理し魚を獲っている。それに対して日本人はアイヌに、一度定められた比率に基づいて自分達の品物で支払

っている。クリル列島へ運ばれる品物は、コメ、さまざまな鉄製品、タバコ、筒、きわめて質のよい木製の漆器、針、厚手の木綿生地、酒^{サギ}その他である。アイヌはアルコールを好むので、アニウだけで、1.5～5 ヴェドロ入り^{サギ}の酒樽がおよそ 300 個運ばれてきていた。それ以外に、日本人は現地でも大量の酒を自分たちで醸造している。日本人の商人たちはこれらの島々では自分たちを絶対的な支配者とみなし、彼らにとっては少しでも働くことは不名誉なものであり、あれこれ指示を出すだけで、タバコを吸ったり酒^{サギ}を飲んだりしている。

5月28日 ズヴェズドチョトフは、日本人との交易の糸口を見出すために、すでにシェレホフによってこのウルップ島へ送られた会社の先導者である。(略)

11時、ユノナ号の艦載ボートが航海士をのせ海岸に向かって出発したが、そこは、ヴァルドウギン(彼はシャログラゾフとともにズヴェズドチョトフの傍にいた人間で、彼らが長期間住んでいた場所を特定させるためにわざわざアメリカから連れてきたのだが、何も知る事ができずに終わってしまったの徒労に終わった)が、そこに行けばズヴェズドチョトフの情報が得られると考えたクリル人の村がある場所だった。(略)ユノナ号のバイダルカが私のほうへやってきて、海岸の2つの高い丘の間に日本人がおり、そこはロシア人の村があった場所で、まさにその浜辺にズヴェズドチョトフが葬られていると考えられると知らせてきた。この情報は信憑性が高いように思われる。なぜなら、ヴァルドウギンとシャログラゾフは、彼らが立ち去った後、ズヴェズドチョトフは島の南側には存在しない魚の獲れるある川の北側へ移ろうとしていたと話していたからである。

6月1日 (略)正午、私の航海士助手が帰艦して、ほとんど倒壊しかけのロシア人の住居を見た^{サギ}と伝えてきた。しかしそこには人間の跡も、最近人が訪れた形跡も全くなかったらしい。道は草で覆われてさえていた。彼は樽といくつかの水筒がころがっているのを見つけ、十字架が立てられた1つの墓と、銘が記された板のついた別の墓を見出した。銘には、その板が1805年4月に設置され、ズヴェズドチョトフと3人の毛皮業者、入植者、女性1人は死亡したものの、彼らがこの村でつつがなく暮らしていたということが書かれていた。しかし残りの人々が、その後どこへ行ってしまったかについての手がかりはなかった。もっとも可能性が高いのはカムチャツカへ向かったか、あるいは日本人に殺害されたかだろう。しかし、もしも殺害されたのであれば、日本人たちは、2、3棟の草葺のユルタと鍛冶場、魚を乾すための小屋を村と呼べるのであればの話だがこの村に火を放っていただろう。海岸では砂に埋まった古いバイダルカを発見した(その後、オホーツクでわれわれは、彼らがまさに1805年にウルップ島を出て、クリル列島のある島で越冬し、われわれが出航した後の1807年になってようやくカムチャツカへ到着したことを知った)。その村は山に囲まれた低い峡谷にあり、かなり居心地の悪い場所だった。飢饉はもちろんそこに

は見受けられなかったが、人々は小さな川で獲れる魚以外の食べ物を持っていなかったので、われわれは、クリル列島におけるわが国の唯一の施設は、日本人の入植地と対照的であると気づくことができた。日本人は入植に最良の場所を選び、立派な家々を建て、まだ規模は小さいにしても本国と変わらないような豊かな生活をしている。アメリカにおける我々の入植地が、これと比較しうるようになる時が果たしてくるだろうか。(略)

午後、ユノナ号の艦載ボートがクリル人の村をまったく発見できないまま戻ってきた。われわれはズヴェストチェトフの仲間のさらなる探索を(略)【止めた】。(略)

6月4日 (略)午前3時、ナイボ湾の南のムスキスと呼ばれる岬が見える。このことから目の前の島を^{クナシル}国後島と確認し、その開けた湾に入った。^{クナシル}国後の姿はこれ以前に見たクリル列島の他の島々よりもはるかに美しく、南に向かうにつれて植生が変化していく。北側の山にはまだ雪が残っている。

6月6日 (略)4時すぎ、^{マトマイ}松前の北東の岬を確認し、南側に投錨した。(略)

6月7日 (略)ユノナ号はアイノの村の対岸に停泊し、日本人の倉庫2棟と数人の日本人の姿を見かけた。

6月8日 悪天候。もし^{マトマイ}松前に向かうならば(略)アニワ湾で停泊。

6月9日～11日 アニワ岬(略)

6月12日 日の出前に、カルピンスキー中尉をユノナ号の艦載ボート2隻とわが艦のバイダルカともに、この湾に現在日本人がいるかどうか、アイヌから情報をえるために派遣した。(略)

6月12日 私はユノナ号へ向かう。そこへ9時過ぎ、カルピンスキー中尉が12人のアイヌを連れて戻ってきた。そのアイヌたちの顔つきはクリル人たちよりも感じがよい。もともと両者はあらゆる点で似通っているのだが。(略)昨年、当地で日本人の入植地が焼討ちされると、彼らはそのことを^{マトマイ}松前へ知らせた。そこへメダルを一枚送り届けたようだが、この報告後アニワ湾に日本船は1隻も寄港していないと言う。(略)サハリンの住民たちにはふんだんに贈り物をし、コメもいくらか与えたが、その後麦芽(麦麴)も欲しかったので理由を尋ねると、酒を造るのだと彼らは述べた。このことは、サハリン人は日本人との交易ができなくなっても、日本の産物になじむほど時間が経っていなかったもので、何も困っていないということを示している。たしかに、彼らはタバコを非常に欲しがり、今それが無いため木の削りくず⁴³をすっていたが、奴隷状態におかれなくてもないものを幾分余計に持っていた以前よりも、完全な自由を手に入れて、満足しているように見えた。まさにこのことについて彼らはロシア人に感謝すべきであるが、と言っても彼らは日本人の存在に不満をもっていたので、われわれも同じように思われたいことを祈るばかりであ

⁴³ 【編訳者補注：ロシア語原文は strumik で意味不明なため、struzhka のことと解釈した】

る。(略)アイヌたちは贈り物を受け取ると立ち去った。(略)われわれは完全な風のために停泊を続けるしかなかったので、この日は上陸することに決めた。手漕ぎボートが艦艇の脇につけられ、乗組員たちがすでにボートに乗り込んでいたときになって、さらに射撃用にユノナ号のバイダルカを伴うことにした。いつもそのバイダルカに乗っていたアメリカ人は、その少し前から精神状態がおかしかったが、回復したように見えたので、バイダルカに乗せることにした。彼はしばらくの間 1 人でそこに座っていたが、不意に櫂をこぎはじめ少しずつ艦艇から離れていった。どこに行くんだ、と大声で呼びかけても、何も答えず、さらに大きく櫂を動かし始めた。艦載ボート 2 隻で彼のあとを追ったが、遠くて追いつけず、そのアメリカ人は岸にたどりつくまで森の中へ逃げ込んでしまった。この逃亡にはなんの計画性もなかったことは明らかである。なぜなら、銃もナイフもたずシャツ一枚で逃げていったからである。

この事件の後、われわれは岸に向かい、90 歳かそれ以上の老人が村長をつとめる村の海岸にいた。彼はわれわれを、清潔な草の敷物で覆われた長いすに座ったまま出迎えたが、他の者たちも敷物を敷いた床の上に、同じように足を下に折り曲げて座っていた。老人は太陽を証人として、いかに彼の心がロシア人に会って喜んでいるかということ、残念なことに目が非常に悪いため、どんなに見たくてもわれわれの姿を見ることができないという話をした。

フヴォストフ中尉は老人にメダルを贈り、他のアイヌたちがするようにもらった後にそれを隠したりせず身につけるよう説得した。われわれがサハリン人に、このようなメダルをさらに 6 人のところで見たことがあるか尋ねたところ、彼らは見たことはないが、トグシマ・クルという長のところで一つあると聞いたと答えた。一緒に上陸していた 2 人の日本人は、アイヌは何か物をもろうとすぐにそれを隠してしまい、誰にも知られないようにするので、これは何も驚くことではないと断言した。老人にはメダルといっしょに、赤い織物の布切れにくるまれた紙がついていたが、その長老はその紙を渡すよりも前にいち早く手に取った。その場でわれわれはお茶を飲み、老人にも御馳走し、さらに 2 軒の家を訪問した後、艦へ戻った。

上陸中にわれわれは長老に、ユノナから立ち去った頭のおかしいアメリカ人を探しにアイヌを差し向けるよう頼んだ。長老はすぐに同意し、息子と 10 人の村人を送ってくれた。探しには向かってくれたが、彼が銃や他の武器を持っているかどうか尋ねることを忘れなかった。

アイヌのところで我々は 1 歳前後の熊を 2 頭購入したが、その取引に応じさせるのはたいへんだった。その獣を殺すと、アイヌたちは、先の部分を細長く削り、剥いだ部分を曲げ若木のようにした細い棒をその首と頭の周りに置いた。その後長い時間、殺されたクマの上で何か唱え、頭は切り落として手元に残した。上述の削った樹皮のついた棒は、アイヌたちの好意の証であり、言うなれば平和の印である。アイヌたちはわれわれを岸辺で出迎える時にはその棒を持ち、ユノ

ナ号を訪問した時もボートの舳先に何本かそれを置いていた。その棒はアイヌの住居でわれわれがもらったものと同じである。

日本人の話では、アイヌは小さな子熊を見つけると、女性たちに自分の乳を与えさせ、できるかぎり十分な食べ物を与えて大切に育てる。熊の子が少し大きくなると、板で周りを簡単に囲い板屋根をつけた、四角形の小屋で飼育する。この小屋は余りに貧弱なので、熊は容易にそれを壊して逃げ出せるが、この庵の暮らしに徐々に慣らされ、いつも十分に食事を与えられていると、逃げ出す必要も感じなくなるのである。2歳を過ぎると熊は殺され食べられるが、殺された熊に対して主人たちが示したように、哀惜の念をもって行われる。何らかの迷信によって、常に生きた熊を飼うようにアイヌは促されていると考えてもいいだろうが、それは我々に熊を売ってくれた人たちは2頭ずつ飼っていたからである。1頭目の熊を譲ってもらったときに村の長の同意さえ必要で、2頭目については何を言っても譲ってくれなかった。熊は村全体の所有で、一頭を殺したら村人全員で食べるのか、あるいは少なくとも村の長の許可なしには誰も勝手に自分のために一頭も殺すことはできないということだと思う。

ここの熊の毛皮はクリル列島の熊と同様、たいへん質が高く、アメリカの毛皮にも全くひけをとらない。

(略)朝方、村の目の前の沖に船を停泊させ、村へ出かけた。遠くからは数人の姿が見えていたが、村には誰もいなかった。昨日我々が彼らの同胞に気前よく贈り物をしたということはこのアイヌが知らないはずはなく、われわれを避けるいかなる理由も彼らには与えなかったはずだ。このことから、アニワ湾には日本人がいるが、船の日本人たちがアイヌにそのことを話すのを許さないのか、或いは日本人は島民にロシア人との交流を一切禁止し、それを破った場合には報復すると警告して脅しているかのどちらかだと我々は結論付ける事ができる。(略)このことから欲深いアイヌたちが、たくさんの贈り物を受け取るかくも絶好の機会を逃すことはありえない。村は完全に無人だったので、各ユルタに贈り物を置いて歩き、三檣帆船の方へ引き返した。われわれが船を係留した海岸にある複数の棒には木製の小箱が吊り下げられていたが、棒の周りにはいくつかの和睦の小旗があった。三檣帆船から降りたとき、私は人々に箱の中のものを見ることを禁じた。船に戻るときには、そこにはわれわれに関わりのある何かが入っているにちがいないと許可した。ロシア人が表彰した島民たちが非常に奇異な行動をとった理由を知りたくなり、小箱を開けるよう命じた。非常に驚いたことに、そこには、昨年この村の長のトグシュ・クルに与えた銀のメダルと、それに添付した書類、ウラジーミル勲章の綬が入っていた。その綬はメダルが身につけられていたか、或いは大切にされていなかったのかどちらかを示している。トグシュ・クルのメダルのことを聞いたことがあると昨日、アイヌたちが言っていたので、このトグシュ・クル

はこのメダルを証拠品として残しておけば、日本人からひどい目にあうとおそらくは懸念したのだろう。

同じメダルをもらった残りの5人のアイヌは、おそらくそのことがあまり人に知られていなかったからか、メダルを返そうという気はなかったといってもよかろう。我々はすべてをまた小箱に戻し、そこへさらに多くの贈り物を入れて、前の通りにそこにぶら下げ、和睦の小旗をとった。そしてその代わりに赤い薄手の毛織物⁴⁴の切れ端をつるし、艦に戻った。(略)

6月14日 (略)島に派遣していたカルピンスキー中尉が帰艦したので、われわれは出航した。

(略)2つの村を訪れたカルピンスキーは1人のサハリン人にも出会わず、2つ目の村で日本人の納屋を2棟発見したので、それに火を付けた。(略)ユノナ号から手漕ぎボートが数隻出たが、それらも誰一人発見できなかった。艦に戻ろうとしてきたとき、3人の住民が乗ったボートが別の集落から、ユノナ号の方へやってきた。2人が甲板に上がり、3人目はボートに残っていたのだが、日本人の姿を発見すると、突然全力で岸へ漕いで行った。しかし彼を追いかけて艦に引き返させ、その仲間と同じく褒美を与えると、彼は非常に陽気になった。このサハリン人たちに、なぜどの村に誰もいないのか尋ねたところ、ニシンのやってくる季節なので、アイヌは全員この魚が来る場所へ集まっていると彼らは答えた。家には誰も残らなかったのである。これが本当だとしたら、船の日本人たちを疑ったのは間違いだったということだ。

6月15日 今日ほど素晴らしい朝には、長い間お目にかからなかったように思われた。空が晴れわたっていただけでなく、全く新しい情景で際立っていたからである。森全体が鳥のさえずりにつつまれ、足りないのはナイチンゲールの声だけのように思われた。しかし遺憾ながら！ 船乗りの心はあまりに頑なで、なんらかの思いがけない出来事によって、自分の軽はずみな振り舞いや、人生における奇行、友情など自分が失ったすべてのもの、そして自らすすんで航海中に耐え忍んでいるすべてのことを思い出す時にのみ、自分が満足するには心が無感覚に陥っているように思えるのである。そういうときには、自らの虚栄心を呪い、肉親や友人、彼らと過ごした時の喜びを思い出して、一刻も早くその抱擁の中へ飛び込もうと決意する。そして涙に濡れた顔は、自然が各人に与えることを彼の心が心地よく感じ続けているということ、思わず納得させるのである。ああ！ 私はほとんど完全に失われてしまった時間がいかに貴重なものであったかを感じはじめている。成し遂げられた多くのことすべてが船乗りの人生にとって単なる序章にすぎなかったのなら、それはあまりにも困難で長く実りのないものだった。年を経るごとに経験も重ねているが、それは当然のことながらわずかな人にとっては、惨めなものであるはずはない。(略)

朝5時すぎ、錨をあげ、ナジェージュダ号の停泊地の向いにある日本人の交易所へ向かった。

⁴⁴ [編訳者補注：ロシア語原文 sitameda を、stamed' のことと解釈した]

レザーノフ氏が述べていた大きな交易所のかわりにそこにあったのは、加工した魚を積んでおくための藁葺きの納屋で、サハリン人はそこから(昨年、この主が連れ去られた後)、自分たちにまったく必要ない大きな鑄鉄製の釜以外はすべて持ち去っていた。アイヌの姿は一人も見かけず、最近そこらからいなくなったことを示す痕跡もなかった。

倉庫は、沖からは見えなかったかなり大きな川の両側にあり、その右側の急流の岸辺に船を係留した。

(略)大きな釜を数個だけ持ち出して残りのものは壊し、日本人の納屋をすべて燃やして帰艦した。このような取るに足らない居留地が、2隻の艦艇の遠征におけるほとんど唯一の目標となったことに驚きを禁じえない。レザーノフ氏の指令書の中で、何よりもこれについて言及されていたからである。(略)

(略)6月19日夜、松前の海岸に、(日本人の話では)アイヌたちが網に魚をおびきよせるため灯した火が2つ見えた。(略)

6月20日(略)正午、われわれはクリリオン岬をのぞむ松前の海岸に達したと考えた。ユノナ号の場所を確認するため大砲を打つ。

(略)6月22日(略)この島に向かう途中、風のため船が停止したので、海岸に停泊していた日本船まで三橋帆船で近づき、乗組員たちは岸に渡った。われわれも上陸したが、1人の人間も見つけることはできなかった。それからその船がおろしていた2つの錨を切り離し(船はピク・ド・ラングリ岬の南方を向いていた(?))、帆をあげ、ときおり曳航しながら、わが艦まで引っ張っていき投錨させた。

この船の積荷はコメや塩、少量の品物、脂を入れるために運ばれてきた大量の空樽だった。(略)

6月23日 早朝、積荷を接収するため錨をあげ、係索を解いて日本船の近くまで行ったが、船倉を壊し、石のバラストを取り除かなければならなかった。これは、広々とした海原での困難で危険だが、大量のコメを手に入れるには不可欠な仕事だった。この作業では、10人の船員たちが期待以上に首尾よく働いてくれ、そのことは正当に評価しなければならない。朝10時から【自分の船で】、ロープを取り除き、すべての船倉を壊す作業に取りかかり、予備の帆や索類を甲板中に敷き詰め、水樽を手作業で移動した。夜8時、全ての移動が終わり、船内には1つの石も残っていなかった。わが船にはコメ220袋が積み込まれた。重量は超過していなかったが、それ以上は積みなかった。それまでにシャナ湾で30から40袋接収していたので、艦艇には、酒の樽^{サギ}7、8個とその他の多くの小さな品物を除いて、コメ約900ブードと塩200ブードが積み込まれたことになる。この荷のために船倉や船室、調理室がいっぱいになり、立っている場所もないほどだった。しかし、私は自分の船をどうすべきかわからない。(略)日本船は甲板の板1枚が85ブードも

あり、おそるべき構造をしている。Bilisty⁴⁵が非常に太い。(略)

(略)船は川を航行できるが、海向きではない。(略)

(略)はじめ、停泊するための船の錨を2つ切り離したが、これ以外にまだ6つあった。日本人の話では、どの船にも4つ手の錨が2つついているということである。(略)

6月24日 (略)日本船から離れてから、バイダルカが船に火をつけた。はじめ炎は燃え盛っていたが、草やコモを焦がした後、火の勢いは弱まった。その後、マストが船尾の方へ倒れ、最後に船を係留していた2本のロープが燃え、船は潮に乗ってリオ・シェリとリボン・シェリの間の海峡へ流されていくのを見た。(略)

6月25日 (略)^{ビク・ド・ラングル}ラングル岬を迂回したとき、いくつかの日本の村が見え、その近くには小型船が2隻とまっていた。まもなくすると、さらに大きな船を発見した。(略)直接それに近づいた。(略)乗組員が日本船に飛び乗り、その上からロープを投げてよこした。(略)風が弱まったので、ユノナ号は村へ接近した。船には誰もおらず、すでに数日前に立ち去ったようだった。深度30サージェンの地点に投錨したまま船を残していったことに驚く。この深さなら風が吹けば、^{マトマイ}松前まで流されてしまう可能性もあるからだ。

積荷は、塩漬けの魚とニシンの燻製、脂、コメ数袋だった。この船は、^{マトマイ}松前の北側か、クリル列島のどこかから戻ってきたにちがいがなかった。自分の船に積み込めるものは積み込み、船の数箇所に穴を開けたが、その穴には、夜中に錨がはまり込んだり船が流されたりしないよう、栓をしておいた。早朝、木くぎを抜き、船を沈める予定である。わが艦には残っていた真水がたいへん少なかったので、この船からなんの苦勞もせず8樽も水が取れたのはありがたいことだった。(略)

6月25日夜、錨が切れた。(略)昨日開けた穴の木くぎをはずさせるために一人の隊員を送った。この隊員はたいへん苦勞し危険をおかしながら、船までロープをつたっていったが、ロープは伸びたり縮んだりしてこの男を強い力で何度も放り上げた。彼が日本船へ渡っている途中、さらに1つのロープが切れ、無事に残ったのは3つだけになった。しかし、さらに続けて1つのロープが切れたので、男にはすぐに艦に戻るよう指示し、その後で残りのロープを切り離した。(略)しかし派遣した隊員はすべての木くぎをはずすことに成功したが、彼が命拾いできたのはひとえにその機敏さのおかげである。(略)

6月26日 (略)船が沈むのを見届けるまで、そこから離れたくなかった。(略)ユノナ号の方へジグザグに向かい始める。

6月27日 (略)深夜1時、ユノナ号の近くに投錨する。その海岸には魚用の納屋だけが存在す

⁴⁵【編訳者補注：意味不明】

る日本の居留地があった。そこには日本船が2隻停泊していた。そのうちの1隻はアニワ湾へ行き、僧侶 bonzhos と神官 pop、4、5人の兵士、大砲、その他いくつかの武器を運んでいた。もちろん人影を我々は船にも海岸にも見いだせなかったが、このずっと前に^{ビク・ド・ラングル}ラングル岬に全員逃げたからである。アニワ湾へ行った船はニッポンからの船だった。その船で、ナガサキへの使節を乗せたナジェーダ号の来訪や、わが国の通商の希望、それにたいする拒絶のことなどが書かれた文書が見つかった。レザーノフ氏とその傍らに銃を持って立っている擲弾兵の肖像画も見つかったが、あまりにも似ていなかったため、名前が書かれていなければおそらくそれとわからなかっただろう。それから、たくさんの地図、オランダ人のものを模したと思われる地球儀、アニワ岬やクリリオン岬やその他の多くの場所を描いた風景画も見つかった。

ユノナ号はこの船からコメその他の荷を積み込んだ。もう1隻の船の積荷は魚だけで、村のすぐ近くに錨を6個下ろして停泊していたことから、この魚はこの地で積み込まれたものようだった。ニッポンから来た船には赤い塗料が塗られていたが日本人によれば、これは官船の印であった。

(略)午後、よりましな品物すべてとコメをユノナ号へ移し、その後、納屋と船を燃やした。(略)

6月28日 早朝、カルピンスキー中尉が16人の隊員を連れて上陸し、北へ約8マイル行った地点で、大きな兵舎4棟と納屋がいくつかある日本人の居留地を発見した。しかし、そこには誰一人おらず、近くのうっそうと茂る背の高い草の中に隠れていた人間を1人見かけたただけだった。村にはまったく何も残っていなかったため、人々はそこからずっと前に引き上げたようだった。その村の近くには2、3のユルタがあった。(略)カルピンスキー中尉はその居留地を焼き、ユノナ号に戻ってきた。それからフヴォストフ中尉は約束していたとおり、2人を除き日本人を全員解放した。日本人たちには大きな日本のボートを与え、彼らが望んだものをすべて支給した。2人の商人は上質のラシャと、stanid⁴⁶、その他たくさんの商品の見本を持っていった。それは、通商が始まりさえすればわが国からどんな商品を購入できるか、自国の人々に見せるためであった。この日本人たちは、自分たちの政府の残酷さと、同時にその臆病さを知っている。軍事的な行動が頻発すれば、政府はすぐにもロシアとの通商に同意すると彼らは確信しているのである。クリル列島とサハリンが日本とロシアのどちらに帰属することになっても自分たちにとっては同じことで、そこへ魚を買い付けに行く許しをもらえるだけでよい、と彼らは言っていた。

6月30日 早朝、ユノナ号のバイダルカと艦載ボートが^{ビク・ド・ラングル}ラングル岬へ行ってきた。5時、ナイボ湾から出てきた日本船を発見したが(略)この船はすぐにわれわれに気づき、岸へ向かい、ナイボ湾の中へ隠れてしまった。その船を三檣帆船で捕らえることもできたが、時間も惜しく、積荷も

⁴⁶【編訳者補注：意味不明】

一杯だったので、その船を拿捕しても意味はなかつただろう。7時過ぎ、もう1隻が湾へ逃げ込んでいった。

7月1日 (略)

7月2日 (略)

7月11日 (略)遠征に関わる書類はすべて、オホーツクにおいてブハーリンに没収されたので、(略)

海軍少尉ダヴィドフ 1808年4月20日

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 75-116.

(前田ひろみ・寺山恭輔 訳)

25. 海軍参議会からスループ船ディアナ号指揮官、海軍中尉 V.M.ゴロヴニンへの指示より。クロンシタットからオホーツクへの航海について (⑥No. 103)⁴⁷

1807年5月16日⁴⁸

皇帝陛下のご許可を得てスループ船ディアナ号に装備を施した目的は、オホーツク艦隊にさまざまな必需品を補給することにある。よって、航海の課題は補給を行なうべくオホーツク港に到達することである。オホーツクへは、時期や諸事情を考慮したうえで、喜望峰ないしはホーン岬回りで最適ないし最短の航路を取って進まなくてはならない。広大な海洋をいくつも渡り、さまざまな気候を体験し、それぞれに特有の風と天候に遭遇するだろう。さらに、休暇を取ったり、新鮮な食糧を補給したりするために、もしくは貴殿に委ねられた船の損傷を修理するために、両インドおよびアメリカの沿岸にあるヨーロッパの大国の施設に立ち寄らなければならないだろう。それゆえ、事前に通知しておくが、貴殿は陸・海軍大臣次官殿からこれらの大国との政治的交流の課題にかんする特別訓示を受け取られたし。海軍参議会は貴殿に経営にかかわる指示のみを与

⁴⁷ 次回の太平洋遠征には、排水量300トン(全長27.8メートル、幅7.6メートル、喫水3.7メートル)の輸送船ディアナ号が選定された。この船は建築木材の輸送用にロディノエ・ポーレ[ペテルブルグから約200kmの位置にある都市。造船場があった]で建造された。すぐれた造船親方メレホフとI.V.クレパノフによる船体検査の結果、ディアナ号は遠洋航海には適していないことが判明した。1806年と1807年の秋から冬にかけて、ペテルブルグ、つづいてクロンシタットでメレホフの指揮下、船はスループ船に改造され、軍艦として位置づけられた。円材の設計はクレパノフが担当した。クロンシタットにおける船の最新化の最終段階では、十二等官である造船親方A.V.ゼンコフが参加した(Головнин В. М. Путешествие на шлюпе «Диана» из Кронштата в Камчатку, совершенное под начальством флота лейтенанта Головнина в 1807-1822 годах. М., 1961, с. 37-42)。

⁴⁸ 添付文書にもとづき日付を決定した。РГАВМФ, ф. 166, оп. 1, д. 909, л. 61 を参照。

えることを決定した。この中の規則は、その大部分が海軍規定、操典やその他の法令で述べられ、海軍勤務員全員に周知されている。しかしながら、貴殿が出発しようとしているのと同じような航海で得られる、実体験から培った人類の知識が拡大するにつれて、時と場合によってはこれらの法令では述べられていないような事件が発生している。それゆえ、上層部は貴殿に対してこれらのうちのいくつかを繰り返す責務がある。また、海軍佐官クルーゼンシテルンから得た最新情報からも、もっとも注目に値するものを同指示に収めなくてはならない。

したがって、国家海軍参議会の指示は以下の最も主要な条項からなるだろう。

第1項。乗組員全員の健康維持。乗組員の衛生管理。できるかぎり最良の食事と栄養の提供。兵卒に対する身体の教練、また武官に対する各自の官位や職務にふさわしい訓練。勤務にかんする直属の上司への報告。国際条約または軍事操典にのっとった友好国の官吏との交流。貴殿が信頼され、抜擢されたことに応えられるように、またロシア海軍の品格が守られるようにスループ船と乗組員を維持すること。

第2項。貴殿の海洋航海の概要。各地の自然の秩序に従い、回避しなければならない自然現象の説明。海軍佐官クルーゼンシテルンの最新の航海から得られたもの。そして最後に、オホーツク艦隊向けの積荷を輸送してからの母港への帰還。(略)⁴⁹

航海の概要

両半球の海洋航海は、それぞれの海洋で決まっている、航海にふさわしい季節によって規定される。本参議会は、貴殿が高名な航海者たちの世界一周航海を指針とすることを決定した。それらは、貴殿が委ねられた船や乗組員すべてを維持・管理するうえで、多くの場面で模範もしくは改善例となるであろう。そのため、貴殿に必要なこれらすべての航海記を、イギリスまたはその他のヨーロッパの港で、貴殿が知っているどの言語で書かれたものでも購入する権利が貴殿には与えられている。その際、海軍局から提供されないのであれば、あらゆる海洋の海図も購入してよい。ともあれ、ここで貴殿が予定している航路について海軍佐官クルーゼンシテルンの見解を追加しておきたい。

ディアナ号が12月以降にヨーロッパの海域を出た場合、喜望峰経由でオホーツクに向かう航路のほうがホーン岬を回るよりもはるかに好都合である。ホーン岬経由の場合、ヨーロッパを遅く出たために、もっとも不都合な時期、つまり4月あるいは5月に岬を回らなくてはならないからである。一方、ディアナ号が12月以前に喜望峰に向かった場合、喜望峰到着は2月になるが、北西風が吹き始める前になるので、おだやかなテーブル湾が利用できる。彼はイギリスから喜望峰

⁴⁹ 経営問題にかんするテキストを省略した。

までの道中は、どこにも寄港する必要はないと考えている。なぜならマデラとテネリフェ島にあるサンタ・クルスの停泊地は、冬季、危険なときがあるのに対し、喜望峰ではあらゆる新鮮な食料を豊富に見つけることができ、航海の期間全体をとおして傷まないワインもあるからである。しかし、ディアナ号がヨーロッパの最後の港をあまりにも遅く出てしまい、2月もしくは3月半ばまでに喜望峰に到着できなくなってしまう場合、そこには寄港しないようにと彼は助言している。3月初頭や4月は、テーブル湾とサイモン湾のどちらも非常に危険である。なぜならこの時期、南東風のあとに北西風が吹き始め、このためテーブル湾では北西からの暴風が、またサイモン湾では北東からの暴風が頻発するからである。したがって、ディアナ号が1月以降にヨーロッパを出航し、なおかつワインを確保しているならば、彼の意見によると聖エカテリーナ島に直行し、そこから喜望峰を回り、オホーツクへの航海を続けるべきである。

喜望峰からオホーツクへの航海にかんしては、たしかに最短になるようにシナ海を通り、新鮮な食糧の補給のためにマニラかマカオに寄港するのがよいように思われる。しかし、この航路には重大な不都合がある。第一に、ディアナ号が喜望峰を2月か3月に回ると、スダ海峽に4月から5月に到着することになるが、この時期はモンスーンの変り目で、それにともない暴風が多発する。この天候の変化がすでに終わったあとも、南西の季節風が続き、台風に警戒しなければならない。台風は船を危険にさらし、難破させることもある。そのような事態が1797年5月に発生している。このとき、イギリスのコルベット船とスペインのフリゲート船、数隻のポルトガル船が沈没した。第二に、わが国と中国、スペイン、バタヴィヤとの国交状態では、これらの国はマカオ、マニラ、バタヴィヤ[ジャカルタ]を寄港地として利用させてくれないだろう。ただでさえ、シナ海での航海が危険であるうえに、この航路にはイギリスの居留地であるプロピナング[ペナン島]、別名プリンス・オブ・ウェールズ島を除き、友好的な港は一つもない。プロピナングでは何でも見つけることができるが、その場合はマラッカ海峽を通らねばならなくなり、距離は長くなる。このため、ニューホランド[オーストラリア]付近に行く、つまり状況に応じてヴァン・デューメンの地[タスマニア]かバッサ[バス]海峽を回り、ジャクソン港[ポート・ジャクソン]に寄港するのがはるかに良いと彼は考えている。この居留地はすでに繁栄のきわみにあり、あらゆる新鮮な食料が手に入るだけでなく、どんな修理や修繕も可能である。この航路には一つだけ欠点がある。つまり、ニューホランドとカムチャツカの間にはテニアン島を除いて、よい寄港地がないのだ。必要に迫られた場合、離れてはいるがサンドヴィッチ諸島[ハワイ諸島]がある。とはいえ、ここからカムチャツカまではせいぜい6週間である。

注記。本参議会は必要に迫られた場合、航路上の友好関係にある島々に立寄ってもよいと考えている。海軍佐官クルーゼンシテルンの見解を記したが、これはあくまでも指針の一つとしてで

ある。この指針によって貴殿は各地の状態や風習をよりよく知ることができるだろう。いずれにせよ、貴殿の前にある航路は時期や事情次第となるだろう。これらにかんしては大臣次官殿が貴殿に特別訓示を与えるだろう。

オホーツク艦隊のために積荷を輸送し、引き渡す目的で、貴殿がオホーツク海かカムチャツカ海に行くことを大臣次官殿が許可している。そこでは、貴殿はペトロパヴロフスク湾、あるいは他でもないオホーツク港に入港しなくてはならないだろう。ただし、積荷はオホーツク地方長官、海軍中佐である帯勲者ブハーリンに引き渡さなくてはならない。ところで、ヨーロッパの港への帰還について、また貴殿がそこからどんな積荷を輸送しなくてはならないのかについても、大臣次官殿が決定する。人類のあらゆる種類の知を拡大すべく行なわれる観察にかんしても、国家海軍局が貴殿に必ず訓示を与える。しかし、本参議会は以下を確信している。貴殿は熟練した優秀な海軍将校として、ここで貴殿に指示された内容、海軍操典に記された海軍参議会に対する責務、そしてその他の、船舶の指揮と関連して法令で定められている義務をすべて正確に遂行するであろう。貴殿は目前に迫った航海で思慮ある指揮を行い、かかる偉大な航海が委ねられることになった、貴殿に寄せられた信頼に応えるであろう。それによって貴殿は、貴殿の顕著な功績そして全乗組員に対する褒賞について、皇帝陛下に請願する確実な手段を上層部に与えるだろう。

(2)РГАВМФ, ф. 166, оп. 1, д. 909, л. 62-77. 発信文書の写し

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

26. N.P.ルミャンツェフから五等官 A.I.フヴォストフへの書簡

1807年7月24日

慈悲深きアレクサンドル・イヴァノヴィチ[・フヴォストフ]殿

貴殿の愛すべきご子息[海軍中尉フヴォストフ]が消息不明のため、貴殿は私を介してご子息についての情報を得たいとお望みでしたが、これまで貴殿のお望みをかなえることができませんでした。

しかし本日、ニジネカムチャツクの陸軍少将コシレフから、さる12月14日付の書簡を受信しました。それによると、海軍中尉フヴォストフは指揮を委ねられた船とともに11月8日、オホーツクからペトロパヴロフスク湾に到着しました。彼はそこで越冬し、船を修理する予定です。以上を喜んで貴殿にお知らせします。

ルミャンツェフ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 5.

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

27. A.I.フヴォストフから N.P.ルミャンツェフへの書簡

1807年7月31日

サンクトペテルブルグ

慈悲深き閣下

昨日、閣下の本月27日付書簡⁵⁰を拝受いたしました。この書簡により、昨年11月8日、わが息子[海軍中尉フヴォストフ]がオホーツクからペトロパヴロフスク湾に到着したことを知りました。このような通知を特別の連絡として拝受し、私の家族全員を安心させようとした閣下のご慈悲に痛み入っております。

アレクサンドル・フヴォストフ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 9.

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

28. 海軍少尉 G.I.ダヴィドフから A.A.バラノフへの書簡。「すでに政治的監視下にある住居にて」

1807年8月7日

オホーツク

慈悲深きアレクサンドル・アンドレエヴィチ[・バラノフ]様

誰かに手紙を送ることしかできないときには、私は大いに喜んでできる限りこの機会を利用します。船は当地にすでに一か月近く停泊しています。作業を行う人手が会社にはなく、ブハーリンの配下にある漕ぎ手たちを雇わざるを得ないという事情だけで、乗組員やわれわれ全員が監視下に置かれています。11人が6、7時間働いて500ルーブルを稼げる場所がどこにあるのでしょうか。私が書き間違えたと言われないように、私はわざわざ数字を文字で書きました。しかしながら、これはオホーツクで実際にあったことなのです。会社はマリア号からいくつかの梱包物を降ろすことに対して、この500ルーブルをブハーリンの漕ぎ手たちに支払ったのです。

われわれは至急便の発送のために、ほんの3、4日間ここに停泊するものばかり思っていました

⁵⁰ [編訳者補注：日付は食い違っているが、1807年7月24日付書簡(本史料集 No. 26)をさしていると思われる]

た。しかし、ブハーリンはわれわれを長く引き留めておく利点を見つけました。というのは、それによって彼の懐に少なくとも6,000ルーブルあるいは7,000ルーブルが転がりこんだからです。彼がいなければ、どんなささいな事もできないのですから、ここでは彼が会社オホーツク支部の支配人なのです。

カルピンスキーは正真正銘の卑劣漢です。彼は愚かにもエリザヴェータ号を破壊した件では情状が酌量され、ユノナ号に採用されました。それにもかかわらず、感謝の念から彼は当地でレザーノフや貴殿、そしてフヴォストフを罵り、ユノナ号に配属され、1,000ルーブルの無駄金を稼ぐ機会を与えられたことを喜んでいました。もし、この畜生がいなかったなら、あるいは監視されることにこの畜生が腹を立てていたら、フヴォストフは今回のような不快事に我慢しなかったでしょう。貴殿が一隻の船をカムチャツカへ派遣し、ユノナ号と単檣帆船[アヴォシ号]の境遇を心配していると伺いました。しかしながら、あらゆる危険を回避した挙げ句に、当地でこれだけの不愉快な出来事にあうなどとは貴殿は予想されなかったでしょう。

今回、遠征をともにし、私はフヴォストフの心意気を窺い知る機会を得ました。一時の軽率な行為だけでは、そのようなものはすぐにはわかりません。ブハーリンはどんな抑圧的な態度を取っても、フヴォストフの真意を測りかねて、驚いています。では失礼します。ごきげんよう。貴殿の従順なる僕と呼ばれる私の、いつまでも変わらない敬意をご確信下さい。

ガヴリル・ダヴィドフ

イヴァン・アレクサンドロヴィチ[・クスコフ]や皆様によるしくお伝え下さい。

(5)Тихменев П. Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени, ч. II, прил., с. 283-284.

(小野寺歌子・畠山禎 訳)

29. N.A.フヴォストフと G.I.ダヴィドフが 1807 年に日本人から略奪した物品の一覧⁵¹

％	商品名	ユノナ号	アヴォシ号	合計
1.	様々な家庭用の神仏図や像	4	-	4
2.	本の入った小さな筆筒と海図	1	-	1
3.	日本語の銘文の入った黒い板			
4.	普通の大きなはめ板の扉	4	-	4
5.	普通の小さなはめ板の扉	5	-	5
6.	漆塗りの鉢	-	2	2
7.	塩入れ	-	2	2
8.	蓋のついた木製の小さな桶	4	0	4
9.	蓋のない木製の小さな桶	-	1	1
10.	足のない木製の小さな桶	-	1	1
11.	土瓶	-	1	1
12.	鉄瓶	-	1	1
13.	急須。蓋有りと蓋なし	9	3	12
14.	蓋のない割れた急須	-	3	3
15.	鉄の分銅	1	1	2
16.	木製の水差し型牛乳入れ	1	-	1
17.	陶器の皿	173	15	188
18.	様々な木製の湯のみ	110	28	138
19.	大小の銅鏡	1	7	11
20.	大小の漆塗りの箱	32	26	58
21.	漆塗りの木製の小箱	-	6	6
22.	あまり大きくない漆塗りの筆筒	1	2	3
23.	漆塗りの日本のスプーンまたはフォーク	64	-	64
24.	木製のそろばん	3	3	6
25.	漆塗りの木製の櫛	20	13	33

⁵¹ [訳者補注：p=プード(1 プード=16・38kg)。f=フント(1 フント=409.5g)。v=ヴェドロ(1 ヴェドロ=12.3 リットル)。訳語が不明なものは原語のまま記載した]

26.	木製のお盆(皿の代わりに利用される)	122	44	166
27.	銅釜	-	1	1
28.	鉄釜	-	7	7
29.	割れた鉄釜	-	4	4
30.	銅鍋	2	2	4
31.	鉄鍋	1	1	2
32.	大きな折りたたみ式衝立	2	-	2
33.	小さな折りたたみ式衝立	2	-	2
34.	日本の墨(破片)	11	-	11
35.	銅製インク壺	-	2	2
36.	銅製の缶、蓋つき	5	-	5
37.	銅製の缶、蓋なし	3	8	11
38.	錫製のヘアピン	10	8	18
39.	ケースなし剃刀	10	8	18
40.	ケースのある剃刀	-	5	5
41.	木製ケース	9	9	18
42.	小さなナイフ	30	6	36
43.	小さなはさみ	-	6	6
44.	キセル	11	21	32
45.	貝殻製の角状の物	1	-	1
46.	食用の紙[海苔?]	1/2 連(240 枚)	-	1/2 連(240 枚)
47.	日本茶 2 箱	2p .30f.	-	2p.30f.
48.	吸いタバコ	5p.15f.	1p.	6p.15f.
49.	本の入った籠	1	-	1
50.	大小の籠	9	9	18
51.	破れた紙の灯火[ちょうちんか行灯]	9	9	18
52.	同じく紙の灯火でまったく役にたたないもの	2	2	4
53.	大小の蠟燭	1p.30f.	-	1p.30f.
54.	漆塗りの木製容器	3	3	6

55.	レンズの入っていない、壊れた望遠鏡	1	1	2
56.	銅製の物差し	1	1	2
57.	銅製の燭台	1	1	2
58.	銅製のペンチ	2	1	3
59.	馬につける銅製の鈴	3	3	6
60.	銅製の棹ばかり	2	2	4
61.	木製の球	1	1	2
62.	脚のついた漆塗りの腰掛け	3	3	6
63.	木製のフレームのついた毛織物	1	1	2
64.	銅製の noshniki[鋏?]	1	1	2
65.	紙に描かれた絵	3	3	6
66.	南京錠	5	5	10
67.	壊れた南京錠	1	1	2
68.	鍵	10	10	20
69.	ガラス	1	1	2
70.	鳥の翼	8	8	16
71.	カルター組	1	-	1
72.	木綿の着物	-	3	3
73.	木綿のシャツ	-	6	6
74.	木綿のまだらのスカーフ	-	13	13
75.	木綿の幅広の長帯	18	-	18
76.	傷んだ幅広の長帯	3	-	3
77.	梳毛の幅広の長帯	-	12	12
78.	絹製の幅広の長帯	-	3	3
79.	ウルップ島の布地製のシャツ	124	-	124
80.	子供のよだれかけ	-	3	3
81.	背が高い者用の胸当て	-	100	100
82.	切断されたクロテンの毛皮二級品	35	-	35
83.	切断されたカワウソの毛皮二級品	50	-	50
84.	絹の上衣	35	-	35
85.	半絹の着物	50	-	50

86.	木綿の着物	100	-	100
87.	梳毛の着物	95	-	95
88.	半絹の刺し縫いの肌着	43	-	43
89.	木綿の刺し縫いの肌着	150	-	150
90.	Kitainyi[中国製あるいは南京木綿の]胴衣	22	-	22
91.	木綿のズボン	15	-	15
92.	Kitainyi[中国製あるいは南京木綿の]ズボン	21	-	21
93.	木綿の前掛け	2	-	2
94.	帯紐	-	18	18
95.	イラクサで織った幕	10	-	10
96.	木綿の刺し縫いの敷布団	28	8	36
97.	木綿の刺し縫いの布団	19	-	19
98.	木綿の敷布	-	2	2
99.	ワタ	23f.	21f.	1p.4f.
100.	麻の粗布一反	13	-	13
101.	木綿生地	1束	14個	1束と14個
102.	ちぢみ織りの生地	-	2	2
103.	木綿生地3反	-	3	3
104.	様々な色の南京木綿	36	-	36
105.	南京木綿3反	-	3	3
106.	傘	5	-	5
107.	紙製の(木綿製の)扇	8	12	20
108.	黒の外套	-	5	5
109.	青い外套	12	-	12
110.	白い外套	60	20	80
111.	様々な色の糸(一巻き)	-	320	320
112.	木綿糸	15f.	-	15f.
113.	斧	2	2	4
114.	様々な大鋸	2	-	2

115.	様々な小鋸	9	-	9
116.	船大工のものに似た、握りのある鋸	-	8	8
117.	船大工のものに似た、握りのない鋸	-	8	8
118.	握りのある鉄製の鉤	-	2	2
119.	大きなナイフ	3	2	5
120.	やっところ	1	-	1
121.	槌	2	-	2
122.	鉄の rymbouty	2	-	2
123.	砥石	7	7	14
124.	鉄の取っ手(かすがい)	13	-	13
125.	木槌と鉄の刃がついたカンナ	4	-	4
126.	片手カンナ	-	22	22
127.	様々なノミ	14	41	55
128.	コーニス、傍取カンナ、shiteniki	-	14	14
129.	鉄のノミ	50	-	50
130.	指物のヤスリ	152	-	152
131.	鉄の輪[あるいは鉄の蝶番]	12	12	24
132.	木綿の帆布の切れ端	1	-	1
133.	羅針盤	5	-	5
134.	falsovyi の小旗	3	2	5
135.	南京木綿の小旗	10	-	10
136.	絹織物の小旗	-	4	4
137.	鎖のついた四つ爪のひっかけ錨	4	4	8
138.	鉄の長材	2	2	4
139.	ピストル	1	-	1
140.	8本の菓莢の入った菓莢袋	-	1	1
141.	短剣	-	1	1
142.	帯	-	2	2
143.	草で編んだ矢筒	-	-	1
144.	漆塗りの矢筒、蓋なし	-	3	3
145.	漆塗りの矢筒、蓋有り	-	12	12

146.	鉄の矢尻のついた漆塗りの葦の矢	457	233	690
147.	漆塗りの弓	-	16	16
148.	鉄の甲冑	28	27	55
149.	甲冑に付属する naryl'niki つき袖あて [肩鎧]	2	-	2
150.	甲冑に付属する頬あて[面頬]	-	2	2
151.	袖あてのみ	29	-	29
152.	漆塗りの盾	11	-	11
153.	ブリキ製の盾	12	9	21
154.	金メッキした軍刀	1	-	1
155.	銅製の火縄銃	1	-	1
156.	火縄銃の銃床	-	1	1
157.	壊れた銅製の大砲	2	-	2
158.	小さな銅製の迫撃砲	1	2	3
159.	銅製の点火装置のついた火縄銃	13	21	34
160.	様々な剣	-	15	15
161.	剣の刃	-	4	4
162.	ラシャ製の銃ケース	2	-	2
163.	皮製の銃ケース	30	6	36
164.	鉄の槍	12	8	20
165.	棹のついた intrepeli	1	-	1
166.	日本の火薬あるいは miakot'	20f.	15f.	35f.
167.	斧槍の代わりに黒い羽飾り(のついた棒)	8	-	8
168.	銃弾用ゲージ	2	2	4
169.	太鼓	1	1	2
170.	バッジ	1	1	2
171.	精米、袋なし	1720p. 26f.	563p.	2283p. 26f.
172.	麴	11p.5f.	-	11p.5f.
173.	塩	196p.36f.	70p.	266p.36f.
174.	酒、弱いアルコール飲料	100v.	-	100v.

175.	樽入り酒	16	-	16
------	------	----	---	----

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л.

137-144.

(伊賀上菜穂 訳)

30. 海軍少尉 G.I.ダヴィドフから会社総本部への報告書からの抜粋⁵²

1807年10月18日

(略)事業の遂行後、海軍中尉フヴォストフは至急便を発送するためオホーツクに向かいました。私が帆や第一斜檣の問題を連絡すると、私も彼のあとに続きオホーツクに来るように命じられました。7月16日、オホーツクの錨地に停泊し、全員が上陸しました。17日、ユノナ号にはほとんど仕事がなく、両船の乗組員を使えば4日で作業を済ませることができたので、私は帆の修繕や第一斜檣の修理を開始するためにユノナ号とアヴォシ号からすべての手漕ぎボートを集め、上陸しました。そのあと、両船はアメリカへ出発しなければなりませんでした。

私が海軍佐官[中佐]ブハーリンのもとを訪ね、第一斜檣用の木材を分けてくれるように頼むと、彼は警護をしている下士官を呼び、私の逮捕を命じました。

「いったいこれはどういうことですか」、と私は尋ねました。「営倉に入ってください」。「私には何のことかまったくわかりません」。「では、陸軍少将ペトロフスキー⁵³閣下のところへ行ってください。少将閣下は皇帝陛下から全権を委任されているお方です。あなたの遠征について閣下に説明してください」。そこで私は警備のあとについて、町に出ました。閣下は睡眠中で、起きるのを待たなくてはなりませんでした。30分後、私のところへブハーリン氏がやってきて、剣を返しました。

「私はどうやってこんなに早く自分の罪を償ったのですか」、と私は尋ねました。でも、酔っ払いからどんな満足のいく答えが得られるでしょうか。

陸軍少将ペトロフスキーが目覚めると、私は彼のところへ行って伝えました。「ブハーリン氏が、皇帝陛下から全権を委任された閣下のもとへ行き、私が用いられた遠征について説明するようにと指示しました」。「遠征とはいったい何ですか」。「それは、元遣日使節である侍従長ニコライ・

⁵² 【編訳者補注：訳出にあたって、有泉和子「19世紀はじめの北方紛争とロシア史料：遠征の後始末——フヴォストフ・ダヴィドフ事件とロシアの出方」、23～30頁所収の翻訳を参考にした】

⁵³ 【編訳者補注：I. G.ペトロフスキー——陸軍少将、カムチャツカ地方統治者(1807～1813年)】

ペトロヴィチ・レザーノフのご命令で行われたものです。秘密遠征と称されており、レザーノフ閣下は一定の時期が来るまで、この遠征については一切口外しないようにとご命令なされました」。

「仮にそうであるならば、私は何も知りたくありません」と閣下は言いました。「ブハーリン氏は無用にも私のことを全権委任などと呼んでおりますが、私は自分の管轄についてのみ委任されているのであり、管轄外の案件の審理に口を差し挟むつもりは毛頭ありません」。その後、海軍佐官ブハーリンがやってきて、あらゆる手を尽くして陸軍少将を本件に関与させようとしたのですが、それを拒否されると、ブハーリンは私を船へ帰すように命じました。船に戻る途中、ブハーリンは、どんな秘密任務についても、昨年、侍従長レザーノフはブハーリンに知らせることができたはずだから、彼がこの遠征を命じたなどとは信じられないと言いました。「では、そのとき貴殿は海軍中尉フヴォストフ、つまり秘密遠征隊の隊長から上申書を受け取られたのですね」。「いえ、受け取っていません」。

その後、ブハーリンは文書の点検だけを行い、もし遠征が本当に侍従長レザーノフの命令にもとづいてなされたのであれば、それについてしかるべきところへ報告し、船はただちにアメリカへ送られるであろう、と言いました。会話は報酬にまで及びました。ブハーリンは「あなたは会社からたっぷり報酬を受け取っているのだから、もちろん、報酬の一部を犠牲にしても残りの報酬と自分自身の自由を守りたいでしょうね」、と言いました。「何のことかわかりません」、と私は答えました。「つまりこういうことです。あなたは[逮捕されて]船に乗せられたうえに、会社での地位を失うことになるでしょう。その地位は、まだ守ることができます。わかりましたか」。「残念ながら、わかりました。ですが、私はけっしてそのような卑劣な手段を選びません。もし私が正しければ、お前も、また他の誰も私に嫌疑をかけないでしょう。私が正しくなければ、法に反してまで私を擁護しないでしょ。私はあらゆる苦しみを受け入れる覚悟ができています」。ちょうどそのとき、われわれの方へひとりの航海士が近寄ってきました。その前にブハーリンは私につきのように告げました。「耳に入ったことは口外しないように。さもなければ、私がここであなたに何ができるのか思い知ることになりますよ」。あまりに簡単明瞭な説明から、私は自分が本物の悪党の手中にあることを知りました。

航海士と検事 auditor が岸に到着すると、われわれ全員は単檣帆船[アヴォシ号]に向かいました。この船はすでに川の中へ引き入れられておりました。私は船が封印され、配下の者が誰一人いないのに気がつきました。彼らは将校や数名の水夫とともに営倉にいました。われわれが封を解いて船室に入ると、海軍佐官ブハーリンは私に遠征関連の文書をすべて渡すように命じました。ところが、日本人に対する軍事行動にかんする指示のいくつかの項目を読むと、小銃やあらゆる武器を船室から運び出すように命じ、オホーツクで武力を行使しないことを約束するよう私に求め

てきました。私は驚いて彼を見ました。しかし、彼の頭が混乱しているのを見て、「私一人が町全体にとってそんなに恐ろしいのであれば、そういたします」と答えました。

「あなたの言葉を信じます。住みたいところを好きに選んでも構いません」。「私にとってはどこでも同じです」。「船の中は嫌ですか」。「どこでも同じです、とすでに申し上げました」。その後、ブハーリンは検事やその他の2名の将校に対し、書類を没収してから封印し、持ち帰るように命じて立ち去りました。彼らはその通りにしました。1時間後、海軍佐官ブハーリンの命令を帯びて検事が船室から日本の弓を武器として持ち出すために戻ってきました。もちろん、私はこの弓を使ってオホーツクを征服できたでしょう。実のところ、どうしてブハーリンが私の絶望や大胆さをそんなに警戒したのか、わかりません。

私の周囲がすっかり落ち着くと、私は自分の置かれた状況について考え始めました。つまり、あらゆる苦勞、非常に長きにわたった努力、そしてかいくぐってきた危険に対する褒賞が、これ以上はありえない程の苦痛にさいなまれるということだったのです。私が日本人の手中に落ちたとしても、これよりも悪くはなかったでしょう。私は不本意ながらこの遠征に参加しました。私は自分の船の半裸の者たちの健康に気を配らなければならず、彼らのうち多くの者の身なりを自費で整えてやりました。十分に平穏なときがなかったために、私は体調を崩しました。私はここで行われている諸事業の無味乾燥さに気づき、かなり前から一刻も早くこの最果ての地を立去りたいという気持ちに駆られていました。人生の一番良いときをこんなにつまらなく過ごしたこと、自分自身の意志で社会を避け、それまでに持っていた乏しい知識、さらには新しい知識を獲得するための時間もすべて失ったことについて自分自身に腹を立てました。それでも、自分自身を責めることはできませんでした。私利私欲のための企てがこんなに大きな犠牲を払わせたのです。それゆえ、その企てのために、かえって世間、そして私を勤務のために採用した会社から好意的な評価を得るかもしれない、そして多くの不愉快な出来事を耐えたのちに、大きな喜びとともに親族や友人を抱きしめられるかもしれないという、はかない望みにかけました。以上が私の見解です。

もしかすると、この見解は適切ではないかもしれませんが。しかし、このような不本意な見解を持ったために、予期しなかった侮辱を受けたことに対して悲しみがあふれ出てきました。もしかすると、皆様はこの文章を読むために数分間を失ったことに不愉快でおられるかもしれません。けれども、私がこれを書き終えて何を感じざるを得ないか考えてみてください。そして、いくぶん大目に見て下さい。さて、いろいろとお尋ねしたいことがあります。侍従長ニコライ・ペトロヴィチ・レザーノフに対して、彼の全権委任がどの程度のものか尋ね、彼に服従することを拒むことができた者がいたでしょうか。レザーノフ閣下は随所で日本船や日本人を捕らえなくてはな

らない、またこれは使節団の拒否に対する復讐として行なわれるとおっしゃっていました。侍従長ニコライ・ペトロヴィチ・レザーノフは、ウナラシュカ[ウナラスカ]島から皇帝陛下に、本事業について、それが着手される一年前に報告しました。日本人がいる場所の原住民を撫柔するために、メダルや物品が手渡されました。これほどの長期間にわたり、本遠征を成し遂げるために露米会社のあらゆる資金が使用されました。それなのに、かりに誰かが閣下に尋ねることができたとしても、これらすべての遂行が皇帝陛下のご意志に反するものではないかと疑念を差し挟むことが、はたしてできたでしょうか。

皆様はもちろん、レザーノフ閣下が指揮者の海軍中尉フヴォストフに与えた指示をご存知です。フヴォストフは派遣され、閣下の命令を遂行しました。

私は、それがもはや初めてではなかっただけに、海軍佐官ブハーリンの不正行為を確信しております。もっとも、彼の所業の目撃者でなければ、それを語ることはできません。不幸にもこの人物の残酷さを、身をもって味わうことがなければ、語ることはならないでしょう。彼の所業を表現するのは恐ろしいことですが、オホーツク中がそれについて話しています。彼の所業のごくわずかでも正当だというのであれば、法律がそのようなふるまいを容認することに、またこんなに長い間、海軍佐官ブハーリンの私利私欲によってオホーツクの町が完全に要塞に変えられてしまったことに驚きを禁じ得ません。ここでは、彼の乱暴が毎日繰り返され、彼の命令が当地ではほぼ唯一の法律なのです。彼はこの町の長官として、郵便発送係を服属させ、届いたこの者に対する苦情のすべてを阻止し、オホーツクやカムチャツカに届く、あるいはそこから送られる書簡や公文書を横取りし、勅令さえも隠す手段をこの者に与えているのです。こうした理由から、むしろ上層部はオホーツクでの出来事について何ら情報を持たず、ブハーリン氏は自分の所業に対するしかるべき報いの前兆を酒の中に沈め、はるか彼方から届く、彼を脅かす法律の力を蔑んでいるのです。オホーツクを除くほかのどの町でも、今私書いたことがにわかには信じられないということには同意見です。しかし、おそらくこれはロシア帝国において唯一ここオホーツクだけで起きる事件であるということを、ここでは誰もが知っています。町中の証言は、いうまでもなくこれが真実であることを証明しています。少なくとも私は、多くの人から聞き、それをもとにこの抜粋を書いたのです。

ここで、不幸にも関わりを持つことになった人物について簡潔に描写してみます。私は封印された船に残りました。食糧は船倉にありましたが、幸いにも船室には乾パンがありました。私は何度も支配人ペトロフのもとへを遣り、食物を提供するよう求めましたが、このブハーリン氏の誠実な友は3度目に一日だけ牛肉、パン、茶そして砂糖を送ってきました。当初、私は干潮時に現れる浅瀬を歩くことを許可されていました。しかし、海軍佐官ブハーリンが私にこの運動を

禁じてからは、私の生活は船内での完全な監禁生活となってしまいました。絶えず私に加えられる侮辱のすべてを書くつもりはありません。なぜなら、私以外の誰にとってもあまり面白くない出来事を書いて、皆様のお時間を奪いたくないからです。8月7日と8日、ユノナ号の荷降ろしと荷の積み込みが行なわれました。9日には単檣帆船[アヴォシ号]の荷降ろしが始まり、10日に終了しました。乗組員の検査に及んだときには本当に見ものでした。彼らは長持ちを壊し、トランクを切り裂き、上等な服や下着を勝手に着て、隠しました。要するに、これは本物の強盗そのものでした。その場にいた将校委員会はこの混乱を止めさせることができず、あるいはそれを望みませんでした。この時、拘束されていた私の船のかつての乗組員は何もかも失ってしまいました。彼らの願いにより、掠奪された彼らの所有物の一覧を謹んで提出させていただくとともに、彼らに対する賠償をお願い申し上げます。この騒ぎの中で、私も配下の乗組員を数人見失いましたが、実のところ私は彼らを捜し出すつもりはありません。きわめて遺憾なことに、将校委員会に任命された者たちはむろん何も知らないために、南クリル列島やマトマイ北部の地図を作成するために必要なメモを海へ投げ捨てたり、破ったりしました。一連の方位がしかるべく整理されていたこのノートの喪失は、何か地図を作成して、海軍将校としてのこの分野の任務において微力を発揮し、ささやかながら奉仕するための手段を完全に私から奪いました。私はこれを日本人への勝利よりもはるかに望んでいたのですが。

船の荷降ろしは国側の人員によって行われました。というのも、ユノナ号とアヴォシ号の乗組員はこのとき拘禁されており、ときどきただ働きのために派遣されていたからです。海軍佐官ブハーリンの漕ぎ手10名はマリア号の荷降ろしの際、聞くところによると、5~6時間でほんの500ルーブルも稼いだそうです。どうやらその仕事は、他の誰かを派遣するにはあまりにもよい儲けだったようです。

単檣帆船の荷降ろしのあと、船を返却するとともに、船にかんする何らかの報告書を与えるとも言わずに、彼らは私を住居に移しました。一つの家屋に私と一緒に海軍中尉マシンが住みました。やっと知人に会えたというだけで私は幸せでした。しかし、晩になって海軍佐官ブハーリンは私に命令を送ってよこし、私がマシンと会うことや、建物から出ることを禁じました。私は少なくとも太陽の恵みを浴びるために建物の周囲を歩くことができるものとばかり思っていました。しかし、数時間後にはそれも禁じられ、その後、戸口には哨兵が立てられました。私に対する監視を徹底的に強化するためには、私が何か新たな罪を犯して口実を与える必要がありました。しかし、かりにそれができたとしても、拘禁されて座っている私に何ができたというのでしょうか。したがって、理由もなくますます残酷になっていった態度は復讐あるいは狂気にほかなりません。

船の荷降ろしのあとで、海軍佐官ブハーリンは遠征事業を審理するための調査委員会を発足さ

せました。それにかんして恐れ多くも私見を申し上げます。もしブハーリン氏が船の荷降ろしが必要だと考えたならば、それをまさしく最初の数日のうちに実施すべきであり、会社の事業が完全に破綻するまで船を強制的にとどめるべきではありません。また、そのときに調査委員会を設けるべきでした。しかも、船を引き留める理由が、今回の遠征について彼に通知がなかったということであるならば、彼はなぜ昨年、秘密遠征隊の隊長である海軍中尉フヴォストフから報告書を受け取ったあとに、ニコライ・ペトロヴィチ[・レザーノフ]にこの遠征について尋ねなかったのでしょうか。その上、裁判を行わずに法にもとづき罰せられるところはどこにもありません。しかし、唯一オホーツクではこれが初めてのケースではないのです。本遠征の遂行が有罪だとみなされるのであれば、その責任は隊長である海軍中尉フヴォストフ一人だけ、あるいは将校全員にあるはずですが。ではなぜ、彼はわれわれ 2 人と造船職人コリューキン氏(もっとも、彼は[レザーノフ]閣下によって、遠征に参加するためではなく、必要が生じた場合にユノナ号を修理するために派遣されました)を無慈悲に扱い、同じ海軍中尉のカルピンスキーは自由を享受し、オホーツク支部は彼の報酬を増額し、彼にユノナ号を委ねたのでしょうか。エリザヴェータ号を破壊したことが、はたしてこのような特別扱いを受ける重大な功労とみなされるのでしょうか。

調査委員会が遠征の件を詳細に審理した結果、海軍佐官ブハーリンに対して、われわれをペテルブルグへ送るべきであるとの意見を述べたことは明らかでした。しかし、この後もわれわれの置かれた状態は少しもよくなりませんでした。運動不足とあまりに多くの不快事のために、私の健康は目に見えて衰えていきました。医者がどのような診断を下しても、私も海軍中尉フヴォストフも屋外へ出ることを許されず、自分の配下の者を除いて亡くなった者の顔を拝むことさえも許されませんでした。ブハーリンが厳格に禁じていたにもかかわらず、親切な哨兵たちはいつも海軍中尉マシンや彼のもとを訪れる人びとと会うことを許してくれました。オホーツクの日々の出来事について彼らから聞く話は、われわれの立場がいくらかでも軽減されるという期待を抱かせるものとは、まったくかけ離れていました。海軍中尉フヴォストフは重い熱病に倒れ、私はほんの二、三の頼み事をするために海軍佐官ブハーリンに懇願し、フヴォストフに会う、それも下士官の護送付きで会う許可を得ました。そしてしまいには、私は壊血病であることが判明しました。言うまでもなく意図的に、少しずつ準備された死を待つことしか、われわれにはもう何も残されていませんでした。

私に対する海軍佐官ブハーリンの態度の中に、ある種の法律が存在するのであれば、私も辛抱してオホーツクで自分の運命の最後を待たせよう。しかし、彼の一切の行動は、彼が悪意に満ちた気まぐれで動いていることだけを示していました。私にとって命とは、それを守るためにあえて何らかの下劣なふるまいをするほど大切なものではありません。しかし、海軍佐官ブハー

リンが自分自身の罪を意識せずに、ただ私の死のために行動していると感じ、彼が毎日のように行なう暴力によってそれが証明されると、私はどんなことでもする覚悟ができ、ついにこの人物の残忍な行為の犠牲となる定めにある命を守ることを考えるようになりました。こうして、私と海軍中尉フヴォストフは、オホーツクで裁判もなく苦しめられ、避けられぬ死を待つよりも法の裁きの下に逃げ込む決意をしたのです。海軍中尉マシンに対するブハーリン氏の態度が、いっそうわれわれにそれを確信させました。ペテルブルグへの自由な入市を許可する外務参議会のパスポートを提示したうえで、マシンが何度も申請したにもかかわらず、ブハーリンはマシンにオホーツクに残るよう命じたのです。こうして9月17日の夜中1時すぎ、われわれは住居を出て、旅を始めました。私の体の具合は、最初の数日は馬に乗るのも苦勞するくらい悪かったのですが、道中、次第に回復し、われわれはヤクーツクに到着しました。

われわれの逃亡を告げる海軍佐官ブハーリンの急使便がここでわれわれの先を越し、ヤクーツク地方長官に対しわれわれを捜索し、金や日本製品を没収し、刑事犯として拘禁すべきであると伝えました。カルタシェフスキー[カルダシェフスキー]氏⁵⁴は彼の親切心からしばらくの間、寛容な態度を取っていましたが、海軍佐官ブハーリンの連絡事項を遂行する責務があると考えはじめました。捜索では、当然ながら何も発見されませんでした。何よりも驚いたのは、ブハーリンが荷降ろしのために組織した調査委員会がわれわれの乗組員を検査したときに、彼が金の捜索を頼んだことです。このような混乱した思考は、彼を摘発するためにのみ役立つものです。カルタシェフスキー氏はわれわれにつきのように話しました。イルクーツク県知事殿の命令が下りるまでは、われわれをヤクーツクから出すことはできない。ペテルブルグやイルクーツクではこの最果ての地よりも法律が無効だということはありません。

こうして新しい動きを待ちながらも、これまでの出来事をすべて皆様へご報告申し上げ、本状をしかるべき上層部へご提出くださいますようお願い申し上げます。オホーツクでは手紙を書くことさえも禁止されていたために、これまで総本部には何も報告できませんでした。自らの行動の正当性を確信し、喜んで自分自身を法の裁きに委ねたいと思います。ひとえに皆様には、われわれをペテルブルグへ送還するよう請願し、事の一切について上層部へお知らせ下さいますようお願い申し上げます。私は非常に短い時間の中で、遠征全体の経過について出来る限り叙述するよう努めました。自らの行為に対する裁判所の見解を知るときを忍耐強く待ちつづけます。

おそらく、今回の出来事によって、かくも遠方の僻地ではもはや名誉を求めてはならないという明確な結論が私の中で出たものと思われま

⁵⁴【編訳者補注：I.G.カルダシェフスキー——ヤクーツク地方長官(1805～1816年)】

す。そこでは遣日使節のような全権委任者に服従しないために迫害を受ける恐れがあり、そのあとにこの服従により別の官吏から迫害を受けるのです。そこでは遠隔地であればあるほど、総本部との間で結ばれた契約もその効力を失い、つねに遂行されるとは限りません。そして、しまいには奉仕に対する褒賞はしばしば破棄され、貧困や侮辱に耐え、そうした人生の不幸を耐え抜くだけの十分な沈着がなければ、絶望に陥るかもしれないのです。これが、私が置かれた状態なのです！ 奉仕ではないとしても、少なくともそれを示したいという願いを持ったその報いがこれなのです。私の過去の生活と現在の生活を比べると、胸がえぐられる思いです。これほどまで無残に私の名誉が汚されたがゆえに、その張本人や人生そのものを呪うのです。私が耐えたすべてのことはいまだ私の魂をおとしめてはいませんが、性格を陰鬱にさせ、人生への関心を失わせ、そして私を取り巻くすべてのものに対する憎しみを引き起こしました。私は誰の保護も求めませんが、悲哀と業腹が私の人生を損なう前に、私の親族に会わせる機会を与えてくださる方に感謝します。私の例はあらゆる者に対して、熟慮した上で祖国の遠い僻地へ赴かなくてはならないということを証明するでしょう。

皆様ご自身も、会社事業と関連して出された命令のすべてにおそらく完全に満足されているわけではないということ存じております。それゆえ、皆様に対して不平を申し上げるつもりはまったくありません。ペテルブルグへの送還を請願していただきますように、繰り返しお願い申し上げます。それによって、私は真の恩義を感じます。深い尊敬の念をいつまでも抱きつづけます。

海軍少尉ダヴィドフ

(5)Тихменев П. Историческое обозрение образования Российско-американской компании и действий ее до настоящего времени, ч. II, прил., с. 284-292.

(畠山禎・小野寺歌子 訳)

31. 海軍中尉 N.A. フヴォストフからヤクーツク地方長官への報告書

1807年10月19日

ヤクーツク

(略)書類は、南クリル列島やマトマイ北部の記録にかんするものも含めてすべて没収されました。侍従長レザーノフから与えられた命令書の原本とメダルだけを手元に残すことができました。もっとも、なにもかもだめになったようです。というのは、略奪されるように荷物は陸揚げされ、今回の遠征にかんする多くの書類や地図はわれわれの手元に戻りましたが、ずたずたに切り裂かれていたからです。2隻の船の積荷には銅製の大型大砲2台、迫撃砲3台、銃58丁、サーベル数

十本、その他多くの武器のほかに、3,200 から 3,800[プード]の米、さまざまな絹・綿織物、日本酒約 500 ヴェドロー、高級な漆塗りの食器類、さまざまな書物約 300 冊がありました。その中には最近の遣日ロシア使節団についての記述、侍従長レザーノフや彼の配下にある擲弾兵の肖像画、ナジェージダ号の出航後、日本で起こった反乱、ロシア国人との交易を拒絶したことをめぐる宗教上の皇帝と世俗の皇帝の間の不和にかんする記述がありました。今は詳細な報告書を作成する手段が奪われています。とくに無念でならないのは、1 万ルーブル以上出してもその半分も手に入れないような品物がすべて略奪され、破壊されたことです。オホーツクの住民の中で、日本の物品を所有しない者はいないでしょう。ユノナ号と単檣帆船[アヴォシ号]の乗組員たちも強奪されました。私はその詳しい一覧を持っていましたが、オホーツクを慌しく出発したために置いてきてしまいました。ダヴィドフ氏が総本部への報告の中で書いているので、われわれの待遇や遠征事業の一切の結末を詳細に記述する必要はないかと思えます。

ともあれ、私は私に与えられた指示書にしたがってすべての任務を遂行しました。総本部に対しては、ここから一刻も早く解放されるよう支援を願うのみです。

海軍中尉フヴォストフ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 30.

(前田ひろみ・畠山禎 訳)

32. 海軍中尉 N.A.フヴォストフからヤクーツク地方長官への書簡

【日付不明】

閣下

オホーツクで私の身に起こった不愉快な出来事をお知らせするために、悲痛な思いでようやく筆をとりました。閣下がこの手紙を読まれてご不快を感じられることがないように、私はこの出来事を自分の記憶から消し去りたいとさえ思っております。しかし、私の部隊に命じられた秘密遠征に関わる問題ですので、簡単にでもご報告申し上げないわけには参りません。オホーツクで 2 か月間にわたり劣悪な状態で監禁されていたため健康状態が思わしくなく、事の仔細をしかるべくお伝えすることができません。ただ、この件にかんする情報を提供する目的でダヴィドフ氏が遠征の経過について詳しく記述しておりますので、もはやとくにその必要はないでしょう。(略)

私があえてつけ加えるとすれば、侍従長ニコライ・ペトローヴィチ・レザーノフをオホーツクへお送りし、閣下がこの町から出立されたのち、私は以前、海上で与えられた秘密指示への補足を受け取り、1806 年 8 月 8 日、サハリン島のアニワ湾へ向かって出航しました。アニワ湾にはこ

のとき、海軍少尉ダヴィドフが指揮する単檣帆船アヴォシ号が停泊しているはずでした。この船の乗組員は少なかったので、日本人から攻撃を受ける危険も少なからずありました。

与えられた指示書にしたがい、アニワ湾で任務を遂行しましたが、単檣帆船の姿が見えないため、私は船が先の嵐のときに日本沿岸かクリル列島のどこかで事故に見舞われたのかもしれないと考えました。しかし、幸い、船はカムチャツカのペトロパヴロフスク湾におりました。

この年[1807年]の事業を終えたのち、私は自分に任されていた遠征の完了を報告する至急便を送るために、オホーツクへ帰還しました。ここで、われわれ全員にとって不愉快な出来事が起こりました。入港した最初の日に、海軍佐官ブハーリンに報告書を提出しました。秘密遠征の責任者として、私は前年にもまったく同様のことを行っていました。翌日、海軍少尉ダヴィドフが両船の船載ボートとともに出かけましたが、誰も戻ってきませんでした。港の満潮時に国有の小型船艇が到着し、単檣帆船を河口へ運び去って行きました。

その後2日間、私は何が起きているのかわからないまま、岸から手漕ぎボートが戻って来るのを待っていました。そしてついに、国側の者を乗せた船載ボートがやって来ましたので、私はそれに乗り込みました。

海軍佐官ブハーリンは私を港の役所へ呼び出し、私がどこへ行ってきたのか、どのような命令にしたがって行動したのか返答するよう命じました。

しかし、私は彼に最初からこうすべきであり、私が服従しないと見きわめる前に力づくで船や乗組員を捕えるべきではないと抗議しました。そして、このような目に合わされ、またその他の出来事をオホーツクで耳にしたあとでは質問には答えたくないし、彼が隠匿したり破棄したりして、私から釈明の手段を奪う恐れがあるので、彼を信用して文書の原本を提出することはできないと述べました。ブハーリン氏は私をそこからユノナ号へ送りました。私はペテルブルグへ出立したいということと船の指揮を拒否することを伝え、住居の提供を求めたところ、それが与えられました。翌日の朝、私は私の住居の扉の前に見張りが立っているのに気づき、外に出さないよう命じられているのを耳にしました。

私の監禁がどのようなものだったかをお伝えして閣下のお時間をとるつもりはありませんが、私が2日間食事を与えられず、二十四昼夜にわたり同じシャツと上着を着たままだったということは言っておきたいと思います。つまりブハーリン氏は、私にニコライ・ペトローヴィチ・レザーノフから受け取った文書を提出させるために、あるいは哀れみを知らない人間に慈悲心をおこさせようと、何か下劣な手段に訴えざるを得なくさせるために、自分が思いつくありとあらゆる苦しみを私に与えて私を衰弱させようとしていました。私は熱病にかかりましたが、医師がどんな診断を下しても外出許可を得ることはできませんでした。

その後、壊血病になり、未だに完治するには至っておりません。以上すべてが、決着を迫っています。(略)

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14.

(前田ひろみ・小野寺歌子 訳)

33. イルクーツク県知事の質問と回答。海軍中尉 N.A.フヴォストフの航海と日本での活動、および日本にかんする知識について

〔日付不明〕

1. どれだけの時間を要したのか。

答:5月2日、アヴァチャ湾の氷がなくなり、5月12日、ウルプ[ウルップ]島に到着しました。

6月7日、マトマイに停泊しました。(略)

2. ウルプ島にかんする質問(略)

答:2艘の手漕ぎボートがウルプ島のさまざまな場所に送られました。そのうちの1艘が、ロシア人たちがとうの昔に立ち去ったことを突きとめました。港で彼らは(略)を見ませんでした。ウルップ島の景観ははなはだ荒涼としており、無人です。島全体が山になっております。太いシラカバが生えていますが、曲がっています。(略)

3. マトマイのどの部分に停泊したのか。

答:おそらくマトマイ北部の海岸に流れ着き、その後、この島の北西側に位置するピク・デ・ラグム pik-de-lagm 島[利尻島]に投錨しました。

4. そこには防御施設に適した、信頼に足る場所は見つかったのか。

答:海軍佐官プハーリンのところに地図があるはずです。

5. そこにはどんな民族が住んでいるのか。

答:サハリン人、クリル人、日本人を見ました。アイヌ人は非常におとなしく、礼儀正しく、すでに野蠻人からははるかにかけ離れています。しかし、アイヌ人は日本人から激しい迫害を受けています。カムチャダール人、アレウト人そしてアメリカのいくつかの民がロシア人によって絶滅させられたように、アイヌ人は絶滅するかもしれません。マトマイ、サ

ハリン、南クリルの原住民はアイヌイと呼ばれる同じ言語を話します。

6. どんな住居と倉庫を見つけたのか。

答：島民はユルタに住み、日本人は非常に清潔かつ簡素に建てられた木造家屋に住んでいます。

(略)日本人が島民にあまりにも過大な負担を課しているのです。島民は島内では食べていくことができず、そのため新たな収入源を探すことを余儀なくされています。ゆえに、政府は彼らがクリルの島々に行くことを許し、彼らはそこに定期的に滞在し、やがて定住しています。いずれ日本人がカムチャツカにも辿りつく可能性があります。カムチャツカには魚があり余っているのです。彼らが土地を占有して、もちろん今日のロシア人が得ている利益よりも大きなものを得ることができるでしょう。日本人は南クリル諸島から魚以外に毛皮も運び出しています。そして、これを長崎に持って行き中国人に売っています。

7. この民族はどれくらい強大なのか。

答：日本は、管下に置いているのはいくつかの植民地ですが、おそらく中国にある植民地を含むその広大な領土に多くの人口を擁する帝国です。わが国の使節団による交易[の提案が]拒絶されたのちに派遣された守備隊を、植民地に配備しています。それゆえ、すでにこの時、日本政府は北方からのロシア国人による占拠の企てを警戒し始めたと結論づけることができるでしょう。

8. 日本人は抵抗したのか。またどのように抵抗したのか。つまり勇敢に抵抗したのか、それとも簡単に降伏したのか。彼らはどんな武器を使っているのか。

答：海軍中尉フヴォストフが最初にシャナ湾へ向かったとき、日本人は彼を接岸させまいと発砲し始めました。この撃ち合いは 2 時間ほど続きました。その後、彼は多数の日本人に追われて退去しなければなりません。しかし、彼ら日本人は自分の目で銃の発砲を見たことがありません。また帝国では日本のキリスト教徒を完全に撲滅するためにいかなる武力も行使しておらず、そのような民からどれだけの勇敢さを期待できるのでしょうか。翌日、より多くの人員で出発し、とても切り立っている断崖に接岸しました。彼らもそこからは攻撃してきませんでした。すると、日本人は全員が集落を捨て、逃げ去り、われわれの船が湾にある間、戻ってきませんでした。大砲の他に日本人は特殊な武器を持っています。その武器はオホーツクに 2 つあります。導火線がついた彼らの銃[火縄銃]は弾が遠くまで届きます。弓矢は実用に適しているというよりも見た目が美しいものです。鉄の薄

片でできた甲冑と兜は漆で覆われています。槍は大変粗悪でどちらかというと言兵式に向いているように思われます。これらの他に、槍のように柄に取りつけられた小銃をいく種類か目撃しました。これは敵から身を守るためというよりも、人を折檻するために考案されたように見えます。

9. 大砲はどこから入手しているのか。ヨーロッパ製か、自国製か。

答：大砲と武器はオホーツクにあります。これらはもちろん日本製です。芸術や手工業のいくつかの分野ではヨーロッパ人さえも凌駕している民が、大砲を作ることができないなどと考えられるでしょうか。重すぎて持ち帰れなかった大砲の一つは、一角砲に似ていました。そのため、それが正確にはどのような鑄造のものなのか、はっきりと申し上げることができません。ただ言えるのは、大型の大砲の砲架は可動式ではなく、鉛の砲丸は粘土を一面に塗布され、火縄杆は1サーゼン以上あり、火薬の大部分は粉状のようです。これらすべてが、日本人の戦術がたいしたものではないことを物語っています。

10. 総じて日本人はどんな特徴を持っているのか。勇敢なのか、それとも臆病で小心なのか。

答：これにかんしては第8項で説明しております。

11. 彼らを襲撃した際、多数の流血があったのか。双方からどれほどの死者、あるいは負傷者が出たのか。

答：海軍中尉フヴォストフは特別上申書の中で以下のように説明しています。彼らとの撃ち合いは2時間15分続きました。当然、彼らも無傷というわけではありませんでした。しかし、日本人は退却の際に誰も残さなかったため、被害の程度にかんしては言えません。彼自身[フヴォストフ]が岸の方へ退却したとき、彼らは彼を追跡しましたが、まったく危害を加えませんでした。

12. 日本人は執拗に抵抗したのか、それとも臆病に降伏したのか。

答：これについては第8項を参照ください。

13. どのような要塞と保塁を目撃したのか。それらはどんな種類のものか。

答：土塁を見ました。それは、築城学の法則にもとづいて補強されておらず、日本人がこの学問の知識を持つとはまったく見受けられません。これらの要塞はヨーロッパ人からの攻撃

よりも、むしろ土着民からの攻撃を防御するのに適しています。しかも、シャナでは要塞の真上に山が、いわば覆い被さるように突き出しています。大砲はこの山の上に設置されており、主力の守備隊を役に立たないものにしてあります。彼らの要塞はどこでも同じような配置だと思われます。

14. 帝国軍、装備その他の数にかんしてどんな情報を得たのか。

答：(略)日本の皇帝は多数の軍隊を擁しております。(略)

15. 日本国民はどんな状況にあるのか。

答：(略)彼らは国境地域を見ました。帝国全体について語ることはできません。(略)

16. 通訳のかわりに、彼らが最初の航海で日本からカムチャツカへ連行した日本人たちを用いたのか。彼らはどのような成果をあげ、熱心に働いたのか。

答：当初、彼らは故侍従[長]レザーノフによって集められた語彙集に従っていました。のちに、去年、アニワ湾で捕らえた日本人たちを通訳として使うようになりました。日本人たちは一冬がたって十分良くロシア国語 *rossiiskii iazyk* を理解し、ほとんどあらゆることにかんして彼らと話をすることができるようになりました。日本人たちは、ロシアの使節団の拒絶と通商関係を樹立する意図から軍事行動が行なわれたと確信していました。彼らは皆、自分たちの境遇をやわらげる唯一の手段として心から貿易を望んでおります。同じことを、日本人たちは長崎でわが国の使節団に主張しました。彼らのところに居た者たちはロシアの風習に愛着を覚えました。日本人のところであるような身分間の屈辱的な格差がロシア人の間にはなく、日本では年長者が年少者に対して行使している苛烈な専横もなく、そして各人の生命や身分が官吏の気まぐれや悪意に左右されないということを耳にしました。しかし、彼らにとって何よりも驚きだったのは、臣民が君主や皇帝と話すことさえでき、しかもその際、頭を地面につくまで下げないということでした。ロシアとの通商を拒否し、フリゲート船ナジェーダ号が去ったために、宗教上の皇帝と世俗の皇帝の間で大きな対立が生じ、同時に日本北部の多くの領土に守備隊が派遣された、と日本人たちは語りました。日本人は、無論、他民族の航海能力を自分たちの物差しで測ります。つまり、多民族はすでに行ったことがある場所以外には行けない、と日本人は考えているのです。

その証拠として、ソーヤ湾について語られたこと、さらにアニワ湾にも守備隊、(略)早くもラクスマンが箱館から出発した直後、ニッポンから2年間で13万人もの日本人が移住さ

せられました。そこでは農耕が行われました。また守備隊と大砲が送られました。

17. この二度の航海で政治、商業その他についてどのような有益な情報を得ることができたのか。

答：この質問は広範な考察、多くの時間、さらに彼らが意識していないような情報を必要としています。そのため、遣日使節団が証明できたと思われる情報だけをとり急ぎお伝えする責務があると考えます。交易はロシアにとって必要です。政府がそれを決意さえすれば、その実現は国難ではありません。なぜならば、この帝国の国内商業は非常に低い性能の船を使って海路にて行なわれているので、これを混乱させ、首都への商品や食糧の運搬を阻止し、ただでさえ政府の無慈悲に憤っている民衆が政府に不満を抱くようにすれば、これらによって日本政府にどんな条件にも合意させることは簡単だからです。

この帝国がヨーロッパ人たちの企てから守られてきたのは、ひとえにこの国が僻地にあるからです。ヨーロッパの政治不安が一層これを助長したように思われます。しかし、政治情勢が平穏になれば、各国は自分たちにとって有利な日本との通商を確立するために、ふたたび執拗に交渉してくるかもしれません。北方にあるロシアはこの事業でどの国よりも大きな成功を収めることができます。ロシアは日本人に塩漬け魚を届けるだけでなく、利益のあがる交易部門を形成することができます。その上、マトマイの住民は抑圧されており、誰よりもロシア国人との交易に意欲的です。彼らは、魚の買い付けに来ることが許されさえすれば、サハリンとクリル列島がロシア国人の支配下になってもまったく構わないとさえ考えています。

18. マトマイからオホーツクまでどれくらいの時間がかかるのか。

答：アニワ岬からオホーツクまで14日間です。

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 69-73.

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

34. シベリア総督 I.B.ペステリ⁵⁵からアレクサンドルー世への上申書

1807年10月26日

トボリスク

上申書

(略)しかし、これを裏づけるものとして、このたびオホーツクより到着した船から郵便にてさらに詳しい情報を受け取りました。それによりますと、侍従長レザーノフがオホーツクに滞在していたとき、侍従長が選抜し、オホーツク港長官ブハーリンが派遣したアメリカ入植民10名を乗せて、ユノナ号は海軍中尉フヴォストフの指揮下オホーツクから出航しました。しかしユノナ号は、着手された航海を行なうかわりに、大量の日本の品物と4人の日本人捕虜とともに、冬の間ペトロパヴロフスク湾に停泊していました。越冬後、船は港を出てオホーツクに到着すると、指揮者であるフヴォストフはかの地の長官である海軍中佐ブハーリンに対し、この夏、[露米]会社手代ズヴェズドチョトフを連行するためにクリル列島第18島へ立ち寄ったと報告しました。ところが、ブハーリンが得た情報では、それとはまったく異なり、本年、フヴォストフはユノナ号とアヴォシ号を率いて日本人と戦闘を行い、いくつかの集落をその家財もろとも焼き払い、戦利品と2人の日本人捕虜を連れてオホーツクへ帰還し、秘密遠征の責任者の名において、遠征にかんする質問を禁止するよう要求したそうです。

しかし、ブハーリンは嫌疑を抱いたため、フヴォストフに対し、委ねられた務めについてしかるべく説明するよう命じました。これに対して十分な回答が得られず、またフヴォストフが堅く口を閉ざしていることから、彼の行動が日本に不満を呼び起こした可能性があり、それゆえ日本人とオランダ人の関係を考慮して、カムチャツカ半島全土とオホーツク港に軍事的な警戒策を講じる必要があると考えています。

これと関連して、必要な調査のために将校委員会を組織し、フヴォストフが指揮した船にあった積み荷を国の監督下に置きました。そして、それらを露米会社の求めに応じて、オホーツクからアメリカ入植地へ送られる荷物として同社オホーツク支部へ引き渡しました。

同じ時期に、私のもとへ海軍中尉フヴォストフの書簡が2通届きました。この中でフヴォストフはブハーリンについて苦情を述べています。それによりますと、彼が海軍少尉ダヴィドフとともにオホーツクに到着したのち、彼フヴォストフが侍従長レザーノフから任された秘密遠征にかんする報告書を出さないという理由で、ブハーリンは2隻の社有船を彼らから没収し、そのうえ彼ら勤務員だけでなく同乗していた毛皮採集者たちもきわめて残酷に扱い、全員をさまざまな劣

⁵⁵ [編訳者補注：I.B.ペステリ——シベリア総督(1806～1818年)。「デカブリストの乱」の主要人物 P.I.ペステリは、彼の息子]

悪な場所に監禁しました。しかし、遠征を遂行した直接の目的はおろか、まさにその任務にもとづき彼が何をしたのか、以下を除いて私にはまったく明らかではありません。すなわち、日本でロシアの使節が拒絶されたことに対する報復として、国の命令によるものと見せかけて、全権委任者が秘密遠征を遂行したこと。遠征では彼に2隻の船が委ねられ、秘密指示書が出されたこと。国益のためにこの遠征にかんする噂は広めるべきではないこと。そして、今では日本側が弱体であることが分かっているので、今後、政府は高慢な国家の沿岸を有利に巡航し続けることがおそらく可能であること。沿岸では、双方が人間愛を大切に、2隻の船が1年間に50万[ルーブルか]ないしはそれ以上の品物を輸送することができ、もしも輸送船を保有しているならば、カムチャツカ全土に食糧を供給することができること、です。

(略)海軍中尉フヴォストフが指揮していた遠征の核心に触れる命令書はどこにも存在していません。(略)私は(略)熟慮のうえ予防措置をとることだけでなく、被疑者の拘束を解くことにつきましても、しかるべき指示を出すよう努めたいと存じます。以上の件にかんする一切を詳細に海軍大臣、そして外務局との関連で商務大臣に報告いたしました。(略)

ペステリ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д.14, л.16-18.

(前田ひろみ・小野寺歌子 訳)

35. 露米会社総本部からアレクサンドル一世への上奏文(⑫No. 40)

1807年10月28日

昨日、露米会社総本部はイルクーツクから以下を通知する至急便を受け取りました。

1. さる8月、オホーツクへ当社所有の二檣帆船マリア号が毛皮を積載して無事に到着しました。露米会社総本部は毛皮の数量について、販売時の予定価格とともに陛下に恭しくお知らせいたします。この二檣帆船は海軍中尉マシンの指揮のもと、さる1806年、シトハ島のノヴォアルハンゲリスク港から出港しました。
2. その他に2隻の社有船がこのオホーツク港へ到着しました。海軍中尉フヴォストフが責任者を務める大型三檣帆船ユノナ号と、もう1隻はそれよりも小型の、海軍少尉ダヴィドフが指揮する単檣帆船アヴォシ号です。さる1806年、両船はともにカムチャツカのペテロパヴロフスク湾で越冬し、侍従長レザーノフから某所へ秘密遠征を命じられました。この遠征について会社総本部は通知を受けておらず、また両船の行動についても把握しておりません。これらの船に

会社の荷は積まれていませんでした⁵⁶。

3. さる6月14日、上記の港に、4隻目の社有船ロスティスラフ号も到着しました。昨年1806年、同船は世界一周航海に参加していた博物学者ラングスドルフとボストン市民ヴリフ⁵⁷をオホーツクへ送り届けるためにシトハ島から派遣されました。侍従長レザーノフと支配人バラノフはシトカ島でヴリフから上述のユノナ号を会社の業務に必要な積荷とともに購入しました。ヴリフはすでに先週、サンクトペテルブルグに到着しました。ただ、オホーツクに到着できず、カムチャツカのペテロバヴロフスク湾で越冬し、そこを出発したのは5月25日になりました。この船にも積荷はありませんでした。

この船は、オホーツク港長官である海軍中佐ブハーリンからの強い求めにより、また国有の輸送船が極度に不足していることから、国家の臨時任務に使用するためにすべての索具や装備とともに譲渡されました。この寄贈の見返りとして、長官は露米会社に対し、カムチャツカその他の土地に国有船で会社のために重量物を運搬することを約束しました。それらの重量物は、ときおり索具や装備品を求めてかの地に立ち寄る社有船を支援するために必要となるものです。

これらの船で、アメリカから現地の支配人バラノフがつぎのような報告を送ってきました。

1806年4月、侍従長レザーノフがカリフォルニアへ出発したのち、シトハ島へ船長兼船主ヴェンチシブ[ウインシップ]が指揮する北アメリカ船オケイン号がボストンから到着しました。バラノフは彼と会社に必要な物資をいくらか交換しました。

ベーリング湾では、ヤクート入江[ヤクタット湾]の近くに露米会社の要塞とすばらしい集落が建設され、耕作を目的に入植が行われましたが、1805年に悪い出来事がおきました。当地のロシア人住民22人と彼らと一緒にいた忠実な島民たちが、推測するところでは、十分に警戒すべきとこ

⁵⁶ ここで言及されているのは、海軍中尉フヴォストフと海軍少尉ダヴィドフによる、日本との通商を目的とした遠征のことである[この史料を所収する史料集は、フヴォストフとダヴィドフの遠征をこのように説明している]。この遠征については、Файнберг Э. Я. Русско-японские отношения в 1697-1875 гг. М., 1960 (邦訳、E.ファインベルク/小川政邦訳『ロシアと日本—その交流の歴史』、新時代社、1973年)を参照。

⁵⁷ 博物学者で、のちのアカデミー会員 G.I.ラングスドルフは、I.F.クルゼンシテルンと Iu.F.リジャンスキーによるロシアの第一回世界周航に参加し、さらに N.P.レザーノフの遣日使節団と彼の北西アメリカ航海に同行した。1812年、彼は2巻からなるこの遠征の参加記を刊行した(『1803～1807年の世界一周旅行記』《Bemerkungen auf einer Reize um die Welt in den Jahren 1803 bis 1807》, Frankfurt-am-Main, 1812)。ボストン人ヴリフは遠征には参加していない。ラングスドルフは1805年から1806年の冬をレザーノフとともにシトハ島で過ごした。しかし、彼の現地滞在条件が自然科学研究で十分な成果をあげるためには不適當であるとわかり、ロシアへの帰国を決意した。その頃シトハ島では、アメリカ人ヴリフの指揮するロスティスラフ号がオホーツクへ出航する準備をしていた。史料の記述によると、その船でラングスドルフは1807年6月14日にオホーツクに到着した。1808年3月16日、彼はサンクトペテルブルグに到着し、まもなく科学アカデミーの植物学助教授に任命された。その後、1812年にはアカデミー会員になり、ロシアのリオデジャネイロ総領事を務めた [ラングスドルフについての詳細は、Манизер Г. Г. Экспедиция академика Г. И. Лангсдорфа в Бразилию (1821-1828). М., 1948(G.G.マニゼル著『アカデミー会員 G.I.ラングスドルフのブラジル遠征(1821～1828年)』、モスクワ、1948年)を参照]。

ろを油断して、近隣に住む非友好的なアメリカ人から奇襲を受け、集落や要塞が焼かれ、住民のうちロシア人14人と多くの島民が殺されました。彼らにくわえて、その場を逃れた毛皮採集者4人と入植者4人、女性2人、子ども3人も、別の場所にあるチュガッチのコンスタンティノフ要塞へ逃げる途中、他の、やはり非友好的なアガラフムト人に捕えられました。彼らは捕虜のうち1人を解放して、シトハ島のバラノフ氏のもとへ送り、残りの者たちの身代金を要求してきたので、バラノフ氏は必要な措置をとりました。

最後にバラノフ氏は、シトハ島からもう3年も訪問していないカディヤク島へ移り、そこでいくつかの会社事業を立て直し、シトハ島には自らの代わりにの長として商業顧問クスコフを残すつもりであると知らせてきました。会社総本部もすでにクスコフ商業顧問をバラノフ氏の後継者として決定しました。ともあれ、バラノフ氏は高齢と老衰ですでに体が弱っているので、ふたたびシトハ島へ戻ってくるか疑問です。

以上、会社総本部は陛下に謹んでご報告申し上げます。

代表取締役、帯勲者ブルダコフ

取締役シェレホフ

事務局長、七等文官ゼレンスキー

二橋帆船マリア号で搬送された会社の毛皮一覧

獣の数		ルーブル	コペイカ
2,520	さまざまな品質のラッコ	176,400	—
372	ラッコの子	3,720	
4,250	ラッコの尻尾	21,250	
39	ビーバー	390	
586	ギンギツネ	8,790	
1,325	クロアカギツネ	9,275	
994	アカギツネ	3,976	
430	カワウソ	6,450	
2,989	アオギツネ	29,890	
109	シロギツネ	109	
324	クロテン	486	
46	ミンク	46	

168	クズリ	840	
84	クロクマ	2,520	
72	オオヤマネコ	720	
12	オオカミ	120	
61,814	オットセイ	92,721	
	計	357,704	

代表取締役、帯勲者ブルダコフ

取締役シュレホフ

事務局長、七等文官ゼレンスキー

【報告】 1807年11月3日

【出典記載なし】 原本

(前田ひろみ・畠山禎 訳)

36. 露米会社取締役 I.シュレホフ[シュリホフ]から商務兼外務大臣 N.P.ルミャンツェフへの報告
第 609 号

1807年11月20日

報 告

(略)さる 1806 年、侍従長である勲帯者レザーノフ氏は社有船ユノナ号でバラノフ島のノヴォアルハンゲリスク港からオホーツクへ帰還しました。レザーノフ氏は、皇帝陛下により委ねられた、閣下もご存知の任務を遂行したのち、前述の船およびもう一隻の社有船である単檣帆船アヴォシ号を、当社の本部が関知していない、サハリン島への特殊秘密遠征に任命しました。レザーノフ氏はこの島に居住する日本人と交易する目的で 2 万 0,024 ルーブル相当の商品、その他を用意するよう当社オホーツク支部に命じ、これは実行されました。この船[ユノナ号]と単檣帆船[アヴォシ号]はカムチャツカで越冬後、本年 8 月にオホーツクに帰還し、かの地で得た積荷を、会社から提供された前述の額に相当する商品と交換するために運んできました。積荷の内訳は、日本のキビ[米]約 3,500 プード、日本の飲み物サゴ[酒]、塩、各種の漆器、細工品、衣服、その他細々としたものです。しかし、オホーツク支部からの報告によると、これらすべてについてオホーツク[港]長官がなんらかの疑惑を抱き、特別委員会に対し目録を作成し、また会社による保管としながら

も、長官の許可が下りるまで国有地に置くよう命じました。

当社総本部は、レザーノフ氏が行った遠征の意図にかんしてまったく情報を持っていません。ただ以下のみを知っております。これら 2 隻の船で運ばれた日本の品物は当社に属します。これらの品物は彼らに提供した商品、そしてまる一年間にわたり、両船とその乗組員が使役されたことと引き換えに得たものなのです。船や乗組員はサハリン行きを命じられなければ、会社に利益をもたらす他の商業活動を目的にアメリカに向かわせることもできたのです。

オホーツクに運ばれた日本の食糧や物品は議論の余地なく当社に属しており、当社にご返還くださいますよう、恐れ多くも閣下の慈悲深きお取り計らいをお願い申し上げます。われわれは、閣下のご決定を期待しております。

取締役イヴァン・シェレホフ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 32.

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

37. I.B.ペステリから N.P.ルミャンツェフへの書簡

1807年11月30日

トボリスク

商務大臣、二等文官、勲帯者ルミャンツェフ伯爵様

閣下に宛てたさる 10 月 26 日付文書で、オホーツク港長官ブハーリンがフヴォストフとダヴィドフを日本で軍事活動を行った件で拘禁したことを私は報告いたしました。このたび、私はイルクーツクから到着した郵便物とともに、文官知事⁵⁸からの上申書を受け取りました。それには、文官知事がヤクーツクからの至急便で受け取った、フヴォストフとダヴィドフからの 2 通の書簡、そして彼らと造船職人コリューキンが露米会社総本部に宛てた、開封された報告書が添付されておりました。この中で、彼らはブハーリンから残酷な仕打ちを受けたために、秘かにオホーツクを発ったことを釈明し、彼らがイルクーツクに行くことを許可するよう請願しています。一方、ヤクーツク地方長官である七等文官カルダシェフスキーは彼([文官]知事)に以下を報告しました。海軍佐官ブハーリンからの通知によると、国家的な犯罪行為の咎で当地に拘禁され、軍事委員会のもとで取り調べ中だったこのフヴォストフとダヴィドフは、見張りに阿片を盛り、9 月 17 日の夜、脱走しました。彼らはヤクーツク地方で身を隠すことはできないので、彼らがそこに到着した場合には、彼らを拘束し、皇帝陛下のご意志が下るのを待ち、また彼らが日本の物品、とくに金を

⁵⁸ [編訳者補注：イルクーツク県知事 N.I.トレスキン(1806～1819 年)]

所持していないか捜査し、もし見つかった場合には没収し、ブハーリンに通知するまでこれを保管しておくよう求めていました。10月13日、彼ら自身がヤクーツクに現れたので、彼らの所持品を検査したところ、日本製品はおろか必要最低限の衣類以外に身の回りのものを一切持っていませんでした。そして、カルダシェフスキー氏の尋問に対し、ブハーリンが彼らを過酷に、非人間的と言ってもいいようなやり方で取り扱ったので、彼らは拘禁から逃亡せざるを得ず、拘禁中は食事もろくに与えられなかったと答えました。それゆえ文官知事殿は、これらの将校がヤクーツク滞在中に自らを扶養する手段を持たないことに配慮しながらも、彼らが日本人に対して行った軍事行動にかんして詳細な情報を彼らから聴取するために、ヤクーツク地方長官にこのフヴォストフとダヴィドフをイルクーツクに送るよう命じました。イルクーツクに到着後、彼らは許可を得るまで監視下に置かれます。以上をブハーリンに通知するとともに、彼らの日本での行動を審理する目的で設置された委員会が作成したすべての文書を至急、送付するよう確認しました。(略)本状に上述のフヴォストフとダヴィドフの書簡の原本を添付します。

ペステリ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 25-26. [史料筆写者による注]この文書には以下の書き込みがある。「本状に添付された2通の書簡を1808年1月15日、エゴール・シェミヤキンが受領した」。

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

38. 露米会社からN.P.ルミャンツェフへの報告

1808年7月2日

(略)海軍士官が商人の船に指揮者として出向することを皇帝陛下がお許しになりましたので、海軍中尉フヴォストフと海軍少尉ダヴィドフは国家海軍参議会の職を解かれ、露米会社に就職しました。彼らは1804年、さまざまな任務を遂行すべく、オホーツク経由で当社のアメリカ入植地へ出発しました。(略)契約にもとづく俸給は、フヴォストフが年4,000ルーブル、ダヴィドフが年3,000ルーブルでした。実際に彼らは1804年5月8日から1806年7月27日まで会社に勤務していました。この日[7月27日]からは、故レザーノフによって、当社にまったく属していないサハリン島に関係する極秘遠征に派遣されました。以後、会社には勤務していません。前述の日以降の俸給としてフヴォストフには7,000ルーブル以上、ダヴィドフには5,000ルーブルを支払う必要があり、さらに彼らの食糧、遠征中に彼らが消費した物品への支出、そして彼らがオホ

ーツクからサンクトペテルブルグへ移動する際の費用をこの俸給と合わせると、2万4,000ルーブルほどが彼らに対して発生しておりますが、したがって当社にはもはや支払い義務はありません。しかし、彼らはここに到着してから、それらの算定と支払いを要求しております。

(略)オホーツクとカムチャツカで、会社が彼らの船から受け取った日本の物品[の売却益]を代わりとしてはいかがでしょうか。(略)彼らから受け取った物品は価値のないものとして扱われましたので、これらの売上金がどれ程になるのか今のところは分かりません。とはいえその主要品目、すなわち米、サゴという飲み物[酒]、その他の何かから今、彼らに支払うべき俸給を渡せるだけの売上金が出るものと期待されます。

(略)オホーツクでは両士官に対し、2万1,408ルーブル43コペイカ相当の商品が引き渡されました。(略)

派遣期間をいつからとみなすべきでしょうか？彼らが当地に到着した日から本状が閣下に承認された日まででしょうか？

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 168.

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

39. 海軍大臣 P.V.チチャゴフから N.P.ルミャンツェフへの書簡

1808年7月13日

(略)皇帝陛下は、私がシベリア総督ベステリおよび前オホーツク港長官ブハーリンから受信した、閣下もご存知の日本遠征にかんする文書を、この遠征の一件を審理する際に、それらも含めて検討できるように、閣下へ送付することをお望みになりました。さらに、陛下は本件ができるだけ遅滞なく決着することを望んでいると閣下にお伝えするようにとの仰せでした。(略)

(略)以上、皇帝陛下のご意志を遂行するとともに、文書が不用となったときにはそれを私にご返却いただきますよう、貴殿に謹んでお願い申し上げます。(略)

注：文書は1808年8月21日、チチャゴフに返送された。

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 146.

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

40. N.P.ルミヤンツェフからアレクサンドルー世への上申書。フヴォストフとダヴィドフの遠征について

1808年8月4日⁵⁹

皇帝陛下もご存知のとおり(略)、故侍従長レザーノフは自分の使節団の不首尾に落胆し、考えた末、(略)彼が交渉で達成できなかったことを武力で達成することを[決意しました]。(略)

レザーノフの計画は、日本北部の港の一つで貿易をする自由を得ることを目的としていました。彼はサハリン島への入植をその第一歩とみなしていました。大砲で防御されたこのわが国の植民地は、毛皮事業だけで入植地の維持費用をまかなうことができます。その一方で、日本人をより近くで知るようになり、マトマイ島では絶えず彼らに脅威を与え、やがて彼らがわれわれとの通商関係を求めるようにさし向けることができます。日本帝国は山が多く、河川は急流で、しばしば洪水に見舞われるために、日本人はむしろ海上航路を利用して国内通商を行っています。しかし、彼らの船はその構造上、沿岸から離れることができません。レザーノフは2、3隻の武装船に単檣帆船を1隻加えて派遣することを考えていました。これらの船が日本船の船列を海岸から遮断し、大量の戦利品を得て、彼らの商業を完全に停止させるだろう。そうすれば、彼の考えでは、民衆の不満が高まり、それだけでなくもすでにわれわれに有利に傾いているのだから、政府はこの問題を双方の利益となるよう平和的に終結する道を模索せざるを得なくなるだろうと。

(略)レザーノフは、1805年、カムチャツカからアメリカへ向かう航海の途上で、この計画をフヴォストフとダヴィドフに説明しました。アメリカに着くと、彼は2隻の船舶を準備しました。1隻は建造し、もう1隻は購入しました。1806年7月、レザーノフはこの2隻の船とともにアメリカからオホーツクへ出航しました。航海中の8月8日、この遠征にかんする指示書を、彼がこの[遠征の]指揮者に決定した海軍中尉フヴォストフに与えました。そして、彼はこの指示書で以下のように命令しました。「サハリン島の倉庫にあるもの、たとえばキビ[米]、塩、商品、魚の一切を持ち帰ること。倉庫が魚で満たされているならば、それを燃やすこと。御堂からすべての像を奪い取り、僧を1名捕らえ、アメリカへ連れて行くこと。サハリン人と日本人にかんしては、どこで彼らと遭遇しても、サハリン人に対しては親切に接して味方にし、日本人に対しては彼らの船を破壊して危害を加えること」。

海軍中尉フヴォストフはこの指示書の写しを海軍少尉ダヴィドフに与えました。それと同時に、彼らの船はおのおのの任務に就くために別れました。

ダヴィドフはこの指示書に従ってクリル列島に行きました。一方、フヴォストフはオホーツク

⁵⁹ [編訳者補注：アレクサンドルー世が上申書を承認した日]

からサハリンに向かい、アニワ湾でダヴィドフと合流するはずでした。

オホーツクに着いた直後、レザーノフはフヴォストフから指示書を取り戻しました。この港を出発後、レザーノフはフヴォストフに封印した指示書を送りました。フヴォストフはすぐに指示書への補足を見つけました。その中では以下のように述べられていました。指定されたアニワ湾で彼と合流する時間は過ぎてしまった。それを念頭にあらゆる事情を考慮し、レザーノフ氏は以下が最善であると判断した。すなわち、命令事項の遂行をすべて中止し、フヴォストフはノヴォアルハンゲリスク港の人びとを増援するためにアメリカへ向かうこと。しかし、風向きのためにアニワ湾に立ち寄りざるを得ないときには、時間を無駄にせず、フヴォストフはサハリン人を撫柔すること。フヴォストフはこれらの相反する命令に驚き、アメリカへ直行する決心がつきませんでした。ダヴィドフが乗船した船は消息不明のまま、彼の推測では日本人の手に落ちた可能性もあったからです。この船がクリル列島のどこかの島で日本人と遭遇し、指示書に従って日本人に対する軍事活動を開始した可能性もありました。そこで、彼はアニワ湾に向かいましたが、そこでダヴィドフの船を発見できなかったため、ダヴィドフは日本人の手に落ちたに相違ないと結論に至りました。その結果、フヴォストフは以前の命令事項すべての遂行に着手しました。フヴォストフはイルクーツク県知事トレスキン宛の上申書で、このように説明しております。この上申書は現在、海軍大臣から私のもとへ戻ってきております。

一方、ダヴィドフもレザーノフ宛の上申書で以下のように説明しています。この上申書も私は海軍大臣から受領しております。すなわち、ダヴィドフはフヴォストフの船と別れ、最後に受けた命令に従い、クリル列島へ向けて針路を取りましたが、秋分のしけで索具に被害を受け、また乗組員が病気になるために、何事も行動に移さずにペトロパヴロフスク港への帰還を余儀なくされました。やがてフヴォストフも自分の航海を終えたのち、そこに到着しました。

1807年、フヴォストフはクリル列島への航海を再度決行することを企てました。フヴォストフは2か月半か3か月遅れるだけでアメリカに到着できると見積もり、事業をもう一度実行することで、日本政府がロシアとの通商に合意するまでこのような遠征が続くということを日本人に思い知らせることができると考えました。

こうして、この2人の武官はふたたびクリル列島に向かい、オホーツク港長官が海軍大臣に宛てた上申書から明らかなように、そこで敵対的な行動をとり、オホーツクに戻り、オホーツク港長官によって両名とも拘禁され、彼らにかんする軍法会議が設けられました。一方、日本から運び出された商品や物品は、社有の倉庫がないために国の倉庫に積み置かれています。その結果、フヴォストフとダヴィドフはプハーリンが彼らに加えた虐待に対し苦情を申し立て、オホーツクから逃亡することを決意し、ヤクーツクに現れました。彼らはオホーツク港長官から冷酷な扱い

を受けたために逃がれてきたと申し立て、最終的にサンクトペテルブルグに到着しました。

私が本件にかんするレザーノフの企てについて皇帝陛下のお耳に入れたとき、陛下はレザーノフのこの行為に対しお怒りになられました。私はその証人です。私に届いたすべての文書から判断すると、問題のすべては、前述の武官たちが故レザーノフに言い含められ、この功績が有益なものであると確信したことにあります。2隻の船が別々に行動し、なおかつレザーノフがすでにオホーツクに滞在していないときに、彼らのうちの一方に突然、何の説明もなく与えられた矛盾する命令に混乱しながらも、彼らは勤務できわだった功績を成し遂げようと任務の遂行を継続したのです。

裁判で明らかにされたこれらのことにもとづき、皇帝陛下はこのレザーノフの企てに対し激怒なされましたが、レザーノフ氏は故人となりましたので、その処置を忘却の手に委ねるべきかと存じます。一方、武官たちは矛盾した、不都合な時に与えられた命令ゆえに、それ以外の行動をとることはできませんでした。けっして本件で罪を問うべきではありません。ブハーリンの残虐な扱いに対するフヴォストフとダヴィドフの訴えは、彼らの審理を目的に軍法会議の設置を求めらる者たちのためにも、所属にもとづき海軍省での審議に委ねるべきです。(略)

サハリンに目を向けますと(略)、この島の占有によってロシアにもたらされるに違いない利益を考慮して、ここで恐れ多くも皇帝陛下におかれましては露米会社の懇願書を思い出していただきたく存じます。フヴォストフの話によれば、日本国内でこの偉業は一種の動揺を引き起こし、日本の皇帝はこれを宗教的支配者の専横に対抗して自分の利益のために利用し、すでに以前よりも大きな力を得たそうです。会社はこれらを理由に、フヴォストフの遠征の利益を得ようとしております。会社はサハリンを占有し、毛皮事業者を入植させ、アメリカの毛皮事業者入植地の例にならい防御施設、集落、農耕その他の形成を導入する許可を請願しています。

私は海軍省と一緒に本件を審議することを望み、それについて皇帝陛下のお許しをいただきましたが、海軍省は、ある程度しか省には関わらないとの理由でこれに同意しませんでした。私はこのような事業を露米会社に許可する必要があると考えます。しかも、会社は本件において国側からの援助を一切求めておりません。私は本件について皇帝陛下のお許しをいただきたく存じます。

武官フヴォストフとダヴィドフにかんして、会社は秘密遠征への出発日までの俸給を彼らに対して支払っております。その日以降の俸給その他の補償については、遠征が完了したそのときまで、運んできた日本の物品や商品の売却益で同様の俸給を支払うべきと考えます。この件について、また運んできた物品の取り扱いについても、陛下のお許しを頂きたいと存じます。(略)

[史料筆写者による注]原本には以下の書き込みがある。「皇帝陛下はこの報告をご承認なされた。ルミャンツェフ伯爵。8月4日」。

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 159-167.

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

41. 商務兼外務大臣 N.P.ルミャンツェフから露米会社総本部への通知(⑫No. 141)。

第1828号

1808年8月10日

国側からの支援を一切受けずに、毛皮事業者の入植によってサハリン島を占有し、アメリカにある会社の他の集落と同様の防御施設、経営、耕作などの開設を求めている会社本部の懇願について、私は皇帝陛下に上奏した⁶⁰。皇帝陛下は露米会社のこの事業をご承認なされた。ただし、サハリン島の住民には友好的な態度で接し、強制や虐待を加えず、彼らの集落を破壊しないようにとの条件を付けられた。これに反する行為が陛下のお耳に届いた場合、罪人は法にもとづき厳正に処分されるであろう。会社本部に対しサハリン島に集落を形成する許可を与えたことについては、内務大臣と海軍大臣にも伝えた⁶¹。

[出典記載なし] 写し

(前田ひろみ・畠山禎 訳)

⁶⁰ アレクサンドル一世への1808年8月7日付上奏文[日付は異なるが、1808年8月4日付上奏文(本史料集史料No.40)をさしている]の中で、N.P.ルミャンツェフは商務大臣として、海軍中尉 N.A.フヴォストフと海軍少尉 G.I.ダヴィドフによる日本近海への遠征、そして露米会社に対するサハリン島開拓権の付与の二つの問題にふれている。ルミャンツェフはサハリン島の開拓がロシアに利益をもたらすことを強調し、なおかつ会社はいかなる資金援助も求めていないので、サハリン島への遠征許可を露米会社に与えるべきであると提案した。ルミャンツェフは上奏文につきのように書いている。「サハリンについては、この島の占有によって今後、ロシアにもたらされるに違いない利益を考慮し、ここで恐れ多くも[露米]会社の懇願を思い出しただきたく存じます。この懇願書は(略)、毛皮事業者の入植によるサハリン島の占有、アメリカにある会社の他の集落と同様の防御施設、経営、耕作などの開設を願い出ております」。その他にルミャンツェフはアレクサンドル一世に、サハリン島の開拓は海軍省の管轄ではないと考える海軍大臣 P.V.チチャゴフとの会談内容を報告した。アレクサンドル一世はルミャンツェフの上奏文を承認し、露米会社にサハリン遠征隊の派遣許可を与えた。

⁶¹ ルミャンツェフはこの日、海軍大臣 P.V.チチャゴフと内務大臣 A.B.クラークンに、アレクサンドル一世が露米会社にサハリン入植の許可を承認した旨を通知した。ルミャンツェフはチチャゴフに対して本件をオホーツク港長官および本件と関わりがあると考えられるその他の統治関係者に、またクラークンに対してはこれらに相当する行政機関に本件を通知するよう依頼した。

42. I.B.ペステリの報告。オホーツクに連行された日本人について

1809年5月20日

(略)オホーツクには、海軍中尉フヴォストフによって連行された2人の日本人がおります。彼らは露米会社に扶養されておりますが、極貧状態にあり、仕事をせずに過ごしているそうです。彼らはかの地の習慣にもとづき、現地人だけが食べる魚で飢えをしのいでいます。そのため、また劣悪な気候のせいで、彼らは壊血病を患っています。ところで、これらの日本人はかなり知性が高く、とくに彼らのうちの一人ソフィ[左兵衛]はかなり分かりやすいロシア語を話し、日本語をロシア語に訳すことさえできるそうです。彼らは今、オホーツクで何の地位にも就いておらず、まったくすることがありません。この哀れな状況から彼らを抜け出させ、彼らを用いて利益を得るために、彼らを国費もしくは会社の負担でイルクーツクに送り、そこで彼らの能力を十分に試験したうえで日本語教育に彼らを用い、彼らの生活に不可欠なだけの俸給を与えるべきです。

シベリア総督

ペステリ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 178.

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

43. [露]米会社代表取締役 M.M.ブルダコフから会社本部への報告。日本の武器見本をサンクトペテルブルグの兵器庫に引き渡すべしとのアレクサンドル一世の命令について

第2248号

1809年12月26日

[露]米会社本部が献じた日本の甲冑を、皇帝陛下は喜んでお受け取りになられ、これを兵器庫に納めるように命じられました。これを果たすべく甲冑を軍務大臣にお送りするとともに、本件を本部に通知いたします。

(3)РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 455, л. 5.

(渡邊聞・畠山禎 訳)

44. 露米会社取締役 M.M.ブルダコフから軍務大臣 A. A.アラクチェエフ伯爵への報告。N. A.フヴォストフと G. I.ダヴィドフの遠征隊による、日本の武器見本の入手について

1809 年

12 月 26 日

故レザーノフ氏の指令にもとづき、海軍中尉のフヴォストフとダヴィドフがサハリン島を対象に行なった極秘遠征にかんして、閣下もご存知のように、この両名はこの島に滞在し、日本の軍隊が使っていたいくつかの甲冑やその他の武器を入手しました。それらの見本がオホーツクから当地へすでに送り届けられております。会社本部は閣下にこれを提出いたします。閣下がこれをご覧になられ、注目に値するものと判明したならば、陛下にもご覧いただきたく存じます。

代表取締役、帯勲者ミハイル・

ブルダコフ

(3)РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 455, л. 1⁶ об.

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

45. 露米会社総本部取締役 M. M.ブルダコフから軍務大臣 A. A.アラクチェエフ伯爵への報告
第 2255 号

1809 年 12 月 27 日

アラクチェエフ伯爵様

[露]米会社本部は陛下に日本の甲冑を献上いたしました。この甲冑は、今は亡き海軍中尉のフヴォストフとダヴィドフがアメリカ入植地にて会社に勤務中、持ち帰ってきたものです。

陛下はこの甲冑を兵器庫に納めるように命じられました。

この陛下のご意志を閣下にお伝えし、本状とともに上記の日本の武具類を閣下にお送りいたします。閣下に完全なる敬意を抱き続けます。

(3)РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 455, л. 2-3.

(渡邊聞・畠山禎 訳)

46. N.A.フヴォストフと G.I.ダヴィドフの遠征隊によって運び込まれた日本の武具

[1809年12月]

甲冑一覧

1. 兜
2. 面
3. 背被い付きの胸甲
4. 前掛け[草摺]
5. 1組の手甲
6. 1組の足用鎖帷子[臙当か]
7. 刀
8. 折れた弓
9. 11本の矢が入った蓋付の矢筒
10. 旗竿に付ける黒い羽飾り

(3)РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 455, л. 4.

(渡邊聞・小野寺歌子 訳)

47. シベリア総督 I.B.ペステリから N.P.ルミャンツェフへの書簡

1810年5月

(略)昨年3月、私は(略)、海軍中尉フヴォストフによってオホーツクへ連行され、そこで露米会社の保護下に置かれ、極貧状態にある2人の日本人について提議する栄を賜りました。彼らは劣悪な待遇を受けていたために、昨年6月に逃亡し、11月まで不明でした。この日本人たちはウリヤ川付近で衣服も食糧もない状態で発見され、その後、オホーツク港長官が派遣した急使によってオホーツクへ連行され、現在、そこでふたたび会社支部支配人の監視に委ねられています。

[オホーツク]港長官はこれらの不幸な捕虜に同情し、彼らは不当にも祖国、さらにあらゆる幸福を失ったと述べ、彼らを祖国へ送るか、あるいはサハリン島の北端まで連れて行き、その先は彼らに故郷にたどり着く機会を探させるよう許可を求めています。

ペステリ

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 179.

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

48. N.P.ルミャンツェフから I.B.ペステリへの書簡

1810年5月31日

(略)私は日本人について皇帝陛下に報告いたしました。陛下は国庫の負担で必要なものをすべて供給したうえで、彼らを祖国に返すようご命令なされました。(略)ところで、この送還を有効に活用するために、彼らもしくは彼らを送り届ける者をつうじて日本の現状について、ロシアに対しどのような感情を抱いているのか、わが国の使節団を拒否したことを後悔していないのか探り出すことを(略)、依頼いたします。(略)

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 180.

(齋藤由佳・小野寺歌子 訳)

49. I.B.ペステリから N.P.ルミャンツェフへの書簡

1812年1月16日

(略)私はイルクーツク県知事に命令を与えました。(略)しかしながら、どのような方法でこれらの日本人を送還するのがよいのか彼とオホーツク港長官が連絡を交わしている間に、彼ら日本人は露米会社の勤務員トボリスク町人レイチコフとともにアザラシ猟を目的に小舟で海に出て、その後戻ってきませんでした。彼らの捜索命令が出されましたが、そのかいはありませんでした。(略)

本日、イルクーツク県知事がヤクーツク地方長官からの連絡を報告しました。2人の日本人のうち一人、デジャイモン[中川五郎次か]はウツク徴税区 *kommissariatstvo* で発見されました。イルクーツク県知事の説明によりますと、彼らはしばしばオホーツクからワモンアザラシ猟に出ておりましたが、今回初めて氷が多くてオホーツク河口に戻れなくなり、海岸沿いにウダ川方面へ向かわざるを得なくなってしまいました。彼らは中国国境のギリヤーク人[ニブヒ]のところで3日間過ごしたのち、ウツクのヤサク税徴税人のもとへ出発しました。そこでは、彼の仲間の日本人ソフィ[左兵衛]が飢えのあまり大量の鯨油を食べ、そのせいで死亡しました。会社勤務員のレイチコフは飢えのためにギリヤーク人のもとへ戻ろうとしましたが、その道中、凍死しました。一方、彼デジャイモンはウツクのコサクに発見されました(略)

(1)АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л.

181-182.

(齋藤由佳・畠山禎 訳)

Архивные документы по истории японско-российских отношений
(1805 – 1812)

Составители: А. А. Кириченко⁶², В. С. Познанский⁶³, М. П. Малышева⁶⁴.

3

*Доклад министра коммерции графа Н.П. Румянцева императору Александру I
об учениках Иркутского народного училища, обучавшихся японскому языку*

21 июля 1805 г.

Об учениках японского языка

Сибирский генерал-губернатор Салифонтов домогался, чтобы вследствие Высочайшаго указа бывшему генерал-губернатору Пилю данного, учеников из семинаристов при Иркутском народном училище японскому языку обучающихся, позволить вывести в другие звания по недостаточному их содержанию.

Ваше Императорское Величество на доклад мой о сем повелеть соизволили оставить всех шестерых учеников в ведении министра коммерции.

Вследствие сего спрашивал я у г[осподи]на генерал-губернатора Селифонтова, все ли помянутые ученики хорошо обучились японскому языку, и по скольку жалованья им производится. На что он отзывается, что ученики приобрели довольное в японском языке знание и более могли бы успеть, если бы не было недостатка в книгах японских; жалованья же им производится по 54 рубли на год из губернских доходов.

Во уважение той цели, что они со временем могут быть употреблены по торговым связям с Япониею, дабы дать им безбедное содержание и тем сообщить их к дальнейшим успехам, я полагаю, принаравливаясь к окладам университетских студентов, к ныне получаемому жалованью по 54 рубли в год еще прибавить каждому по 96 руб[лей], что составит 150 рублей, а всего 576 рублей, и производить сию выдачу из доходов Кяхтинской таможни, кои в 1803-м году было 720 325, а в 1804-м – 878 912 рублей.

Если благоугодно будет Вашему Императорскому Величеству утвердить мое представление, я

⁶² Институт востоковедения РАН.

⁶³ Институт истории СО РАН.

⁶⁴ Институт истории СО РАН.

Редакторы считают своим долгом поблагодарить С.А. Папкова (Институт истории СО РАН), помогавшего нам в подготовке сборника.

отнесусь тогда с Вашей воли к Министру финансов.

Министр коммерции Граф Румянцов

РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 9–9 об.

На полях с левой стороны листа 9-го рукою Румянцева запись: «Государь император сей доклад утвердить соизволил. Г[раф] Н. Румянцов. Петергоф, 21 июля 1805».

(М. Малышева / В. Познанский)

4

Уведомление управляющего Кяхтинской таможни Ф. Голубцова

министра коммерции Н.П. Румянцева

о сделанном распоряжении выдавать прибавку

к жалованью обучающимся японскому языку ученикам Иркутского народного училища

№ 2660

16 августа 1805 г.

Милостивый государь

Граф Николай Петрович!

В Имянном Его Императорского Величества Указе, данном мне во 2-й день сего августа, изображено: «находящимся при Иркутском народном училище шести ученикам японского языка, остающимся в ведении Министра Коммерции и получающим из губернских доходов по пятидесяти четыре рубли в год Повелеваю из доходов Кяхтинской таможни добавлять каждому по девяносту по шести рублей в год». Вследствие чего о произведении помянутым ученикам таковых добавочных денег, со дня онаго Высочайшаго Указа, зделав надлежащее с моей стороны по Иркутской Казенной Экспедиции распоряжение, я поставляю долгом и Вас, Милостивый Государь, о сем уведомить, — имея честь быть с истинным почтением и непременною преданностию всегда

Вашего Сиятельства

Милостиваго Государя

всепокорнейший слуга

Федор Голубцов

Его Сия[тельство]ву графу Н.П. Румянцову

Донесение приказчика РАК Ф.Выходцева в Главное Правление РАК

5 сентября 1805 г.

Из Петропавловской гавани

Под Высочайшим Его Императорского Величества
покровительством Российско-Американской Компании
в Главное Правление Камчатского комиссионера Федора Выходцева

Донесение

От 15 числа декабря прошлаго 1804 года Главному Правлению имел честь донести, что по случаю несчастий, поразивших японское судно у берегов Камчатки, шесть человек той нации по неуважению к их гибельной судьбе со стороны начальствующаго были приняты именем компании мной в возможное пособие, к содержанию их без излишностей обыкновенно нужными трапезами и платьем, что и по благополучном прибытии Его Превосходительства Николая Петровича из Японии принято с одобрением, а потом уже Его Превосходительство благоизбрать изволил при отношении своем препроводить их камчатскому коменданту господину генерал-майору Павлу Ивановичу Кошелеву для принятия их попечительность со стороны казенной, но по отбытие Его Превосходительства в Америку на судне Св[ятой] Марии означенные японцы были по предположению Его Превосходительства Павла Ивановича назначены отправиться для произведения хлебопашества в Верхнекамчатск. И будучи совсем готовы к отъезду, на 30-е число июня в ночь неизвестно по уклонениям ли их от работ или по каким другим предразсудкам в листовенной своей шлюбке скрылись, по узнании чего со стороны начальствующих все способы и старания к отысканию их были тщетны.

Во время прожития их под покровительством компании на продовольствие поденно для их было израсходовано 1162 рубли 17 ½ копейки, о чем при щоте моем и подробности Главному Правлению не премину представить регистр.

Комиссионер Федор Выходцев

(М. Малышева / В. Познанский)

8

*Отношение Сибирского генерал-губернатора
министру коммерции графу Н.П. Румянцеву с благодарностью
о прибавке к жалованью ученикам, обучающимся в Иркутском народном
училище японскому языку*

№ 4195

11 сентября 1805 г.

В Иркутске

Милостивый государь мой

Граф Николай Петрович!

Получив почтеннейшее отношение Вашего Сиятельства от 24 прошедшаго июля за № 1989, спешаю принести Вам, Милостивый Государь, покорнейшую мою благодарность за исходатайствование прибавки к жалованью ученикам японского языка, которые поощрены будучи Высочайшею к ним милостию, конечно, усугубят свое старание оправдать успехами их предназначение.

Имею честь быть с истинным почитанием и совершенною преданностию

Милостивый Государь мой

Вашего Сиятельства

покорнейший слуга

Иван Селифонтов

Его Сиятельству Н. П. Румянцову

РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 191, л. 13.

(М. Малышева / В. Познанский)

*Экстракт из судового журнала фрегата «Юнона»**(из Охотска в губу Анива и обратно в Камчатку в гавань Петра и Павла)*

С 27 сентября по 10 ноября 1806 г.

6 октября 1806г. в 12 часу до полудня подошли к мысу Анива...я старался держаться не далее 3-х итальянских миль от берега, дабы лучше осмотреть селения островитян или вновь возводившихся японцами; ...В самый полдень проходили мыс Анива не более как в 3-х итальянских милях....В начале 7-го часа по полудни увидел первые селения, которые лежат от мыса не более 12 миль, легли на якорь.

7 октября в 4 часу попутный ветер почти затих, но направление оного было тоже. Спустили на воду гребные суда. Поехал я на берег на шлюпке, а на баркасе отправил лейтенанта Карпинского с 16 вооруженными людьми и одним форнакетом. Темнота ночи принудила нас в 8 часов вечера возвратиться на судно. По приезде на берег встретили нас пять человек сахалинцев, все старые —0 не менее 50 лет. С первого нашего шагу старались мы им пантомимами показать нужду нашу в воде, из-за юрт выглядывало много людей. Я старался через лексикон узнать, где их селение. Но они, как будто боясь, не отвечали. Чтобы не подать поводу думать, что мы боимся или имеем против их какие-либо намерения, я и лейтенант Карпинский без ружей взяв с собой два человека промышленных пошли к ним. В правой стороне на горе были разбросанные юрты сахалинцев, или как они себя называли —айно, под которой текла речка. Четырех человек отправил с двумя боченками за водой с тем приказанием, что ежели они услышат выстрел, бежали бы в ту сторону. Оставленным у гребных судов отдал тоже указание. Островитяне проводили нас на самое возвышенное место в юрту, которая была более всех, тут нашли раскладенных два огня, около сидели пятнадцать человек мужчин, шесть женщин и несколько ребят; на лавках, которыми окружена была вся юрта, стояли в углах большие японские лакированные шкатулки и разная посуда, насыпанная пшеном; мы расположились с ними около огня на японских матрацах, сначала старались узнать, не было ли здесь недавно какое судно, но сколько могли понять, то они не видели, подчивали нас юколой и сушеными морскими червяками, у айнов называемых «уть».

Одарил своих хозяев капотами, бисером, ножницами, лентами и табаком. После чего они сделались гораздо смелее, проводили меня до гребных судов и я не малого не хотел дать им подозрение, что надо знать мне селение японцев, распрощавшись, поехал на судно.

...в 8 часов по полуночи отправились на двух судах я, лейтенант Крпинский и корабельный подмастерье Карпин к тому же селению. Подъезжая к тому же селению. Подъезжая к берегу подняли на шлюпе военный и на баркасе купецкий флаг; добрые айно встречали суда уже в большом числе и присели на колени. Когда мы трое вышли на берег, старались объяснить кое-какими словами, что мы россияне и друзья их. Я приказал на берегу поставить флашток, на котором подняли оба флага, как военный, так и коммерческий. Показывая на судно, одарили всех платками и разными безделицами, на тойона или старшина селения надели лучший капот и медаль на владимирской ленте при троекратном из шести ружей выстреле; на судне на каждый залп ответствовали из одной пушки. Здесь должно заметить, что ружейная стрельба не произвела на айнов никакого страха, но когда увидели огонь из пушек, то ужаснулись и пригнули головы. Старшине при медале дал лист, на котором написано: «1806 года октября дня Российский фрегат «Юнона» под начальством лейтенанта Хвостова в знак принятия острова Сахалина и жителей оного под всемиластивейшее покровительство Российского императора Александра Первого, старшине селения, лежащего на восточной стороне губы Анива, пожалована серебряная медаль на владимирской ленте. Всякое другое приходящее судно, как российское, так и иностранное просим старшину сего признавать за российского подданного». Подписал свое имя и внизу листа приложил свою печать, на боку нарисовал оба флага. Завернул бумагу в фанзу и отдал ему. Когда надели медаль, тогда объяснил айнам, что сие изображение есть Российская Империя, они упали вниз лицом, а мы поцеловали как священное изображение, медаль и фанзу принял он как подарок необыкновенный; приискал в лексиконе слова, говорил им, что сие оружие в защиту айнов; лейтенант Карпинский и подмастерье Карпин спрашивали, есть ли здесь японцы, они усмехаясь сказывали, что нет, а показали на один около построенный сарай, в котором мы видели один ящик и.... другие начальные заведения. Айны повели нас в ту же юрту, где и вчера были, одарив все селение и нового кавалера; тут мы и обедали, накормив айнов русским столом, старшина в знак дружества дал мне две остроганные фигурным образом палки, подносил японские чашки и разные безделицы в подарок, которых я не принял. Прикащику приказал сделать пробу мены, но во всем селении не могло окромя двух выдренных хвостов [хвосты выдры], за которые они ничего не брали, показывая, что все увезено японцами. После обеда пошел я с новыми знакомыми на самую возвышенную гору, первое затем, чтобы посмотреть местоположение, что не покажут ли, где есть большие водворения японцев. Самая же губа Анива к северу не так далекопростирается, как означено на карте, а положение оной сходствует с картой корабля Кострикова; хотя я старался

пеленгами огибать все положение губы, но как предмет экспедиции моей был совсем не тот, ветры были постоянно со швалами, в гребных судах имел большую нужду для посылок на берег, время же становилось позднее и я поставлял первым предметом возвращение в Америку; но опись губы Анивы или мысов карафутских выпустил из виду, стараясь искать заселения японцев, считая, что ежели будущей весны угодно будет возобновить экспедицию, но только как возможно ранее, то пользы Американской компании и более вред которой можно нанести японской коммерции идущим около острова Ниппона и Матмая, но и как принести великую пользу.

...Октября 11-го доказывает, что водворения японцев на Сахалине год от году умножается, и в одном небольшом занятии нашли мы избытки всего; во всех селениях острова, где только мы были и одаль берега, видели начальные заведения японцев, сараи, множество заготовленных лесов и пиленных досок, а потому и думаю, что скоро вся губа Анива будет ими населена. Я спрашивал айнов, как называется сия губа, они отвечали — Карафуту; на вопрос, где живут японцы, показывали на второй мыс, который от нас лежал на румбе NWTN, смеялись, показывая на наше судно, давали знать, что надо их бить; тогда был уже 6-ой час пополудни и начинало смеркаться. Я уговорил старшину (которому дана медаль) и еще одного из них ехать со мною на судно. Ветр во весь день дул легкой от 80, в полдень орбсервованная широта места 46 градусов 04 минуты. Гости мои сначала были веселы, но когда стали подымать гребные суда, стук произошедший оттого их испугал; они начали петь унылым голосом песни, подобно как камчадалы и якуты во время шаманства, я вспомнил, что старшина дал мне две остроганные палки, которые, как понимали мы, были знаком дружественным, тотчас оные им подал и они скоро успокоились. А после где только мы ни показывали сии знаки, у нас их брали и на обмен давали другие.

На рассвете, одарив гостей гораздо еще более, приказал отвезти их на берег, во все время как они ехали на шлюбке до берегу плясали и прислали еще две такие же палки.

В 11 часов до полудня при ветре NNO снялся с якоря и имея все паруса ... держался как можно ближе берега ... В 3 часа увидел два селения больших и третье малое, на глубине 14 сажений положили якорь и спустили гребные суда. В 3,5 отправились на берег. На вооруженной шлюбке лейтенант Карпинский, а на баркасе штурман Ильин, с тем, что ежели нет тут японцев, то одарить жителей, а если есть (японцы), то стараться обойтись как можно ласковее и скорее возвратиться на фрегат. В 6 часов ветер начал свежеть и наконец сделался весьма крепок, для показания гребным судам своего места выпалил из одной пушки и зажег фильшмеры, ночь чрезвычайно была темна, горизонт покрылся облаками и начала играть молния. В 8 часов возвратились с берега гребные суда.

Лейтенант Карпинский и штурман Ильин были в двух больших селеньях, в которых жителей молодых совсем не видели кроме стариков и ребятишек. Лейтенанту Карпинскому была дана одна медаль, которую он не одел, потому что в селениях сих нашел три японских сарая, то подумал, что японцы разбежались; одарив айнов, возвратился на фрегат под видом того, что будто ездил за водой.

В 9 часов пополудни поехал я и лейтенант Карпинский на двух судах с 11 вооруженными людьми на берег, во всех трех селениях нашел не более как двенадцать человек мужчин и пять женщин, мужчины все были по большей части были не менее 50 лет и то больные. С равною почестью, как и в первом селении, надел медаль на самого почетного из них одарили капотами, пярнами, платками, бисером, топорами и разными безделицами, и спрашивал, кому принадлежат оные сараи. Они отвечали, что японцам. Осмотрев мы сараи нашли в печах вмазанные японские большие котлы, разную деревянную посуду, много заготовленного лесу, пильных досок и для кровле травы: но как я не видел ни одного японца, то и не подал ни малого поводу, что имею какое-либо против них намерение.

Обедали на берегу и добронравные айны с большим аппетитом ели наше кушанье; два раза давал им в руки ружье, научал как стрелять из онаго и как пуля пробил доску, то увидев они такое действие ружья, все подымя руки вверх с удивлением приклоняли головы и искали пули, которые пролетали насквозь; когда же нечаянным образом один из людей наших ударил в барабан, заметил я, что они вздрогнули, почему еще приказал ударить, в самую ту минуту одна молодая девка стала вертеть головой, кричать ужасны и делать разные кривлянья. Я тотчас приказал бой барабана прекратить, молодую женщину едва мог успокоить, уговаривая, стал гладить ее по голове, тогда один из стариков дал мне знать, дабы я ее оставил. Я ее оставил, объясняя, что в то время вселился в нее дьявол, в ту же минуту другой из айнов выхватил ножик, а я вынужден был вынуть из ножней саблю, которую однако ж в действие не употребил. Когда же совсем успокоилась шаманша, то мы одарили ее платком, ножницами и другими безделицами, после столь драгоценных для них подарков вскоре девка начала сама бить в барабан, лейтенант Карпинский говорил ей, что она давеча обманывала, думая нас шаманством испугать, она лукавым усмехалась, а старики ее защищали. Айны показывали нам, что на близ лежащем мысу есть японцы и большое селенье. На юрте старшины сего селенья прибит медный щит с надписью: «1806 года октября 10-го дня Российской фрегат «Юнона» был здесь», селение назвал Сумнением, одарил айнов безделицами, велел беречь сию доску.

В 4 часа пополудни отправившись на фрегат взял с собой одного молодого человека из айнов с

тем намерением, чтобы показать, что мы расположены к ним дружелюбно и чтобы они смело всегда приезжали к нам.....

....пройдя 8,5 миль увидели мы большое селение, проводник сказал, что это японские казармы и магазины. В 7 часов лег на якорь, время довольно было уже поздно, то и решился до утра не ездить на берег. Вечером одели сахалинца в фуфайку и сертук, и надел я на него медаль. Он казался более доволен сам подаркам, нежели бы всеми сокровищами, старались от него узнать сахалинский язык, он рассказывал нам, что в сем селении много людей, также и пшена, жаловался на японцев, что они их бьют больно. А после мы видели много из тех увечных и раненых саблями, кажется, что японцы с добронравными айнами обходятся немилосердно.

... В 6 часов пополуночиспустили на воду все гребные суда; я и подмастерье Карпин поехали на шлюпке, а лейтенант Карпинский на баркасе. Еще взял с собой ял и байдарку, на всех судах было 22 человека вооруженных, фалканет и два большие мушкетона. Оставшему на фрегате штурману Ильину приказано: ежели умлышит хотя один оружейный или фалканетный выстрел, то в то же время прислать на берег медную десантную пушку с снарядами и большим числом людей на оставшемся на фрегате яле. К берегу всеми судами пристали вместе, где стояла около 12 сажень в длину и 5 в ширину японская казарма, в которой стены были сделаны из тонких дощечек лучшей столярной работы, окна были величиной от крыши и до земли, заклеены очень тонкой и мягкой бумагой, кругом же казармы из жердей обнесен был забор; восемь человек островитян разобрали несколько кольев для свободного нам прохода. Людям своим приказал я ружья поставить в пирамиду, оставя на каждом яле по одному, а на баркасе у флаконета двух человек; без всякого орудия, окромя саблей пошли мы трое в казарму, в которой было раскладено три огня, у первых двух сидели до семидесяти молодых айнов (опосля как узнал я, что японцы из всех близлежащих селениев молодых и здоровых людей забирают к себе для работы, оставляя только одних больных и старых и потому ни в одном селенье, где мы могли быть, не видели ни одного человека средних лет). У третьего огня на возвышенном месте сидели четыре японца на матрацах и курили трубки, по левую у них сторону сидели пять человек пожилых айнов, одетых очень чисто, которые были почетные островитяне. Я сказал японцам, что мы русские и вы нас не бойтесь, по обыкновению приклонением головы и поднятием рук они отвечали на слова мои, один из японцев дал знак островитянам и все они закричали «ЯНГОРА!» (по-сахалински «здравствуй»), прокричали еще несколько нам невнятных слов, потом японцы подали мне свою книгу, в которой показаны планы Нангасаки и Эдо, говоря, что они японцы; потчивали нас кашею и вместо ложек дали палочки, которыми ни один из

нас есть не мог, а еще более потому, что видели много японских сараев и думали, ежели они со пшеном, то и после успеем, кажется, что и не ошиблись. Лейтенант Карпинский и подмастерье остались занимать японцев разговорами, а я, зарядив пистолеты, пошел на гору, где было одно красивое строение, прошел к магазинам, из которых пять были заперты, а остальные четыре сарая отворены: в запертых магазинах сквозь двери приметил я, что они были полны накладены, то и решился не отлагать время далее; два раза приметил людей присматривающих из-за строения за мною, боялся, чтоб за любопытство не быть жертвою, возвратился в японскую казарму.

Лейтенант Карпинский с тремя вооруженными человеками занял южные, а подмастерье Корюкин западные в казарме двери, а семь человек без оружия с одними веревками окружили японцев, остальные же люди были при гребных судах и стояли во фронт. По данному от меня слову схватили японцев за руки, они что-то закричали, сахалинцы тотчас кинулись к дверям, другие же выхватили ножи и хотели броситься на освобождение японцев. Я приказал сделать несколько выстрелов вверх и обнажил саблю. Островитяне, видя, что уже японцы взяты, испугавшись выстрелов, кидались в южные двери, не слушая нимало моего увещания, два поставленные на-крест ружья не в силах были удержать их и обеих поставленных в дверях часовых ранили. Ежели бы не лейтенант Карпинский и подмастерье Корюкин сами не заняли те места, где лежали косы и топоры, и не допустили островитян схватить их, то конечно бы было кровопролитие; японцы были уже связаны, их оных один был так силен, что три лучших человека не могли с ним управиться; он, видя превосходство силы своей, хотел освободиться ножом, направля удар на одного из людей наших, вскоре подоспел я и саблей отвел удар его ножа; тотчас приказал отвести их под караулом на ял, который и отправил на фрегат, оставя одного при себе. Штурман Ильин, слыша на берегу выстрелы, тотчас прислал с фрегата последний ял с медною пушкою и семью вооруженными людьми. Между тем айны все разбежались. Тот увидел ясно разницу людей при обученных или воинских, между сволочью, которою я командовал: все труды наши приобучать их к стрельбе и порядку были тщетны, каждый бежал туда, куда ему хотелось, и если бы не было лейтенанта Карпинского и подмастерья Карпина, то едва ли бы мог собрать своих людей.

Первое мое попечение было успокоить сахалинцев. Я пошел к ним один в селение, которое лежит за речкою (расположение его можете увидеть из плана при сем приложенном). Повторяя им, чтобы они не боялись и что россияне дурного с ними ничего не сделают, человек десять из них робким образом присели на колени, а другие украдкой выглядывали из-за юрт, я потчивал их табаком, дарил ленты, а после сел с ними возле огня; они чрезвычайно удивлялись как я их не боюсь.

Оставя айнов, взял с собою японца, у которого находились от всех магазинов ключи; когда он нам отпер оные, то мы ужаснулись запасу в них находящемуся, а чтобы не терять времени приказал из магазина, который наполнен был пшеном, таскать оное на свои гребные суда под прикрытием восьми человек вооруженных. Мне оставалось сожалеть о том, что не только всех магазинов, но и одной крыны не в силах нагрузить, потому что судно было очень нагружено, сверх того крепкий ветер сделал оному на якоре, а особливо 6-го числа более вреда, нежели под парусами ...

Подарками и ласками сделал сахалинцев гораздо смелее, в поощрение отдал один наполненный магазин для них, сказал, что в нем находится, брали бы они себе, а после чтоб в погрузке помогли нам; скоро сахалинцы стеклись со всех сторон и начали выгружать магазины, таская всякий в свою юрту. Японец, находящийся со мною, сказал что-то им грубое, отчего все они разбежались; видел, что сахалинцы совершенно поражены приказом на первом нагруженном судне отвезти японца на фрегат; айны, увидев, что уже ни одного японца нет, то со всего селения сбежались во множестве и магазин не более как в полчаса опустошили, потом нагрузили пшена из бывших на берегу японских две лодки, которые под конвоем своих судов отправил я на фрегат. Сегодня все гребные суда сделали оборот два раза.

... В 5 часов пополудни приказал три подветренных сарая, которые наполнены были строевым лесом, досками и неводами, зажечь; при начале пожара островитяне испугались, но когда увидели, что люди наши траву, запасенную японцами для крышек, заливают водою, дабы пламя не дошло до юрт их, поднимали руки кверху, радовались и скакали. По окончании пожара лейтенант Карпинский с 15 вооруженными людьми, медною пушкою и одним фалконетом занял возвышенное место, на котором стояла кумирня, учредив между собою сигналы, отправился я на фрегат.

... В 9 часов пополудни я и подмастерье Карпин отправились на берег. Лейтенант Карпинский без меня отыскал самого почетного старшину, одарив как возможно щедрее, надел ему медаль на шею при трех пушечных выстрелах, поступок сей заставил его собрать человек до пятидесяти своих земляков, с удивительным проворством три японские лодки в сей день оборотились пять раз; приехавши на берег, знал я, что судно наше очень грузно и чрезвычайно утеснено, позволил сахалинцам брать себе из японских магазинов, что они хотят; всякий раз, когда они приезжали на фрегат, давали им водку, масло и сухари, первое тех кажется больше им нравилось; надел еще на двух почетных островитян медали, и дал при них каждому лист, подобный первому, одарил при том капотами и разными безделицами. В 6 часов пополудни, забрав артиллерию и всех людей на гребные суда, отправился на фрегат...ночь всю едва могли убратъся с грузом и счистить палубу.

В 8 часов пополудни я, лейтенант Карпинский и подмастерье Карпин отправились на берег с тем, чтобы распрощаться с сахалинцами и довершить начатое. Айнов по приезд на берег видели очень мало. ...потом осмотрели остальные японские магазины. Нашел их совершенно пустыми так, что даже гвозди из стен и крышек были вытасканы, удивляясь, куда такое большое количество в короткое время успели перетаскать, из чего заключил, что около сего места есть многолюдные селения, потом приметил в отдалении высматривающих островитян, а иных ан возвышенном месте, смотрящих с жадностью на баркас и пушку, которая стояла на борту онаго. Мы, не опасаясь ничего, поставили ружья свои в пирамиду, а сами начали обедать; в предосторожность послал пять человек обходом так, чтобы они отделились версты на две и осмотрели, нет ли где поблизости селения; тут открылись нам дурные намерения островитян, наученных от японцев. Мы заметили, что они потихоньку прокрадываются к ружьям. Делали вид, что будто онаго не примечаем; вскоре потом явились обходившие, сказали, что не более 3-х отсюда верст есть две большие юрты, в которых было собрано множество айнов; когда наши люди подошли к сим юртам, то одарили вышедшим на улицу разными безделицами, в сие время выскочило вдруг из юрты несколько человек молодых островитян, которые схватили двух матросов, потащили с собою, так что те не успели и защититься, а прочие кинулись у оставшихся отымать ружья: намерения их тогда были забрать ли вещи, находившиеся у матросов их польстили или были другие какие причины; один из людей успел выстрелить на воздух. Айны, испугавшись сего, все разбежались; неприятельский поступок сей заставил меня несколько оных захватить, вскоре ко мне привели четырех человек из виновных, на место мщенья и угроз одарил их подарками, китайками, ножницами и бисером и накормил обедом, после того через лексикон стал расспрашивать, какая причина побудила их захватить наших людей и зачем сего дня не приходили к нам; пантомимами и разными словами давали знать, что японцы, когда они были на фрегате, стращали их и учили, каким образом убить русских, уверяя, что сами они освободятся; опосля узнал я и от японцев, что это была истина.

Через час пришло человек до тридцати сахалинцев и видя, что захваченные их земляки ничем не обижены, но, напротив того, одарены и обласканы были очень веселы; рассказывали нам, что еще на NW есть две японские фактории, которых они боятся, уговаривали нас, чтобы мы для защиты их остались.

Начало уже смеркаться, чтобы нанести более вреда японцам и заставить трудиться вновь, в то время приказал я зажечь остальные магазины, бумажную казарму и кумирню, островитяне помогали в сем очень усердно, при отправлении на судно люди мои просили, чтобы позволил им убить одного

медведя для пищи, которых у каждой юрты было по одному и более. Когда человек с ружьём подошел к нему, то айны все кинулись на колени и просили, чтобы его (медведя) не трогать; из сего понял я, что они имеют к сему зверю некоторое богопочитание по превосходству силы его; несколько раз случилось мне видеть, что островитяне кормят их своим кушаньем прежде, нежели сами поедят. Снисходя просьбы их приказал оставить, хотя и имел нужду в свежей пище для подкрепления больных цынгою, (число) которых день ото дня умножалось; после этого островитяне сделались еще ласковее.

Когда кончился пожар, то отправляясь на судно, прибил на воротах, где была кумирня, доску подобно прежней и селение назвали «Любопытством»; прибывши на судно приказал поднять все гребные суда, японцы мои смотрели на пожар весьма равнодушно и были очень веселы. ...место сожжения в широте северной 46 градусов 23 минуты, долготы восточная от Гринвича — 144 градуса 00 минут

... В 12.30 при тихом ветре снялся с якоря и пошел из губы Анива.

Николай Хвостов

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1- 13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 46-53.

(А. Кириченко)

14

От флотского лейтенанта Н.А.Хвостова Матмайскому губернатору

1806 г.

Соседство России с Японию заставило желать дружеских связей и торговли к истинному благополучию подданных сей последней империи. Для чего и было отправлено посольство в Нангасаки. Но отказ оному оскорбительный для России и распространение торговли японцев по Курильским островам и Сахалину, яко владениям Российской империи, принудили наконец сию державу употребить другия меры, кои покажут, что россияне могут всегда чинить вред японской торговле до тех пор, как не будут извещены чрез жителей Урупа или Сахалина о желании торговли с нами. Россияне, причинив ныне столь малой вред Японской империи, хотели только показать им чрез то, что северныя страны оной всегда могут быть вредимы от них и что дальнейшее упрямство

японского правительства может лишить его сих земель.

РГИА, ф. 1264, оп. 1, д. 577, л. 35-36. Копия

(М. Малышева / В. Познанский)

15

*Объявление лейтенантом флота Н. А. Хвостовым
острова Сахалина владением Российской империи*

12 октября 1806 г.

1806 года октября 12 ²⁴ Российский фрегат «Юнона», под начальством флота лейтенанта Хвостова, в знак принятия острова Сахалина и жителей онаго под Всемилостивейшее покровительство Российскаго Императора Александра Перваго, старшине селения на западном берегу губы Анивы пожаловал серебряную медаль на Владимирской ленте. Всякое другое приходящее судно, как российское, так и иностранное, просит старшину сего принимать за российского подданного.

Подписанно : Российскаго флота Лейтенант Хвостов

« = сего приложена герба фамилии моей печать »

Цит. по: Дружинин Н. М. Русские мореплаватели в старой Японии. – Ленинград. Изд во Брокгауз Ефрон. 192<, с. <9.

(М. Малышева/ В. Познанский)

Рапорт правителя Камчатской области генерал-майора П.И. Кошелева Н.П. Румянцеву

2 декабря 1806 г.

Рапорт

Минувшего сего года осенью прибыло в Петропавловскую гавань под высочайшим его императорского величества покровительством Российско-Американской Компании суда: первое из Охотска 8 сентября, ... второе с Кадьяку 12 сентября Ростислав, третье – 30 сентября тендер «Авось» под командованием мичмана Давыдова из Америки от Новоархангельского порта и четвертое из Охотска 8-го минувшего ноября фрегат «Юнона» под командованием лейтенанта Хвостова.

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 3.

(А. Кириченко)

Донесение Главного правления Российско-Американской Компании Александру I

15 декабря 1806 г.

Всепресветлейшему, державнейшему, Великому государю, императору и самодержцу российскому

Российско-Американской Компании Главного Управления

Всеподданейшее донесение

Комиссионер компании, управляющий ее делами в Охотске от 31 числа прошедшего октября извещает Главное Компании Управление с нарочною эстафетою из Якутска, полученную сего числа, что 15 сентября прибыло в Охотск с острова Ситха компанейское судно Юнона, купленное тамо у Бостонского мореходца и управляемое лейтенантом Хвостовым;

- Что на сем судне возвратился и действительный камергер Резанов, который выехал из Охотска 24 числа того же сентября, за 60 верст до реки Алдана, а до города Якутска за 400 вост жестоко заболел от трудности пути, но получа некоторое облегчение, достиг Якутска 23 числа октября, получа тамо опять жестокой припадок, от которого однакож при помощи

- пребывающего в Якутске доктора есть надежда к совершенному его выздоровлению;
- И что помянутое судно Юнона господином Резановым из Охотска возвращено обратно к острову Ситха.
 - О дальнейшем же уведомлении по делам Компании извиняется комиссионер что по скорости известить не успел.

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1- 13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 2.

(А. Кириченко)

18

Рапорт генерал-майора П.И. Кошелева Александру I

о прибытии на Камчатку секретной экспедиции под командою лейтенанта Н.А. Хвостова

№ 466

28 февраля 1807 г.

Из Нижнекамчатска

Его Императорскому Величеству

от генерал майора Кошелева

Рапорт

Вашему Императорскому Величеству имел я счастье всеподданейше доносить прошлаго 1806-го года декабря от 14-го числа за № 3003-м о прибывшей в гавань секретной экспедиции под командою лейтенанта Хвостова на фрегате Юноне. Но какая сия Экспедиция, по чьему повелению и на какой предмет зделанная, хотя из отношений ко мне Хвостова известно и не было, но ныне получил я достоверныя сведения из писем и слухов, что сия экспедиция учреждена по повелению действительнаго камергера и кавалера Резанова, якобы по Высочайшей Вашего Императрскаго Величества воле к Японским берегам на раззорение их селенев в отмщение зделаннаго японским двором отказу в бывшем от Вашего Императорскаго Величества посольстве. Как сие действительно уже сказано от Хвостова и на опыте, которой прибывши в прошлом 1806 году в Петропавловскую гавань, привез четырех японцев, множество сорочинскаго пшена и других вещей и что будто бы остров Сахалин взят ими вооруженною рукою, жилища, Японии принадлежащая, сожены и раззорены, а нынешней весной оная экспедиция, состоящая из двух судов: фрегата Юноны и судна

тендр ивос [тендер Авось], как по слухам известно, располагает план свой и к Матмаю.

О чем Вашему Императорскому Величеству всеподданейше доношу.

Верно: Рехлевский

РГИА, ф. 1286, оп. 1 – 1807 г., д. 75, л. 2. Заверенная копия.

(М. Малышева / В. Познанский)

19

Письмо генерал-майора П.И. Кошелева Н.П. Румянцеву

28 февраля 1807 г.

Из Нижнекамчатска

Вашему сиятельству имел я честь доносить прошлого 1806 года декабря от 14-го числа за № 3006-м о прибывшей в гавань Секретной Экспедиции под командою лейтенанта Хвостова на фрегате «Юнона»; но какая сия экспедиция, по чьему повелению и на какой предмет сделанная, хотя из отношения ко мне Хвостова известно и не было, но ныне получил я достоверные сведения из писем и слухов, что сия экспедиция учреждена по повелению действительного статского камергера и кавалера Резанова, якобы по всевысочайшей его императорского величества воле, к японским берегам на разорение их селений в отмщение сделанного японским двором отказа в бывшем его Императорского Величества посольстве; как сие действительно уже оказано от Хвостова – и на опыте, которой прибывши в прошлом 1806 году в Петропавловскую гавань, привез четырех японцев, множество сорочинского пшена и других вещей; и что будто бы остров Сахалин взят ими вооруженною рукою, жилища Японии принадлежащие сожжены и разорены; а нынешней весной оная экспедиция, составляющая из двух судов – фрегата «Юнона» и судна-тендер «Авось», как по слухам известно, располагает план свой к Матмаю. О чем сиятельству Вашему доношу.

Отправлено из Нижнекамчатска февраля 28 дня 1807 года

Получено в Санкт-Петербурге июля 29 дня 1807 года

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1- 13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 8.

(А. Кириченко)

[Дата отсутствует]

...В своей инструкции вы приказали тендеру Авось осмотреть гавань на 16-м острове, описать и следовать к острову Александрову или Уруп и найти там Звездочетова...

...По соединению мною с тендером в Камчатке начальствующий оным дал мне знать, что донес уже на первой почте ...о неудаче исполнения предписанного ему: число больных, худость парусов, недостаток воды и дров..

...согласно ли выполняю с данною мне инструкцией. В пункте 3-м изображены причины понуждения предпринять экспедицию сию, в 4-м пункт [инструкции] идти: на остров Сахалин для разорения факторий японцев, селения сжечь, людей, годных и товары взять с собою, сказав остальным, чтоб не посещали губы Анивы как российского владения кроме как для торговли с нами, которую мы всегда готовы вести...

...24 сентября снялся с якоря и пошел из Охотска в назначенный путь, поспешая, чтобы застать в губе Анива суда, видя из инструкции, что японцы не живут долее октября месяца...

...6 октября вошел в губу Анива, 11-го нашед японскую факторию, однако совсем не ту, у которой был фрегат «Надежда»; мне сказали японцы и сахалинцы, что есть еще две или три фактории, но достоверно сказать нельзя. Я поступил согласно пунктам 4 и 5 в рассуждении селения состоящих в десяти магазинах, казарме и кумирне и тех же четырех японцев; сколько можно было поместить в судно, взял пшеница, соли неводов, котлов чугунных и разной мелочи, также и японцев, ... не только с островитянами, но и с японцами поступлено было самым мягким образом; я на судне дал им совершенную свободу, отдана им вся их собственность, в числе ее не было никаких важных вещей кроме платья, который взял себе по два сундука нового...

.... Надел в разных селениях шести человекам из сахалинцев медали, одарив при том их щедрою рукою и, как кажется, позволенным расхищением японских богатых магазинов привязал сердце их к россиянам; но только с самой той минуты, когда нога первого россиянина вступила на Сахалин с тем намерением, чтобы вытеснить японцев бедные айны сделались несчастнее прежнего, чувствуя иго японцев, охотно кинулись на добычу столь для них важную, но зная при том, что сие будет стоить им жизни, если россияне не защитят их от сего варварского народа (так называют их сахалинцы).

Кумирню взял на судно, жалея, что не смог совсем искусно сделанного молельного храма перевезти и для того сжег как кумирню, так и все японские строения, а юрты природных жителей во время пожара защищал своими людьми...

...то решил оную сжечь, отдал некоторые ломанные и ветхие доски сахалинцам; Из сей фактории погружено в судно пудов до тысячи сорочинского пшена, пудов до ста соли, до ста неводов, несколько прядева, четыре больших и десятка два малых чугунных котлов (первые весьма удобны в Камчатке для варения соли), два ящика чашек, несколько десятков топоров, серпов и ножей. В сие число я не включил платья принадлежащие японцам. Все нами взятое не составило и четвертой части там бывшего, но мы не могли поместить более в судно по тесноте от охотского груза. Стоявшие на берегу восемь японских лодок и одно довольно большое беспалубное судно, на котором они иногда переезжали на Матмай, превратил в пепел.

В пункте 8-м предписано, чтобы узнать, где японцы по островам Курильский гряды имеют свои заведения и торговлю. О сем по незнанию моем японского языка, утвердительно сказать не могу, но догадываюсь, что заведения их есть и на Урупе или по крайней мере летом для рыбной ловли несколько судов ходят на сей остров, что японцы иногда показывают на карте.

О Сахалине...в половине апреля пять судов, на каждом из них один шкипер, один купец и от двенадцати до тридцати работников, отправляются из Матмая в Аниву...

С собою привозят пшено и соль, в конце мая грузят суда свежую рыбу, пересыпая каждый слой толсто солью, в начале июля отправляются к Матмаю и почти всегда на пути встречают остальные шесть судов, принадлежащих к сей торговле, которые нагружены бывают так же как и первые; сии же возвращаются назад в исходе сентября, а иногда и позже. На зиму в Аниве остаются только три купца и один прикащик, которые жили здесь три года, но на чертвый судном привезли их зимовать в Камчатку...

...взятые мною японцы говорят на сем языке....

...также кумирню и все что только найду достойным примечания, и особливо книги и аптеку. Всему последнему прилагаю реестр...прошу разрешения вторые экземпляры послать в морской музей.

...В пункте 4-м предписано захватить бонзу, но сиих никогда в губе Анива не бывает потому, что нет ни одной по-настоящему кумирни, а только оставляют судового идола, которого называют Пентим-сима; сей символ поставлен в губу Анива с первого судна, которое пришло на Сахалин, все японцы приходящие и отходящие на судах из Анивы приезжают к нему на поклонение. Ваше

превосходительство изволили приказать отвезти кумирню на остров Баранов-Ситху, но я имел причины отправить оную в Санкт-Петербург, что усматриваете в конце моего доклада...

... Водворение японцев на Сахалине год от году становится обширнее, что доказывает заготовленные во множестве по всем местам леса, начатое их строение во всех селениях, перемена одежды островитян, у многих уже бритье голов, как у японцев и отправление их религии, к которой они айнов принуждают. Когда зажгли мы кумирню, то бедные дикари, радуясь взглядами на солнце, говоря невнятно, кланяются солнцу, в чем после удостоверились и от японцев.

Взятые мною суть купцы с Матмая, судя по их одежде, по знаниям, праздности, охочие господствовать, и количеству топоров, должно заключить, что они имеют хорошее состояние внутри своего отечества, имена их: Сасано Томимори, Фудзый Кензидзы, Накамура Торизжо и Шимбада Фумадз. Для меня удивительнее всего, что с первой минуты како они и были привезены на фрегат я не видел их скучными, кроме как когда пошел из губы Анива, потерял из виду берег и на короткое только время; они говорили, что я везу их на Камчатку, вынули свой компас и показывали румб, где лежит свой полуостров. В другой раз увидел их очень унылыми, когда выехали мне навстречу из Петропавловской гавани мичман Давыдов и доктор Лангздорф; сие очень их испугало, ибо конечно они ожидали, что придя в Камчатку с ними будет также поступлено, как с португальцами в Японии. Они имеют сведения, когда фрегат Надежда был в Нагасаки и говорят, что за отказ посольству ожидают неприятностей между Японией и Россией; говорили тако же, что оный отказ есть причиной нашей экспедиции, нимало не дивясь, что мы взяли их в плен, но долго не могли понимать, что имея их в совершенной воле так хорошо с ними относимся. Товары, которые получают они от сахалинцев, по словам их, есть одна только рыба и я почти не видел никаких звериных кож; есть у них, как говорят японцы, внутри острова соболи, выдры и лисицы очень худой шерсти, но сему я однако не совсем верю.

16 октября снялся с якоря в Аниве и взял курс к 18-му острову для соединения с тендером,...и я решился идти в Камчатку, чтобы выполнить пункт 9-й инструкции...

...Вернулись в гавань 10 ноября...

...намерен был отправиться в Америку, но когда осмотрел судно...

...В дополнении же к инструкции между прочим сказано. Ежели ветры обяжут без потери времени, то зайти в губу Анива...

...был в губе Анива и осматривал состояние японских факторий и увидел ясно, что предполагаемая вторая причина не есть важна и не должна останавливать назначенных в

инструкции предприятий, ибо хоть лов рыбы и пропущен был, однако в магазинах оной было в изобилии, но сей груз нам значущей менее пшена должен был остаться без внимания, ибо одним пшеном, которое там находилось, могли бы нагрузить три или более судна подобных Юноне. На третье: опыт доказал, что силы и одного судна были достаточны, то исполнил все как велено мне в инструкции дано в море 8 августа 1806 г. за № 392.

Хвостов

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 57-59.

(А. Кириченко)

21

Инструкция лейтенанта Н.А. Хвостова мичману Г.И. Давыдову

По секрету

28 апреля 1807 г.

Петропавловск

1. Взять курс на Курилы, осмотреть как можно ближе 7-ой остров (Шияшнекотан).
2. Курильская гряда с 47° 30" положена неверно и все карты не сходятся. Для описания островов один держать по восточной, другой по западной стороне. Плавание сие принесет много существенной пользы.
3. Но как с 16-го острова должна начаться предписанное в инструкции против японцев и требует общих...то место сие на случай разлуки место это будет первым, которое достигнем через 14 дней. Если же не увидимся, то извольте отыскать упомянутую гавань, пробывать у него не более двух суток, а потом поставить знак, а сами идите к 18-му острову Урупу, на котором находится Звездочетов. Если его не найдете, обойдите вокруг острова (чтобы описать оный и чтобы легче соединиться). Пробывать не более 5 суток. Поставить знак.
5. Следуйте на остров Александра, а оттуда к Сахалину и войти в Аниву. Простояв в оной одни сутки, старайтесь облакать природных жителей и из единого любопытства узнать образ меня с ними, для чего препровождаю к вам несколько коммеек, шитых рубах, ножниц, сукна, разных безделиц, также пять серебряных медалей на владимирской ленте, которыми прошу отличить

старшин островов 16-го, 18-го и Сахалина, давая каждому при медале лист, означающий подданство их российской империи, время имя судна и начальника. По происшествии же суток, естли я не соединюсь с вами в Аниве, а силы ваши будут недостаточны и увидите, что магазины их изобилуют грузом, начинайте с помощью божьей поступать как сказано в инструкции его превосходительства Резанова; буде же магазины их пусты, груз еще на судах и силы ваши будут против них таковы, что наверное приступить не можете, то самым мягким образом препровожайте время, дожидаясь меня кольки пача, ежели найдете два или более судна. В таком случае не становитесь на якорь, старайтесь лавировать во входе в губу, в случае же нечаянной встречи или нападения японцев на вид храня человечество поступайте как с неприятелем.

6. Соединившись в губе Анива, расположим предбудущее плавание и получите от меня дополнение к инструкции.

Лейтенант Хвостов

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, оп. 10, 1803 – 1812 гг., д. 14, л. 62-63.

(А. Кириченко)

23

*Донесение лейтенанта Н.А. Хвостова Н.П. Резанову
о планах второй экспедиции*

30 апреля 1807 г.

....Так как два казенных судна не пришли, то все припасы отдал в Камчатке и весь, исключая порох, стреньгу, смолу и свинец – взамен для Америки взял до 2-х тысяч пудов железа, тендер Авось тоже погрузил до 800 пудов.

...Зиму сию продолжал беспрестанно (заниматься) с японцами, захваченными мною в Аниве, успел, как кажется, двух из оных приводить к России. Поистине и не мудрено, что обхождение наше произвело на них чувство благодарности: до сей минуты ни один из них и не видел, чтобы было в чем-нибудь ему отказано, но они ясно видят и говорят...русский они уже понимают довольно изрядно, начинают говорить и с большим прилежанием собирают русский лексикон.

Препровождение времени сего дало мне некоторые понятия о состоянии японской империи, а

более о Матмае; вся северная сторона острова мало населена японцами, но только природными жителями и некоторым числом купцов японцев, торгующие там имеют магазины и множество товаров.

...суда же могут очистить северную часть Матмая. Японцы, находящиеся у меня, утверждают, что на Ниппон междоусобно и думаю, что нежели теперь...их, то умножающийся внутренний ропот преклонит горделивое правительство сие к желаемости торговли, может со временем сие доставить нам большие выгоды и в хлебе, товарах и покажет, что неприступные берега их государства должны будут преклонить... малому числу судов России...

...мысль о том, что народы, живущие на западной стороне острова, принадлежат китайцам, подвержена сомнению, ибо ни сахалинцы, ни японцы о сем не говорят, ... мудро, чтобы оно подозрительное правительство почитало Сахалин своею принадлежностью и виде занимая японцами, смотрело на оно равнодушно на поступок мой... раздражил японцев не столько против России, сколько против островитян, что и находящиеся у меня утверждают, островитяне выдали их, а после пособляли нам с большим усердием в перевозке и разграбляли остальные магазины.

...айны, чувствуя худой поступок свой, уговаривали меня остаться для защиты их. Несчастное состояние народа сего принудило меня согласиться на сие, когда раздавал им медали, услышал вторично наипубличнейшие о том просьбы. Они все утверждали, что без нашей защиты большей части их них отрубят головы.

По сему я решил сей весны зайтить в Аниву непременно и мы получим следующую выгоду от сего похода:

- 1) освободить айнов от тиранства японского;
- 2) получим богатый груз хлеба, который доставит подкрепление в Америке;
- 3) покажем японцам, что намерены ежегодно посещать Аниву;
- 4) можем захватить большее число людей для доставления в Америку;
- 5) описать 16-й и 18-й острова обязало меня дать повеление и командиру Авошь.

Закончим к половине июля, зайдем в Охотск, а оттуда – в Америку.

... потому не ручаюсь, проходя мимо Матмая, когда случится увидеть селение, соразмерное силам нашим, что оставлю оно без покушения, может быть, что сие не столь хорошо приметя, но думаю, что нет разницы, на Сахалине ли, на Матмае ли, или в другом каком месте причинить вред японцам тем более еще, что в инструкции сказано: пленников взять, где не встретится, только проявить человечество; исполнение чего всегда и везде для каждого из нас будет первым правилом.

Японцы взятые мною суть такого состояния, что конечно не могут принести никакой пользы в Америке, почему я решил выпустить их на Матмае, дав им письмо на русском, французском и японском языках, которое они переведут и напишут, копию которого при сем препровождаю. Доброе наше обхождение заставит их разгласить, как россияне поступают с пленными, и что мы желаем единственно только дружеских связей и торговли, в которых правительство их столь вероломно отказало.

Еще более принудило меня на сей поход праздное время, которое должны мне провести в Камчатке, ибо запастись рыбою для провизии ранее июня нельзя, и на такое количество людей закупить солонину стоило бы большой суммы.

Если правительство примет план сей, то ручаюсь за успех; я, командующий Авось Давыдов и товарищи мои будут почитать себя счастливыми, имев первые случай показать силы, способы и величие России и возможности мщения над гордостью японцев.

Украдено 30 кг свинцу. Изобличен гражданин Америки Уман Мишуев.

...слышал несколько примеров, что распечатывают письма и донесения...

...заставило меня в сем случае поступить осмотрительно..

...в поощрении каждого из 43 человек на вверенном мне судне находящим дал по одному пуду с половиной пшена, на счет которого одел всех в мундиры по образцу...

...15 апреля отдал запечатанные депеши капитану Вульфю и поднял якорь и пошел очищать путь топорами и штевнями судов.

Хвостов

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 60-62.

(А. Кириченко)

28 апреля 1807г. гавань очистилась и Юнона выла в море.

2 мая пошли из губы. Из-за льда в устье стали на якорь.

4 мая пошли в море.

9 мая увидели южный мыс 14 острова (Кетон).

10 мая увидели Юнону, идущую к нам.

12 мая в 3 часу пополудни поворотили к земле, дабы сыскать гавань, о коей упоминается в инструкции; но Шароглазов и Вардугин (промышленные данные на каждое судно его превосходительства служить лоцманом во всех местах) совсем не узнали берега и сказали, что на 16 острове нет никакой гавани, а только озерко, в кое входит прибывшая вода чрез выпадающую из одного речку. Южнее мыса Кастринуского видели небольшую губу, для описи которой послал байдарку, но не стоило того...

18 мая пошли, чтобы приблизиться к 18 острову или Урупу. В 7 часу по полудни Юнона сделала сигнал, что видит берег.

18 мая с Юноны тоже посылали байдарку, которая, пристав к берегу, нашла японскую кумирню, много заготовленного крупного елового леса и следы трех человек, прошедших босиком. Штурман, бывший в байдарке, видел растущий крупный еловый лес и березовый, что одно показывало уже сей остров долженствующий быть Итурупом, ибо известно, что на Уруле нет елового леса, что и Вардугин с Шароглазовым утверждали. Я ... от японцев узнал, что в сем месте четвертый уже год живут 7 человек их соотечественников, а начатое строение кумирни и заготовленный лес доказывает кажется, что они намерены и доле проживать. Все сие заставило нас лавировать к тому месту: ибо штурман за темнотою не видел никакого жилья близко, и не отваживался отойти подальше на берег разведать...

Ныне мы уже услышали от наших людей, что когда еще Звездочетов со всеми промышленными жил вместе на Урупе, то носило слух, что японской чиновник приезжал нарочно на тот остров сказать курильцам, чтобы они выжили русских с Урупа, принадлежащего японской империи, или иначе они их за то накажут. Посему могли мы думать, что Звездочетов увезен или убит японцами; но для вернейшего сведения необходимо нужно было отыскать курильцев и поговорить о том с ними

... в 9 часов вечера я подошел весьма близко к месту, где полагал быть японскому заведению и увидев огонь, лег на якорь на глубине 9,5 сажений, грунт песок, в расстоянии 1,75 мили. Юнона осталась далеко под ветром и для возвращения оной я сжег несколько фальшвееров, спустил ___ ракету и держали фонари, а с пушки не палил, не хотя перепугать японцев.

19 мая ... в 7 часов ... подошел столь близко к селению, что с судна могли видеть все там происходившее и тут лег на якорь.

В 9-м часу съехал на берег, где встретили меня два японца, упав по своему обыкновению ниц, и просили потом взойти в их дом. Тут потчивали меня сорочинским пшеном, джемом, вареным борщом, прекрасной копченой рыбою, бобами замороженными вместе с солодом и солью (сие кушанье весьма солоно, но японцы уверяют, что оно хорошо, когда сварено со свежою рыбою), а потом курительным табаком. Таковой прием (хотя всякой может догадаться, что страх был главной причиной оному) признаюсь отклонил меня от всякого неприязненного поступка.

Заведение сие было сделано для соления рыбы, работы отправлялись курильцами, а малое число японцы надсматривали только над ними. Два магазина, сделанные из травы и жердей, были набиты солью и жиром рыбьим в бочонках или закупоренных кадках; да еще два деревянные были заперты и я не хотел смотреть, что там есть. Около селенья находилось около 15 курильских юрт, но людей было очень мало; и кажется оные работали где-либо в другом месте. Возле селения протекает порядочная речка, через кою сделан хороший мост. Вокруг жилья лежало много заготовленного леса и досок, весьма чисто обделанных, но не думаю однако, что се сие сработано четырьмя только тут находящимся японцами — дом их весьма прост, но чистоты чрезвычайной; вместо стенок заклеена бумага, напитанная кажется маслом, пол выслан весьма чистыми рогожами, а в середине находится кухня.

Небольшое число курильцев обриту были по-японски и когда я сообщил им, что этот обычай нехорош, то курильцы говорили: весьма худ, но японцы их к тому принуждают. — Остров Итуруп, сказал я, принадлежит не Японии, а природным только жителям и японцев отсюда надо выгонять: а если россияне и будут здесь жить, то не станут ничего с вас требовать, так как японцы теперь делают. В доказательство я роздал им подарки.

Японцы сказали, что недалеко отсюда на Итурупе же есть другое их селение и там находятся теперь два судна. Для сего решился не трогать их до прихода Юоны, опасаясь, что они дадут знать о том на свои суда (К тому селению лежала порядочная дорога и на ней доходят в одни день), кои могут уйтить.

Я спрашивал и японцев и курильцев о Звездочетове и сколько понял, что его нет уже на Урупе. Я бы мог узнать о нем точно через японцев у нас находящихся, но конечно не время было дать знать в том живущим на берегу.

Пополудни я ездил к тому месту, где пристала юонская байдарка, что будет около 3-х миль севернее селенья; нашел там довольно заготовленного лесу, кажется для большой додки или судна; но ничего похожего на кумирню и никакого даже домика. — Лес был еловым, весьма мягкий и

дряблый. — Берег в сей части губы и против песчаный, несколько отмельный берег...

... В 4-м часу я возвратился на судно и Юнона была уже на якоре, в 4-х или 5 милях от нас. По 7-му часу приехала с оной байдарка с извещением, что все гребные юнонские суда отправились на находящуюся неподалеку от их судна селения, но кажется, что там нет японцев, если верить живущим близ нас. Я тот же час отправил байдарку обратно, с известием о своих новостях.

20 мая поутру приехал Хвостов с баркасом и мы решили здесь селение и иттить тотчас же в Ойду (гавань, где стоят их суда), почему позавтракав, отправились на берег. Японцы, увидев много людей, перепугались и собрались бежать, однако их схватили. В сем месте, как я сказал, было много соленой рыбы и соли, но пшена весьма мало и мы отдали большую часть одного курильцам, а факторию сожгли. Бедные японцы перепугались и спрашивали: не будут ли их резать; но по приезде на судно совершенно успокоились, увидев своих соотечественников, кои уверили их, что им нечего опасаться. — Я потчевал их чаем и всем, что имел, а через полчаса они стали совершенно спокойны. Один из них остался у меня, а четверо отвезены на Юнону, дабы каждое судно могло сыскать Ойду, находившуюся столь недалеко, что главный прикащик в их заведении видел их оной наши суда; вчерась пришел оттуда в один день и неожиданно попался нам в руки. — Мы уверили их и прежде у нас находящихся, что взяв два японские судна высадили их на Кунашире, или в другом месте, только бы не обманывали. Купец, имеющий более других торговлю или заведения в оной, на Итурупе из города Намбу (у голландцев Наво) недавно пришли на одном из двух судов и теперь находится в заведении, сделанном в губе Шана, что севернее Ойдо.

На спрос о Звездочетове японцы согласно сказали, что он умер, а оставшиеся десять человек, по слухам курильцов, выехали с Урупа в прошлом году, только мудрено, что они прошлой зимы не были в Камчатке.

21 мая ... подошел к Юноне и поехал спросить, что Хвостов намерен делать через полчаса из-за ветра не смог вернуться...

...22 мая вернулся на тендер...Здоровых оставалось 8 человек...

... Недалеко к северу от губы Найбо, находится другая Найбо, где есть японское заведение и гавань...Далеко к северу в открытой губе, именуемой Шана, как я сказал выше, находится еще большая японская фактория, а восточнее оной высокая гора Цурупунубури.

В южной части Кунашира есть изрядная гавань, по словам японцев, и большое селение; на сем острову они начинают окоренятся во множестве и завезли уже лошадей.

...ветер продолжался до 7 часу вечера, когда увидели на ОТН японское судно, в довольно

однако расстоянии. Приметно, что находившиеся на оном люди были в большом замешательстве, ибо то поднимали парус свой, то опускали оный; но в то время бывший почти штиль, вывел их лучше из опасности; ночная темнота совершенно закрыла...

23 мая на рассвете судна больше не видели и думали, что оно вошло в Ойдо или прошло под берегом. – От взятых японцев узнали, что на сем судне находится Цугаэмон, с тремя своими товарищами – Цугуэмон был штурман судна, кое бурей отнесло весьма далеко отнесло по морю около шести месяцев, в продолжение которых большая часть людей перемерла. Наконец выбросило его на курильский остров Парамушир. Оттуда японцы были перевезены курильцами в Камчатку, где прожили зиму 1804 года, будучи весьма довольны сделанным им приемом и пособиями; но весною 1805 года они убежали из Петропавловской гавани на своей лодке. Прошедшую зиму они провели на одном из курильских островов и только нынешней весною прибыли на Итуруп, где объяснили начальнику селения, что судно разбито на острове Омушир (какого имени не имеет ни один из Курильских островов), но ни слова не сказали о том, что видели даже русских. – Начальник Итурупа отправился с Цугаэмоном и тремя его товарищами на том же судне на остров Матмай..

...Но природа здесь совершенная мачеха: туман около Курильских островов столь густ и постоянно бывает в самое летнее время, что едва ли уступит туману Белого моря или Гудзонова залива.

24 мая. При переменных маловетриях вошли в губу Шана за Юною, на коей главный прикащик заведения в Ойдо, знал хорошо положение места.... В 12 часу утра подошли к Юноне, узнали, что при реке, видимой с судов, находится большое селение, которое скоро рассмотрели. – В 1-м часу пополудни отправились к оному лейтенант Хвостов с баркасом, ялом и байдаркою, а мы шли даже при помощи тихого ветерка. ...я отправился на своем яле, но не доехав версты четыре вынужден был воротиться за сделавшимся противоположным ветром... Суда с Юноны пристали к нему.

...Когда Хвостов со своими людьми хотели пристать к берегу, то японцы начали стрелять по ним; только их отогнали ружьями и фальконетами с баркасу, а потом вышли на берег с пушкою. Японцы стреляли из-за строений, однако никого не ранили, наши же (стреляли) из занятого магазинаю. Расстреляв порох, воротились, будучи преследованы японцами, а между тем на одной стороне реки зажгли жильё, кое занимали.

Вечером японцы стреляли с высоты мыса по моему судну из пушки и ружей, а несколько пуль падавших весьма близко в куче, заставили нас думать, что у них есть и картечь. Сначала я отвечал

им двумя ядрами, но после оставил их храбровать.

Японцы сами кажется поджигали остающиеся строения на левой стороне реки, откуда по ним стреляли, и конечно решили защищаться в оставшемся.

25 мая. По утру видели японцев, перставляющими разные вещи, из сожженной половины строения в другую; а скоро потом отправились на четырех гребных судах и двух байдарках – всего 36 человек с тремя пушками, кои с величайшим трудом вытащили на увал, находившийся по левую сторону селения, сажень около 30 высотой и почти в утес; но зато с оногo мы могли стрелять прямо в управление японцев, находившееся под горою, у устья же реки должно было выходить на берег под пушку японцев, почему легко можно было потерять своих людей. – Когда все пушки были подняты на гору, то пошли по дороге к селению, мимо двух четырехугольных мест, обнесенных выкрашенными полотнами, и в одном из них стояла Банжосская палатеа с ширмами. Берег к селению и южная сторона, обращенная к оному, были также прикрыты развешенными на деревьях полотнами, белыми и синими сшитыми по одному вместе. За ними нашли два орудия незнакомаго роду, из коих вчера стреляли по моему судну. Так как они взяты, то я не стану описывать их; а скажу только, что ядра оных весом около фунта, свинцовые, а в середине глина – приметно было, что японцы недавно отсюда ушли, и конечно тогда, как увидели, что мы пристаем к берегу не в том месте, где они ожидали. Подле сих орудий остался боченок недопитой саги (японский напиток), кою они конечно для храбрости тянули. Мы увидели, что одно ядро, выстреленное вчерась ночью с моего судна, взрыло землю подле самых почти орудий.

Между тем в селении все уже было пусто, ибо, конечно, японцы, увидя нас, занявших гору, не решились более дожидаться. Расположив пушки на возвышении, мы опустились вниз. – Японцы бежали в таких торопях, что оставили много заряженных ружей, ножей и другие орудия. Одна большая медная пушка была поставлена на неподвижном станке, а другую нашли без станка и весьма необыкновенной фигуры: довольно пороху, но большая часть оногo походила на мякоть; однако выстрел из большой пушки, оставленной заряженной, был очень громок. – Пальник на сей пушке с фитилем конечно не короче четырех аршин.

Гауб вахта досталась нам с ружьями, луками и значками, кои были еще в другом месте, обнесенном валом, где находилась другая гауб вахта и доска начальника.

12 или 13 магазинов избыществовали пшеном, платьем и товарами всякого роду, а все вместе показывало более процветающую колонию, нежели бедное только заведение для рыбной ловли. Все виденное нами было столь необыкновенным, что мы не понимали даже употребления множества

вещей. По распределению людей, начали свозить с берегу на суда.

К вечеру Хвостов уехал на Юнону, оставив меня ночевать на берегу, почему я и отправлял груз с берегу. Все шло хорошо до того времени, како люди не добрались до саги; а тогда многие из них перепились и с ними трудно было обходиться, нежели с японцами. Я посылал разрубить сагу, но оной во всяком доме было такое множество, что невозможно было всей отыскать, а хотя у большого подвалу и стоял караул, но сие нимало не помогало. Можно сказать, что все наши люди сколько хороши трезвые, столько же пьяные склонны к буйству, неповиновенны и способны все дурное учинить; почему первое при подобном деле должно стараться не допускать их напиться.

В одном месте нашли российский якорь пудов 16 весом, рубашку с вышитым словом «Н.З.» и ложу от винтовки; а все сие заставляло нас заключить, что русские на Урупе убиты или увезены японцами.

26 мая. Поутру поймали одного японца, высказавшегося вдруг из-за магазина, а другого нашли под полом; почему думали, что они присланы были подсматривать за нами. Потом узнали, что первый был купец из горда Намбу и богатейший в сем заведении. После вчерашней перестрелки он ушел, а теперь, полагая нас на судах, возвращался в свой дом. Другой японец был солдат, выпивши от страху столько саги, что в сие время только еще проснулся – сего тот же час отпустили с судна назад. – После поимки сих людей я должен был удвоить караул и отделить по оному людей, употребляемых прежде для перетаски разных вещей на лодки. Купец сказал, что японцы в числе 50 человек с семью офицерами находятся недалеко от нас в долине, где вчерась мы видели по вре__кнам людей и значки, остальные же с курильцами на другой стороне реки; после сего я не мог уже опасаться нечаянного нападения, а пушка, поставленная на горе противу моей...подала бы мне в таком случае помощь. –

Поскольку между тем осмотрели долину, где купец показывал быть японцам, не видели ни одного человека, но свежие следы оных и во многих местах по дороге пшено, платье и разные вещи; также много собак, конечно, японцы с третьего дня еще начали выносить туда все нужнейшее.

Вечером приехал лейтенант Карпинский и сказал, что лейтенант Хвостов велел собрать всех людей и отправиться на суда, для чего много было причин: худость якорного места причиняло опасность судам, а притом при развращенности промышленных, должно было всего ожидать. При сборе людей не могли отыскать трех человек с Юноны и одного с моего судна. С наступающей ночью принуждены были зажечь несколько магазинов, и с людьми и пушками перебрались на гребные суда; но как и тогда ни один из тех промышленников не приходил, то для поджидания оных

остался вооруженный баркас с штурманом, а все остальные суда отправились.

Днем лейтенант Карпинский ездил в другое японское селение южнее сего. – Оно было также пусто, да и в оном ничего не было кроме рыбных магазинов, кои все были сожжены.

27 мая. Поутру возвратился юнонский баркас с известием, что из четырех недостающих человек никто не приходил, однако с судов видели стоящими на берегу. Там оставалось еще несколько лодок, на коих они могли пересечь, и нельзя вообразить, с каким намерением решились они остаться в таком месте, где русские все выжгли и где они уверены быть истязанными, попавшись в руки японцам. – надобно думать, что множество выпитой саги лишило их ума. Лейтенант Хвостов ездил на берег и уговаривал их воротиться, но в ответ они прикладывались по нем из ружей и ушли в гору.

... В 9 часу утра Хвостов сказал мне, что посылает свой баркас на берег для взятия людей. ... Однако мы видели, что только два человека пришли, а другие удалились в гору и собирались стрелять по своим, когда же к ним подходили, почему баркас вынужден был вернуться без них. ... Итак, один человек с тендера, родом китаец, а другой с Юоны из ссыльных, взятых для поселения в Америке, остались на сем берегу, кажется на мучение только.

Мы мало имели времени рассмотреть японские селение на острове Итуруп, в губе Шана, которое теперь сожгли; но по множеству магазинов, сорочинского пшена, других родов хлеба и различных вещей в них находящихся, по пушкам, ружьям и другим орудиям, можно думать, что правительство положило сему селению быть главному на всех Курильских островах, на коих японцы промыслы рыбные отправляют. Оно было самое северное во всей Японии, снабжено было гарнизоном, из чего ясно кажется, что народ сей давно опасается русских. Величина заселения и все находившиеся в оном, показывает пространство рыбных промыслов тут отправляющихся и важность оных для Японии.

Взятые в Найбо японцы уверяют, что соотечественники их в губе Шана было до 300 человек или более. Если число сие справедливо, то пусть посудят о храбрости сего страшного по некоторым описаниям народа, и о сем равнодушии к жизни, что будто составляет главную черту их характера. Однако японцы сказывают, что начальник селения, не могши противопоставить русским, конечно перережет себе брюхо. Я не понимаю, каким образом люди столь мало привязанные к жизни, столь худо защищаются; но подобные примеры наиболее видны между другими народами; а посему кажется, что самоубийства никогда не могут означать великость духа, или весьма редко.

Местечко сие имело большие столярные, кузнечные, слесарные мастерские, кои заставляют

думать, что тут немало находилось ремесленников разного рода. Здесь и в Найбо японцы строили множество лодок и небольшие суда, кои отправляли и на Матмай. Пребольшой сарай занят был только машинами для делания саги; а количество оной, найденное здесь показывает, или большое число живущих людей, или развращенных японцев.

Жилища японцев расположены были не особыми домами, но в больших флигелях они отделяются одни от других выдвижными щитами, столь плотно сделанными, что сначала покажется, будто видишь последнюю уже стену, но выдвинув один щит, находишь потом ряд разделяющихся между собой весьма чистых горниц, устланных повсюду травяными рогожами. В каждом домике была особая кухня, в кою вода проведена посредством труб, и оную брали, отдернув только сделанные в стене краны. Словом, все нужное к общежитию облечено было кажется до возможности и притом с большою чистотою.

Часть строений обнесена была высоким земляным валом в виде крепости на каждой стороне рек, и в них входили в ворота, вырытые в валу до половины высоты одного от нижнего края. Ворота запирались плотными деревянными дверями и возле каждых находились по особо вырытой комнате. Сии крепости могли их защищать от курильцев, ибо одна пушка, поставленная на горе, висящей так сказать над жильем, может выгнать большое число людей из одного. Сие строения, вне крепости находящеся, прикрывалось белыми палатками с пестрыми кругами на окнах, развешенными на выкрашенных деревьях. Такие же обнесенные полотнами места, как я сказал, были и на горе, где конечно в случае тревоги собиралась часть гарнизона, дабы не дать занять места командующего всем селением; но японцы забыли, что мало одной диспозиции, а надобно уметь и защищаться. Какого однако можно ожидать сопротивления от народа, не слыжавшего почти ружейного выстрела. Известно, что никто, кроме военнослужащих, не может иметь в Японии ружье; да и тем даны оные кажется для виду, ибо редкой из них умел действовать оным, по словам японцев, бывших у нас на судах. Сии сначала не могли без трепету услышать пушечного выстрела, делаемого иногда для сигнала; но после казались весьма к тому равнодушными.

Гора над жильем столь крута, что на нее с большим трудом можно было взойти прямо, почему японцы прорыли в ней широкие дороги зигзагами, и сделали вход весьма легкий, да и повсюду видны были деятельность либо к чистоте, приличные японцам. – все дороги были выпланированы и устланы песком, или мелким камнем; в двух местах начали заводить сады; земляной вал уложен весьма равно дерном, берег реки отделан, и красивый через нее мост аркою, представлял изрядную картину.

Кажется японцы содержали всего караул, ибо мы нашли две гауб-вахты; одна в полугоре, где сверх ружей и луков нашли несколько значков или знамен, из коих два по уверению наших японцев, показывают, что начальник гарнизона должен быть немаловажный чиновник, ибо значки сии присылаются от самого КУБО, и коих ни под каким видом нельзя оставлять под (страхом) смертной казнию.

Лагы и шишаки японцев железные, весьма тонкие, покрытые лаком и очень чисто сделанные; копье и штык скользят от них, но пуля легко пробивает на весьма довольном расстоянии.

Ружья с фитилями, сделаны весьма чисто и красиво; берут далеко, только японцы стрелять не умеют. Сказывают будто в Японии нет иных пушек, кроме оставшихся от португальцев, но если мы нашли две на Итурупе, то кажется нельзя не быть им в середине империи. Для больших пушек ядра свинцовые, обмазанные глиной и обклеенные бумагой; для малых же как я сказал, свинцовые, а в середине глина. Большая пушка походила на единорог. Копья японские на длинных гибких шестах, покрытых черным лаком и с позолоченными ручками. Сверх сего есть несколько родов оружия, неизвестных европейцам, и могущих кажется служить для мучения только людей.

... компания торгующих здесь купцов из города Намбу и офицер, командующий гарнизоном, имел присмотр над рыбными промыслами здесь производящимися и всею торговлей; только правление сего весьма несчастливо, ибо сожжено много знатных рыбных магазинов, потеря коих быть чувствительна в некоторых провинциях Японии, особливо при неурожае пшена. Японская империя по малой обширности столько отягчена жителями и пропитанием для некоторой части оных становится столь трудно, что они должны распространить беспрестанно далеко к северу; или для всегдашнего жительствова, или только для рыбных промыслов. Правительство японское не позволяет никому из подданных сей империи выходить из оной; однако же наконец принужденным нашлось не только позволить расширение рыбных ловлей, но даже одобрить таковые предприятия, ибо привоз большого количества рыбы в остров Ниппон вышел совершенно необходим. Во время посольства Лаксмана в Японию остров Матмай едва ли имел половинное число жителей в сравнение с нынешним; теперь же сверх того заводятся большие селения на Итурупе, Кунашире и Сахалине; и со временем доберутся может быть и до Камчатки. Все сие не есть ли доказательство избыточества жителей в сей империи и недостаток прокормления для всех; ибо из северных мест ничего почти не получается, кроме рыбы и жира.

Недавно еще не находилось довольно смелых людей, дабы учинить предприятие на острове Сахалин для рыбной ловли, и сие представлялось только жителям Матмая, ныне же правительство

запретило последним ходить туда и на Курильские острова, а позволило только сие коренным жителям Ниппона, ибо сии находят выгоды поста за то превеликие пошлины. Небольшие гарнизоны, находящиеся на Итурупе и Кунашире, показывают начинающееся окоренение японцев в сих местах и служат доказательством, что распространение японцев на островах к северу от Японии лежащих, сделалось необходимым, что рыбные промыслы, отправляемые на оных, суть великой важности для сей империи, и что неимение оных, будет для ней весьма чувствительно.

Вот путь для притеснения сей гордой империи ибо северные места весьма важны для нее, но слабы, не могут учинить большого сопротивления и не потребуют на отнятие оных больших иждивений (как всегда при том будут окупаться) в сравнении с теми, кои должны употребить против южных населенных пределов сей империи, если бы то кому вздумалось. Небольшое число судов и 500 человек десанта достаточно для занятия острова Матмай и пресечения ввозу рыбы в Ниппон, и я думаю, что сие более подействует над правительством японским, нежели экспедиция с 5-ю тысячами человек десанта, отправленная в Нангасаки и другое место; а притом успехи сей кажутся менее достоверными. Сверх того известно, что внутренность Японии гориста и орошается весьма быстрыми реками, которые затрудняют сообщение зимою, и суть причиною, что почти вся японская торговля отправляется морем на весьма плохих судах, кои не смеют удаляться далеко от берегов: несколько хороших мелких судов, посланных в различные широты по берегу Японии, достаточно останавить торговлю оной, произвести ропот в народы и принудить правительство согласиться на всякие требования. Подобное сему предприятие кажется весьма трудным и невозможным, когда поручается людям не имеющим охоты к выполнению оных; ревность же и истинная любовь к славе и пользам своего отечества, сопряженная с совершенным бескорыстием, редко встречают препоны непобедимые.

...Сибирь едва ли не больше выиграет от торговли с Японией, ибо в нынешнем положении она не может долго существовать, а тогда и население ее несравненно увеличится.

Надежки на экспедицию с севера были бы еще меньше, если бы собирать для сего вольницу, ибо дух предприимчивости не погас еще в Сибири, но предприятие без строгой дисциплины и порядка здесь не могут быть прочны, потому что должны воевать не с многими малочисленными народами, но с населенною империею; притом надобно не бить людей и получать временные только выгоды, но прочные и такие, кои могут переменить совсем вид Сибири: а для сего последователи Ермака не могут быть годны для такого предприятия.

Известен недостаток Камчатки и Америки в хлебе, а ноне можно было привезти достаточное

количество сорочинского пшена для годового прокормления жителей тех мест, если бы суда наши могли поместить оное, и когда бы якорное место в губе Шана было лучше... для сей экспедиции употреблено было только около 50 человек, из коих по крайней мере третья доля ник чему не годны.

Я не мог узнать точно, с которого времени японцы живут на Итурупе, только тому более 20 лет назад, но гарпуны, пушки и другое оружие прислано на оный по отходе фрегата Надежда с посольством из Нангасаки. С того же времени поставлены гарнизоны на острове Кунашир и во всех северных местах. В губу Соя у NN мыса Матмая, где Надежда стояла на якоре, прислан был тот же час по получении о том известия, гарнизон и пушки. Японцы бывшие у вас сказывали еще, что по отходе Надежды из Нангасаки вышли несогласия между духовным и светским императорами и один из них получил большую противу прежнего власть;

...Известно, сколько японское правительство подозрительно и в рассуждении своих подданных, а не только иностранцев..... Пример: в Хакодатэ (что в Сангарском проливе), где стоял Лаксман с судном, по отбытии его переведено с Ниппон в два года 130 000 жителей, прислан гарнизон со всеми принадлежностями, разведено хлебопашество и губернатор (Обунъон) острова Матмая, переведен из города сего имени в Хакодатэ. Японцы конечно судят по своим судам о мореплавании других народов и думают, что русские могут приходить в те только места, где они случайно были один раз.

Для прочной торговли с Японией нужно иметь гавань вблизи оной, но ни одном из Курильских островов не отыскано порядочной, по словам японцев, гавани в южной части Кунашира достаточно хорошо. При ней находится большое японское селение, защищенное приличным гарнизоном, и японцы на сем острове начинают окоренятся во множестве; так что там уже разведены и лошади. Прежде чиновник, командовавший сим местом, был присылаем из горда Матмая, в последнее же время правительство определило поручить управление оного офицерам из самого Ниппона... Правительство японское не доверяет жителям Матмая, весьма притесняет их и особенно в рыбных промыслах. Я понял от японцев, что на острове Матмае запрещено даже хлебопашество повсюду, кроме Хакодатэ, что в нужное для жизни и общежития доставляется с Ниппон, дабы сим средством поставить матмайцев в невозможности когда-нибудь подумать об отделении себя от Ниппон. Если сие подлинно справедливо, то жители Матмая должны быть весьма недовольны своим правительством.

Должно думать, что рыба в Японии не дешева; или вместо оной из Ниппон вывозят во все места великое количество сорочинского зерна и других товаров. В губу Анива последние суда привезли до 5 тысяч мешков, или до 15000 пудов. Что же расходуется во всех северных местах,

сколько взамен того получается рыбы? Понеже рыба есть главный предмет всех заведений японцев на севере и беспрестанного распространения их, то должно сказать о способах приготовления оной. Ее солят чрезвычайно солоно и не в бочках, а в магазинах рядами, кои в таком же точно порядке грузятся на суда. Рыба сия столь солона, что мы не могли есть оную иначе как вымоченную несколько суток в пресной воде, отчего она вышла совсем неудобна для употребления в море. Но японцы вообще едят весьма солоно, и не токмо рыба, но и большая часть их столовых припасов точно столь же солоно приготовлены. – Сливы и другие фрукты, так же редька и прочее, солится у них до чрезвычайности; а иногда заквашивается с солью и солодом. Вообще образ их прокормления совершенно отличен от европейского. Пшено же они едят напротив вареное только в пресном виде с особенным искусством, так что люди наши никак не могли достигнуть до того. Пшено, сваренное японцами, имеет лучший вид и вкус, и может быть потребляемо даже европейцами.

Сельдей в бочонках японцы солят для своего только продовольствия на месте, а нисколько не отправляют в Ниппон; все же сельди, туда идущие, наперед солят немного, а потом прикапчиваются и складываются в связках. Сверх сего сушат просто большую рыбу (роду лососей), набивают потом оной все опроставшиеся из-под пшена мешки и отправляют в Ниппон не для пищи, а для удобрения земли под сорочинское пшено. – На Матмае рыбы весьма довольно для продовольствия жителей, кои за оную только получают все для себя нужное в Ниппон.

Суда японские весьма плохи, грузят сколько могут более и выходят в море в благополучные некрепкие ветры; когда же захватит их буря, то японцы выкидывают груз в море и приходят в порт иногда с пустым судном.

Японцы называют айнами коренных жителей Матмая, Сахалина и Южных Курильских островов, как и сами они себя именуют.

...Айны переезжают с одного острова на другой для торговли, и с Матмая ездят на Уруп для покупки выдр морских и орлиных перьев. Бобров продают японцам, кои отправляют в Нангасаки для промену китайцам; внутри же Японии они не употребляются и никакая мягкая рухлядь, ибо и в северных местах сей империи теплое платье имеет обыкновенный покррой; только длиннее, шире и подбивается весьма толсто хлопчатою бумагою. В Нангасаки же отправляется небольшое количество собираемых японцами соболей, выдр и медведей, только отрасль сей торговли весьма мала; или от недостачи зверей, или от малой склонности природных жителей промыслять оных или наконец и от того, что японцы находят прибыточно употреблять айнов на промысле рыбы, нежели зверей. Шкуры медвежьи очень хороши, выдры также добротны. Соболей же изрядных мне не

случалось видеть. Японцы уверяют, что во внутреннем Сахалине их более и лучше, не уступают добротностью камчатским, виденные же мною на Итурупе не стоили труда купить их.

Орлиные перья нужны айнам для стрел. На большей части острова Матмай (исключая Аткаса) и в Аниве сих птиц мало, более же находится на близ лежащих Курильских островах, особливо на Кунашире. Орлов два рода, хотя они кажутся совершенно между собою сходными. У одних 12 перьев в хвосте и стрела, к концу которой они прикрепляются, идет порямо, даже против ветра; у других 14 перьев в хвосте и они считаются худшими. Японцы ... употребляют айнов во все работы, содержат их как невольников и в чрезвычайном страхе; принуждают их даже принимать свои обычаи, брить голову по японской моде и тому подобное. ...Айны не могут быть привержены к японцам; но не спешат ничего делать как только повиноваться. Японцы собирают молодых айнов из всех селений в свои фактории и сии управляют все работы и ловят рыбу, за кою айнам японцы платят своими товарами по положенной единой таксе. Привозимые на Курильские острова товары суть следующие – пшено, разные железные вещи, табак, трубки, деревянная лакированная посуда даже хорошей работы, иглы, толстые бумажные материи, саги и прочее. Айны любят пьяные напитки и в Аниву только привозили около 300 бочонков, каждый от 3/2 до 5 ведер, сверх того же японцы на месте сами делают оной весьма много. Купцы японские почитают на сих островах совершенными господами, для коих и малейший труд постыден, почему они распоряжаются делами, курят табак и пьют саги.

28 мая. Звездочетов – передовщик компании, отправленный на сей остров Уруп еще Шелеховым, дабы старался завести торговлю с японцами...

В 11 часов юнонский ял с штурманом отправился на берег в том месте, где Вардугин (он с Шароглазовым были у Звездочетова, нарочно были взяты из Америки для обозначения места, на кой они долго жили, но вышло, что их совершенно напрасно возили, ибо они ничего не могли узнать) полагал быть курильскому селению для осведомления тамо Звездочетова, ... пришла ко мне юнонская байдарка с известием, что японцы между двумя высокостями на берегу, полагают быть селению русским, и что на самом взморье похоронен Звездочетов. Сему можно поверить было, ибо и Вардугин с Шароглазовым сказывали, что после их Звездочетов хотел перебраться на северную сторону к одной речке, в коей ловится рыба, не имеющаяся на южной стороне острова.

1 июня....В 12 часов утра воротился мой подштурман с известием, что видел жилище русских почти обвалившееся; но ни следа человеческого и никакого признака недавнего пребывания в сем месте людей; дороги даже поросли травой. Он нашел оставленную бочку и несколько фляг, видел

над одной могилою крест, а над другою доску с надписью, из коей видно: что доска поставлена в 1805 году в апреле, что Звездочетов, трое промышленных, поселщик и одна женщина померла, что они промышляли по сему острову благополучно; но куда остальные люди после убрались, того не из чего было узнать. Самое верное кажется, что они выехали в Камчатку или убиты японцами, но в таком случае кажется, последние сожгли бы селение, если можно так назвать две или три травяных юрты, кузницу и один балаган для сушеной рыбы. На берегу [нашел] старую байдарку, замытую уже песком (в Охотске уже мы узнали, что они точно в 1805 году отправились с Урупа, зимовали на одном из Курильских островов и в 1807 только году приехали в Камчатку по отплытию нашему из оной). Положение жилья – в низкой пади, окружено горами и чрезвычайно неприятно. Голодьбы там конечно не наблюдалось, люди не имели иной пищи кроме рыбы, доставляемой им маленькой речкою и мы могли заметить, что единственное наше заведение на Курильских островах представляло противность заселениям японцев. Сии выбирают лучшее местоположение, обстраиваются весьма порядочно и живут в таком же изобилии, как и в своей земле, если еще не в большем. – Наше заведение в Америке едва ли возмогут когда с ним сравниться

Полудни возвратился юноский ял, не нашед никакого селения курильского, и мы дальнейшие отыски компании Звездочетова [прекратили] ...

4 июня. ...В 3 часа по полуночи опознали южный мыс губы Найбо, называемой мускис, а посему находящийся пред нами остров долженствовал быть Кунашир, в открытую губу коего мы впустились. Вид Кунашира гораздо приятнее всех ранее виденных Курильских островов и представляет перемену зелени к югу. В горах к северу – еще снег...

6 июня. ...В 5 часу увидели северо-восточный мыс Матмая и легли на Z ...

7 июня. ... Юнона была противу селения айнов, где видели два магазина японских и несколько японцев....

8 июня. Погода плохая, а ежели выйти на Матмай...Мы легли на Аниву

9 июня – 11 июня. Мыс Анива...

12 июня. До восхождения солнца лейтенант Карпинский отправлен был с двумя юнонскими ялами и моею байдаркою для осведомления от айнов о том, есть ли ныне в той губе японцы?...

12 июня. Я поехал на Юнону, куда в 10 часу вернулся Карпинский и 12 человек айнов. Физиономии сих приятнее нежели физиономии курильцев, хотя впротчем они два народа со всем между собою сходятся... По сожжению здесь прошлого года японской фактории они дали знак о том на Матмай, куда будто посылают и одну медаль; и что после ни одно японское судно в губе Анива не

приходило... Сахалинцев одарили весьма щедро и дали несколько сорочинского пшена, после чего они стали просить солоду. Зачем? – Саги сделать, сказали они. – Сие показывает, что сахалинцы, лишившись торговли с японцами не потерпят ничего, не имея еще времени привыкнуть к их произведениям. Правда, они пристрастны к курительному табаку и ныне за неимением оного курят струмик; но совсем так, кажется остаются довольны, получив совершенную свободу, нежели быть в прежней неволе и иметь некоторые избытки, кои для них не суть необходимы. – Вот за что они должны благодарить русских, впрочем как они не были довольны пребыванием у них японцев, то избави их бог от подобных вещей с нами... Айны, получив подарки, отправились... и нам за совершенным штилем должны быть оставаться на якоре, то мы решились на сей день съездить на берег. Гребные суда были у борту и люди сидели уже в оных, как вздумалось еще взять юнонскую байдарку для стрельбы. Американец, ездивший всегда в оной, последнее время был помешан в уме; но как казалось, что он поправился, то его и послали в байдарку. Он несколько времени сидел один и вдруг начал помаленьку отгребать от судна. – Ему закричали, куда же ты едешь? Тогда он не отвечал, начал грести сильнее; два яла, посланные за ним, далеко не могли и американец, выскочив на берег, скрылся в лесу. – Очень ясно, что в сем побеге не было никакого намерения, ибо он не имел у себя ни ружья, ни ножа и уехал в одной только рубашке.

После сего приключения поехали мы на берег и пристали к тому селению, где начальником был старик лет одного 90 или более. Он принял нас сидя на лавке, порытой чистыми травяными рогожами, все же другие сидели на устланном полу, также поджав ноги. – Старик говорил речь, призывая солнца в свидетели, сколь сердце его радуется видеть русских, к сожалению, что глаза его весьма слабы, дабы рассмотреть нас так, как бы то ему хотелось.

Лейтенант Хвостов дал старику медаль, уговаривая его носить оную, а не прятать, как то другие айны, получив их, делают, или когда мы спросили сахалинцев, видели они такие медали еще у шестерых, то они отвечали; нет, а слышали, что у одного начальника – Тогусима-куру есть оная. Два японца, бывшие с нами на берегу, уверяли, что сему не должно дивиться, ибо айны, получившие какую-либо вещь, тот час же прячут ее и стараются, чтобы никто не знал про оную. – При медали, даваемой старику, был лист, обернутый в лоскут красной фалды, за которой сей старик-начальник взялся скорее всего и прежде еще, нежели подали ему оный. – В сем месте мы пили чай и потчевали оным старика, посетили еще два жилия и возвратились.

На берегу мы просили старика послать айнов искать сумасшедшего американца, ушедшего с Юоны, на что он в ту же минуту согласился и посылал своего сына с десятью человеками. Хотя

они отправлялись искать, однако, но не забыли спросить: нет ли у него ружья или какого другого оружия?

У айнов мы купили двух медведей по году и более каждому, на что они с великим трудом согласились и когда убили уже зверя, то обклали ему шею и голову небольшими палками, на конце коих наструганы мелкие стружки и загнуты в виде деревца. – Потом долго говорили над убитым медведем, голову отрезали и оставили у себя. – Вышеописанные палочки со стружками, суть у них знаки доброго их расположения или так сказать мирные задачи; с ними они встречали нас на берегу, а приехав на Юнону, имели несколько таких на носу лодок, и кои отдали нам как от людей в жилищах своих.

Японцы уверяют, что айны, нашед маленьких медвежат, дают их женщинам вскармливать грудью, потом продолжают кормить с возможным старанием и всем лучшим, а когда медвежата начнут подрастать, то держат их в легко-сделанном четырехугольном сверху также закрытому досками срубе. – Срубы сии столь слабы, что медведь может легко опрокинуть оный и уйтить; но конечно привыкает помалу жить в сей келье, и будучи всегда сыт, не находит нужды вырваться. Когда медведю пройдет два года, то его убивают и едят; но по сожалению, которое показывали хозяева над убитым медведем. – Можно думать, что какое-нибудь суеверие побуждает их иметь всегда живого медведя, ибо продавшие нам имели по два; для уступки первого даже требовалось согласие начальника селения, второго же ни за что не уступали. Я готов думать, что или медведь принадлежал всему селению и убив одного все вместе съедают или по крайней мере, что без позволения начальника и для себя никто не может убить одного.

Шкуры медвежьи как здесь, так и на Курильских островах очень хороши, и есть нимало не уступающие американским...

...Поутру съехали в селение, против какого стояли на якоре; издали видели несколько человек, но в селении никого не нашли. Нельзя было не знать здешним айнам, что вчера мы столь щедро их соотечественников одарили и не пожали им ни малейшей причины от нас удалиться. Из чего мы можем заключить, что в губе Анива есть японцы, но находящиеся у нас на судах не велели айнам о том сказывать, или что японцы застрашали островитян и запретили им всякое с русскими общение, обещая в противном случае скоро отомстить за то ... Невозможно, чтобы из сего корыстолобивые айны упустили столь добрый случай получит множество подарков. Так как селение было совершенно пусто, то мы расклали в каждой юрте подарки и пошли к шлюпкам. На берегу, у того места, где мы пристали к оному, на шестах был повешан деревянный ящичек и во круге одного

несколько мирных значков. Выходя из шлюпок, я запретил людям смотреть, что есть в том ящике, но возвращаясь, разрешил, что в оном конечно есть нечто относительное к нам. Желая узнать причину столь странного поступка награжденных русскими островитян, я велел открыть ящичек и к крайнему удивлению увидело в оном серебряную медаль, данную прошлого года начальнику сего селения Тогуш-куру, листе при ней и ленту владимирского ордена. Коя показывает, что или медаль была ношена или не бережена. Так как вчерась айны показывали, что слышали про медаль Тогуш-куру, то верней сей опасался потерпеть от японцев, если оставить оную в доказательность

Сего можно сказать то, что остальные пять айнов коим были даны такие же медали, не имели намерения возвратить оных, потому может, что мало о них знали. Мы склади опять все в ящичек, прибавили в оный многие подарки вновь, повесили, как прежде было, взяли мирные знаки, на место оных вывесили кусок красного ситамеду и возвратились на суда...

14 июня....Когда лейтенант Карпинский, посланный на берег, возвратился, то мы снялись с якоря.

...Карпинский, посещавший два селения, не видел в оных ни одного сахалинца, во втором из них нашел два японских сарая и сжег оные. ...С Юоны гребные суда ездили на берег и опять не нашли ни одного человека; но когда возвращались, то скоро из другого жилья отвалила лодка с тремя человеками, приехали к Юоне и два взошли на оную, третий же, оставшись в лодке один и увидев японцев, вдруг погреб из всей силы к берегу; но его догнали, взвели на судно, одарили как и его товарищей и он сделался очень весел. Когда спросили сих сахалинцев, отчего ни в одном селении не находили людей, то они сказали, что во время ходу сельдей все айны собираются на том месте, где есть сия рыба. Дома же никого не осталось. Если сие справедливо, то мы напрасно подозревали своих японцев.

15 июня. Давно уже утро не казалось мне столь прекрасным как сего дня, потому что сверх ясности неба оно отличалось совершенно новою сценою. Казалось, что весь лес наполнен поющими птичками, только недоставало одного соловья. – Увы! Мореходец до того тверд и до того только времени сердце его кажется ему самому одеревеневшим для всех удовольствий, как какое-нибудь неожиданное приключение не напоминает ему его дурачества, странности его жизни, его связей, все, чего он лишился и все, что добровольно претерпевает, тогда проклинаят и он свое тщеславие, вспоминает родных, друзей и удовольствия, которые вкушались с ними, решается как наимовозможно скорее броситься в их объятия и омоченное слезами лицо уверяет его поневоле, что он не мог еще довести сердце свое до того, чтобы оно было чуждо нежно чувствовать влияющих

природою во всех людей. Увы! Я начинаю познавать цену времени едва ли не совсем потерянного – если все много сделанное было только предисловием к жизни моряка, то оно слишком трудно, долго и бесплодно. С увеличивающимися только годами возраста, родится и опытность, которая, конечно в порядке вещей, для редкого должна быть не печальна...

В 6 часу утра снялись с якоря и пошли к той фактории японцев, против которой стояла Надежда.

...Вместо большой фактории, как сказывал господин Резанов, нашли только соломенные сараи для складывания заготовленной рыбы и в коих сахалинцы (по увезении прошлого года хозяев) не оставили ничего, кроме больших чугунных котлов, конечно им не нужных. Мы не видели ни одного айну, ни какое приметы, что они недавно скрылись.

Магазины находились по обе стороны довольно большой реки, коей мы с моря не приметили и пристали по правую от оной сторону у довольно бурунистого берега.

...Взяв несколько больших котлов, остальные переломали, все японские сараи сожгли и возвратились на суда. Я удивляюсь, что такое не значущее заведение могло быть почти единственным предметом экспедиции двух судов, ибо об нем более всего упоминается в инструкции господина Резанова...

...19 июня вечером видели на берегу Матмая 2 огня раскладенные айнами (по словам японцев) для приманивания рыбы в невода...

20 июня...В полдень мы считали себя на матмайском берегу, противу мыса Крильон, палили из пушки для узнавания места Юноны.

...22 июня ...зашед за сей остров, мы заштилились и отправились на шлюпках к японскому судну, которое стояло на якоре, люди же перебирались на берег, и когда мы к оному пристали, то и не нашли уже ни одного человека. Тогда отрубили два якоря, на коих оно стояло (судно держало курс у южному мысу Пикед-Лангль), подняли парус, иногда буксировали и подвели к нашим судам, оставили его на якоре.

Груз сего судна стоял из пшена, соли, небольшого числа товаров и множества пустых бочонков, кои везены были для получения жиру...

23 июня. Поутру я снялся с якоря и подошел к японскому судну, отшвартовался за него для взятия груза, принужден был ломать трюм и вынимать каменный балласт. Работа трудная и опасная в открытом море, но необходимая для взятия большого количества пшена. На сей раз я должен отдать справедливость своим людям, десять человек коих работали так успешно, как я нимало не

мог ожидать. С 10 часов утра [на своем судне] принялись вынимать канаты и ломать все трюмы, запасные паруса и такелаж высланы были на палубе, водяные бочки переставлены на руках; в 8 часов вечера все было на месте, в судне не осталось ни одного камня, а на место одного положено 220 мешков сорочинского пшена, более чего судно мое не могло поместить, хотя и не было перегружено. – Прежде всего в Шана было взято от 30 до 40 мешков и так всего в судне находилось до 900 пуд пшена и 200 пуд соли, исключая 7 или 8 бочек саги и много мелочных товаров, от чего трюм, каюта и камбуз так были зарыты, что же не могли где стоять. Я не знаю однако, чтобы вышло с моим судном ...японское судно имело 85 пуд по палубе и весьма страшной конструкции, билисы чрезвычайно толсты.....

...судно способно ходить по реке, но не по морю...

...сначала отрубили на нем два якоря, на коих оно стояло, сверх сего остались еще 6; по словам японцев каждое судно имеет 2-х четырехречих якорей ...

24 июня ... а когда удалились от японского судна, то оставленная байдарка зажгла оное. Сначала огонь бросился повсюду, но когда подгорела трава и рогожа, то огонь стал тише. После видели как мачта упала на корму, наконец погорели два каната, на коих судно стояло и тогда течением понесло его в пролив между Рио-шери и Рипон-шери...

25 июня. ... обогнув Пик-де-Лангль, увидели несколько японских селений и два небольших судна возле них; вскоре увидели и более большое ... Пристал прямо к нему ... люди вскочили на японские суда и подали с одного тросы... Ветер сделался потише и Юнона пошла к селению. На судне не было ни одного человека, кои кажется уехали еще за несколько день прежде и удивительно, как они оставили судно на якоре на глубине 30 сажень, когда при сем ветре могли бы уйтить на нем на Матмай.

Груз состоял из соленой рыбы, копченых сельдей, жиров и нескольких мешков пшена. Конечно, судно сие возвращалось откуда-нибудь с северной стороны Матмая или с Курильских островов. Взяв то, что я мог поместить к себе, провертел судно в разных местах; нор дабы ночью не класть своих якорей или не лавироваться, велел заколотить оные Пovyдергивать нагеля поутру и утопить тем судно. Воды пресной у меня оставалось очень немного и рад был, что мог налить с сего судна 8 бочек без всяких хлопот....

25 июня.... Ночью оторвало якорь... я послал отомкнуть проверченные вчерась скважины одного человека, который с великою нуждою и опасностью мог перебраться по канатам, кои то отдавало, то вытягивалось и взбрасывало человека вверх с великою силой. Еще один конец лопнул,

тогда когда он перебирался на японское судно и у нас оставалось только три целых, но один вскоре за прежним оторвало, тогда велел человеку поскорее возвращаться и потом отрезал остальные тросы... Посланный успел однако ототкнуть все скважины и он конечно своим проворством только обязан спасением себя...

26 июня. ... Мне не хотелось удалиться от судна, прежде нежели оно потонет..... стать лавировать к Юноне...

27 июня. ...В 1 час ночи лег на якорь недалеко от Юноны, против японского заведения, состоящего только с сараев с рыбой... Здесь стояли два японских судна, одно из них шло в губу Анива, везло бонжоса, попа, четырех или пятерых солдат, пушку и несколько других оружий. Людей, разумеется, мы не нашли ни на судне, ни на берегу, ибо они задолго до того все скрылись на Пик-де-Лонгль. – Шедшее в Аниву судно было из Ниппона. – На нем нашли описание приходу Надежды с посольством в Нагасаки, желание торговли с нашей стороны, отказу в том и прочее; нашли портрет господина Резанова и стоящего подле него гренадера ружьем, но столь непохожий, что без надписи было бы трудно было и догадаться, нашли много карт, глобус, скопированный кажется у голландцев, виды мысов Анива и Крильона и многих других.

Юнона грузила с сего судна пшено и другие вещи; в другом же судне была только рыба, здесь кажется в него груженная ибо судно стояло у самого селения и на 6 якорях. Судно с Ниппон покрашено красною краской, что по словам японцев означает казенное судно;

...По полудни перевезли весь лучший груз и пшено на Юнону, а потом сожгли сараи и суда...

28 июня. Поутру лейтенант Карпинский с 16 человеками ходил на берег и прошел около 8 миль к северу нашел японские заведения из четырех больших казарм и нескольких сараев состоящих, но людей в оном не было, видели только вблизи одного, который скрылся в весьма густой и высокой траве; отсюда они давно уже начали выбираться, ибо селение совершенно было пусто. – Подле оного нашли две или три юрты.... Лейтенант Карпинский сожегши сие заведение возвратился на Юнону; тогда и лейтенант Хвостов отпустил всех японцев как то им было обещано, исключая двоих; им дали большую японскую лодку и снабдили всем, чем они хотели. Два купца взяли образцы всех лучших сукон, станидов и многих других товаров; дабы показав своим соотечественникам, что они могут получить от нас, если только торговля остановится. – Японцы сии знают жестокость и в то же время робость своего правительства; уверены были, что после учащения военных действий, оно неминуемо согласится на торговлю с Россиею. Они говорили, что для них все равно Японии или России будут принадлежать Курильские острова и Сахалин, только бы

позволить им ходить на оные для покупки рыбы.

30 июня. Поутру байдарка и ял с Юноны ездили на Пик-де-Лангль. В 5 часов увидели показывающееся из-за Найбо японское судно... и коль скоро заметило нас, то легло в берег и скрылось за Найбо. Его можно было бы взять на шлюпках, но время становилось дорого и притом имелся полный груз, взятие его не принесло бы никакой пользы. В 8 часу еще одно скрылось.

1 июля...

2 июля...

11 июля. ... ибо все бумаги относительно экспедиции отобраны Бухариным в Охотске...

Мичман Давыдов.

1808 г. 20 апреля.

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л.75-116.

(А. Кириченко)

26

Письмо Н.П. Румянцева Статскому советнику А.И. Хвостову

24 июля 1807 г.

Милостивый государь мой

Александр Иванович!

Находясь в неизвестности о любезном вашем сыне, вы желали через меня получить об нем сведения, в чем по сих пор не имел возможности вас удовлетворить.

Но получив сей день от генерал-майора Кошелева из Нижне-Камчатска от 14 минувшего декабря письмо, в котором между прочим сказано, что флота лейтенант Хвостов с вверенным начальству его судном 8 ноября из Охотска прибыл на зимовку в Петропавловскую гавань для починки своего судна и в приятное удовольствие себе, о чем, милостивый государь мой, и уведомляю.

Румянцев

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1 - 13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 5.

(А. Кириченко)

Письмо А.И. Хвостова Н.П. Румянцеву

31 июля 1807 г.

Санкт-Петербург

Ваше сиятельство

Милостивый государь!

Вчераś имел честь получить письмо Вашего Сиятельства от 27 числа сего месяца, которым уведомили меня о прибытии сына моего из Охотска в Петропавловскую гавань 8 ноября прошедшего года. Приняв такое уведомление за особую это весть Его Сиятельства милость ко успокоению всего моего семейства.

Александр Хвостов

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, с. 9.

(А. Кириченко)

*Ведомость вещей, захваченных Н.А. Хвостовым и Г.И. Давыдовым
у японцев в 1807 году*

№№	Наименование товаров	«Юнона»	«Авось»	В сумме
1.	Домовых разных изображений богов	4	-	4
2.	Комодец с книгами и морская карта	1	-	1
3.	Доска черная с японскими надписями			
4.	Дверей обыкновенных филенчатых больших	4	-	4
5.	Дверей обыкновенных филенчатых малых	5	-	5
6.	Миска под лаком	-	2	2
7.	Солонки	-	2	2
8.	Кадушек деревянных с крышками	4	0	4
9.	Кадушек деревянных без крышек	-	1	1

10.	Кадушек деревянных без ножек	-	1	1
11.	Чайников глиняных	-	1	1
12.	Чайников чугунных	-	1	1
13.	Чайников с крышками и без	9	3	12
14.	Тоже без крышек поломанные	-	3	3
15.	Чугунных гирь	1	1	2
16.	Молошников деревянных	1	-	1
17.	Блюдцев глиняных	173	15	188
18.	Чашек деревянных разных	110	28	138
19.	Зеркал медных больших и малых	1	7	11
20.	Ящичков под лаком больших и малых	32	26	58
21.	Шкатулочек под лаком деревянных	-	6	6
22.	Комодцев под лаком небольших	1	2	3
23.	Ложек японских или вилочек под лаком	64	-	64
24.	Щеток деревянных	3	3	6
25.	Гребенок деревянных под лаком	20	13	33
26.	Подносов деревянных(употребляются вместо тарелок)	122	44	166
27.	Котлов медных	-	1	1
28.	Котлов чугунных	-	7	7
29.	Тож ломанных	-	4	4
30.	Кастрюль медных	2	2	4
31.	Кастрюль чугунных	1	1	2
32.	Ширм больших	2	-	2
33.	Ширм малых	2	-	2
34.	Туши японской (кусков)	11	-	11
35.	Чернильниц медных	-	2	2
36.	Баночек медных с крышками	5	-	5
37.	Баночек медных без крышек	3	8	11
38.	Шпилек оловянных	10	8	18
39.	Бритв без футляра	10	8	18

40.	Бритвь с футляром	-	5	5
41.	Футляров деревянных	9	9	18
42.	Ножичков маленьких	30	6	36
43.	Ножниц маленьких	-	6	6
44.	Трубочек курительных	11	21	32
45.	Рог из раковины	1	-	1
46.	Бумаги пищей	1/2стоп	-	1/2 стоп
47.	Чаю японского в двух ящиках	2 пуд 30!	-	2 пуд 30!
48.	Табаку курительного	5 пуд 15 !	1 пуд	6 пуд 15 !
49.	С книгами корзина	1	-	1
50.	Корзинок больших и малых	9	9	18
51.	Фонарей бумажных побитых	9	9	18
52.	Тож вовсе негодных	2	2	4
53.	Свеч больших и малых	1 пуд 30 !	-	1 пуд 30 !
54.	Банок деревянных под лаком	3	3	6
55.	Зрительных трубок изломанных без стекол	1	1	2
56.	Футов медных	1	1	2
57.	Подсвечников медных	1	1	2
58.	Щипцов медных	2	1	3
59.	Ширкунцов медных	3	3	6
60.	Безменчиков медных	2	2	4
61.	Шаров деревянных	1	1	2
62.	Скамеек на ножках под лаком	3	3	6
63.	Ситцов волосяных с деревянным ободом	1	1	2
64.	Ношников медных	1	1	2
65.	Картин на бумаге	3	3	6
66.	Замков всячих	5	5	10
67.	Тож ломаных	1	1	2

68.	Ключей	10	10	20
69.	Стекол	1	1	2
70.	Крыльев птичьих	8	8	16
71.	Карт колода	1	-	1
72.	Халатов бумажных	-	3	3
73.	Рубах бумажных	-	6	6
74.	Платков бумажных пестрых	-	13	13
75.	Кушаков бумажных	18	-	18
76.	Кушаков добинных	3	-	3
77.	Кушаков гарусных полосатых	-	12	12
78.	Кушаков шелковых	-	3	3
79.	Рубах из урупки матерчатых	124	-	124
80.	Нагрудников детских	-	3	3
81.	Нагрудников для большого росту	-	100	100
82.	Соболей поротых низшего сорту	35	-	35
83.	Выдр поротых того же сорту	50	-	50
84.	Платья верхнего шелкового	35	-	35
85.	Платья полушелкового	50	-	50
86.	Платья бумажного	100	-	100
87.	Платья гарусного	95	-	95
88.	Тож нижнего стеганого полушелкового	43	-	43
89.	Тож нижнего стеганого бумажного	150	-	150
90.	Камзолов китайных	22	-	22
91.	Штанов бумажных	15	-	15
92.	Штанов китайных	21	-	21
93.	Передников бумажных	2	-	2
94.	Поясных шнурков	-	18	18
95.	Пологов кропивных	10	-	10
96.	Тюфяков стеганых на бумаге	28	8	36
97.	Одеял бумажных стеганых	19	-	19
98.	Простынь бумажных	-	2	2

99.	Бумаги хлопчатой	23 ф	21 ф	1 пуд 4 ф
100.	Пестреди кусков	13	-	13
101.	Материи бумажной	1 пачка	14 штук	1п.-14шт
102.	Материи креповой	-	2	2
103.	Материи бумажной в 3х остатках	-	3	3
104.	Китаек разных цветов	36	-	36
105.	Китаек в 3-х остатках	-	3	3
106.	Зонтиков	5	-	5
107.	Вееров бумажных	8	12	20
108.	Дах черных	-	5	5
109.	Дах синих	12	-	12
110.	Дах белых	60	20	80
111.	Мотушек разного цвета	-	320	320
112.	Ниток бумажных	15 ф	-	15 ф
113.	Топоров	2	2	4
114.	Пил разных больших	2	-	2
115.	Пил разных малых	9	-	9
116.	Пил, похожих на тимерманские с черенками	-	8	8
117.	Пил, похожих на тимерманские без черенков	-	8	8
118.	Крючков железных с черенками	-	2	2
119.	Ножей больших	3	2	5
120.	Клещи	1	-	1
121.	Молотков	2	-	2
122.	Рымбоутов железных	2	-	2
123.	Брусков каменных	7	7	14
124.	Скоб железных	13	-	13
125.	Стружей с колотками и железцами	4	-	4
126.	Тож одноручных	-	22	22
127.	Долот разных	14	41	55
128.	Карнизов, зынзубелей, шитеников	-	14	14
129.	Зубил железных	50	-	50

130.	Напилков столярных	152	-	152
131.	Петель железных	12	12	24
132.	Лоскут парусины бумажной	1	-	1
133.	Компасов	5	-	5
134.	Флажков фалсовых	3	2	5
135.	Флажков китайных	10	-	10
136.	Флажков дабыных	-	4	4
137.	Кошек маленьких 4-х лапных с цепочками	4	4	8
138.	Железа брусков	2	2	4
139.	Пистолет	1	-	1
140.	Сума патронная с 8 патронами	-	1	1
141.	Кинжал	-	1	1
142.	Поясов	-	2	2
143.	Колчан травяной	-	-	1
144.	Колчан под лаком без крышки	-	3	3
145.	Колчан под лаком с крышкой	-	12	12
146.	Стрел камышевых под лаком с железными копейцами	417	233	690
147.	Луков под лаком	-	16	16
148.	Лат железных	28	27	55
149.	К ним нарукавников с нарыльниками	2	-	2
150.	К ним набородников	-	2	2
151.	Одних нарукавников	29	-	29
152.	Щитов под лаком	11	-	11
153.	Щитов жестяных	12	9	21
154.	Позолоченная пашка	1	-	1
155.	Пицаль медная	1	-	1
156.	Ложа пицальная	-	1	1
157.	Пушек медных негодных	2	-	2
158.	Маленьких медных мортир	1	2	3
159.	Ружей с медными замками фитильных	13	21	34

160.	Шпаг разного рода	-	15	15
161.	Клинков шпажных	-	4	4
162.	Ружейных чехлов суконных	2	-	2
163.	Ружейных чехлов кожаных	30	6	36
164.	Пик железных	12	8	20
165.	Интрепелей на дровках	1	-	1
166.	Японского пороху или мякоти	20ф	15ф	35ф
167.	Султанов черных вместо алебард	8	-	8
168.	Калибров ружейных для пуль	2	2	4
169.	Барабанов	1	1	2
170.	Значек	1	1	2
171.	Пшеница белого без мешков чистого	1720п 26!	563п	2283п 26!
172.	Солоду	11п 5ф	-	11п 5ф
173.	Соли	196п 36ф	70п	266п 36ф
174.	Саги мерной, напиток слабый	100 ведер	-	100 ведер
175.	Тож в боченках	16	-	16

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 137-144.

(А. Кириченко)

31

Донесение лейтенанта Н.А. Хвостова Якутскому областному начальнику

19 октября 1807 г.

Якутск

...бумаги все отобраны, даже касательные описи южных Курильских островов и северной части Матмая, и я мог только сохранить настоящую инструкцию, данную мне от действительного камергера Резанова и медали. Впрочем все кажется погибло, потому что, можно сказать, выгружено грабительски, многие бумаги и карты, касающиеся экспедиции сей, попадались в руки к нам, но

только изорванные. Груз обоих судов, исключая двух больших медных пушек, трех мортир, пятьдесят восьми ружей, нескольких десятков сабель, множества других орудий, имея от трех тысяч двухсот и до трех тысяч восьмисот сорочинского пшена, разных шелковых и бумажных материй, до пяти сот ведер японской водки, лучшей лакированной посуды, до трехсот разных книг, между прочим и с описанием последнего российского посольства в Японию, портрет действительного камергера Резанова и при нем одного гренадира, описанием возмущения случившимся в Японии по отходе «Надежды» и раздоры между духовным и светским императорами за отказ в торгах в торговле с россиянами.

Теперь отняты способы к подробному отчету. А последнее оставило прискорбное напоминовение, что из товаров, которые слишком на сто тысяч рублей едва ли найдется и половина целого, все разграблено, переломано и вряд ли есть какое-либо состояние людей в Охотске, которое не имело бы японских вещей. Жкипаж также Юнонской команды как и тендера разграбили, чему я имел подробный список, но при скором отправлении их Охотска оставил. Излишним почитаю наше содержание и все последствия дел экспедиции подробно описывать, потому что господин Давыдов в донесении своем в Главное Управление изобразил.

Впрочем исполнив все согласно с данной мне инструкцией не утружу Главного Управления какими-либо просьбами как только того, чтобы (было) оказано пособие к скорейшему выпуску отсюда.

Лейтенант Хвостов

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803 – 1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 30.

(А. Кириченко)

32

Письмо лейтенанта Н.А. Хвостова Якутскому областному начальнику

[Дата отсутствует]

Ваше превосходительство,

Милостивый государь!

С крайним прискорбием и трудом принимаюсь за перо, дабы описать неприятное свое приключение в Охотске. Желал бы даже изгладить его из своей памяти, а не токмо чтобы доставить

вам неудовольствие чтением онаго. Но дела секретной экспедиции, порученные в мою команду, заставляют хотя в коротке говорить о том. Слабость здоровья, расстроенного жестоким двухмесячным содержанием в Охотске, не позволяет мне распространяться так, как должно было; но в сем тепер и нет большой нужды потому, что господин Давыдов описывает последовательное течение дел экспедиции достаточным образом для подания о том сведения...

Особенного только я могу сказать, что отвезя действительного камергера Николая Петровича Резанова в Охотск, получив по отъезде его превосходительства из сего города дополнение к прежней секретной инструкции, данной мне в море 8 августа 1806 года, я отправился в губу Анива на острове Сахалин, где тендер Авось под командою мичмана Давыдова должен был находится в сие время и конечно в немалой опасности от японцев по малому числу людей на сем судне.

Исполнив в Аниве то, что согласно было с данной мне инструкцией и не видя там тендера, я полагал, что оный мог потерпеть несчастье в бывшее бурное время где-либо на берегах Японских или Курильских островов. Но к великому удовольствию нашел его в Петропавловской гавани на Камчатке.

По окончании предприятия сего года пришел в Охотск для отослания депеши об исполнении вверенной мне экспедиции, но здесь случилось общая для всех нас неприятность – быв в первый день на берегу подал капитану Бухарину рапорт. Как от начальствующего секретною экспедицией, что самое сделал в прошлом году. На другой день мичман Давыдов отправился с шлюпками из обоих судов и никто не вернулся. А на большой воде пришедший казенный катер увел и тендер в реку.

После сего я два дня в требовании с берегу гребных судов, не понимая того что происходит. наконец пришел ял с казенными людьми и я отправился на оном.

Капитан Бухарин призвал меня в портовое правление, приказывал отвечать: где я был и по какому повелению исполнял.

Но я говорил ему, что сие должно было учинить с самого начала, а не силою схватывать суда и людей, когда не видал еще от меня неповиновения, то после сих его поступков и других дел, о коих слышал в Охотске, не стану даже отвечать и не могу поверить ему подлинных бумаг, опасаясь, что он утаит или изорвет их и лишив меня способов оправдаться. Господин Бухарин посылал отсюда меня на Юнону. Я сказал, что хочу ехать в Петербург, отказываюсь от управления судов и прошу квартиру, кою и отвели мне. На другой день поутру нашел приставленной у дверей моей квартиры караул и услышал приказание не выпускать вон.

Не могу занимать Ваше Превосходительство описанием моего содержания, скажу только, что два дня не давали мне есть, 24 сутки держали в одной рубашке и том же платье и словом: господин Бухарин хотел кажется истощить надо мною все выдуманные им мучения, дабы заставить меня или отдать полученные от Николая Петровича Резанова бумаги, или принудить прибегнуть к какому-либо низкому средству для умиловления человека, не знавшего никогда сожаления.

Я вытерпел горячку, но не смотря на все представления лекаря не мог получить позволения прохаживаться.

После того впал в скорбут, от коего и теперь еще не совершенно оправился. А все вместе принудило решиться...

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803 – 1812 гг., оп. 10, д. 14.

(А. Кириченко)

33

*Записка о вояже и действиях в Японии и познаниях в оной
флота лейтенанта Н.А. Хвостова.*

Вопросы Иркутского губернатора и ответы

[Дата отсутствует]

1. Сколько времени понадобилось?

Ответ: 2 мая Авачинская губа очистилась ото льда, 12 мая подошли к Урупу, 7 июня были у Матмая...

2. Вопрос об Урупе.

Ответ: На Уруп были посланы два гребных судна в разные места и одно из них узнало, что русские давно уже съехали, в гавани они не видели...вид Урупа весьма дик и бесплоден, все они гористы. Растет береза крепкая, но кривая..

3. В которой части Матмая останавливались?

Ответ: Едва ли не были выброшены на берег у северной части Матамая, потом стали на якорь у острова Пик-де-лагм, находящийся на северо-западной стороне сего острова.

4. Нашли ли там надежные места к укреплению?

Ответ: Карта должна находится у капитана Бухарина.

5. Какой народ там живет?

Ответ: Видели сахалинцев, курильцев и японцев. Айнну кажутся весьма тихи, добронравны и далеко уже отступили от состояния диких, но быв жестоко утеснены японцами может быть также истреблены как камчадалы, алеуты и несколько народов Америки русскими. Природные жители Матмая, Сахалина и южных Курил говорят на одном языке называемом айнами.

6. Какие нашли жилища и магазины?

Ответ: Островитяне живут в юртах, японцы же в деревянных домах весьма чисто и просто сделанных.... Японцы слишком отягчены жителями, кои не находя внутри оной способов прокормления, принуждены изыскивать новые для сего источники; почему правительство и позволяет им распространяться по Курильским островам, где они по времени и укореняются потом; есть надежда, что некогда японцы доберутся и до Камчатки, како при великом изобилии рыбы они конечно могут занять с большею, нежели русские теперь пользою. Японцы с южных Курильских островов сверх рыбы вывозят и мягкую рухлядь, кою отвозят в Нангасаки и продают китайцам.

7. Сколь велико сего народа?

Ответ: Япония есть многолюдная по своему пространству империя, не исключая может быть и китайской, но места веденные ими были только из колонии в некоторых; из коих содержит гарнизоны, посланные по отказу уже нашему посольству в торге, почему можно кажется заключить, что еще тогда же правительство японское стало опасаться покушения россиян с северной стороны держать.

8. Делали японцы сопротивление и каким образом, то есть с храбростью или без труда сдавались?

Какие они употребляют орудия?

Ответ: Когда лейтенант Хвостов съехал в первый раз в губе Шана, то они не хотели позволить ему пристань к берегу и начали стрелять так, что перестрелка продолжалась около двух часов. После

чего он должен был возвратиться, будучи преследован японцами, коих было очень много. Но можно ли ожидать большой храбрости от того народа, который никогда не выдвигал ружейного по себе выстрела, и который в империи своей даже не находит никакого военного происшествия по совершенному истреблению христиан в Японии? Когда на другой день съехали более людей и пристали к такому утесистому берегу, у коего они не могли сделать вреда, то японцы оставив селение ушли все и не возвращались до сих пор как суда наши в губе находились. Сверх пушек японцы имели особого рода орудия, каковые два в Охотске находятся. Ружья их с фитилями и бьют далеко, луки и стрелы более приятны на взгляд, нежели сколько удобны для действия, латы и шишаки из тонкого железа покрыты лаком, копья очень плохи и служат кажется более для параду; сверх же сих они видели несколько родов ружей, насаженных подобно копьям на древки и кои выдуманы более кажется для истязания людей, нежели для защищения себя от неприятеля.

9. Пушки откуда получены? Европейские или местные?

Ответ: Пушки и орудия находятся в Охотске и суть конечно японской работы: ибо как можно подумать, чтобы народ, превосходящий в некоторых искусствах и рукоделиях самих европейцев не умел обрабатывать пушек. Одна из них не взятая за тягостию походила на единорог, почему и не можем утвердить, какого она точно литья. Надобно сказать, что станины у больших пушек неподвижные, ядра свинцовые обмазанные глиной, пальники длиннее сажени, большая часть порошу походит на мякоть и все подает невысокое мнение о военном искусстве японцев.

10. Вообще какого свойства – храброго или робкого и трусливого найдены японцы?

Ответ: О сем значит в объяснении на 8 пункт -

11. При нападении на них было ли много кровопролития и сколько с обеих сторон лишились жизни или изувечены или ранены?

Ответ: Лейтенант Хвостов в особом рапорте объясняет, что перестрелка с ними продолжалась два часа с четвертью и конечно не без урону с их стороны: но о чинах онаго не может сказать, ибо японцы при ретираде никого не оставили, когда же он сам отступал к берегу, то они преследовали его, не причинив однако никакого вреда.

12. С упорством ли сопротивлялись японцы или с робостью сдавались?

Ответ: О сем в пункте 8-м.

13. Повстречали какие крепости и укрепления и какого роду?

Ответ: Видели земляные валы укрепленные не по правилам фортификации и никак не показывают знания японцев сей науки. Крепости сии удобны более защищать как от нападения коренных жителей, нежели от европейцев. При том в Шана над самой крепостью гора, так сказать нависла, а пушка поставленная на оной может сделать бесполезным самый большой гарнизон. Думается, что расположение у их крепостей и везде такое же.

14. Какие приобрели сведения о числе войск империи, обмундировании и прочее?

Ответ: ...Японский император содержит много войск...

15. В каком положении находится японский народ?

...они видели пограничные области, невозможно говорить об империи вообще...

16. Употребляли ли вместо толмачей японцев, привезенных ими в первую поездку из Японии в Камчатку и с каким успехом и усердием они служили?

Ответ: Сначала они руководствовались лексиконом, собранным покойным камергером Резановым, а после употребляли переводчиками взятых прошлого года в губе Анива японцев, кои довольно изрядно понимают по прошествии зимы российский язык и могут с ними почти обо всем изъясняться. Японцы были уверены, что отказ посольству российскому и намерение достигнуть торговли были причиною военных действий. Они все искренно желали торговли как единого средства к облегчению своей участи, тоже самое утверждали японцы нашему посольству в Нангасаки. Бывшие у них получили привязанность к обычаям российским, не приметив в них той унижительной разности между состоянием, каковая находится у японцев, не видя того жестокого деспотизма, которым каждый старший пользуется в Японии над меньшим и наслышавшись, что жизнь и состояние каждого не зависит от прихотей или злобы чиновников, но всего для них было невероятнее, что подданный может даже говорить с государем и императором, и притом не поникшую голову до земли. Японцы сии сказывали, что по отказу в торговле России и по уходу фрегата «Надежда» вышли великие распри между духовным и светским императорами, и что тогда же были отправлены гарнизоны во многие северные владения Японии. Японцы конечно

судят о мореплавании других народов по-своему, думая, что они не могут приходить в иные места, как где уже были.

Доказательство тому сказанное о губе Сое, еще то ... гарнизон и в губу Анива, еще по отходе Лаксмана из Хакодагэ, переведены с Ниппон в два года сто тридцать тысяч японцев и разведено там тако хлебопашество, также прислан гарнизон и пушки.

17. Какие полезнейшие политические и коммерческие и прочие сведения в сии две поездки приобрести предупели?

Ответ: Сей вопрос требует обширного соображения, много времени и притом таких сведений, каких они в себе не чувствуют, потому долгом считаю доставить в самой скорости те известия, кои только могут посольство в Японии доказывает кажется, что торговля нужна России и достигнуть оной не трудно, если только правительство на то расположено, ибо внутренняя коммерция сей империи отправляется морем на весьма плохих судах, потому нетрудно расстроить оную, остановить подвоз товаров и съестных припасов к самой столице, поставить там в неудовольствие против своего правительства народ и без того уже жестокостями его раздраженный и принудить через то японское правительство согласиться на всякие условия.

Удаленность только сей империи служила ей оградою противу покушений европейцев, смятение Европы еще кажется более тому спешествовали; но когда водворится тишина, то может быть откроется снова и домогательства, для получения торговли с Японией выгодной каждому народу. Россия северной стороны может лучше всех успеть в сем предприятии и доставляя японцам только соленую рыбу, можно составить богатую уже отрасль торговли. Сверх того жители острова Матмая утеснены и более других еще расположены к торговле с россиянами, они даже охотнее желают видеть Сахалин и Курильские острова во владении россиян, только бы им позволили приходить на оные для покупки рыбы.

18. Сколько времени из Матмая до Охотска?

Ответ: От мыса Анива до Охотска – 14 дней.

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1- 13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 69-73.

(А. Кириченко)

26 октября 1807 г.

Тобольск

Его императорскому величеству

Рапорт

...Но в подтверждение сего с пришедшего ныне из Охотска судна почтою получил подробнейшие сведения, что отправленное из Охотска в бытность там действительного камергера Резанова судно Юнона с избранными им и отправленными начальником Охотского порта Бухариным 10-ю человеками поселенцев для водворения в Америке под командою лейтенанта Хвостова, вместо предпринятого пути находилось зимою в Петропавловской гавани с грузом многих японских вещей и с четырьмя пленными японцами. По прозимовании ж отправилось в море и по прибытие ныне в Охотск командир Хвостов тамошнему начальнику флота капитану 2-го ранга Бухарину донес, что заходил он сего лета на осьмнадцатый Курильский остров для взятия компанейского прикащика Звездочетова, напротив же того Бухарину известно, что и нынешнего года Хвостов с судами Юнона и Авось производил военные действия с японцами; истребил некоторые селения с их имуществом и прибыл в Охотск со взятыми им призами и двумя человеками японцев пленников, требуя имянем начальствующего над секретною экспедициею запрещения спрашивать о ней.

Но Бухарин, по сомнению им усматриваемому, приказывал Хвостову дать надлежащее о сделанном ему поручении объяснение; но не получив же удовлетворения, посему и по упорству Хвостова предполагает, что действия его возбудили в Японии неудовольствие, от которого по связям японцев с голландцами предстоит надобность взять военную предосторожность всему Камчатскому полуострову и Охотскому порту.

В рассуждении чего для должного изыскания состава из воинских чиновников комиссию и взяв казенный присмотр груз, находившийся на судах бывших под командою Хвостова – отдал оныя по просьбе Российско-Американской компании Охотской конторы для перевода отправляемых из Охотска вещей в американские селения.

Вместе с сим дошли ко мне и два письма лейтенанта Хвостова, в коих он жалуется на Бухарина, что сей по прибытии его с мичманом Давыдовым в Охотск сверх отобрания от них двух компанейских судов употребляет величайшую жестокость не только с ними служителями, но и с

находившимися на тех судах промышленными людьми, содержанием всех их под строжайшим караулом в разных непристойных местах за недачу отчета о вверении ему, Хвостову, от действительного камергера Резанова секретной экспедиции. Не открывая однако ж и мне о прямой цели существования ея, ниже о действиях какие им произведены по самому поручению кроме того что уполномоченный сделал секретную экспедицию под видом государственным, за отказ Российскому посольству в Японии, которая поручена ему на двух судах и снабжен он секретною инструкцией, что не следовало бы для пользы государственной разносить слухи об упомянутой экспедиции и что теперь знает слабое положение японской стороны, может быть угодно правительству продолжить далее выгодное крейсирование около берегов горделивой державы, где щадя человечество с обеих сторон, два судна в год могут принести на полмиллиона и более, а ежели бы иметь при себе транспорт, то в силах прокормить и всю Камчатку.

...не имел никаких предписаний о существовании бывшей под командою лейтенанта Хвостова экспедиции, ... я прижу...и учинить ныне же подлежащее распоряжение как о принятии предосторожностей на благоразумии основанных, так и о удалении от подсудимых жестокостей, - обо всем том подробно сообщил министру морских сил и по части иностранного департамента министру коммерции...

Пестель

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1- 13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 16-18.

(А. Кириченко)

36

*Донесение Директора Российско-Американской Компании И. Шелехова
министру коммерции и министру иностранных дел Н.П. Румянцеву*

& 609

20 ноября 1807 г.

Его сиятельству....Румянцеву

Донесение

...Возвратившись в прошлом 1806 году в Охотск с острова Баранова из Ново-Архангельского порта на компанейском корабле «Юнона» господин действительный камергер и кавалер Резанов, окончивший высочайше возложенные на него поручения, известные Вашему сиятельству, назначил

как помянутый корабль, так и другой компанейский же тендер «Авось» в особую секретную, и правлению компании не известную, экспедицию в рассуждении острова Сахалин, приказав Охотской компанейской конторе для торговли с японцами на том острове обитающими отпустить товаров и прочаго на 20024 рубля, что и исполнено; корабль тот и тендер зимовали в Камчатке и возвратились в Охотск в августе месяце нынешнего года, доставя полученной тамо в оборот отпущенных от компании на вышеуказанную сумму товаров груз, состоявший в японском пшене, которого одного около 3500 пудов, их напитки саго, соли, разных лаковых вещах и изделиях, платьев и прочих мелочах, что все однако же, как охотская контора уведомляет, охотское начальство по какому-то принятому им сомнению приказало особо наряженной комиссии описать и взять хотя и в компанейское сбережение, но в казенном месте до разрешения начальства.

Главное Компанейское Правление не имеет ни малейшего сведения о намерениях предпринятой господином Резановым экспедиции, но зная только, что привезенные на обоих оных судах японские вещи, принадлежат компании взамену не только отпущенных с ними товаров, но и самого употребления в течение целого года обоих тех судов и экипажей, которые могли, когда бы не назначены были к Сахалину, отправлены быть в Америку по другим торговым видам в пользу компании.

Приемлете смелость всепокорнейше просить ваше Сиятельство оказать милость представительством вашим, чтобы привезенные в Охотск японские припасы и вещи, как бесспорно принадлежащие компании, отданы были ей, на что ожидаем Вашего Сиятельства резолюции.

Директор Иван Шелехов

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, оп. 10, 1803 – 1812 гг., д. 14, л. 32.

(А. Кириченко)

37

Письмо И.Б. Пестеля Н.П. Румянцеву

30 ноября 1807 г.

Тобольск

Господину министру коммерции действительному тайному советнику кавалеру

графу Румянцеву

Вслед донесения моего Вашему Сиятельству от 26 минувшего октября о взятии начальником Охотского порта Бухариным под стражу Хвостова и Давыдова за произведенные ими в Японии военные действия – ныне с прибывшей из Иркутска почтою, получил я рапорт от гражданского губернатора с приложением полученных им с нарочною эстафетою из Якутска от помянутого Хвостова и Давыдова двух писем и в открытом конверте донесений их и корабельного подмастерья Корюкина в Главное Российско-Американской компании управление, в коих изыясняют они о выезде их тайным образом их Охотска по причине делаемых им жестокостей со стороны Бухарина – просят о позволении им приехать в Иркутск. Якутский же областной начальник надворный советник Кардашевский донес ему (губернатору), что капитан Бухарин уведомил его, что означенные находящиеся там по криминальному государственному делу под стражею и состоящие под следствием в воинской комиссии Хвостов и Давыдов, напоивши часового опиумом на 17 число сентября в ночи бежали; а потому чтобы они не могли укрыться в Якутской области, просил на случай их туда приезда, взять их под стражу до получения об них высочайшего соизволения и обыскать – нет ли при них японских вещей, а паче золота, которые естли найдутся отобрать и хранить до уведомления его; но 13 октября сами они явились в Якутск, у которых по обыску не токмо никаких японских вещей, но даже никакого экипажа, кроме самонужнейшего платья, не оказалось – и на спрос господина Кардашевского объявили они, что мера строгого и можно сказать бесчеловечного с ними поступка Бухарина, принудила их сделать утечку из-под стражи, под коей они были без пропитания. Почему господин гражданский губернатор сколько из уважения тому, что сии чиновники, находясь в Якутске, не имеют способа по содержанию себя, не менее и для того, дабы можно было отобрать от них обстоятельные сведения о произведенных ими военных действиях против японцев,

- предписал якутскому областному начальнику оных Хвостова и Давыдова отправить в Иркутск, где они по прибытии своем и будут находится под присмотром до получения разрешения, о чем уведомил Бухарина с подтверждением о поспешнейшем доставлении всех тех бумаг, какие наряженною комиссиею о действиях их в Японии отработаны.....представляю при сем в оригинале письма сказанных Хвостова и Давыдова.

Пестель

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 25-26. На документе сделана надпись: «Приложенные при сем два письма получены Егором Шемякиным 15

января 1808 г.»

(А. Кириченко)

38

Донесение Российско-Американской Компании Н.П. Румянцеву

2 июля 1808 г.

...Вследствие Высочайшего его Императорского Величества соизволения, чтобы флота офицеры отпускаемы были на купеческие суда для управления ими, уволены от Государственной Адмиралтейской Коллегии в Российско-Американскую Компанию лейтенант Хвостов и мичман Давыдов, которые в 1804 году и отправлены были через Охотск в компанейские американские заселения для исполнения разных назначений...жалованье по договору: первому – по 4 тысячи, второму – по 3 тысячи рублей в год. Они действительно находились в службе компании с 8 мая 1804 года по 27 июля 1806 года, с сего числа откомандированы покойным Резановым в особую секретную экспедицию в рассуждении острова Сахалин до компании совсем не принадлежащую, и более уже компании службы не исправляли, почему и следует им с помянутого числа жалованье, причитающееся первому более 7 тысяч, а второму 5 тысяч, равно провизию их, разные расходы во время экспедиции ими употребленные и проезды их от Охотска до Санкт-Петербурга, чего с жалованьем насчитывается около 24 тысячи рублей, компания не обязана уже им заплатить, но они, прибыв сюда, требуют рашету и удовлетворения.

... не угодно ли заменить из японских вещей, полученных компанией в Охотске и Камчатке с их судов.... Сие полученные вещи хотя поступили без цены и какая выручка из них последует хотя теперь еще и неизвестно, но уповательно, что из главных статей: пшена японского, напиток саго и из чего-нибудь другого выручится столько, чтобы вознаградилось то жалованье, которое ныне их удовлетворить должно.

...В Охотске этим офицерам было отпущено товаров на 21408 рублей 43 копейки...

С какого времени считать командировку, со дня прибытия их сюда или по день вашей апробации сего представления?

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 168.

(А. Кириченко)

39

Письмо министра морских сил П.В. Чичагова

Н.П. Румянцеву

13 июля 1808 г.

...Государь император высочайше пожелал изволить дошедшие ко мне от Сибирского генерал-губернатора Пестеля и бывшего начальника Охотского порта Бухарина бумаги, до известной вашему сиятельству японской экспедиции относящиеся, препроводить к вам для совокупного соображения при рассмотрении дела о помянутой экспедиции и при том сообщить Вашему Сиятельству, что Его Величеству угодно, чтобы дело сие окончено было сколь возможно без промедления...

...Исполняя сим монаршую волю и прося покорнейше вас, милостивый государь мой, бумаги сии ко мне возвратить, когда не будет в них нужды...

Примечание: Бумаги отосланы Чичагову 21 августа 1808 г.

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, с. 146.

(А. Кириченко)

40

Доклад Н.П. Румянцева Александру I

об экспедициях Хвостова и Давыдова

[Дата отсутствует]

Вашему Императорскому Величеству известно, ...что покойный камергер Резанов, огарчась неудачею своего посольства в соображения свои, ... что не смог он достичь негациациею, достичь военною рукою...

План его был в том, чтобы приобрести свободу торговать в одном из северных японских портов, и первым к тому приступом счел водвориться на Сахалине, где прикрытая артиллериею колония

наша могла одними звериными промыслами окупать свое содержание, а между тем ближе знакомиться с японцами, и держать на Матмае во всегдашнем страхе, скорее поставить их в искание торговых связей с нами. Гористое положение империи японской и быстрота рек, часто из берегов выходящих заставляют японцев внутреннюю торговлю производить более морем, а суда их по строению своему от берегов удалиться не могут. Резанов полагал отрядить два или три вооруженных судна с тендером, которые бы отрезывали от берегов цепь японских судов, и обогащаясь призами заперли вовсе их торговлю; - и тогда, по его мнению, ропот народа и без того уже в пользу нашу преклонного, принудил бы правительство искать мирного окончания сему делу в обоюдных пользах.

...Резанов в 1805 году на пути своем из Камчатки в Америку объяснял план сей Хвостову и Давыдову. Пришед в Америку снарядил он два судна: одно построил, а другое купил. В июле 1806 года Резанов с обоими судами отправился из Америки в Охотск, на пути в 8-й день августа дал по предмету сей экспедиции инструкцию лейтенанту Хвостову, которого определил начальником оной. В инструкции сей между прочим предписал: «что найдется на Сахалине в магазинах, как-то пшено, соль, товары, рыбу – все взять с собою. Буде же которые магазины будут рыбою наполнены и одолъ строений, таковые сжечь. Из кумирни забрать все идола и захватить одного бонза взять с собою в Америку. В рассуждении сахалинцев и японцев всюду где ни встретят их стараться первых привлекать ласками, а вторым – делать вред истреблением судов их.

Лейтенант Хвостов дал с сей инструкции копию мичману Давыдову и в то же время суда по назначению их разлучились.

Давыдов по силе той же инструкции пошел к Курильским островам; а Хвостов из Охотска должен был идти на Сахалин, и в губе Анива соединиться с Давыдовым.

По приходе в Охотск Резанов от Хвостова инструкцию обратно и по отъезде своем из сего порта прислал оную Хвостову запечатанную. Хвостов нашел уже дополнение к инструкции, в котором между прочим сказано было: «что время назначенное к соединению его в губе Анива пропущено, и что при том сообразуясь со всеми обстоятельствами нашел господин Резанов лучшим, все предписанное оставя следовать Хвостову в Америку к подкреплению людьми порта Ново-Архангельск, но ежели ветры без потери времени обяжут Хвостова зайти в губу Анива, то чтобы он обласкал сахалинцев; Хвостов поражен будучи сим противоречащим предписанием не решился идти прямо в Америку, потому что судно, на котором отправился Давыдов, оставалось в неизвестности и по предположении его могло быть в руках японцев; что судно сие могло встретить японцев на каком-нибудь Курильском острове и по инструкции начать с ними военные действия.

Вследствии чего пустился он в губу Аниву и не найдя там судна Давыдова, заключил, что он конечно в руках японцев и потому приступил к исполнению всего прежде предписанного. Так объясняет Хвостов в рапорте своем к Иркутскому губернатору Трескину, который мне ныне возвращен от министра морских сил.

Давыдов со своей стороны объясняет в рапорте своем Резанову, полученном мною так же от министра морских сил, что разлучась с судном Хвостова и вследствие последних предписаний направил он путь свой к Курильским островам, но штормы равноденствия, повредившие такелаж, и болезни экипажа заставили его, не произведя ничего в действие, возвратиться в Петропавловскую гавань, куда вскоре пришел и Хвостов по окончании своей экспедиции.

В 1807 году Хвостов вознамерился повторить плавание свое к Курильским островам, рассчитывая, что он мог только двумя с половиной или тремя месяцами позже придти в Америку, но зато повторение предприятия могло заставить японцев думать, что подобные экспедиции продолжаться до того времени, доколе японское правительство не согласится на торговлю с Россиею.

Таким образом, оба сии чиновника отправились вторично на Курильские острова, где действовали неприязненной рукою, как из рапорта начальника Охотского порта к министру морских сил видно, возвратились в Охотск и начальником одного оба были содержаны за караулом, наряжен над ними военный суд, а вывезенные из Японии товары и вещи сложены за неимением компанейских в казенные магазины. Вследствие чего Хвостов и Давыдов, жалуясь на притеснения Бухариным им чинимых, решились из Охотска уйти, явились в Якутск, объявили, что они бежали от жестокостей Охотского начальника, и наконец прибыли в Санкт-Петербург.

Когда я доводил до сведения Вашего Императорского Величества предприятие Резанова по сему предмету, тогда я был свидетелем того гнева, какой Вы за сей поступок на Резанова положить изволили. Из всех бумаг до меня дошедших, все дело, по моему мнению, замыкается в том, что помянутые чиновники, будучи внушениями покойного Резанова, убеждены в пользе сего подвига; будучи расстроены противоречащим повелением, данным одному из них нечаянно и без всякого объяснения, - данным во время разлуки двух судов, и тогда, когда уже Резанова в Охотске не было, продолжили свое поручение, желая отличиться на службе.

На сих основаниях суда, я полагаю мнением, что поелику Ваше Императорское Величество изволили изъявить негодование на сие предприятие господина Резанова, который скончался, то и предать вообще меру сию забвению, а чиновникам, которые по противоречащему предписанию и

данному в неудобное время иначе поступать не могли, вообще дела сего в вину не ставить. Жалобы же Хвостова и Давыдова на жестокости Бухарина и причем побудившим нарядить над ними военный суд, передать по принадлежности рассмотрению министерством морских сил ...

Обращаясь к Сахалину.... и соображая выгоды, каких от занятия сего острова для России неминуемо должны последовать, я осмелюсь припомнить здесь Вашему Императорскому Величеству домогательств Российско-Американской Компании, которая выводит пользу экспедиции Хвостова тем, что, по словам его, в самой Японии подвиг сей произвел будто бы смятение, и что император японский употребил оное противу духовного деспотизма в свою пользу, и приобрел уже себе более против прежнего силы, просит позволения занять Сахалин заселением онаго промышленниками, и там по примеру американских ея заселений учредить укрепление, с колонию, хлебопашество и прочее.

Я полагаю, поелику министерство морских сил, с которым я желал рассмотреть предмет сей и на что последовало Вашего Императорского Величества соизволение, отрекается как от части до него не принадлежащие, что таковое предприятие дозволить Компании нужно, тем более, что не требует она никаких в сем случае со стороны казны пособий и я испрашиваю на сие Высочайшего соизволения.

Что же касается до чиновников Хвостова и Давыдова, с которыми Компания разочлась по день отправления секретной экспедиции, в рассуждения удовлетворения их с сего времени жалованьем и прочим, я полагаю произвести сие на счет вывезенных японских вещей и товаров по тому же расчету по самое окончание экспедиции и испрашиваю как на сие, так и на то, куда доставленные вещи обратить, Высочайшее соизволение...

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 159-167. На документе имеется надпись: «Государь император сей доклад утвердить изволил. Граф Румянцев. Августа 4 дня».

(А. Кириченко)

Записка И.Б. Пестеля о японцах вывезенных в Охотск

20 мая 1809 г.

...В Охотске находятся два человека японцев, завезенных туда лейтенантом Хвостовым. Известно, что они были на содержании Российско-Американской Компании, находятся в самом бедственном положении – питаюсь по тамошнему месту одною почти рыбою, которая свойственна только уроженцам тамошним, живущим в совершенной праздности, и сколько от оной, столько и от вредного климата страдают цынготною болезнью. Между тем сказывают, что сии японцы имеют довольно хорошие способности ума, а особливо один из них, Софии, весьма понятно говорит по-русски и даже переводит с японского на русский язык. – Чтоб вывести их из бедного положения, в каком находятся они теперь в Охотске, не место того, что они там совершенно без всякого дела – употребить их с пользою – предполагаем доставить оных в Иркутск на казенном или компанейском коште с тем, чтобы употребляя их тут к обучению японского языка – до совершенного испытая способности их – производить такое жалованье, какое необходимо нужно для содержания их.

Сибирский губернатор

Пестель.

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 178.

(А. Кириченко)

*Записка в Правление Американской Компании**ее первенствующего директора М.М. Булдакова**о повелении Александра I передать образцы японского вооружения**в Санкт-Петербургский Арсенал*

& 2248

26 декабря 1809 г.

Подносимые правлением Американской Компании японские латы Его Императорское

Величество принять изволил с благоволением, повелев поставить их в Арсенал. Препроводив оныя для сего предмета к военному министру, я уведомляю о том правление.

РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 455, л. 5.

(М. Малышева / В. Познанский)

44

*Записка директора РАК М.М. Булдакова
военному министру графу А.А. Аракчееву
о приобретении экспедицией Н.А. Хвостова и Г.И. Давыдова
образцов японского вооружения*

26 декабря 1809 г.

Лейтенанты Хвостов и Давыдов, известные Вашему Сиятельству по той секретной экспедиции, которую предпринимали они против острова Сахалина по предположениям покойного господина Резанова, быв на том острове достали несколько лат и других воинских орудий, употребляемых японскими войсками. Один экземпляр оных сюда из Охотска уже доставлен, и правление компании представляет Вашему Сиятельству, надеясь, что ежели по усмотрению вашему окажутся они достойными внимания, то будут потом удостоены и Монаршаго воззрения.

Первенствующий директор и кавалер Михайло Булдаков

Декабря дня

1809 года

РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 455, л. 16 об.

(М. Малышева / В. Познанский)

*Затиска директора главного правления РАК М.М. Булдакова
военному министру графу А.А. Аракчееву*

& 22DD

27 декабря 1809 г.

К Гр[афу] Аракчееву

Главное правление Американ[ской] Комп[ании] поднесло Государю Императору японския латы, вывезенные покойными флота лейтенантами Хвостовым и Давыдовым в бытность их в службе комп[ании] в Американских ея селениях.

Его Величество Высоч[айше] повелел поставить сии латы в Арсенале.

Сообщая сию Монаршую волю Вашему Сиятельству, я честь имею доставить к Вам при сем помянутое японское вооружение, пребывая в прочем с соверш[енным] почтением.

РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 455, л. 2–3.

(М. Малышева / В. Познанский)

Реестр японского вооружения привезенного экспедицией Н.А. Хвостова и Г.И. Давыдова

[Декабрь 1809 г.]

Реестр латам:

- 1) Шишак
- 2) Маска
- 3) Нагрудник с наспинником
- 4) Передник
- 5) Пара кал[ь]чуг на руки
- 6) — — на ноги
- 7) Сабля
- 8) Лук переломленный
- 9) Колчан с закрышкою, в нем одина[д]цать стрел

10) Султан черный, который должен стоять на древке

РГИА, ф. 13, оп. 1, д. 455, л. 4.

(М. Малышева / В. Познанский)

47

Письмо Сибирского губернатора И.Б. Пестеля Н.П. Румянцеву

Май 1810 г.

...В марте прошлого года я имел честь представлять ... о вывезенных лейтенантом Хвостовым в Охотск двух японцев, оставленных там на попечение Российско-Американской Компании в самом бедном положении. Следствием худого содержания их было то, что в июне прошлого года сделали побег и до ноября не доходило о них никакого слуху. Ныне японцы сии отысканы около реки Ульи без платья и без пищи, и потом нарочно-посланными к ним от начальника Охотского порта привезены в Охотск, где опять отданы под надзор правителя компанейской конторы.

Начальник порта, входя в положение несчастных пленников сих и изъясняя, что они без всякого права лишены отечества своего, а с ним и всего блага их – просит дозволения или отправить их в свою отчизну или доставить их до северной оконечности острова Сахалин, откуда сыщут они случай достигнуть своей родины.

Пестель

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 179.

(А. Кириченко)

48

Письмо Н.П. Румянцева И.Б. Пестелю

31 мая 1810 г.

... докладывал о японцах императору. Его Величество высочайше повелел изволить возвратить

оних в отечество, снабдя от казны всем нужным... А дабы из сего отправления извлечь пользу, я прошу ... поручить разведать через них или через тех, которые их отвозить будут о нынешнем состоянии Японии – в каком расположении пребывает к России и не жалеет ли об отказе нашего посольства....

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, л. 180.

(А. Кириченко)

49

Письмо И.Б. Пестеля Н.П. Румянцеву

16 января 1812 г.

...Я сделал Иркутскому губернатору предписание... Но между тем, как происходила у него с Охотским портовым начальником переписка о средствах какими бы лучше японцев сих отправить, они отлучились со служителем Российско-Американской Компании тобольским мещанином Рычковым на лодке в море для промыслу тюленей и назад уже не возвращались. Сделаны были распоряжения к их отысканию, однако тщетно...

Ныне же Иркутский губернатор доносит по извещению якутского областного начальника, что один из сих двух японцев Дежаймон найден в Удском комиссариатстве. Он показал, что отлучаясь весьма часто из Охотска в море для промысла нерп, они не могли один раз попасть обратно в Охотское устье за множеством льда и принуждены были пуститься вдоль морского берегу к Удскому. Там пробыв три дня на китайской границе у гиляков пошли к ясашным Удского комиссариата, где товарищ его японец Софи, голодный, наевшись весьма много китового жиру, умер от того. Служитель компании Рычков пойдя от голоду обратно к гилякам, на дороге замерз; а он Дежаймон найден удскими казаками...

АВПРИ, ф. С.-Петербургский Главный архив 1-13, 1803-1812 гг., оп. 10, д. 14, с. 181-182.

(А. Кириченко)

監修者・編訳者・訳者一覧

監修者

平川 新 東北大学東北アジア研究センター 教授

編訳者

寺山恭輔 東北大学東北アジア研究センター 准教授

畠山 禎 名城大学理工学部 非常勤講師

小野寺歌子 東北大学東北アジア研究センター 教育研究支援者

訳者(五十音順)

伊賀上菜穂 中央大学総合政策学部 准教授

オイドフ・バトバヤル 北海道大学大学院文学研究科 博士後期課程

齋藤由佳 近畿大学留学生別科 非常勤講師

藤原潤子 総合地球環境学研究所 上級研究員

前田ひろみ 同志社大学言語文化教育研究センター 非常勤講師

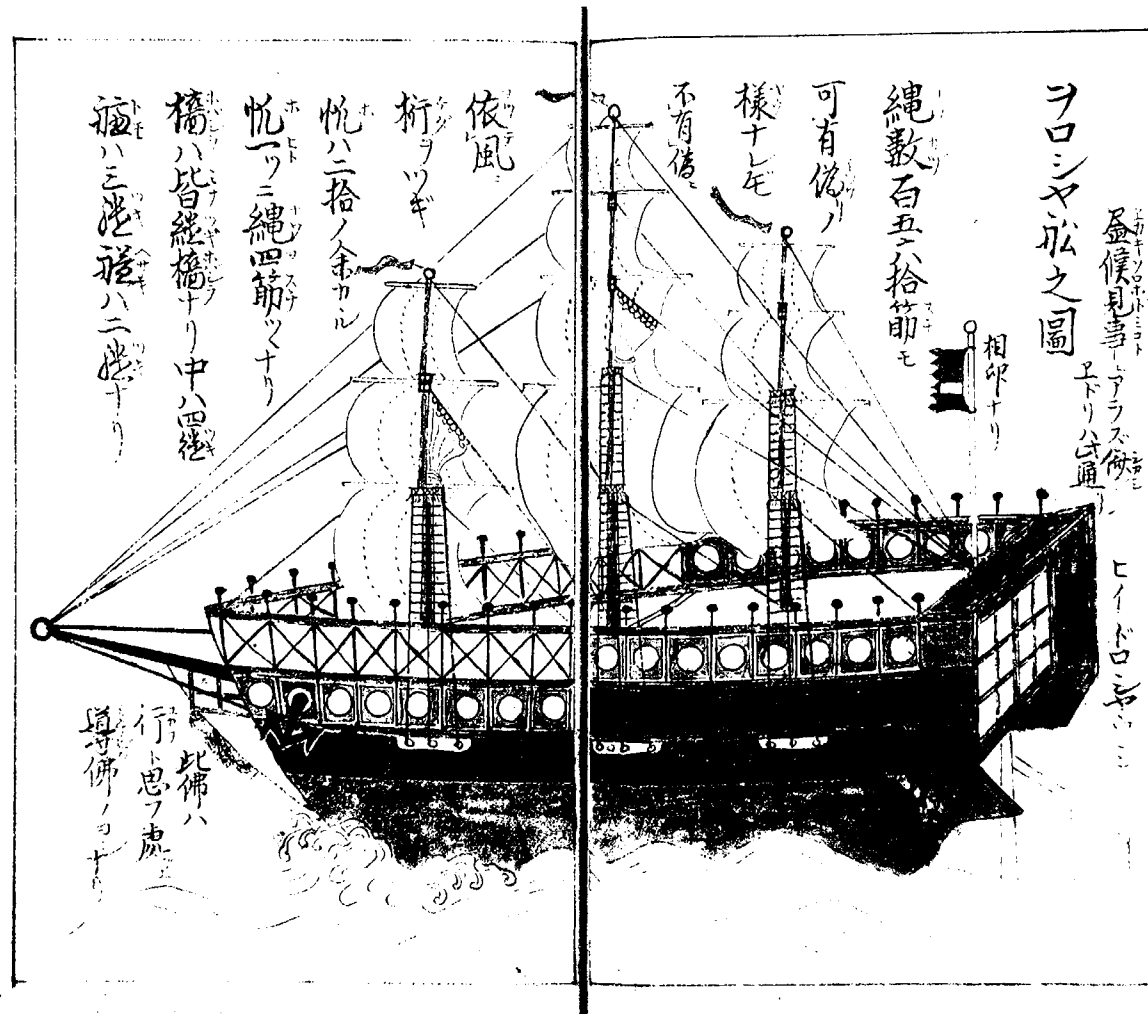
渡邊 聞 サントペテルブルグ国立大学大学院文学研究科 博士後期課程修了

ロシア史料にみる 18～19 世紀の日露関係 第 5 集
(東北アジア研究センター叢書 第 39 号)

2010 年 2 月 24 日発行 非売品

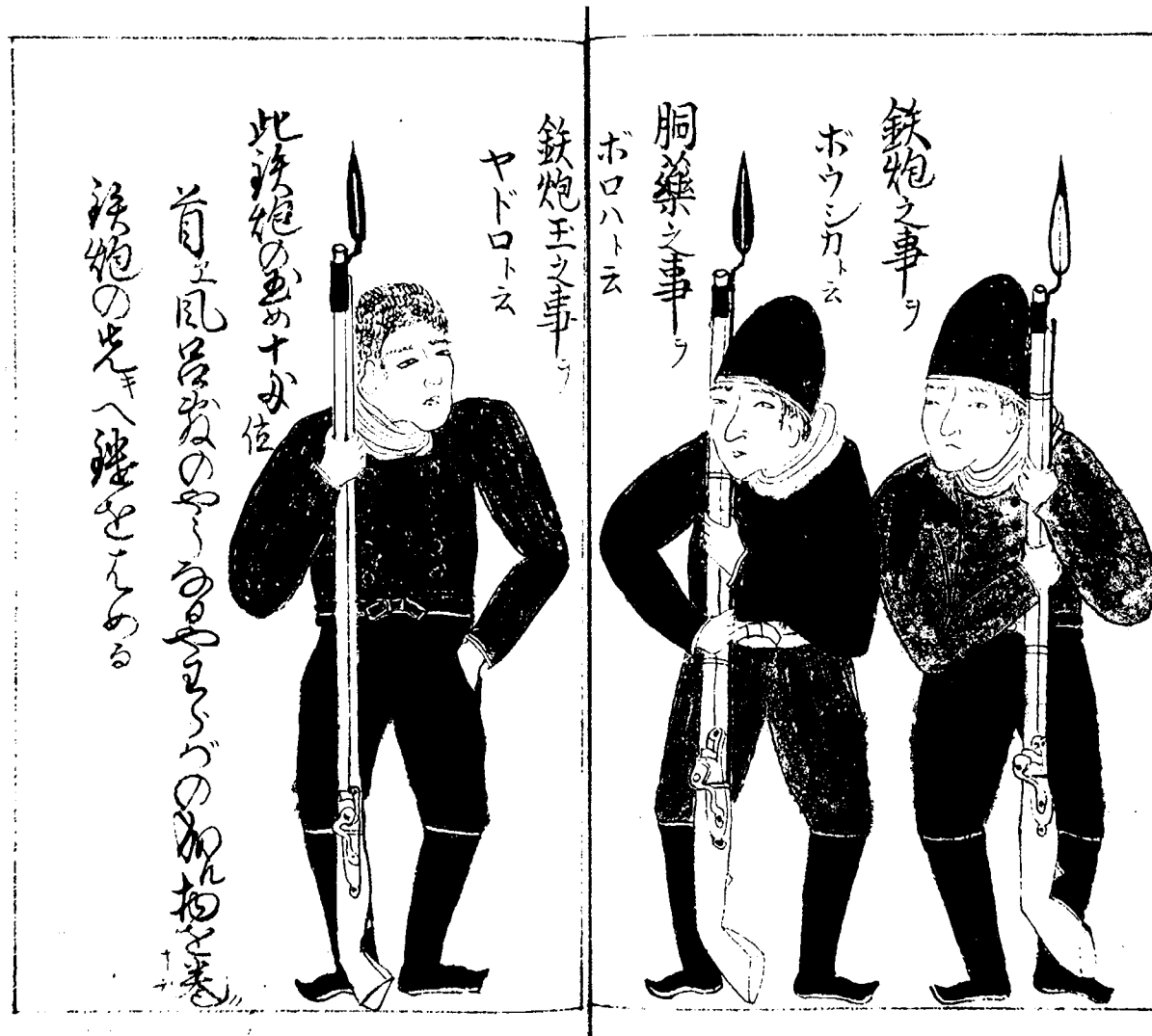
監 修 平川 新
編 者 寺山恭輔・畠山 禎・小野寺歌子
発 行 者 東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 仙台市青葉区川内
印 刷 東北大学生生活協同組合 プリントコープ
〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6
工学部中央厚生会館

ISBN 978-4-901449-65-6



1. 「ロシア船の図」

盛岡藩士大村治五平の「私残記」（大村次盛氏蔵）に描かれたロシア船。北方警備を命じられてエトロフ島に駐在した大村は、文化4年（1807）に同島を襲撃したロシア海軍士官フヴォストフの捕虜となるが、1ヶ月後にリシリー島沖で釈放された。ロシア船は「エガキソロホド見事にあらず」という注記がある。絵では立派に見えるが、実際はそれほど美しくはない、ということか。



2. 「ロシア人兵士の図」

盛岡藩上大村治五平の「私残記」（大村次盛氏蔵）に描かれたロシア人兵士。大村は、捕虜となって身近にロシア人兵士を見た。

